

レジャー・レクリエーション研究

第 61 号

第 38 回 学 会 大 会 発 表 論 文 集

日本レジャー・レクリエーション学会第 38 回学会大会

平成 20 年 11 月 28 日(金)・29 日(土)・30 日(日)

於：新潟医療福祉大学

日本レジャー・レクリエーション学会

2008年11月

1. 印刷・製本

発表論文は、提出された原稿をそのまま縮写し、論文一題につきB5版見開き2ページまたは4ページにオフセット印刷され、「レジャー・レクリエーション研究（大会発表論文集）」として製本される。

2. 原稿用紙

提出原稿は、指定の原稿用紙（A4版）4枚以内に限る。なお、予備を含め合計6枚の原稿用紙が同封されている。

3. 文字

本文文字は、邦文タイプ（4号活字）またはワードプロセッサ（12ポイント・24ドット以上）を用いて、横書き印字したものに限る。

4. 演題・氏名等

①演題は、原稿用紙上部第1行と2行を用い、副題がある場合には行を改めて記載する。

②演題には、本文より大きな活字または倍角文字を用いること。

③氏名は、演者と共同研究者について行を改めて区別し、演者には氏名のすぐ前に○印をつけること。

④所属機関名は、氏名に続いて（ ）付で記入する。また、複数の共同研究者が同一の機関に所属する場合には、まとめて（ ）付で記載すること。

5. 本文

①本文は、目的、方法、結果、考察など、できるだけ分かりやすくまとめ、研究論文として完結していること。

②本文各段は、最初の一字分をあけて書き始めること。

③原稿用紙の字数は、40字×40行の1600字となっている。

④図表などを使用する場合にも、必ず本文枠内に収めること。

6. 送付要領

①同封の厚紙にはさみ、原稿とそのコピー2部を同封のこと。

②同封の提出用封筒を使用し、書留郵便（簡易書留可）で郵送のこと。

③提出要領が守られていない場合には、原稿を受け付けない場合がある。

7. 締切期日

2008年10月10日（金） 当日消印有効

8. 送付先

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科
自然環境保全学/観光レクリエーション研究室
麻生 恵 気付
日本レジャー・レクリエーション学会編集委員会
電話 03-5477-2436
FAX 03-5477-2625(造園科学科事務室)

目 次

第37回学会大会開催にあたって 日本レジャー・レクリエーション学会会長 鈴木 秀雄 ……1	A-8 地域スポーツクラブに所属する父親の「仕事の日」と「休 みの日」の1日24時間の使い方 ……48
第38回学会大会開催要項 ……2	A-9 山小屋の屋根形状の特性が外観評価に及ぼす影響について —北アルプス・雲の平山荘を事例として— ……52
第38回学会大会組織委員会 ……4	A-10 ボート競技による水辺環境の復権 —親水メディアとしてのボートの中心価値— ……56
第38回学会大会実行委員会 ……5	A-11 利根運河とボート遠漕 —向島艇庫村から銚子までの遠漕の歴史— ……60
参加者へのご案内 ……6	B-1 レクリエーション活動における参加者の気分と運動能 力・身体組成の関係について —I市介護予防試行事業の結果より— ……64
研究(口頭)発表者へのお願いとお知らせ ……7	B-2 介護予防教室における目的別レクリエーションプログ ラムの開発と効果に関する研究(2) ……66
座長へのお願いとお知らせ ……7	B-3 介護予防事業における運動実施の自覚的変化について (2) ……68
討論者・質問者へのお願い ……7	B-4 高齢者介護サービス事業施設の職員における高齢者レ ク活動支援力向上について期待(2) —セミナー参加者における経験年数別によって— ……72
第38回学会大会開催地略図 ……8	B-5 老人病院の入院初期における余暇支援のあり方 ……74
第38回学会大会 基調講演 シンポジウム ワークショップ ……9	B-6 活動支援による行動障害緩和への試み ……78
第37回学会大会研究(口頭)発表・演題、ポスター発表…19	B-7 障害者スポーツにおける「障害/健常」意識の変容過 程に関する研究 —車椅子バスケットボール競技者に着目して— ……82
A-1 First International Recreation Congressに参加した 日本人代表3人の発表 ……24	B-8 レジャー志向性尺度の開発に関する研究(3) —成人女性サンプルによる尺度安定性の検討と旅行行 動への応用— ……86
A-2 戦時期日本における「体力向上」の祭典 —紀元二千六百年・東亜競技大会を中心として— ……28	
A-3 知識の社会的構造変化とレジャー概念の再構築 —メディア編集型人材教育プログラムの開発を通して— ……30	
A-4 現代社会における運動に関する提言としてのいくつか のkey wordsを探る ……34	
A-5 森林分野の専門辞典に見るレジャー・レクリエーシ ョン関連用語の変遷 ……38	
A-6 英国レジャー研究学会およびその年次大会について ……42	
A-7 フロー理論の構造と特質に関する基礎研究 —自己の統制、環境に対する支配の視点から— ……46	

B-9	レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究 ……………90	P-3	高齢者の転倒予防のための運動あそびについて ……132
B-10	エンパワーメントによるツーリズム協働事業定着に向けてのグループワークに関する研究 ……………94	P-4	アリゾナ州におけるTherapeutic Recreation視察報告 ……132
C-1	高等教育機関における地域に根ざした人材の育成 —学生交流集会その成果と課題— ……………96	P-5	四天王寺大学及び同短期大学部におけるレクリエーション・インストラクター資格取得状況とその課題 —資格取得卒業生追跡アンケートをもとに— ……133
C-2	総合型スポーツクラブに関する社会学的検討 ……100	P-6	学校運動部に対する地域スポーツクラブの活動支援 —愛知県三河地域におけるオリエンテーリングプログラムの事例より— ……133
C-3	総合型地域スポーツクラブ育成事業とレクリエーション協会の「揺らぎ」 —O県におけるフィールドワークをもとに— ……102	P-7	西宮市レクリエーション活動協会の歩みと地域貢献への課題 ……134
C-4	幼児・児童の健康づくりシステムの構築 —生活リズム向上のためのレクリエーション活動— ……104	P-8	民間野外教育活動団体における長期キャンプの実践 ……134
C-5	幼児の健康づくりシステムの構築 —保育園児の運動あそびと歩数— ……………108	P-9	長期キャンプにおける参加者の疲労の推移 ……135
C-6	幼児の生活リズム向上戦略と健全育成システムの構築 (IV) —幼稚園児の午後あそびの実態と基本的な生活習慣づくりを行う上での課題— ……………112	P-10	大学キャンプ実習の参加者によるキャンプ場の施設評価 ……135
C-7	保育園幼児の生活状況と体力・運動能力に関する研究 (第6報) ……………116	P-11	クッチャロ湖学生サミット (CASE 1) について ……136
C-8	高等教育期における積極的身体運動の必需に向けて —現代社会における体育実技関連科目群の果たす役割— ……120	P-12	輪島市三井町におけるワークショップとその効果について ……136
C-9	幼稚園就園5歳児の生活経験と身体活動量 ……124	P-13	横浜市美しが丘西追分公園における愛護会と地域との関わりについて ……137
C-10	保育者の『遊び』の認識と実践に関する研究 —指導者養成との関連から— ……………128		会則及び諸規程他 ……139
	第38回学会大会ポスター発表・演題 ……………130		役員選出細則設置の趣旨 ……144
P-1	大学生の環境に対する態度についての研究 ……131		投稿規程・原稿作成要領・投稿票 ……150
P-2	レクリエーション教育における実践的展開の報告 ……131		学会大会号編集企画 ……157

第38回学会大会開催にあたって

～ "余暇のやりくり (Leisure Management) の時代" から

"創りあげる余暇 (Leisure Development) の時代" への

転換点としての学会大会に向けて ～

日本レジャー・レクリエーション学会 (JSLRS)

会 長 鈴 木 秀 雄

関東学院大学教授、Ph. D.

「第38回学会大会開催にあたって」は、先の学会ニュースNO.86 (AUG.2008)に、「人」が「命」をよりよく「活かす」ためには、個人の生きる喜び (Enjoying Personal Living ; EPL) の獲得が最も重要であることについても既報しましたが、改めて、新潟医療福祉大学の御協力を得て、同法人施設のNSGカレッジリーグ学生総合プラザSTEPを主会場に第38回学会大会を開催しますことを重ねてご案内いたします。大会テーマを「地域おこしとレクリエーション」とし、基調講演に「地域おこしとレクリエーション ～その有効性をめぐって～」をお話いただきます。シンポジウムも引き続き地域おこしに沿って活発な議論が進められます。

ところで、その土地の伝統文化や歴史が重要である地域の動きとは裏腹に、世界はグローバル化の波に飲み込まれ、何事も一国の思い (施策) だけでは、容易に課題の克服を図ることが難しい情勢に益々なっています。経済活動などでは、規制緩和の名の下にHigh Risk, High Returnが時に善しとされ、多くの歪みも生じてきました。Low Risk, Low Returnでもない、むしろ理想といえどもNo Risk, Sustainable Society (リスクもなく、持続可能な社会) の構築こそが当然至極重要な地球時代であるといっても過言ではありません。

余暇時代の到来が叫ばれて久しいのですが、個人の側に立った余暇の発想は未だ根付いていません。今まさに、世界は金融危機、経済危機の只中ですが、このような時代にこそ本質的な余暇の問いかけを学会として進めていかなければなりません。勿論、社会の動きは時代とともにその速さや変化の度合いを増しはしますが、しかし個人の余暇生活そのものにはそれほど急激な変化を瞬時にもたらすものでもありません。

換言すれば、余暇そのものに対する信頼は、未だに経済的な動きに社会が強い影響を受けると、途端に余暇そのものの価値も中心的な位置づけから疎外され、結果として個人の生活そのものの中にもたちまち"ゆとりある余暇"がしっかりと位置づけられていないことがうかがえます。

これまで、既に自身が持ち得ている余暇に対する "余暇のやりくり (Leisure Management) の時代" であったと言えるでしょう。しかし、これからは、自身が持ち得ていない領域においても余暇を積極的に産み出していく、"創りあげる余暇 (Leisure Development) の時代" でなければなりません。たとえ社会が大きな変化や激しい変遷をするなかにあっても、豊かな心と真摯な生き方を微動だにしない個人の生活を創りあげていかなければなりません。それは、いつになく、たとえ個人それぞれの私的な関心ごとへの快追求であろうとも、温かい他者への思いやりを決して忘れない多岐にわたる癒しがそこここに含まれた余暇の有り様が問われる時代であるのです。

余暇とは、決して余った暇などではなく、創りあげなければ存在しない、自由裁量の"時間"であり、"活動" であり、"状態" であることの余暇認識 (Leisure Awareness) が、その個人の生活そのものを大きく左右することにもなるのです。

グローバルな時代にあっても、むしろその生きている地域 (Local) で、個々人が生き生きと生活していく姿勢を "創りあげていく余暇 (Leisure Development) のなか" に探求していく時代といえるでしょう。この意味からも、余暇を通しての地域おこしとともに、自分おこしを忘れてはならないのです。この学会大会が多くの貴重な研究成果の発表の場であることは言うまでもなく、さらに会員相互の深い交流を通して、"創造する余暇" に向けて、いくつかの価値あるヒントを与えてくれますことを期待しています。

日本レジャー・レクリエーション学会 第38回学会大会開催要項

大会テーマ「地域興しとレクリエーション」

1. 主催：日本レジャー・レクリエーション学会
2. 主管：日本レジャー・レクリエーション学会第38回学会大会実行委員会
3. 期日：平成20年11月28日(金)、29日(土)、30日(日)
4. 会場：NSGカレッジリーグ学生総合プラザSTEP
〒950-0914 新潟県新潟市中央区紫竹山6丁目3-5 電話025-255-5534
5. 日程：

第1日目 11月28日(金) 地域研究

12：50～ 集 合 集合場所：新潟駅南口バス乗り場噴水周辺
13：00 出 発

第2日目 11月29日(土)

11：00～12：00 理 事 会 会 場：4階小会議室

12：00～15：00 受 付 受付場所：4階ロビー

13：00～13：15 会長挨拶 鈴木秀雄(学会会長)

13：15～14：15 基調講演 会 場：4階大ホール

森川貞夫「地域興しとレクリエーションーその有効性をめぐってー」

14：30～16：30 シンポジウム 会 場：4階大ホール

「地域興しの手法としてのレクリエーション」再検討ー新潟市における諸事例からー

進行：小田切毅一、パネリスト4名

16：45～17：45 ワークショップ 会 場：4階大ホール

鈴木 允「中越地震災害復旧のレクリエーション支援体制づくり」

坂内寿子「地域と学生を繋ぐ教育活動の実践」ー教育の特色を生かしたレクリエーション・サービスー

18：00～ 懇 親 会 7階 スカイラウンジ

第3日目 11月30日(日)

8:30~	受付開始		
9:00~10:00	研究発表	4階A会場	3題
		4階B会場	3題
		4階C会場	3題
10:00~11:00	研究発表	4階A会場	3題
		4階B会場	2題
		4階C会場	3題
11:00~11:40	研究発表	4階A会場	2題
		4階B会場	2題
		4階C会場	2題
11:00~15:00	ポスター発表会場オープン	4階中研修室	
11:40~12:30	ポスター発表質疑応答時間		
13:00~14:00	学会賞表彰式および総会	会場: 4階A会場	
14:00~15:00	研究発表	4階A会場	3題
		4階B会場	3題
		4階C会場	2題

理事会	平成20年11月29日(土)	11:00~12:00	会場: 4階小会議室
学会賞表彰式	平成20年11月30日(日)	13:00~13:15	会場: 4階A会場
総会	平成20年11月30日(日)	13:15~14:00	会場: 4階A会場

食堂: 11月29日(土)、30日(日)のいずれも館内では営業していません。周辺には飲食できる店多数。
(11月30日の昼食は、参加申し込みの時に、あらかじめ弁当を予約出来ます。)

喫煙所: 喫煙は指定された場所をお願いします。(厳守のこと)

日本レジャー・レクリエーション学会 第38回学会大会組織委員会

大会会長	鈴木 秀雄〔学会会長	関東学院大学〕
大会副会長	小田切毅一〔学会副会長	新潟医療福祉大学〕
	坂口 正治〔学会副会長	東洋大学〕
	西田 俊夫〔学会副会長	淑徳大学〕
大会委員長	麻生 恵〔学会理事長	東京農業大学〕
委 員	小椋 一也〔学会常任理事	東京医学柔整専門学校〕
	上岡 洋晴〔学会常任理事	東京農業大学〕
	嵯峨 寿〔学会常任理事	筑波大学〕
	田中 伸彦〔学会常任理事	(独法)森林総合研究所〕
	土屋 薫〔学会常任理事	江戸川大学〕
	寺島 善一〔学会常任理事	明治大学〕
	西野 仁〔学会常任理事	東海大学〕
	沼澤 秀雄〔学会常任理事	立教大学〕
	松尾 哲矢〔学会常任理事	立教大学〕
	横内 靖典〔学会常任理事	城西大学〕
	天野 勤〔学会理事	聖徳大学〕
	浮田千枝子〔学会理事	群馬松嶺福祉短期大学〕
	小野寺浩三〔学会理事	東北福祉大学〕
	釘持 武〔学会理事	(社福)伸生会〕
	下村 彰男〔学会理事	東京大学大学院〕
	高橋 伸〔学会理事	国際基督教大学〕
	滝口 真〔学会理事	西九州大学〕
	田中 光〔学会理事	洗足学園短期大学〕
	茅野 宏明〔学会理事	武庫川女子大学〕
	前橋 明〔学会理事	早稲田大学〕
	マーレー寛子〔学会理事	京都府立大学大学院〕
	森川 貞夫〔学会理事	日本体育大学〕
	師岡 文男〔学会理事	上智大学〕
	山崎 律子〔学会理事	(株)余暇問題研究所〕
監 事	古城 健一〔学会監事	大分大学〕
	上野 直紀〔学会監事	いわき明星大学〕

日本レジャー・レクリエーション学会 第38回学会大会実行委員会

- | | | |
|---------|---|---------------------------|
| 大会実行委員長 | ◎ | 小田切毅一〔新潟医療福祉大学〕 |
| 事務局長 | ◎ | 麻生 恵〔東京農業大学〕 |
| 大会幹事 | | 西原 康行〔新潟医療福祉大学〕 |
| | | 中島 孝子〔新潟医療福祉大学〕 |
| | | 池 良弘〔日本福祉医療専門学校〕 |
| | | 坂内 寿子〔新潟中央短期大学〕 |
| | | 中野 允〔新潟青陵大学〕 |
| | | 関 久美子〔新潟青陵大学〕 |
| | | 見田 賢一〔新潟医療福祉大学大学院〕 |
| | | 菅原 成臣〔Y M C A 医療福祉専門学校〕 |
| | | 矢野加奈子〔東京農業大学〕 |
| 実行委員 | ◎ | 小椋 一也〔東京医学柔整専門学校〕 |
| | ◎ | 上岡 洋晴〔東京農業大学〕 |
| | ◎ | 嵯峨 寿〔筑波大学〕 |
| | ◎ | 田中 伸彦〔(独法)森林総合研究所〕 |
| | ◎ | 土屋 薫〔江戸川大学〕 |
| | ◎ | 寺島 善一〔明治大学〕 |
| | ◎ | 西野 仁〔東海大学〕 |
| | ◎ | 沼澤 秀雄〔立教大学〕 |
| | ◎ | 松尾 哲矢〔立教大学〕 |
| | ◎ | 横内 靖典〔城西大学〕 |
| | ○ | 天野 勤〔聖徳大学〕 |
| | ○ | 浮田千枝子〔群馬松嶺福祉短期大学〕 |
| | ○ | 小野寺浩三〔東北福祉大学〕 |
| | ○ | 劔持 武〔(社福)伸生会〕 |
| | ○ | 下村 彰男〔東京大学大学院〕 |
| | ○ | 高橋 伸〔国際基督教大学〕 |
| | ○ | 滝口 真〔西九州大学〕 |
| | ○ | 田中 光〔洗足学園短期大学〕 |
| | ○ | 茅野 宏明〔武庫川女子大学〕 |
| | ○ | 前橋 明〔早稲田大学〕 |
| | ○ | マーレ-寛子〔京都府立大学大学院〕 |
| | ○ | 森川 貞夫〔日本体育大学〕 |
| | ○ | 師岡 文男〔上智大学〕 |
| | ○ | 山崎 律子〔(株)余暇問題研究所〕 |
| 監 事 | ※ | 古城 健一〔大分大学〕 |
| | ※ | 上野 直紀〔いわき明星大学〕 |
| | △ | 菅原 成臣〔東京Y M C A 医療福祉専門学校〕 |
| | △ | 矢野加奈子〔東京農業大学〕 |

◎学会常任理事、○学会理事、※学会監事、△学会幹事

参加者へのご案内

1. 受付

11月28日(金) 地域研究 12:50～ 受付開始
13:00～ 出 発

新潟駅南口バス乗り場噴水周辺

11月29日(土) 特別プログラム 12:00～15:00

11月30日(日) 一般研究発表 8:30～

NSGカレッジリーグ学生総合プラザSTEP 4階

2. 参加費

正会員 ¥4,000-

その他の一般の方(大学院生含む) ¥3,000-

※但し、11月29日(土)の基調講演、シンポジウムは公開のため、参加費無料となります。

※学生(学部、短大、専門学校の在学生)は11月30日(日)は無料にて参加できます。

受付時に学生証の提示をしていただきます。

3. 昼食

11月30日(日)の昼食は予約制となっております。

昼食を予約されている方は、11月30(日)受付時にご確認のうえ、所定の場所(休憩室)にてお召し上がり下さい。

4. 駐車場

会場内に駐車場がございます。

5. 喫煙

学内は原則的に全面禁煙でございます。喫煙は指定の場所でのみ可能でございます。

研究(口頭)発表者へのお願いとお知らせ

1. 発表受付

各発表会場の入口で発表受付を行います。発表するセッション開始時間の30分前までに受付を済ませ、「次演者席」におつきください。

2. 発表配布資料

配布する発表資料（レジュメ、補足資料等）については、50部を発表受付時に提出してください。尚、必ず演題番号（例：A-1）、演題名、演者氏名（筆頭者）を記載してください。また、配布資料の残部は、お持ち帰りのほどお願い致します。（厳守）。

3. 発表会場のメディア対応について

(1) パワーポイントの使用

Windows X P（Power Point2003）対応のパソコンを設置しております。使用希望の方は、発表用ファイルをUSB接続用のメモリーキーで御用意の上、各セッションの開始30分前までに各会場の発表受付で備え付けのパソコンにコピー作業を行い、動作確認をしてください。

(2) 動画ソフトの使用

Windows Media Playerは使用可能ですが、使用する場合は、念のため、事前に事務局にご確認ください。

4. 発表時間

発表は1演題につき15分です（13分経過時→ベル1回、15分終了時→ベル2）。尚、質疑応答の時間は1演題につき5分とし、各セッション毎にまとめて行います。

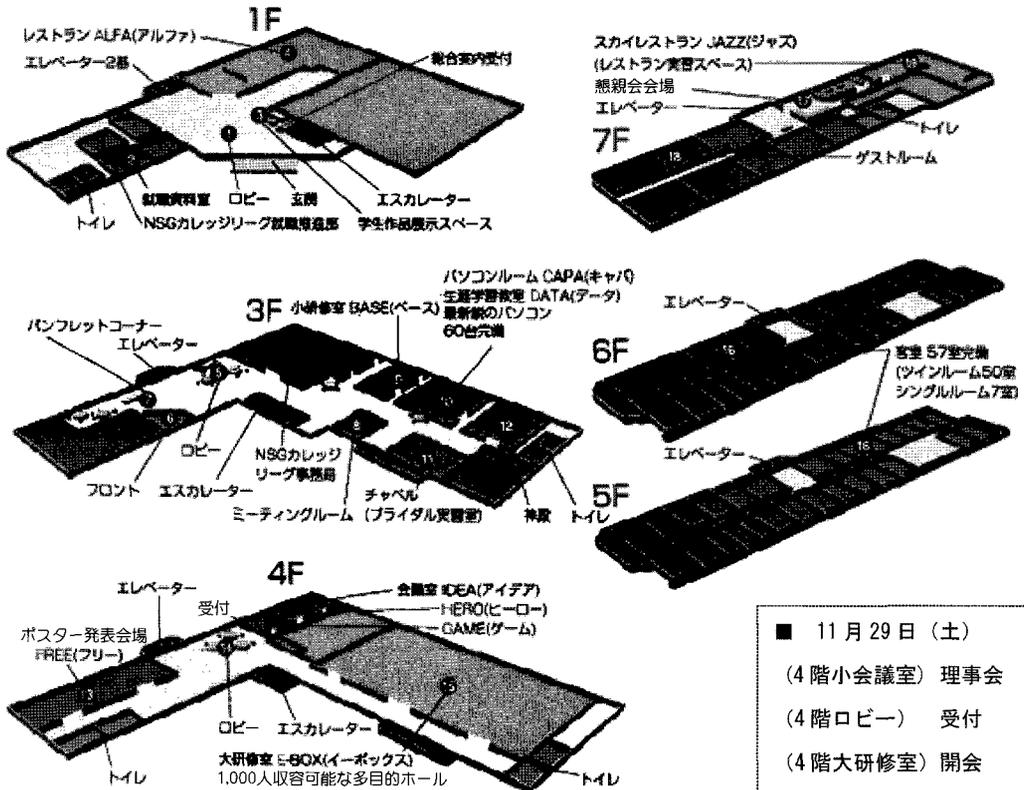
座長へのお願いとお知らせ

1. 各発表会場の入口で座長時間の30分前までに受付を済ませてください。開始20分前には「次座長席」におつきください。
2. 時間を厳守して進行するようお願いいたします。
3. 質疑応答は各セッション毎にまとめて該当時間内でとり行うようお願いいたします。
4. 発表取消等で空時間ができた場合、討論や休憩に当てられるなど、ご裁量ください。

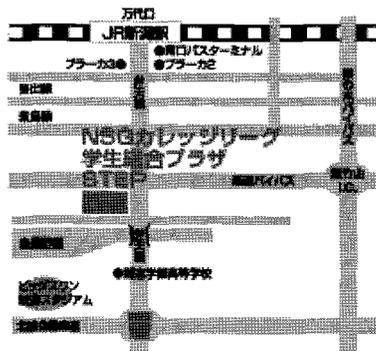
討論者・質問者へのお願い

挙手のあと、座長の指示を待って所属、氏名を告げ、参加者にわかるように発言してください。

●会 場： NSG カレッジリーグ学生総合プラザ STEP
 〒950-0914 新潟県新潟市中央区紫竹山 6 丁目 3-5
 *詳細は→ <http://mydreams.jp/step/index.html>



基調講演
 シンポジウム
 ワークショップ
 研究発表
 学会賞表彰式
 総会



交通のご案内

- 車／紫竹山インターより 5 分、桜木インターより 3 分
 新潟亀田インターより 7 分
- タクシー／JR 新潟駅南口より 7 分、新潟空港より 25 分
- バス／JR 新潟駅南口より、新潟・南部営業所行バス「弁天橋」下車徒歩 1 分

- 11月29日(土)
 - (4階小会議室) 理事会
 - (4階ロビー) 受付
 - (4階大研修室) 開会
 - 会長挨拶
 - 基調講演
 - シンポジウム
 - ワークショップ
 - (7階スカイラウンジ) 懇親会
- 11月30日(日)
 - (4階大研修室) A会場
 - B会場
 - C会場
 - (4階中研修室) ポスター会場
 - (4階大研修室A会場) 総会
 - 学会賞表彰式

第 38 回学会大会

基 調 講 演

シンポジウム

ワークショップ

基調講演：地域興しとレクリエーション

森川貞夫（日本体育大学）

「地域興し」＝「地域づくり」とレクリエーション・スポーツとの関わりはこれまでも多くが論じられてきたが、一方では平成の大合併以後、地域のさまざまな変貌、とりわけ「限界地域」とよばれる過疎化が進む地域にとっては遊びやレクリエーション・スポーツどころではないという悲鳴に近い声も聞こえてくる。

かつての地域共同体が崩壊し住民の共同体意識が希薄化してきたという声もまた危険信号のように語られてきた。だからこそというべきであろうが、お祭りにしろ御輿や地域運動会のような町や村、地域を挙げて住民が大事にしてきた地域行事の再評価と再生、活性化が求められているのも事実であろう。

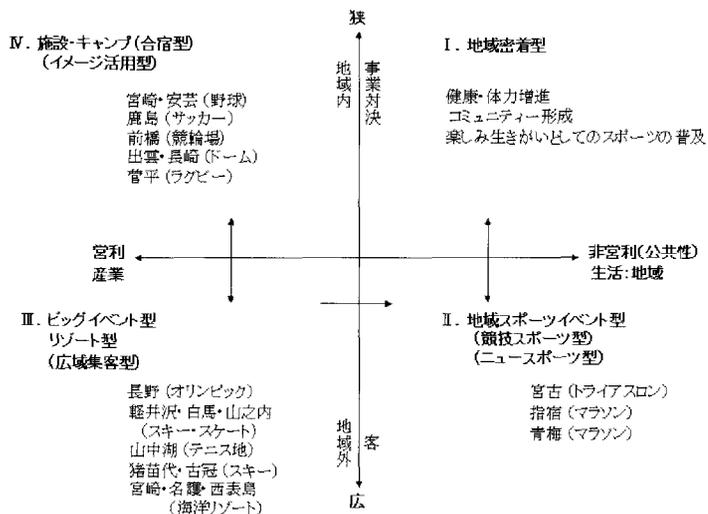
あらためてこれまで地域行事として存在した娯楽や運動等の諸活動のもっていた機能と役割を地域形成の視点からとらえ直すと共に今日の地域の状況に照らし合わせつつレクリエーション・スポーツ活動の可能性と期待を探りたい。

しかし、これまでの取り組みの事例が示すように「地域興し」や「地域づくり」の問題はそこに生きて生活している住民の主体形成の問題と共に語られなければ実効性も希望も存在し得ない。その場合にレクリエーション・スポーツの機能・役割は現実の地域の実態に対して直接的なものというよりはむしろ副次的なものであり間接的もしくは結果として生じるものにとらえておく方が無難であろう。というのはレクリエーションあるいはスポーツそれ自体は本来自己目的的な活動であり手段的に取り扱われることを嫌うものであるであろうというのが私の立場である。

とは言うものの現実的には行政レベルであれ地域レベルであれ「スポーツによる地域振興」が期待され取り組まれてきたのも事実である。それらを分析するために類型化したのが図・1である。

したがって問題はそれぞれの地域の実態に合わせて「地域主体形成」との関わりで地域興しの手法としてのレクリエーション・スポーツ活動の求められる「主体者像」すなわち地域における「スポーツの主人公」のイメージをふくらました。

図 スポーツによる地域振興の類型化



注) 自治大臣官房地域政策課(1986)、山口(1996)を参考に新たに作成した

シンポジウム：「地域興しの手法としてのレクリエーション」再検討

— 新潟市における諸事例からの提案 —

提案趣旨など

コーディネーター：小田切毅一氏（新潟医療福祉大学）

地域興しにレクリエーションが有効であり、また不可欠であると考えられる場合の、このレクリエーションとは何か。言うまでもなくこの言葉は、単なる楽しみの活動だとか余暇を消費する行動として理解されるものではない。地域を活性化させるより善い生き方に向けて、地域を拠点にした人的交流の広がりを実現する「創りかえ」（re+creation）の行動、とでも言うべきであろう。商業的収益とか経済的効率といった実利性が最優先されるのではなく、仲間とともに喜び連携し協力するコミュニケーション・ワークが目指されるという意味で、満足感や幸福感に通じる創造的生きがい行動と考えられる。

すでに枚挙の暇もないほどに、新潟市や県下近隣地区には、数多くの地域興しの実例がある。まず「食」にかかわる実例としては、その土地の特産品の宣伝とも一体となったイベントが、果物や鮮魚や米づくりや酒づくりなどに及んで多様に展開されている。また「景観保全」にかかわっては、「はせぎ」や「棚田」や「潟」や「花づくり」などに関連する実践も多様にみられる。あるいは、「雁木」のある町並みでの音楽会のような、イベント開催などもこの例外ではない。そして地域のシンボルの存在となる風物や文化的遺産に着目する地域興しも多い。たとえば「凧揚げ」「牛の角突き」「ひな人形」「踊り」「花火」... など。さらに豪雪地帯特有の種々の「雪祭り」のような機会も人的交流に欠かせない。これら諸事例の中には、地域興しの手法としての上述のレクリエーションの意味合いが、生かされている事例が多いのである。

では本シンポジウムで対象とする新潟市とその周辺地区（近郊）は、ニーズに対応するいかなる地域興しのビジョンを持ち得るのだろうか。永年生活が営まれてきた地域特有の、自然的、文化的、政治・社会的な問題状況や時代的制約などに着目する必要がある。たとえば新潟市を特徴づける「田園型政令都市」といった性格づけは、広大な農園地域に近接して、旧新潟市の比較的人口低密度の都心部やいくつかの周辺市街地が点在する、昨今の合併を伴う行政区画への状況把握とも結びつく。都市部の拡大に伴う中心部の空洞化傾向なども見落とすことは出来ないが、ともあれ従来からの政令指定都市とも異なる実情に着目した性格づけである。こうした性格づけは必然的に、食糧自給率が高い新潟市の姿をクローズアップさせる。そして周辺豪雪地帯との円滑な人的交流の確保の問題や、さらには自然の宝庫を現存させ続ける一方で、同時に永年にわたって人口流出を継続させてきた事情なども、多面的・総括的に包含する。

新潟市は、こうした意味では確かに、いわゆる「住んでみたい都市」に関する一般的イメージ、すなわち便利で快適で過密な消費型都市のイメージとも、一線を画しているように感じられる。それ故にレクリエーション振興という視野に立つ場合、新潟市とその周辺地区（近郊）における地域興しには、レクリエーションの新たな社会運動的な展開が期待できるようなも思われるのである。こうした問題の発展の可能性に関しては、以下に続く四つの話題提供と、それらを踏まえた議論の成果を待つことにしたい。

第一話題

アルビレックス新潟における地域興しの実践から

田村 貢（アルビレックス新潟）

レクリエーションという観点からみるとサッカーは、自らが参加してプレーして楽しむだけでなく、家族や仲間とともに最員のチームや選手を大合唱で応援する「観るスポーツ」ともなる。ホームスタジアム東北電力ビッグスワンを埋め尽くす大観衆。「おらがチーム新潟」を応援する大声援。日本海に面した雪深い街、日頃は穏やかで感情を表に出すことをしない新潟の人たちが、オレンジ色のユニフォームを纏い、「アイシテル ニイガタ!」と熱狂する。こうした熱気は、雪国の街というイメージにはこれまで無かったものであり、新しい新潟の地域興しを象徴・先導するような「異空間」を創り出している。

以下は、アルビレックス新潟がJ1に昇格した頃に発刊された書籍『ニイガタ現象』に、ひとりのサポーターが寄稿した文章である。「今朝も早くからサッカーを観に行くため、準備している娘。新聞、テレビ等滅多に報道されることのないJ2サッカー。帰宅するや試合内容を嬉々と話す。物事を何時も冷めた目で眺める娘を何故そこまで駆り立て、燃え上がらせるのか不思議でならなかった。牛に引かれて善光寺参り、ではないが、一度はサッカーを観てと言われ仕方なく一回だけは観に行く約束をした。それまでスポーツ観戦と言えば野球、息子を連れて東京ドームへ何回も通った。晩酌をしながら野球のナイター観戦が毎日の楽しみで、妻や娘の不興を買っていた。妻とともに新潟スタジアムに足を運んだ。何かが違う、この雰囲気、この熱気。選手の名前、試合のルールも知らないのに、腹の底から湧き上がる不思議な気持ち。試合後、妻の目を見るところですらと涙が浮かんでいる。かく言う自分も目頭が熱くなっていた。何が琴線に触れたのか。それを確かめるため、家族の驚きを尻目に観戦に通いだした。何時も笑顔でファンに接する GK 野澤、ひたむきにボールを追いかける MF 寺川、仁王の如く敵に立ち塞がる FW 船越等々、観戦を重ねる程にサッカーの奥深さ、楽しさを覚えた。J1 昇格がかかった長居スタジアムでの一戦、期待が大きかっただけに気持の落ち込みも激しかった。アルビレックスを応援するようになり、何が何でも J1 昇格を果たし、日本一のチームに成長を願う自分を時として可笑しく思う。観戦を通じ多くの人と知り合い、話した。アルビレックスは俺たちのチーム、俺たちが育てる、そんな気持ちで皆が応援しているのだと思う。2003年サポーターの願いJ1昇格、大きな木、果実を得ることが出来た。この木に光を当て、肥料を与え大きな木に育てるため、2004年力の限り、声の限り、精一杯応援するぞ。」

多くの観戦者は、ただ単にサッカーを観戦するだけではない。共通の想いを持つことで、家族との絆が深まり、新しい仲間と出会う。こうした、小さなコミュニティがスタジアム全体を埋め尽くし、連帯感や一体感が生まれ、上述した「異空間」を演出するのである。私どもの仕事は、多くの地域の人々の手による地域のアイデンティティをつくり育てていくこと、まさに地域興しに向けてコーディネートしていくことだと自負している。Jリーグ百年構想を実現させる経営努力は、だから必然的に新潟に豊かなスポーツ文化を育み、環境整備の取組などへと運動を具体化させる。このことを、大勢のサポーターの方々と確信しつつ進みたいと考えている。

第二話題

生涯スポーツの拠点、総合型地域スポーツクラブにおける新潟的地域興しを問う 西原康行（新潟医療福祉大学）

2000年に制定された文部科学省のスポーツ振興基本計画は、全国の各市町村に最低一つの総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）を設立することを目標として掲げた。新潟県では、2008年9月現在、30の総合型クラブが設立されている。そのうち新潟市においては、中核的な都市部から20km以上離れた田園の広がる豊栄地域に「ハピスカとよさか」という総合型クラブがあるだけである。スポーツ振興基本計画の各市町村に最低一つという到達目標は達成しているが、都市部の生活者がこの「ハピスカとよさか」に足を運ぶことはない。こうした現状にたつて、全国に普及しつつある総合型クラブをめぐって、本シンポジウムでは二つの問いを立てたい。

一つ目は、そもそも新潟的な総合型クラブという新潟ならではのオリジナルなクラブは存在するのかという問いである。全国に現在約2,400ある総合型クラブの中において、新潟の30のクラブにはこんな特色があるということがいえるのであろうか。農村部、都市部、新興住宅地、過疎地、高齢化が進んでいる地域といった地域カテゴリーで違いを見出すことは可能かもしれない。例えば、高齢者が多い地域では、高齢者向けの事業（レクリエーション、以下レク）を多く取り入れた総合型クラブがあり、新興住宅地で若年層が多い地域は、子供や若者向けの事業（レク）を多く取り入れたクラブがあるといった特色である。そうであれば、新潟市は田園政令指定都市を宣言しており、コシヒカリを生産している農家が多いのだから農村に分類されるのであろうか。それとも政令指定都市なのだから都市に分類されるのであろうか。また、例えば古くから新潟に伝わる伝統芸能、近代から現代にかけて政策的に地域に普及させたレクやスポーツ、あるいはメッカ作りで新潟的レクや新潟的クラブを語ることは可能なのか。

二つ目の問いは、どうすれば地域がレクやスポーツによって興隆するのかという問いである。これまで地域振興のために政策的にレジャー・レクやスポーツを普及してきた地域がいくつかある。その在りようは様々で、レジャー環境の開発、メガスポーツイベントの招致、メッカ作り、地域オリジナルなレクやスポーツの開発と地域住民への啓蒙などである。しかしながら、例えばメガスポーツイベントの招致として長野オリンピックを取り上げた場合、開催後に長野市がどのように興隆したであろうか。選手村はマンションとして再利用されているが入居率は低く、各競技会場も利用される頻度は少ない。レジャー環境の開発では、かつて隆盛した新潟県の湯沢町が現在は閑散としたマンション群だけを残している。これらの例は、いずれもむしろ否定的な遺産に思える。

結論的に、総合型クラブの新潟的地域興しを考える場合、むしろ日本海側の荒波の中で農業を主体として生活してきた内に秘めた耐え忍ぶ力と、古くは北前船が行き交い、他を受け入れる開放性を兼ね備えた新潟人の身体性にその可能性を見出したい。意図的、政策的ではない、自由な地域の中から自然に発生してくる力に委ねることや、地域の中から出てくる旗振り役の活動家の土着のエネルギーにその可能性を見出したい。

第三話題

ハンディキャップ・レク、障害者主体の文化による地域興しの試み

池 良弘（日本福祉医療専門学校）

「誰もが住める町」で福祉レクを活用し、障がいがあっても高齢であっても、誰もが住みやすい町づくりを目指したい。「誰もが住める町」とはハード面に視点が置かれがちであるが、実はソフト面の整備と主体者（障がい者・高齢者）の心の置き所で決まる。その実現を可能にするのがレクリエーションだと考えている。

私は学生時代、上京し車いすを利用する方々と活動を共にしてきた。いわゆる生活圏拡大運動を実践したり、また障がい者バスケットなどを用いた「くるまいすの介助法」（朝日厚生文化事業団）などを確立した。

帰郷してから国際障害者年に日本で始めて、障がいを持つ者と持たない者が共に楽しめるハンディキャップ・レク（現在の福祉レクの礎）を提唱し、障がい者の中からレク指導者を発掘することを目指しつつ、彼らが活躍できるような「場づくり」をしてきた。脳性まひの方がウオーケラリーの指導をしたり、全盲の青年がダンスや卓球を指導したり、聴覚障がい者の方々が「万代太鼓」で海外公演をしたり、障がいがあってもそれを意識せずに工夫することで、どんなことでもできる姿を示したことによって、マスコミにも取り上げられるようになった。

そんな文化的環境の反映だろうか。新潟で生まれたお笑い集団「なまら」に、脳性まひブラザーズの障害をもつ方々が、障がい者集団「こわれもの祭典」として、逆に障がいを利用するように、自身の存在をアピールするような事態も生じている。地域（町）興しの場としての演芸場が新潟市古町に開設されたが、私はこのような彼らの出演の経緯を注目して見守っている。

また私の本務校では、授業で学んだレク技術を地域の高齢者に要介護予防の一旦として、活用できるよう課外実習という制度を取り入れ、要介護予防の活躍を展開している。そして介護実習とあわせ、福祉レク実習を介護実習の段階に応じて展開している。資格導入から日本でも中心的役割を果たし、高齢者施設では個別レク援助を提供しているが、何よりも利用者の行動変容を引き出し、何も話もできない利用者が学生と話し、歌を歌うといった光景を実現することが目指される。個別レク援助の実習に関しては学生の指導はもちろんのこと、施設職員の理解がなくては実施できない。導入当初は介護教員と施設の理解を得るための苦労も大きかった。教員がレクの重要性を解き明かし、自主的に施設を巡回しながら福祉レクの説明に回った。さらに、福祉レクのリカレント教育として実施していた公開講座を県下の施設職員を対象に提供した。現在では介護技術とレク援助のできる学校として、学生の活躍も含め、地元新聞などにも紹介され、知られるようになっていく。

障がいがあってもなくても、高齢であってもなくても、レクを使って障がい者や高齢者にとって住みやすい、心安らぐ地域（町）作りの試みがなされていることは疑いもない事実である。障がい者や高齢者こそが、“受け手”ではなく、これからの地域社会の“担い手”になる。レクが心のよりどころともなり、地域興しの“主体者”としての役割を果たせるのだと確信している。

第四話題

市民ボランティアがつくりだす新潟のあたらしい都市づくり

上山 寛（建築家 上山寛アトリエ）

レクリエーション活動の新潟における新たな可能性という視点から、まザワールドカップ新潟大会の事例をもとに検証してみたい。

2002年に日韓共同開催でワールドカップが開かれ、新潟が最初の試合会場に選ばれたことはいまだに記憶に新しい。この世界的な大会を成功させようとさまざまな準備が行われてきた。大会時に新潟に世界からやって来るサポーターを暖かくもてなし、新潟の楽しい思いでを持ち帰ってもらおうと、新潟市を中心に市民団体「ウェルカムにいがた 2002」が2000年に結成され新潟市の支援を受けながら様々な活動を行ってきた。筆者はこのなかで事務局長としてほぼ全体の活動に関わることが出来た。大会時に新潟駅前を埋め尽くした外国人サポーターの姿や中心部各所で繰り広げられた外国人サポーターによるパフォーマンスはワールドカップでなければ目にする事の出来ないハレの場であり忘れられない光景である。この活動には外国語が出来る、出来ないに関わらず多くの市民が参加し、外国人の案内活動等に活躍していただいた。2002年度末の解散記念シンポジウム・懇親会では、参加された多くの方々から「こんな充実した時間は無かった。またぜひ参加したい。」と言う要望をいただいた。彼ら彼女らが再び充実した時間を持てる時が、その後やって来たかどうかは定かではない。

私は日常的に建築設計を仕事としている。その延長線上で都市のありようやまちづくり活動等に関わる機会をこれまで多く持ってきた。そのなかでの活動は自ら住む地域を良くしようと確信的な人々による、やや自己犠牲的精神を含んだ部分が無いとは言えないと感じていた。ところがどうだろう。ワールドカップ時の「ウェルカムにいがた 2002」での活動を振り返ってみると、ここに参加した多くの人々は自己の感性と身体を駆使して外国人との交流を楽しみ自然体で創造活動を行っていたのである。これが「こんな充実した時間は無かった。もう一度体験したい。」につながり、結果としてより良い人間関係形成と都市の活性化につながっているのではないだろうか。これまではレクリエーション活動が個人の内面的な充実に視点が置かれてきか、その枠を超えて地域や都市の活性化にも大きくつながっていることを示している。レクリエーション的視点からの活動が個人個人の創造性開発と共に地域や都市の可能性を引き出す原動力と成りうるのである。レクリエーションの持つ新たな可能性の展開である。もっともこれには都市における文化的・社会的活動を長期的に誘発していく戦略的取組みが欠かせない。

新潟市に於けるスポーツ大会を例にとると国際的には約20年前のアジア卓球大会、そして2002年のワールドカップ大会が開催されているが、長期的戦略的な視点から取組んだ結果からこれらが実施されてきたわけではなく結果論である。おりしも新潟の抱える課題として、将来の北陸新幹線開通に伴い都市の衰退が始まると言われる2014年問題への取組みが急務である。新潟の対岸にはアジア大陸が広がり、ロシア、中国、韓国が隣接している。これら近隣諸国との文化的交流活動を戦略的な視点から積極的に推進し、そのなかでレクリエーション運動により自然体市民活動を誘発し、より魅力的な新潟を形成していくことが求められている。今、レクリエーション活動の新たな展開によって新しい新潟が誕生しようとしている。関係者の奮起を期待したい。

情報発信 ワークショップ：新潟

このワークショップでは、新潟ならではのレクリエーションによる地域興しの事例を、中越地震の災害との関係や、地域に開かれた大学を実現させるミュージカル出前などに触れながら、ご案内します。

進行・世話人：坂内寿子（新潟中央短期大学）

~~~~~

## ワークショップ①

テーマ 「中越地震災害復旧のレクリエーション支援体制づくり」

鈴木 允（新潟県レク協会理事

レク・コーディネーター）

### 1. はじめに

- ・ 当時の様子
- ・ 支援事業の大枠
- ・ 日レク協会・県レク協会との協議など

### 2. コーディネーターとしての活動

- ・ こころのケアを求めて
- ・ 趣旨説明（教委・社協・ボラセン）
- ・ 有資格者や加盟団体への呼びかけ
- ・ 登録者の状況

### 3. 実際の活動開始後の状況

### 4. まとめ

- ・ 活動のあり方、及びレク・ボラの役割

~~~~~

◎新潟では、来年2009年開催の「トキめき新潟国体」にむけ、種々の運動的問いかけやボランティアを募る呼びかけなどがなされています。マスコットのトッキッキにちなんだトッキッキダンスも、講習会をはじめとする様々なHP上で、踊りへの県民の参加を呼びかけています。



~~~~~

典 拠

<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/kokutai/dance.html>

<http://www.pref.niigata.jp/soumu/kokutai/event/>

## ワークショップ②

### テーマ 「地域と学生を繋ぐ教育活動の実践」

#### ～教育の特色を生かしたレクリエーション・サービス～

坂内寿子（新潟中央短期大学）

#### 1. 大学の概要

新潟県加茂市に位置する新潟中央短期大学は、入学定員 80 人、収容定員 160 人の保育系（幼児教育科）男女共学の単科短大である。本学は昭和 62 年にレクリエーション資格の課程認定を受けて以来、幼稚園教諭二種免許及び保育士資格と併せて毎年卒業生の 8 割ほどがレクリエーション・インストラクターの資格を取得し県内の保育所、幼稚園、児童施設において保育者として活躍している。

#### 2. 周囲の状況

本学が所在する加茂市（人口約 32,000 人）は新潟県のほぼ中央に位置し、古くから北越の小京都といわれている。東西に細長く、新潟市、三条市、五泉市、田上町と接している。県立自然公園粟ヶ岳を水源とする加茂川の清流は、三方を山に囲まれた市街地を縦貫して信濃川に注いでいる。

産業は全国シェアの 70%を誇る桐たんすや家具、建具、屏風など木工のまちとして全国的に高い評価を得ている。観光面でも、加茂市の花「雪椿」の群生地として脚光を浴びている。また「日本一の福祉のまち」を目標に福祉水準の維持、充実に努めている。

#### 3. 教育の特色

本学の教育特色の第 1 は、小規模校だからこそできる徹底した少人数制教育があげられる。学生と教職員の距離が近く「ホットな人間関係」を結びながら「きめ細やかな教育の実践」を全学態勢で取り組んでいる。

第 2 は、「地域に開かれた大学」「地域に根ざした教育」として、地域に向けてさまざまな行事・活動を展開し、交流を広げ深めている。なかでも昭和 61 年から継続して取り組んでいる“中央短大ミュージカル”は文部科学省が選定する『特色ある大学教育支援プログラム』に平成 15 年度採択され、地道な教育実践が評価された。その他にボランティア活動として、依頼のあった地域の保育現場や子育て支援サークルに出向いて、子どもたちや保護者に合唱、合奏、手品、ゲーム、ダンス、オペレッタ等を披露する“出前保育”や自然環境に恵まれている本学の周辺を散策する“自然体験・森の散歩”は好評を得ている。

また、“地域団体主催のイベント”にスタッフとして参加することを奨励しており、成果を上げている。なかでも来年度開催される「トキめき新潟国体」のオープニングにおいて披露される“トッキキダンス”の普及活動が新潟市在住の学生を中心に行なわれている。

#### 4. 教育活動の実践を紹介

本学は学生が主体となって事業の企画、運営、評価といったプロセスを体験的に学ぶなかで地域を理解し、人との交流を深め、感動体験を共有できる教育活動の実践を特色としている。そうした様々な地域と学生を繋ぐ教育活動＝レクリエーション・サービスを紹介することで話題提供としたい。



# 第 38 回学会大会

研究(口頭)発表・演題

ポスター発表

# 日本レジャー・レクリエーション学会 第38回学会大会大会研究(口頭)発表・演題

## ■研究発表 A会場

□座長：嵯峨 寿(筑波大学) 9:00~10:00

A-1 First International Recreation Congressに参加した日本人代表3人の発表  
○西野 仁〔東海大学〕

A-2 戦時期日本における「体力向上」の祭典  
- 紀元二千六百年・東亜競技大会を中心として -  
○小澤 考人〔東京大学大学院〕

A-3 知識の社会的構造変化とレジャー概念の再構築  
- メディア編纂型人材教育プログラムの開発を通して -  
○犬塚潤一郎〔実践女子大学〕

### ☆質疑応答

□座長：西野 仁(東海大学) 10:00~11:00

A-4 現代社会における運動に関する提言としてのいくつかのkey wordsを探る  
○鈿持 武〔(社福)伸生会; 関東学院大学大学院〕  
鈴木 英悟〔東海大学〕  
鈴木 秀雄〔関東学院大学人間環境学部〕

A-5 森林分野の専門辞典に見るレジャー・レクリエーション関連用語の変遷  
○田中 伸彦〔(独)森林総合研究所〕

A-6 英国レジャー研究学会およびその年次大会について  
- 2008LSA年次大会出席報告 -  
○山崎 律子〔余暇問題研究所〕  
高橋 和敏〔余暇問題研究所〕

### ☆質疑応答

□座長：土屋 薫(江戸川大学) 11:00~11:40

A-7 フロー理論の構造と特質に関する基礎研究  
- 自己の統制、環境に対する支配の視点から -  
○マーレー寛子〔京都府立大学大学院〕

A-8 地域スポーツクラブに所属する父親の「仕事の日」と「休みの日」の1日24時間の使い方  
○吉原さちえ〔東海大学〕

### ☆質疑応答

□座長：田中伸彦〔(独)森林総合研究所〕 14:00~15:00

A-9 山小屋の屋根形状の特性が外観評価に及ぼす影響について  
- 北アルプス・雲の平山荘を事例として -  
○下嶋 聖〔東京情報大学〕

A-10 ボート競技による水辺環境の復権  
- 親水メディアとしてのボートの中心価値 -  
○添田 直人〔葛飾区ボート協会〕

A-11 利根運河とボート遠漕  
- 向島艇庫村から銚子までの遠漕の歴史 -  
○古城 庸夫〔江戸川大学〕

### ☆質疑応答

## ■研究発表 B会場

□座長：上岡洋晴（東京農業大学）9:00～10:00

- B-1 レクリエーション活動における参加者の気分と運動能力・身体組成の関係について  
-I市介護予防試行事業の結果より-  
○高崎 義輝〔仙台大学〕  
小池 和幸〔仙台大学〕

- B-2 介護予防教室における目的別レクリエーションプログラムの開発と効果に関する研究(2)  
○小池 和幸〔仙台大学〕  
高崎 義輝〔仙台大学〕

- B-3 介護予防事業における運動実施の自覚的变化について(2)  
-おもにアンケート結果と面接から-  
○上野 幸〔余暇問題研究所〕  
山崎 律子〔余暇問題研究所〕  
高橋 和敏〔余暇問題研究所〕

### ☆質疑応答

□座長：松尾哲矢（立教大学）10:00～10:40

- B-4 高齢者介護サービス事業施設の職員における高齢者レク活動支援力向上について期待(2)  
-セミナー参加者における経験年数別によって-  
○廣田 治久〔余暇問題研究所〕  
山崎 律子〔余暇問題研究所〕  
高橋 和敏〔余暇問題研究所〕

- B-5 老人病院の入院初期における余暇支援のあり方  
○草壁 孝治〔医療法人社団慶成会青梅慶友病院〕  
佐近 慎平〔医療法人社団慶成会青梅慶友病院〕  
今井 悦子〔医療法人社団慶成会青梅慶友病院〕

### ☆質疑応答

□座長：浮田千枝子（群馬松嶺福祉短期大学）11:00～11:40

- B-6 活動支援による行動障害緩和への試み  
○佐近 慎平〔医療法人社団慶成会青梅慶友病院〕  
草壁 孝治〔医療法人社団慶成会青梅慶友病院〕  
今井 悦子〔医療法人社団慶成会青梅慶友病院〕

- B-7 障害者スポーツにおける「障害／健常」意識の変容過程に関する研究  
-車椅子バスケットボール競技者に着目して-  
○河西 正博〔立教大学大学院〕  
松尾 哲矢〔立教大学〕

### ☆質疑応答

□座長：山崎律子（余暇問題研究所）14:00～15:00

- B-8 レジャー志向性尺度の開発に関する研究(3)  
-成人女性サンプルによる尺度安定性の検討と旅行行動への応用-  
○佐橋 由美〔大阪樟蔭女子大学〕  
宮崎 幸子〔中京女子大学〕

- B-9 レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究  
○土屋 薫〔江戸川大学〕  
茅野 宏明〔武庫川女子大学〕  
マーレー寛子〔京都府立大学大学院〕  
佐橋 由美〔大阪樟蔭女子大学〕  
佐藤 馨〔びわこ成蹊スポーツ大学〕

## ■研究発表 B会場

B-10 エンパワメントによるツーリズム協働事業定着に向けてのグループワークに関する研究  
○見田 賢一〔新潟医療福祉大学大学院〕

☆質疑応答

## ■研究発表 C会場

□座長：師岡文男（上智大学）9:00～10:00

- C-1 高等教育機関における地域に根ざした人材の育成  
－学生交流集会その成果と課題－  
○中野 充〔新潟青陵大学〕  
池 良弘〔日本福祉医療専門学校〕

- C-2 総合型スポーツクラブに関する社会学的検討  
○大隈 節子〔三重大学〕

- C-3 総合型地域スポーツクラブ育成事業とレクリエーション協会の「揺らぎ」  
－〇県におけるフィールドワークをもとに－  
○谷口 勇一〔大分大学〕

### ☆質疑応答

□座長：高橋 伸（国際基督教大学）10:00～11:00

- C-4 幼児・児童の健康づくりシステムの構築  
－生活リズム向上のためのレクリエーション活動－  
○前橋 明〔早稲田大学人間科学学術院〕  
松尾 瑞穂〔早稲田大学大学院人間科学研究科〕  
長谷川 大〔早稲田大学大学院人間科学研究科〕  
泉 秀生〔早稲田大学大学院人間科学研究科〕

- C-5 幼児の健康づくりシステムの構築  
－保育園児の運動あそびと歩数－  
○松尾 瑞穂〔早稲田大学大学院〕  
前橋 明〔早稲田大学人間科学学術院〕

- C-6 幼児の生活リズム向上戦略と健全育成システムの構築（IV）  
－幼稚園児の午後あそびの実態と基本的な生活習慣づくりを行う上での課題－  
○泉 秀生〔早稲田大学大学院〕  
前橋 明〔早稲田大学人間科学学術院〕

### ☆質疑応答

□座長：沼澤秀雄（立教大学）11:00～11:40

- C-7 保育園幼児の生活状況と体力・運動能力に関する研究（第6報）  
○長谷川 大〔早稲田大学大学院人間科学研究科〕  
前橋 明〔早稲田大学人間科学学術院〕

- C-8 高等教育期における積極的身体運動の必需に向けて  
－現代社会における体育実技関連科目群の果たす役割－  
○鈴木 英悟〔東海大学非常勤講師〕

### ☆質疑応答

□座長：前橋 明（早稲田大学）14:00～14:40

- C-9 幼稚園就園5歳児の生活経験と身体活動量  
○三浦 唯敬〔東海大学大学院生〕  
西野 仁〔東海大学〕

- C-10 保育者の『遊び』の認識と実践に関する研究  
－指導者養成との関連から－  
○清水 一巳〔名古屋女子大学短期大学部〕

### ☆質疑応答

## First International Recreation Congress に参加した日本人代表 3 人の発表

西野 仁 (東海大学)

### はじめに

1932 年、米国ロスアンジェルスにおいて、アメリカレクリエーション協会が主催し First International Recreation Congress が開催された。この会議は、「第一回国際厚生会議」(名古屋市、1940、p.210)、「第一回国際厚生運動大会」(興亜厚生大会事務局、1941、p.1)、「第一回レクリエーションならびに余暇に関する世界会議」(文部省、1952、p.11)、「第一回世界レクリエーション会議」(文部省、1953、p.15) などと日本語訳はさまざまである。会議は、National Recreation Association が主催し、7 月 23 日から 29 日まで開かれ、25 カ国にハワイとフィリピンを加えた外国から 101 名の代表が参加、国内 33 州とワシントン DC から 595 名の代表が参加した。(1933、National Recreation Association、p.12)。日本からは、11 名の日本人が参加し、岸清一(日本体育協会会長)、大谷武一(体育研究所長)、斉藤惣一(日本 YMCA 同盟総主事)の 3 名が発表した。本研究は、3 名の日本人がどのような内容の発表を行ったのかを、会議の proceedings をもとに、紹介・考察したものである。

### 岸 清一博士の General Sessions における講演 Recreation in Japan 要旨

日本では、西洋流のレクリエーションやプレイグラウンドの領域は、大規模に行われていない。日本には、「Sumo 相撲」と呼ばれる一種のレスリングがある。300 年くらい前からは職業相撲が盛んになったが、2000 年もの長期間、「相撲」はアマチュアでレクリエーションとして盛んに行われてきた。大きな室内闘技場で二人の巨人が相対する定期的な相撲トーナメントは、職業娯楽である。他に「Judo 柔道」「Jiu Jitsu 柔術」「Gekken 撃剣」も古くから行われている競技やレクリエーション的活動である。それらは「Samurai 侍」の教育や訓練の一部として行われてきたが、今日では、中学校や高等学校で、男子の体育科目として行われている。

西洋から紹介されたスポーツやレクリエーションについては、野球が帝国大学や早稲田大学などの大学生の間で急速に広まっており、国技の様相を呈している。漕艇も同様に、大学対抗レガッタも開催されている。陸上競技やローンテニスも盛んになってきており、デビスカップに選手を派遣している。

日本がはじめて国際オリンピック大会に参加したのは、1912 年ストックホルムで開かれた第 5 回大会である。1924 年のパリ大会で織田選手が三段跳びで 6 位入賞し、4 年後のアムステルダム大会で第 1 位になっている。以前は横泳ぎが主流だった水泳もクロールなど近代泳法を学び、アムステルダム大会では、イングランドを破るまでに発展している。しかし、まだ、水泳プールが不足しており、数年前までは、東京 YMCA にあるだけであった。その後東京 YWCA と私立大学にプールが建設されている。二年前には、明治神宮外苑に出来た屋外プールで、極東選手権大会を開催したことを誇りに思っている。この 12,000 の客席を持つプールは今日では、おそらく世界

で最もきれいなプールであろう。1923年の地震以来、東京の学校には、25メートルプールが建設され、体育のプログラムに使われている。

公共のプレイグラウンドも地震後整備されているが、多くの場合、コミュニティレクリエーションやプレイセンターの役割は、神社や教会の庭が担っている。東京には80の公園があるが、そのうちの53は過去5年以内に造られた。これらの公園がプレイやレクリエーションの場となっている。訓練されたスーパーバイザーが常駐するプレイグラウンドはたった一つであるが、全てのプレイグラウンドで管理が行われている。しかしいくつかの体育訓練学校が、それにそった授業を展開し始めており、学校教育の新しい段階に合う人材と、適当な競技やレクリエーションの用具が小学校と中学校に置かれている。これは、60年前に紹介され、学校で共通に見られたそれまで肩苦しい古いスウェーデン体操とは対照的である。

非常に広く楽しまれている競技である、バスケットボールやバレーボールの普及はYMCAのアメリカ人の体育ディレクターたちに負うところが大きい。日本は合衆国から手伝ってもらいながらこの発展を加速し続ける必要がある。日本の社会はどんなにか、欧米からの競技やレクリエーションによって生活全体が深く影響を受けている。日本語にはあてはまる言葉が見つからない多くのスポーツ用語が、ごく普通に若者たちは使っている。二年前の視察中、日本の片田舎で、“home run”, “strike”, “foul”などをそのまま、大声で叫びながら野球をしていた日本人の少年たちに、「どこで英語をならったのか」と問うたところ、「英語は話していない」との答えが返ってきた。

この会議で、合衆国はじめ、諸外国の代表と接触し、多くを学び日本に持ち帰りたい。そして、日本レクリエーション協会を組織し、アメリカ合衆国がやっているようにより実効のあるものにして行きたい。

### 大谷武一の Use of School Facilities for Recreation Section Meeting における発表要旨

遊びには十分な空間の確保が絶対条件である。現在、日本では、主にお寺や放課後の学校校庭がレクリエーションの場を提供している。最大の問題は指導者である。教育関係者たちを安心させてくれるような指導者の育成は、今のところほとんど不可能である。しかし、10年後には状況が変わっていると信じている。

日本の学校では、体育は一部の高等教育機関を除き必修であり、Judo や Gekken が取り入れられている。加えて、ボランティア団体で、ゲームやスポーツが行われている。中でも、ドッチボールは小学校で盛んである。円陣で行われたり四角いコートで行われたりするが、きちんとしたルールを定めている。バスケットボールは主として男子生徒に、またバレーボールは女子生徒によって行われている。テニスは中・高等学校で行われている。ハードボールを打ち合うテニスも行われているが、多くの学校ではソフトボールが使われている。バックネットも要らず、この方が、費用もかからない。

アメリカで国技と言われるほどの野球だが、日本の方がより人気が高いかもしれない。日本の学生は野球狂である。小学校などでは軟らかいゴムの球が使われており、学内で学生と教員たちがチームをつくり、ゲームを楽しんでいる。私のための今回の送別会も野球だったし、帰国後の

歓迎会も野球だろうと思う。観るためより、多くの者が参加できることに重きが置かれている。

長い歴史を持つサッカーとラグビーも大学で行われているが、アメリカンフットボールは紹介されていない。しかし、間もなくこれも盛んになるだろう。

海に囲まれている日本では、水泳が盛んである。海岸、湖、川は、夏の間、大いに賑わう。泳法の完成度や遠泳が大切にされてきたが、最近は学校に水泳プールが次々に建設されている。

スキーやスケートが、近年急に、若い人たちの間で人気が出てきた。寒冷地の少年たちはそれらが出来るが、温暖な地方の人にとっては、適地までの旅費を捻出せねばならない。

陸上競技の進歩も著しい。国際オリンピックの陸上競技出場者のほとんどが大学生であることは興味深い。

遠足やピクニックも学校でよく行われている。もちろん、本来教育目的で行われるが、多くのレクリエーション的価値を持っている。小学校の4・5年生が歩ける範囲の名所や重要な場所を訪れる。これらを通じて、若者たちは何らかの身体的にも、心理的にも、精神的にも役立つものを得ている。

つい最近までは純粋なスウェーデン体操が主流であったが、一種の教育体操が注目されている。機械体操がだんだん広がってきて、オリンピックに初めて、体操チームを送るまでになってきた。

多くの少年が参加する競技やレクリエーション的活動は Judo, Jiu-Jitsu, Gekken である。もともと、自己防衛のためであったが、近年は楽しみのためへと変わってきた。

競技スポーツは代表チーム間の競技会に主眼があり、学内のスポーツ競技やレクリエーションの発展を狙っている。教育的観点からすれば、単なる競技の観客ではなく、できるだけ多くの人が実際に参加することのできるスポーツやレクリエーションを求めている。われわれはみんなのスポーツ **sports for all** を発展させたい。これがわれわれの目標である。放課後の校庭開放や指導者を養成し、成人たちがもっともっと遊びやレクリエーションの価値や質がわかるようにしていくことが望まれている。

## 斉藤惣一の Recreation in Religious Group における発表要旨

日本の遊びやレクリエーションを考える時、天照大神の神話を思い出す。岩屋に隠れた大神の前で、多くの位の低い男女の神々が歌い踊り、それにつられて大神が岩屋から出てきて世の中が明るくなった。その時、大神が発した言葉が **attractive** あるいは **interesting** を意味する “**omoshiroshi**” であったという。

この物語は、(1) 女性の尊敬 (2) 大衆遊戯 (3) レクリエーションについて示唆している。日本には、大きく神道、仏教、キリスト教の3つの宗教がある。初期の神道の儀式や祝祭では、踊り、音楽、弓、相撲、剣術などが行われていた。これらは人々のレクリエーションでもあり、それらの潔白さは、スポーツマンシップに相通じる。

仏教は本来もっと禁欲的であり、たぶん神道のような陽気さはないのだが、日本仏教は本来の仏教の考え方とはきわだって異なっている。祭りで老若男女は陽気にはしゃぎ、歌い、踊る。また寺はコミュニティーの遊び場でありレクリエーションセンターになっている。高名な

僧 "Ryokan" "良寛は子供たちと寺で一緒によく遊んだと伝えられている。

日本でのキリスト教について述べよう。日本のキリスト教会は、遊びやレクリエーションの精神の紹介に大きな役割を果たしたとは言えないが、アメリカ人宣教師たちの個人的リーダーシップや熱心さは、野球やその他のスポーツやレクリエーション普及の重要な要素となっている。

YMCAとYWCAがどんなにかレクリエーションに貢献したかを述べることができてうれしい。東京YMCAは、日本初のそして長期にわたって近代的な体育の中心であった。F.H.Brown氏のもとで、バスケットボールやバレーボールや体操レクリエーションなどが発展した。地震後の復興で、多くの学校はYMCAのデザインを参考に体育施設を建てた。永い間、YMCAの水泳プールは、日本で唯一のプールであった。

#### 中略

YWCAの貢献も同様に重要であり、特に女性のスポーツ競技やフォークダンスや野外劇などの発達に関係している。

#### まとめ

1932年ロスアンゼルスで開催されたFirst International Recreation Congressに参加した日本人代表の発表は、当時の状況をできるだけ網羅しようとの意図が伺える。

岸清一は、相撲の紹介からはじめ、欧米から移入された野球、漕艇、テニスなどが大学生を中心に普及していること、しかし、水泳プールなど施設が整っていないこと、公園やプレイグラウンドの建設に着手したが、管理や指導を担う人材が整っていないこと、片田舎でもスポーツ用語が英語のまま使われていることなどを語っている。最後に、アメリカから多くを学び日本にレクリエーション協会を組織したいと宣言している。

大谷武一は、学校施設に絞って発表している。日本で誕生した軟球にテニスや野球を紹介し、遠足にも触れ、参加するスポーツの必要性を強調した。また、sports for allという言葉を手紙に使用していたことも特筆される。

斉藤惣一の発表は、神道、仏教、キリスト教それぞれが、レクリエーションとどうかかわったかを簡潔に解説している。YMCA,YWCAが日本の体育・レクリエーションへ貢献したと述べている。

#### 文献

National Recreation Association, 1933, First International Recreation Congress PROCEEDINGS

名古屋市、1940、第二回日本厚生大会大会誌

興亜厚生大会事務局、1941、興亜厚生大会誌

文部省、1952、職場のレクリエーション

文部省、1953、青年の体育・レクリエーション指導の手引き

## 戦時期日本における「体力向上」の祭典<sup>イベント</sup>

### ——紀元二千六百年・東亜競技大会を中心として

小澤考人（東京大学大学院）

紀元二千六百年、幻の東京オリンピック、レクリエーションの力学

東京オリンピックがアジア初の大会として 1964 年に開催されたことは、戦後日本の高度成長期を照らし出す明るい星座のように、多くの人々に記憶されている。それがかつて開催決定後に戦争で消滅した 1940 年の「幻の東京オリンピック」以来、ようやく実現した夢であったことを知る人も少なくない。だがそれにかわり同じ西暦 1940 年に、アジアの五輪ともいうべき国際スポーツ競技大会が日本で開催された事実はそれほど知られていない。紀元二千六百年の奉祝イベントとして開催された、東亜競技大会がそれである。

本報告では、日中戦争下で開催されたこの東亜競技大会に焦点を当てる。戦時期日本のスポーツや娯楽など文化的側面をめぐっては、従来「暗い谷間」の時代として、軍国主義体制による弾圧やファシズム体制下での統制といった局面が取り上げられてきた。それは戦後、「明るい民主的」国家への転換を歩み出した日本社会において、戦時期の思想統制や消費と祝祭の抑制など文化の「抑圧」こそは、自由と主体性を侵害するファシズム期の悪しき象徴として、克服されるべき対象と見なされたことにも深く関わっている。つまり戦争批判と反省の視線が、反復されてはならない「暗い谷間」を問題化してきたのだが、近年、戦時期におけるむしろ文化創造の営みや、国家権力による一方的統制ではない下からの能動的参加も含めた複合的諸側面についても捉え直しが始まっている。いわば単なる「抑圧」のみならず、それを巻き込む異なる形での様々な扇動もまた問題となり始めたのである。近代日本は明治国家の当初から国家装置として祭典を創出してきたが、戦時期においてもスポーツや祭りが一様に弾圧されたのではなく、本報告が検討する東亜競技大会もまさに「スポーツの祭典」として開催されたのである。より深い批判的視線を堅持するためにも、戦時期における諸力の絡まりあう複雑な実態を丁寧に追跡していかなければならない。この時期には明治神宮大会など重要なスポーツ・イベント数多く見られるが、本報告はこれまで研究主題として看過されてきた東亜競技大会を中心に焦点を当て、この出来事の具体的な内実とその出現を促した力学について照明を当てるものである。

東亜競技大会は、日中戦争の長期化により二年前に東京オリンピックが返上され、かわりのヘルシンキ大会もまたヨーロッパでの第二次世界大戦の勃発により二ヶ月前の 4 月に放棄が正式宣言されたばかりの戦渦の国際情勢下で、東京大会が 1940 年 6 月 5 日～9 日の五日間にわたり、関西大会は 6 月 13 日～16 日の四日間に開催された。大会の主催者は紀元二千六百年奉祝会・東京市・大日本体育協会による共催のもとで、東京大会は、明治神宮外苑の競技場・相撲場・野球場を中心に、日比谷公園コートや日本青年館、大宮競輪場などの会場で行われ、これに対して関西大会は、奈良県の橿原神宮競技場をはじめ、兵庫県の子園野球場、大阪府の花園競技場・天王寺公園・真田山プールなど拡散した範囲で開催された。開催国の日本から 326 名の参加を筆頭に、外国からは満州国 199 名、中華民国（汪兆銘政権）65 名、フィリピン 71 名、ハワイ 17 名のほか、在留外国人 54 名を含めた 406 名、合わせて 732 名の青年たちによって、それは国際競技大会という形のもとで

繰り広げられたスポーツの祭典である。

この国際スポーツ競技大会がなぜ開催されたのかという問題について、大日本体育協会の報告書も含め、これまで一般にく（幻の東京）オリンピックの代替としての紀元二千六百年奉祝事業として理解されてきた。それは確かにそのとおりだとしても、しかしそれを再考に付すと次のような問いが浮上してくる。まずオリンピックの代替という点について、なぜ返上した企画を代替する必要性があったのだろうか。つまり東京オリンピックの返上には理由があり、それが日中戦争に起因しているとするれば、1938年の返上時点よりもお戦禍の泥沼化した1940年に、なぜわざわざ国際スポーツ競技大会を開催する必要性があったのだろうか。また国際大会とはいえなぜアジアに偏向しているのか。紀元二千六百年の奉祝という点でも、なぜ政府主催の祝典事業（建国祭・銃後奉公祈誓大会など）だけではとどまらず、それとは別に国際スポーツ競技大会を行う必要性があったのだろうか。

このような問いのもとに、1930年の東京オリンピック招致構想を発端として特に1938年7月15日の東京オリンピックの返上決定というポイントに注目して追跡していくと、次のような構図が浮かび上がってくる。すなわち、帝都復興の次なる課題として一都市（東京市）の構想から出発したオリンピック招致構想が、紀元二千六百年の奉祝というナショナリズムの論理を付加され実現化することで、1938年7月の東京オリンピック返上決定後にはオリンピック返上や万博の延期にもかかわらず、紀元二千六百年の奉祝という論理自体はその普遍性により消滅することなく、今度はむしろ西暦1940年が近づくにつれ軍国主義体制とナショナリズムの深まりとともに、何らかの祭典・イベントを行う契機や前提となっていくという構図である。その際、結論を先取りしていえば、大日本体育協会による1938年8月9日開催の座談会（「オリンピック返上後の体協の方針」）や1939年11月19日開催の座談会（「紀元二千六百年を迎えて」）に注目すると、そこに前景化してくるのは、オリンピックというイベントの領域を越えて、国民の「体力向上」を促進する力学が立ち上がり作動し始めている様相であり、本報告で主題とする東亜競技大会のみならず、同じく1940年の10月16日から大阪市で5日間開催された興亜厚生大会をはじめ、全国で多々行われた小さな運動会や武道大会などを加えると、この紀元二千六百年という平面には直接・間接に「体力向上」の祭典として並ぶイベントが相当数に及ぶことが判明する。

本報告では、このように東亜競技大会という一つの国際スポーツ競技大会を中心的に取り上げ、この出来事の具体的内容とその出現に関与する重層的な力学を探究することにより、戦時期日本におけるスポーツ・イベント、より特化していえば興亜厚生大会や国民厚生運動も含めてそれらを貫くレクリエーションの力学を浮かび上がらせ分節していくことを課題とするものである（具体的なデータ・資料の提示は報告レジュメと補足資料参照）。

#### <紀元二千六百年の祭典——中央諸団体等による大規模な奉祝イベント>

|     |                                       |
|-----|---------------------------------------|
| 2月  | 樫原神宮奉餼米継走（2日）、建国祭（11日・紀元節）            |
| 6月  | 東亜競技大会、奉祝天覧武道大会（18～19日）、銃後奉公祈誓大会（19日） |
| 7月  | 東亜教育大会（8～12日）                         |
| 8月  | 樫原神宮奉納武道大会（16日）                       |
| 10月 | 興亜厚生大会（16～20日）、明治神宮国民体育大会（27日開会式）     |
| 11月 | 海外同胞東京大会（4～8日）、紀元二千六百年式典・奉祝会（10～11日）  |

（出所）『紀元二千六百年祝典記録』（第十二冊）、下線部は「体力向上」の祭典。

## 知識の社会的構造変化とレジャー概念の再構築 メディア編集型人材教育プログラムの開発を通して

犬塚潤一郎（実践女子大学）

レジャーとは何か。日常的には分りきったもののように思われるこの語の意味内容について、レジャー研究者はそれぞれの個別の研究の場の必要に応じて、問いなおしを繰り返すことになる。レジャー概念の定義については、従来より多くの研究が発表されてきていて、われわれの理解を大いに深めてきた。すでにこの点については十分な基礎が与えられているとみなしえることではあるのだが、一方で、昨今の情報化社会の様相をモデル化する試みから見て、従来のレジャー概念把握の枠組みに対して、いくらかの変更が必要になってきたのではないかと考えられる。そのような姿勢から、あえてその当否をここに問いたいと思うものである。

### レジャー概念の枠組み

ここでレジャー概念の研究について総括するつもりはないが、概して“レジャー”を問うにあたっては、“労働”のための時間および“生活の必要”のための時間との対比、および“主体性”の概念との関係を通して捉えられ、また一方レジャー行動を“消費”のサイクルに絡め捕る“産業の仕組み”への社会学的な批判から論ぜられてきたものと思われる。

そこには単なる抽象概念定義の問題というよりは時代性を帯びるものがあり、今日のレジャーの問題は、進展する産業社会における人間性の問題として、概念的には近代性の反省のコンテクスト(post-modernity)に依りながら、社会論や産業論の範疇における具体性に即して語られてきたのである。

一方産業社会の構造それ自体は、情報技術の進展を推進力として、それ自体の内部構造からの変質を続けている。具体的には企業の組織構造とそこに求められる人間の資質について際立った変化があり、さらにそれに連動するように家族の具体的な姿や人間観が変化させられてきた。

ここでは、知識社会とも捉えられる情報化が進んだ社会における“労働”の意味内容の変化に注目して、従来のレジャー論の基礎枠組みとの異同を問いたいものと思う。

### 労働の変化

もとより労働の意味内容については、中世社会までのものと近代のものとは大きな変化がみられることが指摘されている。ユダヤ教における安息日が罪の報いに相対するものであるように、またギリシア哲学における観照が本来の姿を忘れていることに相対するものであるように、古代から中世にかけて、労働とは刑罰・苦役の意味を含むものであった。一方ルネッサンス以降では、人の労働が価値の第一の源泉として、美德と重ね合わされるような対照性をも備えるようになる。

それは、労働 labor と仕事 work の対比としても捉えられることでもある。“仕事”は、義務としての従事だけではなく、芸術家の作品や、今日でいえばスポーツ選手の優れたパフォーマンスを指すものとしても使われるのである。良い仕事が語られることはあっても、労働と善とは語義的に相容れないわけである。そのことが労働とレジャーとの関係を複雑なものとしている。形式的・外面的には同じ労働と見えるものが、本人にとってはやりがいのある仕事と感じられているのであれば、それはレジャー行動ともみなしえるのである。

そのことを説明するために、主体性という概念構造が枠組みとして加えられてきた。そのひとつの典型が“学習”である。義務や強制として捉えられる勉強は、レジャーのない時間であるのだが、真理の探究の時間こそレジャーの本質と考えられてきたのである。逆に強制的・受け身的に行われるレジャー行動が、労働と等しいものと感じられることもある。

このようなレジャーと労働との関係の近代的な分かり難さは、主体性という枠組みを重ねることによって再整理することができるのであるが、ここではそれとは違った意味での、労働の意味内容の変化について指摘してみたいと思う。

### 資源としての人間

単純化してみれば、産業構造としては脱工業化、モデルとしては脱近代化の社会において、労働者に求められる能力は、何らかの専門的・限定的能力や単純化・標準化された役務遂行への時間提供ではなくて、いわば言語活動一般についての能力となった。企画を立てたり資料整理を行う、あるいは交渉事にあたるにせよ、そこに必要とされるのは、文字や数字からなる言葉・情報を扱いコミュニケーションする能力である。それは人間にとっての、人が人であることの、本質にあたる能力であり、労働が人間の部分的な（本来の姿でない）能力を要請した状況とは、対照的に異なっている。

『モダン・タイムス』でチャップリンが演じた工業社会での人物像は標準化された運動によって疲弊した心身を再生する・レクリエーションすることと全体的な人間性を回復する・レジャーする時間と場を必要とした。そこに描かれた労働とレジャーとの対比は鮮やかなものであった。

しかし一方、チャップリンの演じる損なわれた人間像は、家庭の時間・場においてもネジを回し続ける、止まらぬ労働行動によって表現されたのだが、今日の労働者が、帰宅しても間もなく、あるいは休日に、パソコンのスイッチを入れてモニタに向かうことは、それとは重ね合わされることではないのである。

今日の労働の現場は、ネジを回すことほどに同じことの繰り返しであるどころか、偶発的で不確定な、それでいて言葉の速度で変動を続ける、流れゆく情報の変化に対応することである。繰り返されることがないのでそれは、年月を重ねるように従事しても従来の意味での専門となるような修練はなく、いつまでも一般の能力にとどまる。

そして、労働の時間を終え、家庭の、自分の時間と場に戻ってもなお、使われるのは同じ能力なのである。本も読まずパソコンも見ず、自由な時間は言葉を使わずに体をどこか動かすようにする、というのでは、労働－レジャーとは逆の関係で、人が部分化する（動物になる）ということになってしまう。

労働に言語活動が取り入れられるということは、労働者に無定形かつ柔軟な言語行為が求められるということであり、定型化した特定の仕事を遂行する専門的・部分的能力ではなくて、人事が求めるのは何をやるかは決まっていない可能性へと対応できる人間存在そのもの、つまり“人材”なのだということである。

### レジャー余力の喪失

人材とは、人間としての一般的な言語活動を遂行しえる存在そのものを売り渡すことであって、そこから余った時間・余暇に残っているのは人間固有のというよりは生物一般の能力でしかないという状況につながりえるものである。

それは、過去と比べればはるかに知的な業務を遂行しながら自分の時間ではなぜ学習に

取り組むことができなくなってしまったのか（晴耕ならぬ晴読が続けば、雨読のリズムが豊かになり難い）、労務管理に精神障害の問題がクローズアップされるのかという、社会現象の問題につながりえることである。

労働が人間の非人間化を求めるものである場合はそれを補うように、レジャーに人間の全体性を求めることができるのであるが、労働が人間の一般的能力、つまりは人間そのものの存在を道具として求める場合は、残されたレジャーの場にはすでに空っぽとなった存在しか戻ってこないという、いっそう過酷な現実が待つことになる可能性がある。

このような状況においてレジャーの課題である人間性の回復を果たすためには、人間にとっての一般的な言語行為についての能力の質を、従来のモデルとは変えてゆく必要があるのではないかと考えられる。

### 知識の社会的構造の変化

偶発的で加速度的に変化する情報に対応する能力とは、従来の知性に求められていた“集中”という特性とは対照的な“気散じ”の状態にある。一つに向かってゆく強力な推進力よりも、どうにも対応できる軽さである。

気が散っている、おしゃべりをしたりあれこれ目移りしたり落ち着かない状態は、従来は知的学習の障害として捉えられてきた。それをいかになくし集中状態へと収斂してゆくかが教師にとっての教室経営の課題であった。それは知識の探求というものがひとつの真理へと向かうものである、ということと重なり合っている。

しかし現代の思想が真理よりは関係を重視するように、また現代の産業が全ての人にとって最高の普遍的価値を持つもの、つまりは単一の製品の開発を目標とするものではなく、移り変わる多様性に対応できるシステムづくりを中心課題としているように、求められる知性の状態は子どもの遊びの状態に似た、気散じの状態なのである。それは従来から見方からすれば物事の表面を上滑りしてゆくような軽薄さであり、真理や存在に根拠を求めず、言説から次の言説が生まれてゆく際限なき繰り返しの多様化のメカニズムである。

たとえば今日の若者を中心とした商品の価値観が、優れている、良い、美しいといった普遍的価値観（真善美に相当する）つまり収斂する方向よりはむしろ、“かわいい”という、伝統的な意味では価値とはいえない、横並びに対象を並べてゆく選択基準にシフトしていること、あるいは、アニメに代表されるソフト商品（コンテンツ）が、現実との向き合いにおける作品化という位置関係よりは、既存の作品群を源泉として、表現が表現を生むように、いわば閉じた表現世界構造にあることなどの、社会に特徴的な現象と対応していると考えられるだろう。

そして知識自体もまた、誰か特定の人物、あるいは固有の場所といったものと不可分にあるのではなくて、ネットの上に解放され、重なり合いつながりあいながら、匿名的で場面的な、根なし草的なままに規模の拡大を続けている。

このような状況は、流行や一時的なものではなくて、揺り戻しの動きこそあれ、全体としては一貫した、不可逆の社会変化（脱工業化、知識社会化）としてみなされるだろう。

それを前提とすれば、知識の取り扱い方の教育、つまりは一般的な言語活動能力についての教育の手法にも、対応した変更が求められることだろう。

### メディア編集能力

教室ではまず排除されるべき、講義中での学生のおしゃべりは、先の気散じの状態への

要請からみれば、むしろ推奨し技術としての高度化を求められるべきなのであろうか。講義を聴きつつおしゃべりをしながらメールをチェックしアルバイトの計画を調整するようなこと、それは集中力の欠如した状態なのか、偶発的でめまぐるしく移り変わる動的多様性への対応能力を示すものなのか。同じように、従来は処罰の対象ともなる、公開情報の切り貼り行為によってなるレポート作りに、例えば wiki にみられるような、集合的な知の編成への参加能力の訓練を見るべきなのだろうか。

この後者の課題について、あるモデレートな対応を構想し、具体的な教育プログラムとしての開発に現在取り組んでいる。それは従来のな体系性への志向と散逸的な状況への適応とを、操作的に組み合わせた手法である。現在は非常に単純化されたフレームワークに落ち着いたその手法のおおよその概要と利用イメージは次のようなものである。

体系性というものはネットワーク状況のうちにおいても、構成要素的に現われる。知的教育においてそれに対応する作業の代表となるのが、論文作成であろう。論文は一般的な定式、すなわち「対象—方法—解釈／導出—まとめ／反省」という構造を持っている。

一方その構造のそれぞれの段階に対応して、現象、理論、組み合わせの可能性、対置的射程といった、学習者から見て参照すべき知識が多様にあり得る。従来の教育／学習過程は、学習者から見てこの参照すべき（外部にある）知識を、いかに自分のものとし、固有の作品（自分の論文）の創造へと結び付けてゆくかということが課題とされてきた。その意味で、安易な切り貼りは、借りものにとどまるかあるいは窃盗に等しい（他人の所有のままに私有に至っていない）とみなされるのである。学ぶということは人のものを自分のものに仕上げゆくことで、それが借用でも窃盗でもないようにするために、学問の手法の洗練が行われてきたものともいえるだろう。

そのような学習者個人の内面における、いわば隠された知の融合や変態と対照的に、知の相互関連構造を外部的にオープンに表現し操作するインターフェースをコンピュータの画面上に用意する。学習者は、このインターフェースを通じて自分の論文構成を考え、ラフな内容を記述しながら、論拠や関連事項となる知識をネット上から検索・見つけ出して、インターフェース上の参照構造要素へと切り貼りしてゆく、という操作イメージである。

さて学習者の意識は、創作者と収集・編纂者との間を行き来しながら、画面上では構造的な明確さのもとに、紛れることがない。この内面化と構造的把握との間をシフトする能力の習得がここで目的とされていることである。

現在のネット上の知の学問的水準の不十分さのうえでも、このような、知識がネットに公開され相互関係している状況での知的作業技術の習得が、先にみた労働の意味内容の変化およびレジャーの新しい構造への、人の対処の方法へとつながるものではないだろうか。

### レジャー能力の開発

情報化という社会変化がもたらす現実を通してみれば、脱工業化や知識社会化は、労働とレジャーとの二項関係におけるウェイトの転換ではなく、労働の意味内容を変え、人の主体性や生活の実態を変更し、レジャーとの意味関係を変えつつあるものなのだろう。

求道的な面もある旧来のレジャーに対して、本質的に子どもの遊戯的で、外観としては軽薄な、新しいレジャーの成立が要請されていると、もしそう考えるのであれば、これからのレジャー能力の開発は、ネット的な知への参加の技術となるのではないだろうか、あらためて問い直してみたいものである。

## 現代社会における運動に関する提言としてのいくつかの <sup>キーワードズ</sup>Key words を探る

- 鈞持 武 ((社福)仲生会; 関東学院大学大学院)  
 鈴木英悟 (東海大学)  
 鈴木秀雄 (関東学院大学人間環境学部)

キーワードズ: 癒し (処方型) と快追求 (カフェテリア型)、楽しさとおもしろさ、余暇の3機能  
 カップリング化 (組み合わせ) とカクテル化 (融合・混合)、至適運動 (Befitting Exercise)  
 運動処方方の4原則、怒責運動 (Holding breath and Straining muscles)、運動機能形態

### I. 研究の目的

現代社会での生活様式の静的で不活発な生活への偏りから、多世代にわたり身体運動の実践が必要であると提唱されている。子どもの体力低下、中高年のメタボリックシンドローム (Metabolic Syndrome)、高齢者の身体機能の低下 (筋力の低下) などの問題も生じているからである。

その身体運動は、健康の3要素の1つであるが、休養と栄養の2つとは大きく異なる点を有している。それは、休養と栄養は生理的な必要性が起こり、眠くなったり、空腹感を感じたりするが、身体運動だけは生理的な欲求が起こってこないことである。そのため、「身体を動かすことが楽しい」とか「健康のために、運動をしなければならない」といった主体的欲求がない限り、十分な運動量を日常生活の中に摂り入れることは難しい。

現代人は、余暇において楽しさやおもしろさの追求はもとより、所謂“癒し”といわれる領域の活動もしながら、各世代が抱えている課題を克服していくために、積極的な身体運動の実施と生活習慣化への導入・転換が急務といえる。

本研究では、身体運動に関連する先行研究のなかから、いくつかの重要語としてのキーワードを探り、それらの課題を繙いていくことが目的である。

### II. 研究の方法

本研究は、現代社会において余暇になされる身体運動の必要性を再認識するとともに、身体運動の“科学的効果・感覚的効果”と“生活習慣化・運動習慣の社会化”への手がかりとするため、共同研究者である鈴木秀雄の以下の先行研究：

1. 「健康づくり実践編—要介護予防運動のすすめシリーズ⑧—」『社会保険』2005. 12月号 No.665, (社)全国社会保険協会連合会, 2005年12月.
  2. 「至適運動の意義」『人間環境学会紀要』第7号 関東学院大学人間環境学会, 2007年3月.
  3. 『新版 スポーツ・体育・運動実践考～“至適運動のすすめ”と“生涯スポーツへの誘い”～』石橋印刷, 2007年3月.
  4. 「多世代にわたる健康的な身体運動の創出」『人間環境学会紀要』第8号, 関東学院大学人間環境学部, 2007年9月.
- を中心に、多義にわたる身体運動に関するキーワードを探る。

### III. 身体運動の諸相

多世代にわたり身体運動の実施が求められているが、身体活動の理解のされ方の違いも含め、まずはその整理をしておきたい。竹中は、「身体活動とは、骨格筋の収縮によって生じるあらゆる活動、すなわち散歩、家事、園芸など日常生活に

おける、いわゆる身体を動かすという意味である。身体運動とは、身体活動の中でも、健康増進や体力増進を目的とし、構造化され、反復されるものである。…（中略）身体活動は、日常生活における活動量全般とし、身体運動は、特別な時間や場所において行われるものとして捉えればよい<sup>1)</sup>としている。

しかし、身体運動は、特別な時間や場所においてのみ行われるものといえるのであろうか。余暇において身体運動を摂り込もうとするとき、その実施者がなぜ身体運動をしようとしているのか、どうしてしなければならないのか、あるいはしたいのかなど、心理的な要因にまで明確に論及・論究することが必要であろう。

また、現代社会では、日常生活の利便性や効率性、安全性を優先するために、機械化が進み、身体活動は自身のエネルギー消費を少なくしようということから、省エネモード化している現実がある。当然、そこでは積極的・意欲的な活動には至らない。だが、身体活動においても、家庭菜園などで鎌を持ち、上肢・下肢の筋力トレーニングの一環とばかりに、意識して実践されれば身体運動へと見事に変容する。

身体運動が、手段的な身体運動であろうが、目的的な身体運動であろうが、いずれも重要である。鈴木は、積極的な身体運動の発生を①課題起因型（問題解決型）と②目的指向型（嗜好実践型）に大別し、前者を治療的・療育的・処方的（therapeutic）な意味合いを持つ広い意味で“癒し”（処方型）とし、後者を個人の嗜好として身体運動に興味や関心があり、それ自体を楽しみに運動しようという“快追求”（カフェテリア型）としている。<sup>2)</sup>

課題起因型（問題解決型）は、しなければならないという手段的な身体運動であり、その運動量は結果的に有効性に重点がおかれる。また、目的指向型（嗜好実践型）は、特化した種目に没頭しやすく、今流に表現すれば、時には“オタク化”することさえあり、必要とされる運動量を満たさないこともある。ウォーキングやランニングは、有

酸素運動であり、体脂肪の減少には効果が期待できるが、例えば、ランニング好きが高じてウルトラマラソン（100 \*<sub>m</sub>）などにのめり込み、膝痛や腰痛を慢性的に抱え込んでしまうことにもなる。これは、過度な身体運動による“オーバー・ユース（over use）”の一例といえよう。身体運動を実践する際、留意すべきことは、癒し（処方型=手段的）に対する“有効の下限”と、快追求（カフェテリア型=目的的）に対する“安全の上限”である。

また、特定の有酸素運動に偏ることは、心肺機能の向上にそれらの運動が集中して、限定されたトレーニングを意味することになり、筋肉群の向上も求められる健康の獲得や寝たきり防止等の課題に十分対応できるとはいえない。特に中・高齢者の場合、骨密度が減少し、骨粗鬆症（骨量が減少し、骨の構造も破綻して脆い）になることや筋肉量の減少が顕著に現れることから、身体運動の中に危険を回避できる形態での怒責運動（holding breath and straining muscles）を積極的に摂り入れ、抗重力筋（背筋群、大腿四頭筋、下腿三頭筋など）を中心に筋力をつけ、維持していくことが必要となる。

筋力をつけるということは、即ち筋肉を作ることになる。鈴木によれば、体の動きを起こす能力として必要になる“筋肉”を作る働きは、基本的には成長ホルモンが大きな役割を担っている。特にいきみ踏ん張る“ややきつい運動”のような怒責運動を行うと、成長ホルモンの分泌が盛んになり、蛋白質の同化を助長し、筋肉が作られる。怒責運動とは、相撲で組み合って力を出しているが動かない状態や、故障をした車を後ろから力を込めて押しているような動きであり、即ち踏ん張る身体運動がその典型的な運動である。歯を強く噛み合わせることで、脳（海馬、視床下部、運動野）への強い刺激が伝わり筋に力を入れることができる。但し、中高年者にとって息をこらえながら強い力を出す怒責運動は危険性も含む。その回避には自ら号令をかけながら行えば、呼吸をしている状態と同じようになり、危険回避の一助に

もなる<sup>3)</sup>と論述されている。

また、石河は、「運動によって成長ホルモンの分泌が増加する…成長ホルモンは睡眠時にも増加するが、はげしい運動の方が血中の成長ホルモンの濃度ははるかに高いレベルに達する」<sup>4)</sup>とも報告している。

つまり、成長ホルモンの分泌は、この怒責運動のように筋肉に強い力がかかったときと、ノンレム睡眠中に分泌されるが、高齢者に限らず、筋力向上を目的とする際、呼吸をしながら怒責運動を積極的に実践するとともに、持久的な疲労を摂り込む運動を加え、しっかり睡眠をとるライフスタイルこそ、持久力を有する身体の造り上げとともに、筋力を効率よく作り上げることができる。筋肉量が増えれば、体内のエネルギー消費も盛んになり、代謝機能の向上にもつながる。高齢者に過度な筋肉運動が必要なのではなく、日常生活で使われる筋肉を中心に筋力を向上させていくことが、自立生活維持につながっていくことは言うまでもない。補完的身体運動の実施や積極的な他種目への挑戦もなされていくことが大切である。

前述した“適切な身体運動”の総称として、鈴木は“至適運動 (Befitting Exercise)”という用語を定義している。至適運動とは、その個人の状態に相応しい運動の質量や形態を意味するもので、適度な負荷があり、安全の上限を超えることなく、しかも有効の下限を下回ることのない理想的な運動の質量・形態・嗜好をさし、その全体像を論じている。運動を処方的 (運動の4原則: ①安全の上限、②有効の下限、③個人の条件…性別、年齢、身体状況、運動経験、既往歴等、④運動の条件…強度、頻度、反復、回数、時間等) に捉えることは、既に手段的な意味合いを持つもので、楽しさの獲得やおもしろさの実感 (個人の嗜好: ①個人の楽しさ、②個人のおもしろさ) を得ることは最優先課題とならない。具体的な運動機能形態 (①動きを起こす能力…筋力、②動きを続ける能力…持久力、③動きを整える能力…調整力→柔軟性、平衡性、敏捷性、巧緻性) の向上には、主観的で感覚的な目標値の設定ではなく、客観的で科学的

な判断が必要になる。<sup>5)</sup>

多世代にわたる身体運動の実践について共通して言えることは、安全性と有効性、快追求と癒し、筋力・持久力・調整力のバランスを常に意識し、調整・実行されていくことである。

#### IV. キーワードのまとめ

積極的身体運動の実践は、豊かな発育・発達、健康な身体獲得のみならず、自立した生活維持 (寝たきり等の防止) ばかりか、精神的な発達や安定、認知症の改善・抑制をもたらす。

身体運動の動機、発生は上述の通り、課題起型 (問題解決型) と目的指向型 (嗜好実践型) の要因からなり、手段的領域の身体運動には、健康のためであったり、病気の予防や治療であったりすることから、当然のごとく楽しさ・おもしろさが削ぎ落とされ、消極的になり、継続化に至ることは難しい。一方、目的的身体運動は、おもしろさ・楽しさから、より高度な技術や戦術を求め、運動の競技化へと進行したり、その種目にしか興味を示さなくなったりすることがある。どちらか一方に偏ってしまうことは、時として望ましいことではない。大切なことは、その身体運動の継続化をはかる意図から、楽しさ・おもしろさの経験を通して、それらを感じ取る能力を身につけることであり、同時に運動の4原則である、安全の上限、有効の下限、個人の条件、運動の条件を正しく認識し、補強・補完的身体運動を実践していくことである。

仕事や身体活動等を省エネ化してしまっている現代社会では、多世代にわたり、それぞれの状況・状態に適した“至適運動”を日常生活の中に摂り入れ、身体的レクリエーションへと昇華させていくことが求められる。

なお、余暇になされる身体運動であることから、余暇の3機能 (休養や休息の回復型、気晴らしや娯楽の発散型、自己啓発や自己開発の蓄積型)<sup>6)</sup>における創意・工夫から自身の至適運動を創出し、実践していくことも重要である。

①休養や休息の回復型は、単に休ませることだ

けを指しているのではない。むしろ使っていない身体を積極的に動かし、身体を養うことを意味している。

②気晴らしや娯楽の発散型は、楽しさ・おもしろさを求める目的的身体運動を進める一方で、健康づくりという手段的な要素を常に意識しながら、バランスをとっていくことが求められる。

③自己啓発や自己開発の蓄積型は、自身を向上させることはもとより、各種ボランティア活動をはじめ、積極的な社会参加や社会貢献への発展までを視野に入れるべきである。例えば、筆者が日本レジャー・レクリエーション学会第36回学会大会において発表(「福祉領域におけるレクリエーションに関する専門家の導入をめぐる提言」)したように、福祉領域においても正しいレジャー・レクリエーション観を兼ね備えた人材が強く求められている。要介護予防を目的とした運動に関する講習会へ参加をし、施設等で習得した技術や知識を遺憾なく社会に向けて発揮することも一例としてあげられる。

これらの機能は、振り子に例えるならば、正しいレジャー観を支点にして、左側に「休養や休息の回復型」、中央に「気晴らしや娯楽の発散型」、右側に「自己啓発や自己開発の蓄積型」が位置した領域を、振り子がより大きく左右に揺れ動いている形態を意味している。さらに、カップリング化(2機能の組み合わせ)とカクテル化(3機能の混ぜ合わされた融合)<sup>7)</sup>を自分らしく創意・工夫することによって、身体領域に限れば“真の生涯スポーツ像”が生まれてくるといえるであろう。

#### 《引用文献》

- 1) 竹中晃二「身体活動・運動と行動変容―特集によせて」竹中晃二(編著)『現代のエスプリ―身体活動・運動と行動変容―』No.463 至文堂, 2006年2月, p. 5.
- 2) 鈴木秀雄「至適運動の意義」『人間環境学会紀要』第7号 関東学院大学人間環境学会, 2007年3月, p. 4.
- 3) 鈴木秀雄「健康づくり実践編―要介護予防運動のすすめシリーズ⑧―」『社会保険』2005. 12月号 No.665, (社)全国社会保険協会連合会, 2005年12月, pp. 27-29.
- 4) 石河利寛『健康・体力のための運動生理学』(株)杏林書院, 2000年4月, p. 155.
- 5) 鈴木秀雄「至適運動の意義」『人間環境学会紀要』第7号, 関東学院大学人間環境学部, 2007年3月, pp. 6-7.
- 6) 鈴木秀雄『新版 スポーツ・体育・運動実践考～“至適運動のすすめ”と“生涯スポーツへの誘い”～』石橋印刷, 2007年3月, pp. 68-72.
- 7) 鈴木秀雄「多世代にわたる健康的な身体運動の創出」『人間環境学会紀要』第8号, 関東学院大学人間環境学部, 2007年9月, p. 14.

## 森林分野の専門辞典に見るレジャー・レクリエーション関連用語の変遷

田中伸彦(独)森林総合研究所)

キーワード：森林レクリエーション、専門辞典、用語の歴史の変遷

### 1. 研究の背景・目的

本研究は、わが国の森林分野で「レクリエーション(以下レクと表記)」が、どのように位置づけられてきたのかを明らかにする目的の一環として行われた。

わが国は、国土の約3分の2が森林に覆われる国であるため、レク活動の場として森林は重要な役割を果たしてきた。わが国の森林レクに関する研究や施策を振り返ると、明治期に近代的森林管理が開始されて以降、大正期に一時活性化したものの、第二次世界大戦で中断し、戦後は1960年代あたりから再興したという歴史がある(田中2007-1, 田中2008)。言い換えれば、現在行われている森林のレク管理は1960年代あたりを機に連綿と続けられているといえる。しかし、そのように歴史を重ねているものの、森林レクという言葉の定義は、現在においてもなお、明確で固定的なコンセンサスを得ているとは言い難い。むしろ、時代の変遷に従って森林レクという言葉が指す意味は、絶えず変化し続けているというほうが適切な認識であると言えよう。

この様な状況を鑑みて、田中(2007-2)は、1961年から2001年までに発刊された5冊の森林分野の専門辞典におけるレクに関する解釈の記述を比較を試みた。その結果、レクという言葉の概念は、年を経るにつれて広がりを見せ、多様化している事実を明らかにした。つまり、レクという言葉の解釈は、当初森林との密接度が深い活動に限られていたのであるが、近年は純粋な野外活動とは必ずしもいえない活動まで対象を広げる傾向にあることが明らかになった。そのため今後は、森林や林業に直接関係する野外活動はもちろんのこと、森林との直接的関わりが高いとはいえないレク活動も積極的に範疇に入れ、最適な森林管理を探求する必要があるとの結論を得た。

本研究は、上記の結論を受けた上で、専門辞典を用いて更なる考察を行うことにした。つまり、田中(2007-2)ではレクという直接用語の定義の変遷だけを検討の俎上に乗せて考察を進めたのであるが、今回はそれを「辞典に掲載されているレジャー・レク関連用語全般」の変遷に拡張し、より深い考察を試みた。

なお、一般に言葉を定義する方法には、「この言葉はこの意味で使うべきという規範的内容を明らかにする方法」である「規範的定義」と、「その言葉が実際にどのような意味で使われているのかという実態を明らかにする方法」である「事実的定義」がある。本研究では後者の「事実的定義」に着目して考察を行っていることを付記しておく。

表-1 これまでにわが国で発刊された森林・林業関係の専門辞典一覧(発行年順)

| 事典名          | 発行年  | 編著者                               | 出版元        | ページ数 |
|--------------|------|-----------------------------------|------------|------|
| 1 林業百科事典     | 1961 | 社団法人 日本林業技術協会                     | 丸善株式会社     | 1086 |
| 2 新版 林業百科事典  | 1971 | 社団法人 日本林業技術協会                     | 丸善株式会社     | 1168 |
| 3 森林・林業・木材辞典 | 1994 | 林野庁編集協力、森林・林業・木材辞典編集委員会編          | (株)日本林業調査会 | 375  |
| 4 森林の百科事典    | 1996 | 太田猛彦・北村昌美・熊崎実・鈴木和夫・須藤彰司・只木良也・藤森隆郎 | 丸善株式会社     | 826  |
| 5 森林・林業百科事典  | 2001 | 社団法人 日本林業技術協会                     | 丸善株式会社     | 1236 |
| 6 森林の百科      | 2003 | 井上真・桜井尚武・鈴木和夫・高田文一郎・中静透           | 朝倉書店       | 739  |
| 7 現代林業用語辞典   | 2007 | 林業Wikiプロジェクト編                     | (株)日本林業調査会 | 184  |

\*ハッチングをかけたものは今回の考察対象とした辞典である。

## 2. 方法

表-1に示したとおり、わが国では森林学に係る専門辞典が7冊発行されている。本研究では考察に一貫性を持たせるために、そのうちから編著者・出版元が同一で、かつページ数も比較的統一がとれており、さらに1961年から2001年の40年間にわたる変遷を追うことができる「林業百科事典(日本林表技術協会(1961年版))」、「新版林業百科事典(日本林業技術協会(1971年版))」、「森林・林業百科事典(日本林業技術協会(2001年版))」の3冊に着目した考察を行うことにした。

考察の方法としては、まず①上記3冊の編集方針を整理した上で、次に②各辞典から森林レクに関連する用語を抽出・類型化して比較・考察を行うという手順を踏んだ。なお本研究では、「森林レクに関連する用語」について「森や樹木と人との関わりを表す用語のうち、余暇時間の人間活動に関係しうる用語」と定義し、その定義に従い用語を幅広く抽出した。

## 3. 結果・考察

### (1) 編集方針の比較・整理

対象とした3冊の専門辞典の編集方針を比較するため、各辞典が編纂に当たって設定した専門分野の比較を行った(表-2)。

その結果、1961年と1971年版では12の専門分野、2001年版では11の専門分野を設けていることが分かった。その中で、森林レクに関連する用語を主に担当しうる専門分野は「林政」、「林業経営」、「経営」、「計画」、「造園」、「環境」の6分野である。そのうち、「林業経営」、「経営」、「計画」の3つはほぼ類似の専門分野である。

ここで特徴的なことは、「造園」が2001年版では専門分野として設定されなくなり、逆に「環境」が新設されたことである。つまり、このことから森林分野において造園空間・技術等に関する関心が弱くなる反面、環境問題と関連したトピックに関心が向き始めていることが見て取れる。

### (2) 関連用語の数・類型

次に、3冊の専門辞典の「和文索引」を用いて、どのような関連用語が辞典で取りあげられているのかを分析した。

その結果、森林レクに関連する用語は、1961年版で130語、1971年版では97語、2001年版では363語が取りあげられていることが明らかになった。なお、掲載数としては1971年版が最も少なく2001年版が最も多かったが、1971年版は掲載用語自体が少ない。そのため、全掲載用語数と森林レクに関連する用語との比率を比較してみると、1961年と1971年版ではほぼ同値(1.26%)で、2001年版で倍以上増加(2.91%)したことが明らかになった(表

表-2 3つの専門辞典の専門分野比較

| 林業百科事典<br>1961年             | 新版 林業百科事典<br>1971年          | 森林・林業百科事典<br>2001年 |
|-----------------------------|-----------------------------|--------------------|
| 1 林政                        | 1 林政                        | 1 林政               |
| 2 林業経営                      | 2 経営                        | 2 森林調査<br>3 林業     |
| 3 森林立地<br>4 造園              | 3 森林立地<br>4 造園              | 4 青林               |
| 5 森林保護                      | 5 森林保護                      | 5 森林生物<br>6 防災     |
| 6 防災                        | 6 防災                        | 7 森林利用             |
| 7 伐木運材                      | 7 伐木運材                      | 8 林産物利用<br>9 森林植物  |
| 8 木材加工<br>9 林産化学<br>10 特殊林産 | 8 木材加工<br>9 林産化学<br>10 特殊林産 | 10 環境<br>11 国際林業   |
| 11 森林植物                     | 11 森林植物                     |                    |
| 12 林業                       | 12 林業                       |                    |

横方向のハッチングによる区分けは類似の専門分野を示す  
「木デイトリック」は森林レク関連用語が主に扱われる専門分野

表-3 各辞典の全掲載用語数とレク関連用語数

| 事典名       | 発行年  | 全掲載用語数(A) | 森林レクに関連する用語数(B) | B/A(%) |
|-----------|------|-----------|-----------------|--------|
| 林業百科事典    | 1961 | 10299     | 130             | 1.26   |
| 新版 林業百科事典 | 1971 | 7681      | 97              | 1.26   |
| 森林・林業百科事典 | 2001 | 12495     | 363             | 2.91   |

ー 3)。

さらに、掲載された用語の意味・内容を吟味し、12のカテゴリーに分類した上で、3冊の辞典すべての和文索引に掲載されていた用語をピックアップすると、わずか28語に過ぎないことが明らかになった。28語のうちでは、ほぼ4分の1ずつの比率を占める「環境保全」用語(8語)と、「自然公園」用語(7語)、「五感・アメニティ」用語

表-4 3冊の辞典すべて掲載された用語(28語)

|       |                                                                           |          |                                                                 |
|-------|---------------------------------------------------------------------------|----------|-----------------------------------------------------------------|
| 造園・庭園 | 造園<br>庭園<br>剪定(せん定)                                                       | 自然公園     | 自然公園<br>国立公園<br>特別地域<br>特別保護地区<br>イエローストーン国立公園<br>国立公園<br>自然公園法 |
| 環境保全  | 環境<br>自然保護<br>自然保護運動<br>国際自然保護連合<br>緑の週間<br>緑地<br>保安林<br>天然記念物<br>特別天然記念物 | 五感・アメニティ | 景観<br>風致<br>風景<br>風致保安林<br>風致林<br>日本の三大美林                       |
| 名所・公園 | 都市公園                                                                      | 学習・教育    | 学校林                                                             |
|       |                                                                           | レクリエーション | レクリエーション                                                        |

(6語)が突出していた(表-4)。

続いて分類された12のカテゴリーごとに掲載された用語数の推移を年代別にとりまとめた結果、「環境保全」、「五感・アメニティ」、「学習・教育」、「観光」、「レクリエーション」、「NPO・ボランティア」、「世界遺産」、「ナショナルトラスト」など、多くのカテゴリーの掲載用語が軒並

表-5 カテゴリーごとの掲載用語の増減

| NO | カテゴリー                   | 用語数             |                    |                    | 主な用語                                                                                                                    |
|----|-------------------------|-----------------|--------------------|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    |                         | 林業百科事典<br>1961年 | 新版 林業百科事典<br>1971年 | 森林・林業百科事典<br>2001年 |                                                                                                                         |
| 1  | 造園・庭園<br>(百分比)          | 46<br>100       | 25<br>54.3         | 16<br>34.8         | 造園・造園樹木・剪定・園芸品種・ツツジ類の造園・イタリ<br>ア式庭園・バルコニー庭園・石灯籠・回遊式庭園・枯山<br>水・建仁寺垣・現代庭園・住宅庭園・前庭 など                                      |
| 2  | 環境保全<br>(百分比)           | 24<br>100.0     | 26<br>108.3        | 142<br>591.7       | 環境・自然保護・愛鳥週間・愛林日・アースデー・緑の週<br>間・ウィルダネス法・カーソン・環境モニタリング・環境白<br>書・巨樹巨木・グリーンミニマム・緑地協定・合意形成・森<br>林と生活に関する世論調査・天然記念物・風致地区 など  |
| 3  | 名所・公園<br>(百分比)          | 17<br>100.0     | 10<br>58.8         | 4<br>23.5          | 都市公園・公園制度・都市公園法・公園墓地・児童遊園・<br>植物園・日比谷公園・国民公園・松島・遊園地 など                                                                  |
| 4  | 自然公園<br>(百分比)           | 14<br>100.0     | 12<br>85.7         | 20<br>142.9        | 自然公園・国立公園・国立公園法・都道府県立自然公園・自然<br>公園法・国立公園協会・国民休暇村・海中公園・特別地<br>域・特別保護地区・普通地域・イエローストーン国立公園<br>など                           |
| 5  | 五感・アメ<br>ニティ<br>(百分比)   | 13<br>100.0     | 10<br>76.9         | 46<br>353.8        | アメニティ・ディスプレイ・観覧のアメニティ・景観・自然<br>風景地・視覚・テクスチャー・ピクチャレスク・日景賞<br>風景・風致・風致保安林・森林美学・日本の三大美林・星<br>山のアメニティ・心理学的尺度構成法 など          |
| 6  | 学習・教育<br>(百分比)          | 6<br>100.0      | 6<br>100.0         | 34<br>566.7        | 環境教育・インタープリター・自然観察指導員・自然解説<br>活動・自然観察路・ユネスコ・ネイチャーゲーム・ネイ<br>チャーセンター・自然観察の森・学校林・森林インストラク<br>ター・山村留学・林業普及指導事業 など           |
| 7  | 観光<br>(百分比)             | 4<br>100.0      | 4<br>100.0         | 20<br>500.0        | 観光事業・総合保養地帯・国民宿舎・旅行費用法・エコツ<br>アー・エコユニアム・グリーンツーリズム・温泉 など                                                                 |
| 8  | 風習・文化<br>(百分比)          | 4<br>100.0      | 1<br>25.0          | 4<br>100.0         | 門松・鷹狩り・茶の湯用木炭・クリスマスツリー・森林文<br>化・日本山水論・日本風景論                                                                             |
| 9  | レクリエ<br>ーション<br>(百分比)   | 2<br>100.0      | 2<br>100.0         | 51<br>2550.0       | レクリエーション・レクリエーション活動・レジャー・ウイーン<br>の森・森林浴・探検会・保健休養機能・(レクリエーション<br>の)自然資源・運路のある自然地域(米田園有林の)・森林<br>の総合利用・森林空間利用・森林療法・遊歩道 など |
| 10 | NPO・ボラ<br>ンティア<br>(百分比) | 0<br>-          | 0<br>-             | 19<br>∞            | 環境NGO・車の祖運動・住民参加・女性の参加・地球市<br>民・阿蘇グリーンストック・車列十字軍・森林クラブ・青年<br>海外協力隊・参加型森林管理 など                                           |
| 11 | 世界遺産<br>(百分比)           | 0<br>-          | 0<br>-             | 5<br>∞             | 世界遺産・世界遺産条約・自然遺産・世界自然遺産・文<br>化遺産                                                                                        |
| 12 | ナショナル<br>トラスト<br>(百分比)  | 0<br>-          | 0<br>-             | 3<br>∞             | ナショナルトラスト・ナショナルトラスト協会・ナショナルトラ<br>スト法                                                                                    |

\*斜体文字の項目は、40年の間に掲載用語が半分以上減少したもの

\*網掛けの項目は、40年の間に掲載用語が2倍以上増加したもの

み増加する中、1961年版では上位を占めていた「造園・庭園」、「名所・公園」に関する用語の掲載が著しく減少したことが明らかになった(表-5)。最後に、表-5のデータを用いて、各年ごとにカテゴリー別の構成比をとりまとめたところ、1961年から2001年にかけて「造園・庭園」と「名所・公園」が大きく落ち込み、「環境保全」と「レク」のカテゴリーが著しく増加したことが明らかとなった(図1~図3)。

#### 4. まとめ

以上、1961年から2001年の間に、森林分野の専門辞典において、レクに関する関連用語は全般的に増加したものの、その構成を詳細に検討すると、掲載カテゴリーが「造園・庭

園」や「名所・公園」から「環境保全」へと大きくシフトしたことが明らかになった。

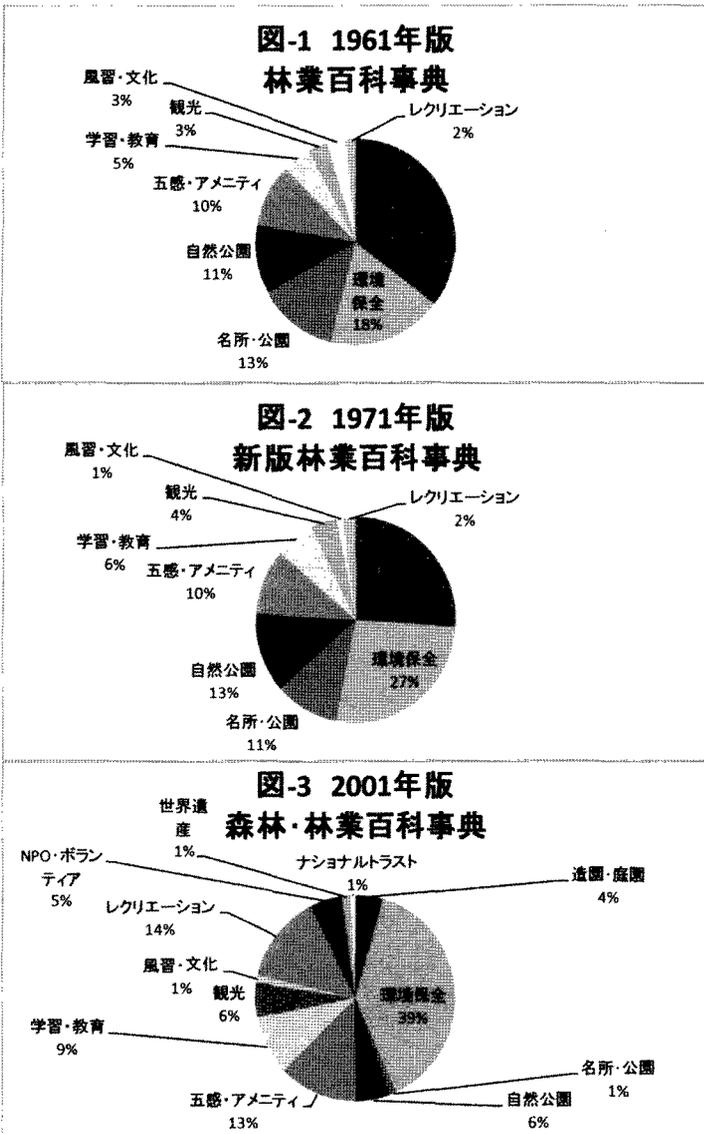
その理由としては、編集方針により「造園」の専門分野が消えて「環境」が新設されたという側面が大きい。しかし、「造園」、「庭園」、「剪定」、「都市公園」などの用語が2001年版の辞典でも継続して掲載されていることから判断すると、「造園・庭園」や「名所・公園」の分野が森林学の対象から完全に外された訳ではない。むしろ対象ではあるが関心が向けられなくなったと見るほうが妥当だろう。

世の中のシステムが多様化したため、森林レクに関する関連用語が森林分野の専門辞典の中で増加することは必然であろう。ただし、上記のように関心が向けられなくなる分野がある事実については留意を払う必要がある。「造園・庭園」あるいは「名所・公園」というレク空間は現在も厳然として重要な野外レク空間であり、森林や樹木はその主要な構成要素となっている。従って、都市からウィルダネスまでの幅広い国土空間における森林管理を一貫して行うためには、「造

園・庭園」や「名所・公園」と森林学との関係を再検討することが必要になると考えられる。

【引用文献】(1)日本林業技術協会(1961)林業百科事典, 丸善, 東京, 1086pp (2)日本林業技術協会(1971)新版林業百科事典, 丸善, 東京, 1168pp (3)日本林業技術協会(2001)森林・林業百科事典, 丸善, 東京, 1236pp (4)田中伸彦(2007-1)明治期から1960年代にかけての日本の観光レクリエーションに関わる施策の動向, 林業経済60(4), 1-16 (5)田中伸彦(2007-2)専門辞典の記述に見る「森林レクリエーション」の定義・解釈の変遷, レジャー・レクリエーション研究59, 64-67 (6)田中伸彦(2008)戦後から1970年代までに着手されたわが国林学における観光レクリエーション研究, 日本森林学会誌90(4), 267-282

【註記】日本語には、「事物に関する知識を集めて配列し、項目ごとに解説した書物」という意味の「事典」と、「言葉を集めて配列し、意味や用法などを解説した書物」という意味の「辞典」があるが、本論では、固有名以外はすべて「辞典」と表記に統一した。



## 英国レジャー研究学会およびその年次大会について - 2008LSA 年次大会出席報告 -

○山崎律子（余暇問題研究所）、高橋和敏（余暇問題研究所）

### はじめに

かねがね、英国においてレジャー研究誌として“Journal of Leisure Studies”（季刊）が、Leisure Studies Association（以下 LSA と省略する）から出されていることを承知していた。これは、米国 NRPA の加盟団体のひとつ SPRE (Society of Professional Recreation Educators) の機関誌“Journal of Leisure Research”（季刊）に匹敵する質の高いレジャー・レクリエーション関係の研究誌である。

今回、LSA の年次大会が7月上旬に英国中西部のリバプールで開催されることを知り、インターネットの知識のみでは不十分と考え、実際に出席して、目の当たりに体験し、関係者とも会い、本学会大会に報告することが、個人にとっても、本学会にとっても有意義との決断に至った。

したがって、本報告は、英国における LSA の概要と今年の年次大会の要点を報告し、本学会運営の参考に資することを目的とする。

### 1. LSA とは

LSA は、1975 年にレジャー研究や直接的・間接的に関連する領域に携わる研究者、実践者、学生のために学際的な視点で会合やコミュニケーションの場を提供するために設立された。すなわち、①レジャー研究を培う、②レジャー研究を奨励しこの分野の教育を進展させる、③出版物や国際的ジャーナル“Leisure Studies”発刊によって討論を促進する、④現代的レジャー問題についての情報交換を刺激する、⑤政策によく反映させるためにレジャー研究知識を広める、などを目的としている。

現在の会長は、Scott Fleming で、カーディフにあるウエールズ大学スポーツ、体育、レクリエーション学部教授ということである。その事務局は、ブライトン大学チェルシー校にあり、局長は、Karl Spracklen、実質的にはブライトン大学の Myrene McFee が事務的処理を行なっている。

この学会の実質会員数は不明であるが、有料の研究誌や他の専門書を出版している関係から、その会員数はかなり多く、収入も会費以外の収入も見込まれることが推測される。いわゆる購読会員を含めてのことである。そのためか、Taylor & Francis という出版グループがこの学会のスポンサー（後援者）になっているということとその他のパートナーシップを組んでいることが運営面での余裕をもつ結果となっている。

### 2. 2008LSA 年次大会について

今回出席した 2008 LSA 年次大会は、3 日間の会期であった。会場は、リバプール・ジョン・ムーアズ大学であった。同大学の教育・地域・レジャー学部観光・消費者・食料研究センターの主管であった。大会テーマは“Community, Capital and Cultures: Leisure and Regeneration as Cultural Practice”（地域、資産、文化：レジャーと文化の再生）であった。すなわち、余暇（レジャー）と文化の視点から、文化遺産を保存しつつ地域再生

への道を模索するリバプールの直面している社会的課題にチャレンジする姿勢が明らかであった。基調講演でも、有名な文化遺産アルバートドックを中心にした観光開発地区が論じられた。

大会出席者は、各日約 100 名であった。少人数の学会大会の印象があった。聞くところによると、例年この程度の集まりという。しかし、EU になったためか、英国国内学会でも国際的であった。EU 各国からの出席をはじめ、北欧からも出席していた。アジアからはシンガポール、イランと日本のみであった。ちなみに出席国別を列記すると、下記のようなになる。

スウェーデン、ノールウェー、キプロス、イタリー、ポーランド、オランダ、  
ドイツ、フランス、イギリス、カナダ、アメリカ、オーストラリア、  
ニュージーランド、ガーナ、シンガポール、イラン、日本

日本を含めると 17 カ国を数えた。出席者総数のうち、少なくとも約 1 / 3 は、英国以外の国からの人たちであった。

参加登録費は、会員用、非会員用に大別されていた。さらに開催一ヶ月以前登録と一ヶ月以内登録と区別され、それぞれ登録費の金額に差があった。すなわち、会員一ヶ月以前登録費 280 ポンド、会員一ヶ月以内登録費 315 ポンド、非会員一ヶ月以前登録費 330 ポンド、非会員一ヶ月以内登録費 330 ポンドであった。加えるに 1 日出席のみの項目があった。たとえば会員一ヶ月以前登録費の 280 ポンドは日本円に換算すると 61,600 円となり、日本のそれと単純に比較するとかなり高額の登録費になる。(1 ポンド約 220 円として)

加えるに、主管大学の学生寮を利用して、学会大会出席者のための宿泊に便宜を図るために、宿泊費込みの登録カテゴリーがあった。

### 3. 一般発表傾向

会期 3 日間を通して、一般発表は 74 題であった。その内訳は、下表の通りである。

表 1 一般発表演題領域別分類表

|                  |    |
|------------------|----|
| 観光関係             | 23 |
| 運動・スポーツ・体力関係     | 9  |
| 地域開発関係           | 7  |
| イベント関係           | 5  |
| 文化遺産関係           | 4  |
| アミューズメント産業関係     | 4  |
| 音楽フェスト関係         | 4  |
| スポーツ産業関係         | 3  |
| レジャー欲求関係         | 3  |
| その他(上記に分類できないもの) | 12 |
| 計                | 74 |

そのうち観光(ツーリズム)を扱った研究がもっとも多く(23)、体力と運動・スポーツの問題を取り上げた研究も次に多かった(9)。とくに大会テーマの関係があらうかと推

測されるが、文化遺産や地域開発の問題も多く取り上げられていた。

中でも目を惹いた演題は、“Performing the Mecca of Extreme Sports”と題して、スウェーデン人とノールエー人の共同研究で、西ノールエーVossを冒険スポーツのメッカとして紹介しながら、崖上からのパラシュートダイビングを、先達のレジャー理論を論議して、そのスポーツの意義を検討していた。

次に挙げられる演題は、“Changing the Casting of the Bad Guy to Sustain Auschwitz Concentration Camp: a World Tourist Site Presenting Local's Dissonant Heritage”と題して、英国人が、現在荒廃が著しいオーシュビッツ収容所（第二次大戦中、ドイツ軍がユダヤ人虐殺で悪名を馳せた施設）の新しい姿、負の世界遺産として、各界が協力して残していくべきものと主張していた。

#### 4. 懇親行事について

研究発表と同時に大会前夜から毎日行なわれていた懇親行事に触れてみたい。

- 1) パブ・ナイト・・・出席者が前日にリバプール入りをするのに対しての配慮の行事が“Philharmonic Public House”での有志の自由な懇親会であった。20数人参加があった。
- 2) “The Ferry Across the Mersey”・・・第1日の夕刻に行なわれた。リバプール市街とマージー川をはさみ対岸の街を結ぶフェリーを借り切り、上流方向から外洋出口までのクルージングをして、リバプール発展の足跡を見ながら解説を聞いた。(夕食ビュッフェ付き)約50名の参加があった。
- 3) “Gala Dinner”・・・第2日目にあった。いわば大会夕食会である。ライムストリート駅の近くにあるホリデイイン(ホテル)が会場であった。

このように、出席者には、発表のみならず、年次大会の役割のひとつとして懇親の機会を多く提供していた。

#### 5. 考察および所感

以上年次大会概要を挙げたが、これら、学会員にとっても学会の運営にとっても参考になると思われる諸点を考察することにした。

- 1) LSAは、決して大きな学会ではない。しかしながら、国内学会といっても、少なくとも10カ国以上からの会員を擁している。したがって、国際的な学会組織といっても誰もが異論はもたないようである。前述に関係があるかと思われるが地理的環境や歴史的・民族的・言語的環境が重要な要因であろう。
- 2) またLSAは、質の高い専門ジャーナルや出版物を出している。これには、出版社をバックに運営している。推測するに、いわゆる両者間にギブアンドテイクの関係を保っているように思える。すなわち、一方的にスポンサーになるわけではなく、会員からの情報があって、しかも出版を容易にできる環境づくりがなされている。さらに運営にはボランティアばかりではなく、事務局には、専門的に事務的処理をしているスタッフがいることも見逃せない。
- 3) 年次大会開催通知は、ホームページを通して、インターネット上でのみ行なわれ、申込みおよび登録費の支払いもインターネットで行なわれた。効率・費用の点からも推奨に値する。
- 4) 登録費について・・・本学会の参加費と較べて、かなり高額になるが、決めの細かさ

がある。さらに参加の自由性がある。これを本学会大会に適用しようと思っても無理がある。このことは、将来を見据えて、考えの中に置くことがよいように思われる。

5) 大会テーマについて・・・LSA は、主管校にまかされている。主管校やその地域が直面している課題の特色を生かし、大会でその解決の糸口を発見できる可能性があることも参考になる。それは大会のプログラミングに直接関係する。

6) 大会プログラミングについて・・・年次大会開会については、簡単な挨拶程度で堅苦しくなく、時間的にも短かった。シンポジウム形式はなく、テーマに即したキーノート発表があったのみであった。一般発表も、少人数のせい、1題につき30分とってあった。発表は15分～20分で、発表者の判断にゆだねられ、質疑応答がその直ぐ後に続く。日本の通例のようにベルの合図がなかったのも形式的ではないように思えた。また、前日から懇親のプログラムがあり、ごくインフォーマルであり、参加しやすかった。

7) 一般発表について・・・ごく表面的ではあるが、次の感触を得た。

(1) 高齢者問題の演題は皆無であった。

(2) 観光問題あるいは観光と文化の問題について論じられる演題が多かった。

(3) 観光産業、スポーツ産業、アミューズメント産業、音楽フェスティバル関係の演題も多くあった。

(4) 全般的に着想が豊かであり、現実的問題解決志向であった。

(5) パワーポイントの使用が通常化していた。DVDの両用も通常化していた。

(6) 質疑応答は、率直に質問し、応答も堅苦しさを感じさせなかった。

8) 全般的な印象・・・主管校の実行委員長をはじめ事務局の先生方は全般的に全体に目を配っていたが、個々人にも気を使っている感じが感じられ、出席していても心地よかった。大会テーマにしても、発表内容にしても、現実を直視しながら問題を解決しようとして、社会にアピールしていこうという姿勢が熱く感じられた。

## 6. むすび

以上、英国におけるレジャー研究学会およびその2008大会の概要を報告してきたが、強く感じられることは、ヨーロッパにおいては、日常的に国際化しているという事実である。本学会員としても、できるだけ機会を捉えて、発表するとともに実際体験をしたい。

(注) 2009LSA Conference は、次の通り行なわれます。

期日：2009年7月7日～9日、 会場：Canterbury Christ Church University  
カンタベリーは、ロンドンの南東90キロのところですよ。

フロー理論の構造と特質に関する基礎研究  
—自己の統制、環境に対する支配の視点から—

マーレー寛子(京都府立大学大学院)

キーワード：フロー、マイクロフロー、支配感

はじめに

チクセントミハイが初めてフロー理論に関する本を出版したのが1975年である。それから30年以上経た現在、心理学、教育学、ビジネスなど多くの分野でこのフローの概念が述べられ議論されてきている。レジャー、レクリエーションの分野においてもこのフロー理論は、参加者の能力と活動レベルとの関係を考える上での重要な理論として多くの教科書に取り上げられている。チクセントミハイは、フロー研究を通して楽しい経験とは何か？ 全ての人々がそれぞれの生活の中で楽しく幸福に感じることは可能なのかという問いを追求してきた。

しかし、フローの理論が示されてきてはいるものの、日本のセラピューティックレクリエーション(以下TR)サービスにおいて、この理論が積極的に援助に活用できているとは言いがたい。迫(2004)は、学校体育においてもフロー理論の興味・関心が高まったにも関わらず、授業中でのフロー体験の深化は困難であると述べている。彼は、フローモデルの説明不足を理由のひとつとしてあげている。福祉レクリエーション援助に関する文献においてもほとんどが1975年のフローモデルを示している程度で理論の詳細は述べられていない。高齢者へのTRサービスにおいて、高齢者が生きがいを感じられる活動の提供というものが現在の大きな課題となっている。チクセントミハイのフロー理論の高齢者TRサービスへの具体的な援助方法が研究されることによってフロー理論がより理解されていくのではないかと考える。

今回の報告は、フロー理論活用方法を研究する第一段階として、基礎研究の位置づけで、チクセントミハイの初期の文献である *Beyond Boredom and Anxiety* (邦題「楽しみの社会学」)を中心にチクセントミハイが提唱したフロー理論の構造と特質を明らかにしたい。そして、それらの考えが高齢者の余暇援助にどのように反映しえるのかを考察してみる。

フロー理論概要

チクセントミハイの研究は、「楽しさの経験」とその「経験を生み出すものの構造」を解明しようとした。

フロー：なんらかの活動に完全に没入している時に感じる包括的感覚

マイクロフロー：日常生活の中の無意識に行われる些細な行動

フロー経験の要素：①行為と意識の融合、②限定された刺激領域への、注意集中、③自我意識の喪失、④行為や環境への支配感、⑤明確なフィードバック、⑥自己目的的な性質—それ自体のほかに目的や報酬を必要としない

チクセントミハイは、「フロー状態の最も顕著な要素は、おそらく環境に対する支配の感覚であろう。」(チクセントミハイ,2000,p.281)と述べている。フローを理解する上で、彼は、遊びと仕事のように構造的として区別をするのではなく、同じ活動であってもそれがどのように経験されるかによって区別されなければならないとしている。楽しいとされる活動ではなく、楽しいと感じている経験に注目しなければならない。彼は、「楽しさ、即ちフローは、たとえ活動の形態に影響されるとしても、それに限定されることはない」(チクセントミハイ,2000,p.274)と強調している。どのような活動を提供するのかに終始するのではなく、その活動を体験している時の心理状態にもっと目を向けなければならないのではないだろうか。経験とは心理的な状態であり、その状態を決定するのは、その体験をしている本人である。フローモデルが問題としているのは、人が活動に没入している時の主観的経験である。

フロー状態にあるためには、本人の内的技能と外的挑戦が合致していると感じなければならない。そのバランスも主観的なものであると述べている。人は、その外的挑戦である環境がその人にとって何なのかを規定しなければならない。つまり自分を取り巻く世界を選択的に構成することによって環境への支配感を強める。チクセントミハイは、フロー活動は、人間の意思決定の結果であり、人は、いかなる状況をもフロー活動に転化しえると述べている(チクセントミハイ,2000)。

マイクロフローに関しても日常生活の中で普段気にも留めないような、無意味な行動であるが、この些細な行動が人と環境との相互作用の調和を保つための重要な役割を持っていることが実験の結果出ている。チクセントミハイは、マイクロフローの剥奪の実験を行い、これらの些細な行動が抑制されることによって人は、自分の行為を支配しているという感覚が失われ、人の注意力は低下し、精神的にも不安定になったりする結果を導き出している。

高齢者に対する余暇支援の対象者の多くは、すでに身体的、精神的に支配感を奪われてしまってきている。そのような状態の対象者に対して、フロー理論に基づいて楽しみの要素を提供していくためには、どのように彼らに自己の統制、環境に対する支配を感じる援助ができるのかを考えていくことが必要になってくる。

#### 参考文献：

Csikszentmihalyi,M.(1975).*Beyond Boredom and Anxiety*. Jossey-Bass Publishers.

チクセントミハイ,M.(2000).*楽しみの社会学*,(今村弘明訳)思索社.

迫俊道.(2004).「楽しい体育」におけるフロー理論適用の意義と課題.日本レジャーレクリエーション学会.レジャーレクリエーション研究 53 : 60-61.

## 地域スポーツクラブに所属する父親の 「仕事の日」と「休みの日」の1日24時間の使い方

吉原 さちえ (東海大学)

### I. はじめに

最近、「ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）」という言葉を目にする。2007年12月にワーク・ライフ・バランス推進官民トップ会議で、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」（以下、WLB 憲章と訳す。）と「仕事と生活の調和推進のための行動指針」（以下、WLB 行動指針と訳す。）が策定された。

具体的な内容は、WLB 憲章中には、『仕事は暮らしを支え、生きがいや喜びをもたらす。同時に家事・育児・近隣との付き合いなどの生活も暮らしに欠かすことはできないものであり、その充実があるからこそ、人生の生きがい、喜びは倍増する』と記されている<sup>1)</sup>。また、WLB 行動指針は、「仕事と生活の調和が実現した社会」に必要とされる諸条件として、次の3つの条件を掲げている。それらは、1. 就労による経済的自立が可能な社会、2. 健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会、3. 多様な働き方・生き方が選択できる社会、という条件である<sup>2)</sup>。

本来、社会の中で人間が人間らしく生きていく上での基盤は、『生活』そのものにあると考える。しかし、WLB 憲章や WLB 行動指針の根底にある考え方は、我々の社会や人々の暮らしを『仕事』中心に考え、豊かに生きていくための基礎となる『生活』に対する考えが二の次になっているように思えてならない。例えば「健康で豊かな生活のための『時間の確保』」や、『多様な働き方』・生き方が選択できる社会」という言葉の裏には、より効率的に仕事を行い、生産性の向上を目指すことが前提にあると考えられる。また、「多様な働き方・生き方の選択」に関する条件の内容には、『生き方』に関する具体的な記載がない。つまり、この取り組みは、『経済の側からの視点』に力点が置かれており、人間が人間らしく生きるという『生活の側からの視点』ではないかと推測することができる。また、『生活』の中には、睡眠や食事などの日常生活に必要な不可欠な生活必需時間と、時間を自分の好きなように、思いのままに過ごすことができる自由時間がある。これらを『生活』として一つにまとめるのは、どうしても無理がある。このようなことから、前者を「生活」時間とし、後者を「自由」時間ということに区別して捉えることが、『生活』と一括りするよりも、より現実に即している気がする。

こういった観点から、『仕事』よりも、むしろ以前から「自由」時間に力点を置いて暮らしている人こそが、日常の生活も仕事も充実した生き方をしているのではないかと予測する。

それを明らかにするために、地域スポーツクラブに所属している父親（有職者）の1日24時間の使い方の調査を1週間にわたって実施し、『「仕事」時間と「生活」時間と「自由」時間に要する時間がどのくらいあるのか』、『クラブに所属する父親（有職者）の1日の肉体的・精神的疲労度や充実度』などを調査・分析することが目的である。

## II. 研究の目的

地域スポーツクラブに所属する父親の1日24時間の使い方の調査を1週間にわたって実施し、『「仕事」時間と「生活」時間と「自由」時間に要する時間がどのくらいあるのか』、『1日の肉体的・精神的疲労度や充実度』などを調査し、それらを分析することである。

## III. 研究の方法

### 1. 調査方法

- 1) 質問用紙によるアンケート調査 (質問項目 34 項目)
- 2) 日記法による1日24時間の使い方の調査 (連続7日間、1週間)

1日24時間の使い方を調査する方法は「タイム・バゼット」と呼ばれ、ハンガリーのザライ授を中心とした研究グループがその調査方法によって国際比較調査を実施した<sup>3)</sup>。それを国際的に標準化し、生活時間調査に用いたのは原 他 2名<sup>3)</sup>である。さらにそれを地域スポーツクラブに所属する父親(有職者)が記入しやすいように、記入項目の内容を一部改良し、調査を実施した。一日の終わりに、その日の活動などを振り返り、いつ、どこで、だれと、何をしていたかなどを、番号または直接記入する方法で、調査を行った。

### 2. 調査対象者

神奈川県内の地域スポーツクラブに所属する父親(有職者)が対象者である。クラブの代表者か、クラブマネジャーに、事前に調査依頼をし、調査に協力することができるという返答をいただいたクラブの父親3名が今回の調査対象者である。

### 3. 調査期間

2008年9月24日(水)～9月30日(火)の連続7日間(1週間)である。

## IV. 結果及び考察

表1: 仕事の日と休みの日の「仕事」時間と「生活」時間と「自由」時間

| 仕事の日(5日間)          |      |    |       |    |      |       |      |      | 休みの日(2日間)          |     |   |       |      |    |       |    |    |
|--------------------|------|----|-------|----|------|-------|------|------|--------------------|-----|---|-------|------|----|-------|----|----|
| 仕事(h)<br>(通勤時間を含む) |      |    | 生活(h) |    |      | 自由(h) |      |      | 仕事(h)<br>(通勤時間を含む) |     |   | 生活(h) |      |    | 自由(h) |    |    |
| A                  | B    | C  | A     | B  | C    | A     | B    | C    | A                  | B   | C | A     | B    | C  | A     | B  | C  |
| 73                 | 60.5 | 68 | 43    | 46 | 40.5 | 4     | 13.5 | 11.5 | 0                  | 8.5 | 0 | 20    | 17.5 | 22 | 28    | 22 | 26 |

### 1. Aさんの場合: 45歳、子ども2人(小学生:2人)、4人家族

A銀行(管理的職業)に21年間勤め、課長相当職に就いている。1週間うち、週5日が「仕事の日」であり、毎週週2日が「休みの日」である。残業は毎日あり、残業時間は、1回につき2～3時間程度である。労働時間(通勤時間を含む)は、14～15時間程度である。本人は、労働時間を「短くしたい」と思っている。仕事の日は、肉体的・精神的疲労度が「ややあり」、1日の充実度は「どちらとも言えない」という回答であった。休みの日は、肉体的疲労度は「ややある」が、精神的疲労度は「ほとんどな

く)、1日の充実度は「充実していた」という回答であった。仕事では、精神的疲労を「とても感じる」ようであり、また、ストレスや悩み・不安を「やや感じている」ということであった。休日・休暇に関しては、「満足」していた。地域スポーツクラブは、本人にとって「気分転換」の場、「楽しい」場という存在であり、一方で、クラブでの活動に対する充実度は、「どちらとも言えない」ということである。クラブの活動以外の「自由」時間の活動は、「子どもと遊ぶ」、「読書」、「テレビ視聴」、「スポーツ観戦」などをすることが多く、「ある程度充実感がある」と回答している。仕事の日は、ほとんど「自由」時間をとることができず、「仕事」時間と「生活」時間の繰り返しである(表1)。休みの日は、「自由」時間に費やしているが、「やりたくて」活動している場合と、「他にすることがなくて」活動している場合があった。

**2. Bさんの場合：53歳、子ども3人(社会人：1人(一人暮らし)、大学生：1人、小学生：1人)、5人家族**

B 進学塾(専門・技術的職業)に32年間勤め、監督/主任相当職に就いている。1週間うち、週5日が「仕事の日」であり、毎週週2日が「休みの日」である。残業は週3日あり、残業時間は、1回につき1時間程度である。労働時間(通勤時間を含む)は、12時間程度である。本人は、現在の労働時間に対して「今のまま」でよいと思っている。仕事の日は、肉体的疲労度は「あまりない」が、精神的疲労度は「ややあり」、1日の充実度は「充実していた」と答えている。休みの日は、肉体的・精神的疲労度が「ややある」が、1日の充実度は「充実していた」と回答している。仕事では、肉体的疲労は「あまり感じなく」、精神的疲労やストレス、悩み・不安を「やや感じる」ということであった。Bさんは、仕事に対する満足感で、仕事内容や仕事場の人間関係に「やや不満」を感じ、収入に関しては「不満」と回答していた。休日・休暇に関しては、「どちらとも言えない」答えている。地域スポーツクラブは、本人にとって「もう一つの居場所」、「なくてはならないもの」といった存在であり、そこででの活動は、「充実感がある」ということであった。また、クラブ活動以外の「自由」時間の活動は、「子どもと遊ぶ」、「読書」、「テレビ視聴」、「家族との外出」などをすることが多く、「ある程度充実感がある」と回答している。仕事の日は、3人の中で一番「自由」時間をとることができ、「仕事」時間が12時間程度に対して、「自由」時間が2時間程度あった(表1)。休みの日は、さらに「自由」時間に費やす時間が増え、ほとんどの場合が「やりたくて」活動を行っていた。

**3. Cさんの場合：49歳、子ども2人(大学生：2人)、4人家族**

C 情報機器(専門・技術的職業)に27年間勤め、役職には就いていない。1週間うち、週5日が「仕事の日」であり、毎週週2日が「休みの日」である。残業は毎日あり、残業時間は、1回につき2時間程度である。労働時間(通勤時間を含む)は、12~15時間程度である。本人は、現在の労働時間に対して「今のまま」でよいと思っている。仕事の日は、肉体的疲労度が「とてもある」という場合は、精神的疲労度も「とてもある」と回答している。また、肉体的疲労度が「ややある」という場合は、精神的疲労度は「あまりない」と回答している。1日の充実度はほとんど「どちらとも言えない」と答えている。休みの日は、肉体的疲労度は「とてもある」が、精神的疲労度は「ほとんどない」と回答している。1日の充実度は、調査を実施した週に体調を悪くしていたこともあり、「充実していなかった」とい

う回答であった。仕事では、肉体的・精神的疲労を「やや感じる」ということであり、ストレスや悩み・不安も同様に「やや感じる」という回答であった。地域スポーツクラブは、本人にとって「なくてはならないもの」、「リフレッシュできる」といった存在であり、そこでの活動は、「ある程度充実感がある」ということであった。また、クラブ活動以外の「自由」時間の活動は、Cさんの場合は、「サッカー」が中心で、このクラブ以外にも別のクラブに所属している。仕事の日、「仕事」時間が12～15時間程度に対して、「自由」時間が「ない」日があれば、4時間程度「ある」日もあったので、3人の中で2番目に「自由」時間が多くなっている(表1)。休みの日は、さらに「自由」時間に費やす時間が増え、ほとんど場合が「やりたくて」活動をしていた。

#### 4. まとめ

3人の調査協力者の年齢は、40～50代である。職業歴はいずれも20～30年であった。職場では、それ相応の地位に就いている方もいる。3人とも通勤時間を含め、労働時間が10時間を超える。また、いずれの職場でも、残業が1～3時間程度あった。「労働時間を短くしてほしい」と感じる者もいるが、「現状のままでよい」と考えている者もいる。3人に共通して言えることは、仕事の日、肉体的・精神的疲労度が「ある」状態である。1日の充実度は、「どちらとも言えない」という回答が多かった。一方、休みの日は、肉体的・精神的疲労度は、必ずしも「ない」わけではないということがわかった。ただし、1日の充実度は「充実感があつた」と感じているようである。今回の3人の調査協力者は、「仕事の日」と「休みの日」のバランス、「仕事」時間と「自由」時間のバランスを、各々が1日24時間の中でそれぞれに見合うマネジメントして生活しているように思われた。

3人にとって、地域スポーツクラブの存在は、所属歴が長ければ長いほど、「なくてはならないもの」「もう一つの居場所」というように、クラブに対する帰属意識が高く、生活の一部になっているように思われる。クラブ活動以外の「自由」時間の活動は、小学生のお子さんがいる場合は「子どもと遊ぶ」という回答と、自分自身の趣味である「読書」、「テレビ視聴」、などをするという回答が得られた。3人の調査協力者は、このクラブ活動以外の「自由」時間は、クラブ活動が「自分自身」の時間であるので、とくに小さいお子さんがいる場合は「家族と一緒に過ごす」時間として設けているように思われた。

なお、今回の調査は、調査協力対象者が非常に少ないため、引き続き、調査に協力してくれる対象者を探し、継続的に調査を実施する予定である。

#### V. 主な参考文献・資料

- 1) 内閣府、仕事と生活の調和推進(ワーク・ライフ・バランス)ホームページ、  
<http://www8.cao.go.jp/wlb/charter/charter.html>、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章
- 2) 内閣府、仕事と生活の調和推進(ワーク・ライフ・バランス)ホームページ、  
<http://www8.cao.go.jp/wlb/charter/charter.html>、仕事と生活の調和推進のための行動指針
- 3) 経済企画庁 国民生活局 国民生活調査課 編、生活時間の構造分析 時間の使われ方と生活の質、1978、pp.はじめに1-2

山小屋の屋根形状の特性が外観評価に及ぼす影響について  
 —北アルプス・雲ノ平山荘を事例として—  
 下嶋 聖（東京情報大学）

## 1. はじめに

山小屋は、主に山岳性自然公園を中心に、登山者（公園利用者）の利用拠点施設として存在する。悪天候時には、山小屋の存在が登山者に安心感を与えるなど、登山活動において必要不可欠な施設である。山岳地が持つ制約条件の下、山小屋は立地環境に合わせて建築され、その結果山小屋一つ一つに個性が生まれ、その山城のシンボリック的存在をなす。

山小屋は、立地環境の特性から、修繕や補修などきめ細かな維持管理が求められ、築年数が経っている場合や自然現象による倒壊や破損した場合は、新築や増改築が必要になる。また登山者の増加により、収容人数の強化を図るため増改築を行う場合もある。山小屋の多くは自然公園内に立地するため、新築をはじめ増改築を行う場合は、自然公園法に基づき周囲の景観に調和した建築物にするよう求められている。しかし自然公園法には景観に調和する方法について一定の明文化があるものの、具体的な基準や根拠が明確ではない。

既往研究を見ると、山小屋の空間構成や配置計画を明らかにした研究<sup>1)2)</sup>はあるが、山小屋に対する一般的なイメージや周囲の山岳景観への調和性について把握した研究は少ない。そこで本研究では、山岳景観に調和する山小屋のデザインに関して特に屋根の形状について、登山者を対象にアンケート調査を実施し、山岳景観に調和する山小屋の屋根の形状を把握することを目的とした。

## 2. 研究方法

### 2-1 研究対象地



本研究で対象にした山小屋は、北アルプス中央部に立地する雲ノ平山荘とした。山荘が立地する雲ノ平は、富山県、岐阜県、長野県の3県が隣接する三俣蓮華岳より北側に位置し、日本で最も標高の高い溶岩台地（2,400m～2,700m）で面積は約25万㎡である。山荘を含め雲ノ平全域が、中部山岳国立公園（特別保護地区）及び国有林（保安林）に指定されている。

図1 研究対象地

### 2-2 調査方法

アンケート調査は、雲ノ平山荘及び近隣の三俣山荘の2カ所で留め置き方式にて実施した。留め置き期間は、2008年8月12日から10月13日（小屋開設期間）まで実施した。アンケート票の内容は大まかに3つの内容に構成されている。1つめは、登山に関する事項を聞いた。具体的には、今回の登山計画内容、登山に対する準備、安全配慮、山小屋への要望、自然公園行政に関する知識である。2つめは、景観評価である。具体的には、山小屋の屋根の形状をコンピュータシミュレーションにより4タイプに加工した画像試料を作成し、屋根の形状が周囲の景観に調和するか聞いた。評価項目は、「調和性」、「目立ち度」、

「違和感」、「好ましさ」、「親しみやすさ」の5項目を7段階の評定尺度で評価してもらった。さらに4つの画像を雲ノ平の景観に調和していると思う順に並べてもらった。3つめは、回答者の属性である。具体的には、年齢、性、登山歴などである。

### 2-3 シミュレーション画像の作成方法

画像処理の基となる画像を雲ノ平山荘から登山道沿いに三俣山荘方面（キャンプ場方面・東方向）に向かって309mの地点より、2008年7月26日に撮影した。撮影高は、1.5mとした。この309mの地点の算出方法は、人間が持つ視覚特性より算出した。一般に、ある景観を眺めた際、景観内に存在する物体の見込み角が1度を超えると、視認性が高くなり、気になり始めることが指摘されている。雲ノ平山荘の場合、現行の建築物の地上高がおよそ5.4mであり、見込み角1度の場合の視距離（見通し距離）は約309mである。屋根の形状は、現行の建築物である「ギャンブレ型」、「かまぼこ屋根型」、「切妻屋根」、「陸屋根」とした。このうち陸屋根を除いて、他の3つは一般的に山岳地で見られる山小屋の屋根の形状を選定した。作成した画像は、アンケート用紙（普通紙A4サイズ）にサービス版サイズ（最終寸法87×116mm）で出力した。



1) ギャンブレ型（現行）



2) 切妻屋根



3) かまぼこ型屋根



4) 陸屋根

写真1 アンケート票に使用したシミュレーション画像

### 3. 結果

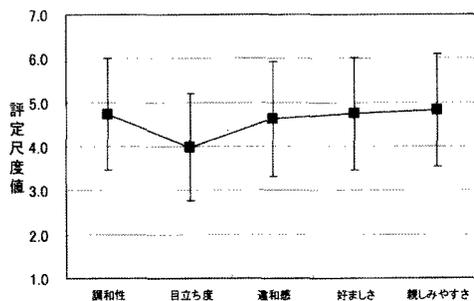
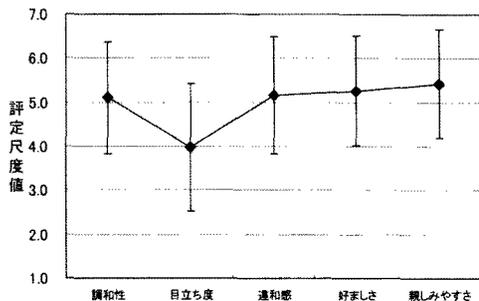
アンケート調査の結果を表1に示した。これを見ると、雲ノ平山荘及び三俣山荘を訪れる登山者像は以下の通りになる。まず属性は、約半数が50代以上の中高年層であり、山行人数は単独あるいは2名が半数を占める。半数の人が雲ノ平を初めて訪れる登山者である。次に、登山計画や安全配慮について、5割の登山者が何らかの保険に加入しているものの、約3割が未加入であった。非常時の通信手段として、8割の人が携帯電話を挙げていた。山行中の位置確認に8割の登山者が市販の山岳地図を持参している一方で、何も持参していない登山者が存在していた。最後に山小屋に対する要望として、登山道の概況情報を求める声が一番多く、次いで気象情報の入手手段としてテレビの放映を挙げていた。

表1 アンケート調査の結果

| ■属性        |              | 人          | 割合                   | ■属性                       |                | 人                           | 割合                      | ■登山の計画・安全配慮       |                | 人                | 割合  |     |
|------------|--------------|------------|----------------------|---------------------------|----------------|-----------------------------|-------------------------|-------------------|----------------|------------------|-----|-----|
| 調査地        | 雲ノ平山荘        | 65         | 72%                  | 属性                        | 小屋泊            | 69                          | 77%                     | 情報収集源             | 山岳ガイドブック       | 61               | 68% |     |
|            | 三俣山荘         | 25         | 28%                  |                           | テント泊           | 7                           | 8%                      |                   | インターネット        | 47               | 52% |     |
|            | 年齢           | 10代        | 9                    |                           | 10%            | 西方                          | 12                      |                   | 13%            | 山岳雑誌             | 34  | 38% |
|            |              | 20代        | 15                   |                           | 17%            | 2泊3日                        | 7                       |                   | 8%             | 市町村や山小屋に問い合わせ    | 14  | 16% |
|            |              | 30代        | 9                    |                           | 10%            | 3泊4日                        | 28                      |                   | 31%            | テレビ              | 4   | 4%  |
|            |              | 40代        | 8                    |                           | 9%             | 日 4泊以上                      | 24                      |                   | 27%            | 山を紹介した市販のDVD・VHS | 1   | 1%  |
|            |              | 50代        | 16                   |                           | 18%            | 数 5泊                        | 10                      |                   | 11%            | 市販の山岳地図          | 73  | 81% |
| 60代        | 26           | 29%        | 2泊                   | 10                        | 11%            | 国土地理院発行の地形図                 | 36                      | 40%               |                |                  |     |     |
| 70代以上      | 3            | 3%         | 7泊以上                 | 10                        | 11%            | 市販のガイドブック                   | 24                      | 27%               |                |                  |     |     |
| 性別         | 男            | 58         | 64%                  | 構成                        | 単独             | 22                          | 24%                     | 確認                | 参照したホームページの印刷物 | 4                | 4%  |     |
|            | 女            | 30         | 33%                  |                           | カップル・夫婦        | 9                           | 10%                     | 認                 | 小型GPS受信機       | 3                | 3%  |     |
| 来訪回数       | 初めて          | 49         | 54%                  |                           | 家族             | 4                           | 4%                      | 持参しなかった           | 2              | 2%               |     |     |
|            | 2回目          | 21         | 23%                  |                           | 友人・知人          | 23                          | 26%                     | ■自然公園行政や山小屋に対する要望 |                | 人                | 割合  |     |
|            | 3回目          | 16         | 18%                  |                           | ツアー            | 13                          | 14%                     | ・国立公園であること        |                |                  |     |     |
|            | 未訪問(これから訪れる) | 3          | 3%                   |                           | 部活動            | 14                          | 16%                     | 知っている             | 66             | 73%              |     |     |
|            | 東北           | 2          | 2%                   |                           | その他            | 3                           | 3%                      | 知らなかった            | 21             | 23%              |     |     |
| 住所         | 関東           | 46         | 51%                  | ■登山の計画・安全配慮               |                | 人                           | 割合                      | ・国有林であること         |                |                  |     |     |
|            | 北陸・甲信越       | 8          | 9%                   | 折立                        | 47             | 52%                         | 知っている                   | 54                | 60%            |                  |     |     |
|            | 東海           | 15         | 17%                  | 入 新穂高温泉                   | 22             | 24%                         | 知らなかった                  | 33                | 37%            |                  |     |     |
|            | 近畿           | 12         | 13%                  | 山 上高地                     | 10             | 11%                         | ・山岳地の植生復元活動について         |                   |                |                  |     |     |
|            | 中国・四国        | 2          | 2%                   | 口 高瀬ダム                    | 5              | 6%                          | 知らない                    | 42                | 47%            |                  |     |     |
|            | 九州           | 2          | 2%                   | 室堂                        | 5              | 6%                          | 知っている                   | 40                | 44%            |                  |     |     |
|            | 5年未満         | 16         | 18%                  | 山行計画上の通り道                 | 23             | 26%                         | 参加している                  | 4                 | 4%             |                  |     |     |
| 5年以上10年未満  | 20           | 22%        | 来 希望の地だから            | 21                        | 23%            | ・山小屋のトイレは環境に配慮したバイオトイレにするべき |                         |                   |                |                  |     |     |
| 10年以上15年未満 | 14           | 16%        | 訪 日本最後の秘境と言われているから   | 14                        | 16%            | 強くそう思う                      | 44                      | 49%               |                |                  |     |     |
| 15年以上20年未満 | 8            | 9%         | 理 色々な庭園の名がついているから    | 3                         | 3%             | そう思う                        | 25                      | 28%               |                |                  |     |     |
| 20年以上30年未満 | 6            | 7%         | 由 今回訪れる予定はない         | 2                         | 2%             | どちらともいえない                   | 15                      | 17%               |                |                  |     |     |
| 30年以上40年未満 | 10           | 11%        | その他                  | 21                        | 23%            | そう思わない                      | 3                       | 3%                |                |                  |     |     |
| 40年以上      | 14           | 16%        | 保険加入していない            | 31                        | 34%            | 全く思わない                      | 0                       | 0%                |                |                  |     |     |
| 百名山について    | 数えたことがある     | 50         | 56%                  | 山岳保険に加入                   | 35             | 39%                         | ・クリーンエネルギーによる発電もするべきである |                   |                |                  |     |     |
|            | 聞いたことがない     | 90座以上登頂    | 11                   | 22%                       | 加入 傷害保険に加入     | 22                          | 24%                     | 強くそう思う            | 34             | 38%              |     |     |
|            |              | 50座以上90座未満 | 16                   | 32%                       | 登山届 提出した       | 64                          | 71%                     | そう思う              | 39             | 43%              |     |     |
|            |              | 50座未満      | 23                   | 46%                       | しなかった          | 19                          | 21%                     | どちらともいえない         | 10             | 11%              |     |     |
|            | 数えたことがない     | 37         | 41%                  | 分からなかった                   | 0              | 0%                          | そう思わない                  | 1                 | 1%             |                  |     |     |
| 聞いたことがない   | 1            | 1%         | 登山届の存在を知らなかった        | 0                         | 0%             | 全く思わない                      | 4                       | 4%                |                |                  |     |     |
| 山岳会への入会の有無 | 入会していない      | 57         | 63%                  | ブエ 検討した                   | 73             | 81%                         | 登山道の概況情報                | 62                | 69%            |                  |     |     |
|            | 入会している       | 34         | 38%                  | ルス 検討しなかった                | 13             | 14%                         | テレビ                     | 51                | 57%            |                  |     |     |
|            | (社)日本山岳会     | 3          | 9%                   | ト   ケ ツアーに参加しているのでよく分からない | 1              | 1%                          | 小 携帯電話の電波中継塔の設置         | 35                | 39%            |                  |     |     |
|            |              | 日本勤労者山岳連盟  | 3                    | 9%                        | ト   言葉自体初めて聞いた | 0                           | 0%                      | 屋 公衆電話            | 26             | 29%              |     |     |
|            |              | (社)日本山岳協会  | 1                    | 3%                        | の 予 設定した       | 53                          | 59%                     | 山小屋のホームページ        | 24             | 27%              |     |     |
|            |              | 日本アルパイン協会  | 0                    | 0%                        | 設 備 設定していない    | 17                          | 19%                     | 求 自然解説            | 21             | 23%              |     |     |
|            | 地元の山岳会       | 11         | 32%                  | 定 日 天候次第では設定する            | 16             | 18%                         | め る 携帯電話の充電             | 16                | 18%            |                  |     |     |
| その他        | 16           | 47%        | 定 日 ツアーに参加しているの設定がない | 4                         | 4%             | 宿 泊 予約可                     | 16                      | 18%               |                |                  |     |     |
| 人数         | 単独           | 23         | 26%                  | 携 帯 手 機                   | 75             | 83%                         | サ   風呂                  | 16                | 18%            |                  |     |     |
|            | 2人           | 23         | 26%                  | 非 常 時 呼 び 子 ( 笛 )         | 66             | 73%                         | ビ   夏山診療所               | 14                | 16%            |                  |     |     |
|            | 3~4人         | 13         | 14%                  | 仲 間 ( ツアー会社 ) が 準 備       | 34             | 38%                         | ス   オリジナルグッズ販売          | 10                | 11%            |                  |     |     |
|            | 5~10人        | 19         | 21%                  | 鏡                         | 12             | 13%                         | 生 ビール販売                 | 8                 | 9%             |                  |     |     |
|            | 10人以上        | 10         | 11%                  | 通 アマチュア無線                 | 8              | 9%                          |                         | 6                 | 7%             |                  |     |     |
|            |              |            |                      |                           | 5              | 6%                          |                         |                   |                |                  |     |     |

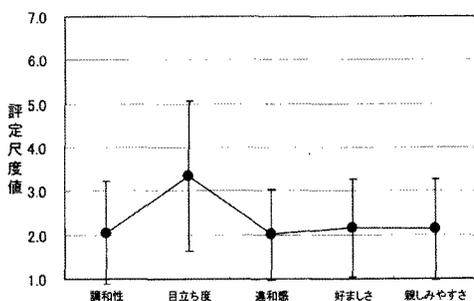
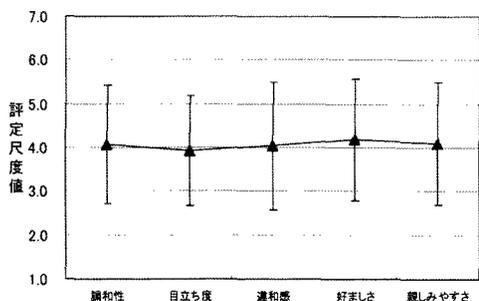
注1) 各質問項目で、無回答は除外して表記した。

注2) 一部の質問項目で、回答方法に複数選択を設けたため割合の合計が100%にならない



ギャンブレ型屋根の評価値 (平均値±SD)

かまぼこ型屋根の評価値 (平均値±SD)



切妻屋根の評価値 (平均値±SD)

陸屋根の評価値 (平均値±SD)

図 2

景観評価の結果

表 2 調和していると思う屋根の順位

| 順位  | ギャンブレ型屋根 (現行) | かまぼこ型屋根 | 切妻屋根 | 陸屋根 |
|-----|---------------|---------|------|-----|
| 1位  | 46            | 15      | 12   | 1   |
| 2位  | 20            | 42      | 10   | 1   |
| 3位  | 6             | 16      | 50   | 1   |
| 4位  | 1             | 0       | 1    | 70  |
| 未回答 | 19            | 18      | 18   | 18  |

数字は、被験者数

景観評価の結果を図 2 並びに表 2 に示した。これを見るとギャンブレ型屋根の評価値が目立ち度を除いて、高かった。次いでかまぼこ型屋根の評価値が高く、切妻屋根、陸屋根の順であった。つまり現行の屋根の形状であるギャンブレ型屋根に対して、登山者は好印象を持つことがいえる。調和していると思う順位についても、景観評価の結果と同様に、ギャンブレ型を 1 位に挙げている被験者数が一番多かった。

#### 4. まとめ

以上の結果より、登山者は現行の「ギャンブレ型」屋根が最も雲ノ平の景観に調和していると評価しており、このことから「ギャンブレ型」屋根が雲ノ平の景観にふさわしい山小屋の屋根の形状であることが示唆された。したがって雲ノ平において、新築また増改築で山小屋の屋根の形状を検討する際、自然景観に配慮するならば現行の「ギャンブレ型」屋根の形状にすることが望ましいといえる。今後の課題として、登山者の属性について詳細に分析を行い、属性別に見る景観評価の特性を明らかにしたい。

#### 引用文献

- 1) 平瀬有人他：山岳地建築の空間構成に関する研究 (その 1) - 北アルプスにおける山小屋建築を事例として、日本建築学会大会学術講演梗概集, 1113-1114, 2005.
- 2) 長森博人他：山岳地建築の空間構成に関する研究 (その 2) - 山小屋建築の配置計画に関して、日本建築学会大会学術講演梗概集, 1115-1116, 2005.

## ボート<sup>1)</sup> 競技による水辺環境の復権

～親水メディアとしてのボートの中心価値～

添田直人（葛飾区ボート協会）

「言問橋を渡り、長命寺のほうへ土堤を歩いて行ったときである。遙か向うの突き当たりに、見馴れないスタンドと旗塔を持った背の高い建物が優雅な姿を見せている。…眼を隅田川のほうへ移すと、折しも、商大艇庫の前を出たボートが矢のように滑りだし、言問橋のほうに下ってくる。八人の漕手の身体が一斉に起き上がり、また伏せるのも、こちらから見ると、左舷の四つのオールがまるで生物のように同時に行ったり来たりするのも珍しかったし、見事にも見えた。

…両岸の群集は一瞬、水面を白い光のように横ぎる滑<sup>スライディング</sup>席艇に眼を奪われた。」

（田中英光、『端艇漕手』、1944年）

### 1 問題状況と研究の端緒

地域に川が存在する場合、その流域圏にある独自の文化が存在すると考えることができる。然るに、その独自の文化は単に川を交通路としてとらえ物資や情報的手段としてみるだけでは不十分である。また、河川の産業（交通、漁業等）や川の自然環境（水、土、空気、あるいは鳥、昆虫、魚等の多様な生物等）を個別に取り出して検討するだけでは、独自の文化を把握することは困難であろう。

川のある地域は、川に関わる人々が水辺の自然や風景を感性的にとらえることによって生じ、育まれ、形成されたはずである。幸田露伴、永井荷風、芥川龍之介、藤牧義夫、山田洋次らはいずれも川を愛する作品（小説、映画、版画等）を発表したが、それが作品として人々に受容されたのは、川の魅力についてある共感が生じたからであると思われる。

川のある地域において生活の中に川が存在し、それを文化として形成し、人々の共感を得るような川の魅力とは何か。

以上の問題に答えるためには、川のある地域、流域を一つの文化として総合的に把握することが必要である。本研究ではそのための一つの端緒として、近代スポーツの黎明期に存在した墨田公園周辺の隅田川東岸（本所、向島）のボート選手、艇庫と地域との関わりについて検討する。

ボートは、水辺の自然が豊かに確保され（水質、穏やかな波、空気等）、艇庫が地域に受容されることが必要である。ボートは、川の両岸何れかではなく、川それ自体において、水面から両岸の風景を見ることができる。また、ボートは、川の流域に沿って長距離の遠漕（向島～小名木川～江戸川～利根運河～利根川）ができ<sup>2)</sup>、交流ができる。

<sup>1)</sup> 本研究の対象とする「ボート」とは、モーター付きのプレジャーボートやカヌー等のことではなく、いわゆる漕艇のことである。私は漕艇をスポーツかつ川の芸術と考える。

<sup>2)</sup> 古城庸夫の研究によればこの流域で遠漕が行われた回数は140回以上にのぼる（「ボー

通常ボートそれ自体を取り上げる場合、競漕（レガッタ）、タイムレースに特化するスポーツのそれとして位置づけられよう。然るに、ボートはその特性上川のある地域と不可欠だから、艇庫、選手は地域と共鳴し、独自の地域文化が形成される可能性がある。

かつて、隅田川東岸（本所、向島）には最盛期に約 10 個以上の大学、高等学校等の艇庫（東京商大、東大、一高の各艇庫が本所。大倉高商、千葉医大、外語、日大、明治、開成中、慶応、早稲田、静水会の各艇庫が向島。）が林立し、「向島艇庫村」とよばれた。

高等教育機関に在学する者が少なかった時代に、日常的に一箇所に学生が集中して合宿し、生活するような地域はここ以外にはなく、歴史上稀有な例であった。

ところがこれまで、ボートの存在価値を媒介として、一地域を横断的歴史的に記述し、研究したものはほぼ皆無であり<sup>3)</sup>、地域文化として本所の艇庫、「向島艇庫村」に関する専門的な研究もほぼ皆無である。

本研究はこの空隙を埋めることによって川の魅力のありかを探るものである。

## 2 研究方法

- (1) 地域住民の取材
- (2) 文献調査

## 3 現時点の成果と考察

- (1) 地域の取材

① 第二次世界大戦の空襲により東京地区は戦災にあったが、本所地区の東京商大、東大の艇庫や向島地区は比較的戦災が少なかった。しかし、すでに隅田川東岸は明治時代中期以降工場地帯として形成され、水質汚濁がすすみ、地下水利用のため地盤沈下がすすんだ<sup>4)</sup>。また、首都高速道路が隅田川の墨堤上に建設された（1971年）。以上の客観的要因によって、全国大会は 1947 年以降、主要な競漕について、早慶戦は 1959 年以降（但し 1978 年以降隅田川で復活）、東大一橋大の「東商戦」は 1961 年以降、それぞれ埼玉県戸田に移った。

② 現在、隅田川にある艇庫は、1968 年の一橋大学艇庫解体を最後にまったく存在しない。艇庫がなければ競漕も困難であり、現在隅田川で行なわれる競漕も、年に 2 回であり（4 月の早慶戦、8 月のウォーターフェア隅田川レガッタ）、隅田川で日常的にボートを漕ぐ機会はなく、ボートを見ることはほとんどない。

かつてのボート盛衰期の隅田川のことを知る地域住民も少なくなっている。

③ 墨田区における地域住民によって「すみだ史談会」が存在する（結成は 1989 年 5 月）。その主要なメンバーから取材した結果は、概略以下のとおりである。

ア 墨田公園の最北部にあった商大艇庫は子供心にも美しいの一言であった。川でスタートダッシュの水しぶきは迫力があり、道端で会う選手はシャツと短パンが多かったが、かっこよかった。

---

ト競技の歴史展」、2008 年 4 月 20 日）。

<sup>3)</sup> 各大学等を横断しボートの通史を詳細に記録した唯一の文献は宮田勝善の『ボート百年』、1976 年改訂新版、時事通信社である。

<sup>4)</sup> 鈴木理生、『江戸の川・東京の川』、日本放送協会 1978 年（1989 年井上書院が再刊。）

イ 本所と向島は地域差があり、商大は向島の松の湯という銭湯に行き、東大は本所の有馬湯という銭湯に行っていた。銭湯で選手に会った時、大きくなったらボートを漕がないかと言われたことがあり、恥ずかしさと嬉しさとで心臓が高鳴った。自分も大きくなりたいと思い、選手を観察すると誰もが足の膝の裏が油で黒く汚れていた。

ウ 学生が自宅の店舗（洋品店）を訪ねてきて、ユニフォームの襟元に赤のリボンを縫い付けて欲しいと頼まれたことがあって、母親はミシンで一生懸命縫い付けの作業をしていた。

エ 艇庫の近くの通りの向島商栄会（現、鳩の街通り）に、「ボート」というカフェがあり、商大の学生がよく出入りしていた。

## (2) 文献調査

① 隅田川についてボートに関わってきた各大学、実業団等によって『記念誌』等が多く存在する。しかし、それらは性格上各団体の個別の歴史を記述するものである。本研究では、その記述の中から地域とボート選手の地域とのかかわりを抽出する。

ア 東京商大・一橋大学 『一橋ボート百年の歩み』（1983年）

イ 早稲田大学、同高等学院 『漕艇部の百年、早稲田ボート文化史』（2002年）

ウ 慶応大学 『百年の歩み』（2004年）

エ 大倉高専・東京経済大学 『東京経済大学端艇部 100年史』（2004年）

オ 日本郵船 『転形期の人々』（1966年）

② 復興局・特別都市計画委員会等の議事録（1924年）

1923年関東大震災後の復興再建時、内閣直属の帝都復興審議会（のち特別都市計画委員会）を復興の決定機関とし、帝都復興院（のち復興局）を執行機関とする復興計画の策定がなされた。そこでは、東京の理想的都市はどうあるべきかが真剣に議論され、今日における東京の都市の原型が形成された。

この復興計画上、特に公園施設はできる限り新・増設が行われ、焼失区域に墨田、錦糸、濱町の三大公園が新設され、児童公園、東京市内各小学校校舎に隣接する小公園が約 51 個建設された。墨田公園は、隅田川を含むことに特徴があって、東西兩岸、北は白髭橋の下流から南は吾妻橋下流までの総面積が 18 万 4800 平方メートルである（比較して日比谷公園のそれは 15 万 5100 平方メートル）。これに隅田川の水上当部分（29 万 7000 平方メートル）を加えれば相当大規模である。

特別都市計画委員会の議論の焦点のひとつは、墨田公園の位置の選定であった。議論は、向島の料亭「八百松」（震災後営業を停止）跡地を何ゆえ墨田公園の敷地に入れないかという点であり、紛糾した（1924年3月14日第3回特別都市計画委員会議事録）。

紛糾した内容とは、料亭「八百松」跡地は、風景上から言っても、また、春秋のボートレースの際に「邪魔になり、今迄学生諸君は困り抜いて居った所」<sup>5)</sup> であるから、その跡地を公園敷地外の私有地として残さず公園敷地にすべきである、というのであり、それが大真面目に主張された。また、隅田川を生かした水辺の公園な

<sup>5)</sup> 復興調査協会、帝都復興史第3巻、pp1875-1915、興文堂書院、1930年

のだから、川の沿岸に歩行者の逍遙道路を建設すべきことが提案された。

その結果、

ア 料亭「八百松」跡地を墨田公園敷地内に編入すべき修正案

イ 川縁にある向島側の道路を公園の外に出して公園を完全に作る修正案

ウ 公園内にはその機能を害する建築物の建設を許可せざるよう注意せられんことを望むとの希望条件

がそれぞれ可決された（1924年3月17日、同月19日の公園市場特別委員会）。

### (3) 考察

上記の取材、文献調査等を検討して現時点で分かることは、次のとおり。

第1に、関東大震災後の復興計画において、水辺の公園である点を考慮して、都市公園の、なかんずく水辺と水面に着目して、ボートの利用価値を重要視し、この認識に反する公園計画に反対する姿勢が顕著という点である。

第2に、本所の艇庫と向島艇庫村は、隅田公園敷地に含まれている。上記(2)の「イ」と「ウ」の決議に該当する具体的な都市計画上の指導等が存在する。

すなわち同時期、東京商大の艇庫再建があり、同艇庫が隅田公園内に存在することから、当初計画が木造艇庫であったところ、復興局は、文部省、大学を通じて隅田公園の美観にふさわしくするために、艇庫を鉄筋にするよう勧告を行っている<sup>6)</sup>。

また、隅田川沿いに遊歩道が設けられ、墨田公園の真真中に架橋された言問橋や料亭「八百松」跡地付近から架橋された東武鉄橋についても、墨田公園からの眺望、景観を生かす構造物として工夫が加えられている。

ところで、公園設置によって隅田川沿岸は強固な土堤が築かれたが、その結果として以前から存在した川の荒天による風浪を避けていた船着場がなくなった。そのため「竹屋の渡し」周辺に舟溜を設置し、それにそって防波築堤を公園の築堤とすることによって、避難した舟の風浪の害を少なくした。このことは、戦後、治水上築かれた防潮堤（堤防を挟んで沿岸と川とを分断し、川の風浪を消えにくくする。）と比較して、雲泥の差があるといいうる。

第3に、本所の艇庫と向島艇庫村のボート選手らは、日常、艇を出して隅田川を行ったり来たり練習し、時には遠漕し、数万の観衆を集めての競漕はもちろん、早朝から地域の道路をランニングし、賄いや風呂は地域の食堂、銭湯を利用した。全国大会など選手が多いときやコーチは艇庫近くの一般家庭にも宿泊したようであり、地域の人々と日常的なふれ合いがあった。地域の住民は選手を受け入れ、子どもは選手を尊敬し、選手は練習の合間に子どもの勉強を教え、時には近くの飲食街に繰り出した。地域の住民は、競漕を応援し、勝負の喜怒哀楽を選手とともに味わったことがうかがえた。

## 4 参考文献

文中で触れたもののほかには、主として次のものがある。

① 藤牧義夫、隅田川絵巻（全4巻）、別冊太陽No.54、平凡社、1986年

② すみだ史談会、すみだ史談（No.1～No.35、同会報集大成）、1990年～2008年

<sup>6)</sup> 四神会、一橋ボート百年の歩み、1983年、pp310～327

## 利根運河とボート遠漕

一向島艇庫村から銚子までの遠漕の歴史―

古城庸夫（江戸川大学）

### 1. はじめに

千葉県北部の野田市・流山市・柏市と接しながら利根川と江戸川を結ぶ利根運河（約8 km）は、明治21年（1888年）5月から始まった開削工事によって、明治23年（1890年）6月16日に運河竣工式が行われ完成を見た。

しかし民間の資本によって作られた利根運河は、鉄道の完成や台風被害によって打撃を受け昭和17年（1942年）国有化され、現在では運河の役割を終えている。

本研究では旧制の大学及び高校と実業団の端艇部（ボート部）が、明治期から行っていた（銚子遠漕）の航路と時代背景を明らかにすることによって、ボート競技と遠漕航路周辺の人々とのつながりを明らかにすることを目的とする。

### 2. 初めての遠漕が行われた時代背景

隅田川でボートが漕がれるようになったのは明治10年（1877年）頃で、東京外国語学校（現東京外国語大学）の学生たちが拠金して造った2隻のボートは、学校の統廃合によって東京大学予備門と東京商業学校（現一橋大学）に受け継がれていった。

明治11年（1878年）11月16日に外国人で構成された東京漕艇倶楽部が、大橋と永代橋間で秋季競漕会を行うと、それに刺激を受けたように明治13年（1880年）体操伝習所（現筑波大学）が就業の余暇に操櫓法を練習し、明治15年（1882年）3月14日には石川島造船所に茗溪・昌平の2艇の建造を依頼した。

また同年11月21日には隅田川で海軍水兵の競漕が行われると、明治16年（1883年）6月には東京大学の学生たちが東京師範学校付属体操伝習所にボートレースを申し込み初めての対校戦が行われ体操伝習所が3戦全勝した。

またF・W・ストレンジの指導で陸上競技を始めていた東京大学の学生達が6月16日に陸上競技会を開催すると、明治17年（1884年）10月17日に東京大学のボート好きの学生団体である走舸組（注1）が隅田川で競漕会を実施し、多くの観客が見物のために押し掛け、以後隅田川では海軍と学生によるボートレースが大変な人気を呼んだ。この間海軍の軍人たちは学生のボートレースの役員を務めるなどの協力体制を取った。明治26年（1893年）3月20日、元海軍大尉の郡司成忠しげただが千島列島探検に5隻（カッター一隻・ピンネース2隻・和船2隻・オール漕ぎ帆走兼用艇）の短艇で向島から漕ぎだすと、東京大学、高等中学、尋常中学、日本中学、共立学校、学習院、高船学校、慶応大学、改玉舎、日本銀行、三菱会社などのボート数十隻が水上から見送り、同年には三菱、日本郵船、三井、日本鉄道による初めての会社対抗ボートレースが行われた。

また明治28年（1895年）には琵琶湖の天津で第一回大日本連合競漕会が行わ

れると、東京から大学や会社のボート関係者が選手や役員として参加するなど、日本国中がボートレースという新しい西洋スポーツに夢中になって行ったと思われる。

そのような社会的状況の中で初めての宿泊を伴った長距離の漕艇訓練が一橋大学端艇庫によって行われたのは、明治31年（1898年）1月のことで、航路は隅田川艇庫～荒川～江戸川～利根運河～利根川を経て銚子の大新旅館に向かったと思われる。

また銚子遠漕が行われた理由は、長距離を漕ぐことによって漕艇技術及び体力の向上を図りつつ隅田川の見慣れた風景を離れ気分転換を行いながらクルーとしての一体感を強めようとする狙いもあった。

### 3. 明治期の隅田川における艇庫建設

明治17年（1884年）以降、隅田川でのボートレースが盛んになり、多い時では一月に十数回の競漕会が行われるようになっていった。

それまで浅草橋の野田屋という貸しボート屋や、築地の小林という船宿にカッターやバッテリーなどという船を預け、各学校から学生達はボートソングを歌いながらオールを担いで徒歩で隅田川に向かっていた。

しかし明治20年（1887年）4月16日に帝国大学の向島艇庫が完成すると、明治45年までの間に13団体によって続々と艇庫が建設され、隅田川の吾妻橋を中心に一大ボート文化圏が形成されていった。

- 1) 明治20年（1887年）帝国大学（現東京大学）
- 2) 明治25年（1892年）学習院大学
- 3) 明治27年（1894年）第一高等学校（現東京大学）
- 4) 明治30年（1897年）高等商業学校（現一橋大学）
- 5) 明治33年（1900年）東京高等工業高校（現東京工業大学）
- 6) 明治33年（1900年）東京外国語学校（東京外国語大学）
- 7) 明治37年（1904年）早稲田大学
- 8) 明治39年（1906年）日本銀行
- 9) 明治39年（1906年）東京高等商業学校（現一橋大学）
- 10) 明治40年（1907年）明治大学
- 11) 明治40年（1907年）慶応大学
- 12) 明治42年（1909年）東京高等師範学校附属中学校（現筑波大学附属高校）
- 13) 明治45年（1912年）大蔵高等商業学校（現東京経済大学）

### 4. 大正10年頃の寺島地区の艇庫群

明治45年（1912年）頃には隅田川の吾妻橋を中心として、下流に第一高等学校と東京高等工業学校の2校と上流に10校と一実業団の艇庫が完成し艇庫村と呼ばれた。

この艇庫村と総称されたボート競技は艇庫に合宿所を併設していた関係で、他スポ

ーツの合宿所とは一味違う隣り合った密接な相互理解と相互扶助の精神を涵養する一大スポーツ団体を生むことになっていった。

そしてそのような良好な関係は、ボート競技が他競技に先駆けて大正9年（1920年）日本漕艇協会を設立したことにつながった。

このことは大日本体育協会の第2代会長に東京大学出身の岸清一（注2）が就任したことと密接な関係があると思われる。

この極めて純粋なオアーズマンシップ（注3）はボート部を卒業し社会人となつてからも相互扶助の精神として今日まで受け継がれている。

大正10年頃になると下流にあった2校の艇庫が上流へと移転したため、長命寺のわずか上流にあった下流より一橋大学・東京帝国大学・第一高等学校（元日本銀行艇庫）の艇庫群が最下流となった。

新たに上流に建設された艇庫と他団体に譲渡された艇庫は、以下の七つである。

- 1、明治40年（1912年）慶応大学から日本郵船に譲渡
- 2、大正3年（1914年）慶応大学寺島地区に移転
- 3、大正中頃（不明） 日本大学
- 4、大正8年（1919年）静水会艇庫建設（現東京海上スポーツ財団）
- 5、大正9年（1920年）千葉医科大学（現千葉大学）
- 6、大正10年（1921年）学習院大学から早稲田高等学院に譲渡
- 7、年代不明 野口造船所

こうして、言問団子の上流にある現一橋大学艇庫の川上には、14団体の艇庫と競技用ボートも作成していた造船所も加わった15の団体で、明治期よりもさらに濃密なオアーズマンシップが形成されていった。

## 5. ボート遠漕

明治31年（1898年）1月に、一橋大学端艇部によって銚子遠漕のための航路が開かれると、明治35年（1902年）12月に一橋大学が再び銚子遠漕を行った。

すると同年12月に早稲田大学が柴又遠漕を経て、12月22日から1月8日までの銚子遠漕を成功させたことによって、他団体の遠漕が盛んにおこなわれるようになっていった。

また明治42年（1909年）には一橋大学・早稲田大学・第一高等学校・高等師範学校・明治大学の5校が遠漕を実施し、時には練習形式の競漕を行ったり旅館に同宿するなどの状況が生じていたので、旅館関係者とオアーズマン同士の独特の友情が育まれていったと思われる。

さらに遠漕の航路は銚子以外にも開かれ、短期遠漕としては柴又・松戸・流山・野田、中期遠漕としては境・潮来などが行われ、平成18年（2006年）までに143回の遠漕が数えられている。

それら遠漕の時に宿泊した旅館名は銚子の大新旅館を含め合計23個に上るが、現在ではその多くが廃業しているなかで、平成20年(2008年)9月に松戸市で営業していた旅館海老屋の宿泊人名帳(昭和14年~15年)が発見された。

このことにより学徒出陣記念遠漕が実施されていた事実が判明したが、その内容については今後の研究を待たなければならない。

#### 注1. 走舸組

明治16年(1883年)頃、ボートを漕いでいた学生達によって、多くのクラブが生まれたが、代表的なものは以下の三つである。その後全クラブの統合機関として生まれたのが、走舸組である。

1) MBC (Member of Boat Club) 代表 日高真実 山口鋭之助(学習院長・宮中顧問官) 林権助(駐英大使・宮内省御用係) 他

2) ORC (Oriental Rowing Club) 武田千代三郎(県知事・大日本体育協会副会長) 神崎東蔵(弁護士) 他

3) SRC (Sumida Rowing Club) 岸清一(日本漕艇協会会長・大日本体育協会会長・IOC委員) 他

#### 注2. 大日本体育協会

武田千代三郎・岸清一・杉村陽太郎(国際連盟事務局長・フランス大使・IOC委員・一高、東京帝国大学のボート選手)などボート関係者が多く在籍していた。

#### 注3. oar smanship

oar とはボート競技のオールのことで、漕手としての技量全般を指しスポーツマンシップに繋がる。

#### 引用文献

近代体育スポーツ年表 岸野雄三他

大日本体育協会史 大日本体育協会

日本体育協会50年史 日本体育協会

ボート100年 宮田勝善

スポーツ八十年史 日本体育協会

東京大学漕艇部100年史 東京大学漕艇部

東京大学漕艇部50年史 東京大学漕艇部

一橋ボート100年の歩み 一ツ橋大学漕艇部

力漕100年 日本大学ボート部

明治大学体育会端艇部100年史 明治大学端艇部

利根運河 建設省江戸川工事事務所

東京工業大学端艇部100年史 東京工業大学端艇部

## レクリエーション活動における参加者の気分と運動能力・身体組成の関係について - I 市介護予防試行事業の結果より -

○高崎義輝(仙台大学) 小池和幸(仙台大学)

### I. はじめに

高齢者対象の健康教室を実施するとき、一般に指導者は、参加者の気分にも配慮し指導を行っている。それは、参加者のやる気を引き出したり、グループダイナミクスを活用したりなど、その活動の期待する効果を引き出すための一つの環境整備的な介入であり、その気分の影響は少なくないと考えられる。しかし、先行研究では、種々のアクティビティの介入により、参加者に望ましい気分の効果を得られた(谷口,1998,2000;O'Connorら,1993;安永ら,2001)との報告はあるが、参加者の気分とその活動の効果に関係が認められるといった報告は見当たらない。

そこで、本研究では「参加者の気分は、その活動の期待する効果に大きな影響を及ぼす心理的変数である」と仮説し、I 市介護予防試行事業の事例をもとに、レクリエーション活動における参加者の気分と運動能力、身体組成の関係について検討した。

### II. I 市介護予防試行事業の概要

I 市介護予防試行事業(以下、I 教室と略す)とは、改正介護保険法により導入された地域支援事業(一般高齢者施策)を試行的に実施した事業である。平成 17~18 年の 2 ヶ年、I 市、M 県社会福祉協議会、S 大学が共同で行った。実施の頻度は、週 1 回 2 時間で 6 ヶ月間実施した。プログラムは、I 市の社会資源が活用でき、介護予防に有効であると考えられた転倒予防エクササイズ 4 回、水中運動 10 回と M 県社会福祉協議会で実績のある乗馬(療法)4 回、園芸(療法)4 回の計 22 回の複合プログラムにより実施した。

### III. 研究方法

**調査対象者:**平成 18 年度 I 教室参加者 23 名より、要介護認定で非該当の 65 歳以上の高齢者のうち、必要なデータを全て測定できた方、計 13 名(平均年齢 71.08±4.84 歳・女 11 名、男 2 名)を調査対象者とした。

**調査期間:**平成 18 年 5 月 9 日~10 月 31 日までの約 6 ヶ月間

**調査場所:**転倒予防エクササイズと園芸は「I 市総合福祉センター」とし、水中運動と乗馬、測定は、グリーンピア I プール棟にて実施した。

**調査内容:**プログラムの介入効果の測定するため、①~④の調査を実施する。毎回のセッション前後に①気分の変化(Face scale: Lorish and Maisiaku, 1986))を実施した。プログラム前後に②運動能力(a. 健脚度<sup>®</sup>測定;10m 全力歩行/速度・歩数, 最大一步幅, 40cm 踏み台昇降, b. 開眼片足立ち), ③身体組成: Inbody3.2 (BIOSPACE 社製)を実施した。

**集計分析:**本研究の測定結果は、統計ソフト SPSS(Windows, version14.0j)を用い、t 検定で比較を行い、2 変量の相関関係については Pearson の相関係数を用いた。有意水準は、すべて 5%未満( $p < 0.05$ )とした。また、本研究では、1) 運動能力の測定項目を T-Score(偏差値=(得点-平均点)÷標準偏差×10+50)に置き換え、各測定項目の比較基準を統一し総合的に比較したり、2) Face Scale の変化の平均(1.25 点)を基準に気分が改善した群 7 名とその他の群 6 名に分け、その特徴や違いについて検討した。

#### IV. 結果及び考察

##### 1. 気分と運動能力の関係

気分と運動能力・全項目 T-Score 合計に、有意な相関関係 ( $\gamma=0.55$ ) があるとまでは、認めなかったが、気分改善群とその他の群の比較では、気分改善群の運動能力・全項目 T-Score 合計が 19 ポイントに向上し、その他の群はほぼ維持した。両群のプログラム前の運動能力・全項目 T-Score 合計は、ほとんど変わらなかった(図 1 参照)。

また、項目別測定値で見ると 10メートル全力歩行(所要時間), 最大一步幅で大きく変化し, 40cm 踏み台昇降で若干の低下がみられるものの, 全体としては気分改善群が向上傾向であった(表 1 参照)。

以上の結果より, I 教室における参加者の気分と運動能力の効果について, 気分改善群=「運動能力向上者」, その他の群=「運動能力維持者」という関係性が示唆された。

対象データが少なく ( $n=13$ ), あくまでも I 教室の事例の結果であるが, 参加者の気分は, 運動能力の効果に影響を与える心理的変数と考えられた。

##### 2. 気分と身体組成の関係

対象者全体として, プログラム前後で身体組成の各項目に変化はなく, 相関関係も認めなかった。また気分改善群とその他の群の比較でも, 身体組成の各項目に変化は認めなかった。

(図 2・表 2 参照)

プログラムの介入とは直接関係ないが, 気分改善群の人はプログラム前の体脂肪率が, その他の群に比べ 6.68%も低い人で, I 教室の気分改善群は, その他の群と比較し, 肥満傾向が低かった。その理由については, 日常生活活動量と関係すると考えられるが, 本研究では分らなかった。

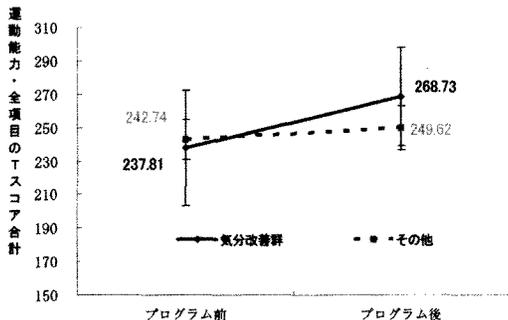


図 1. 気分改善群とその他の群の比較  
①

表 1. 群別の運動能力・各項目の変化

|                   | 気分改善群         | その他          | 差      |
|-------------------|---------------|--------------|--------|
| 10m 全力歩行・所要時間 (秒) | 0.69 ± 0.31   | 0.17 ± 0.40  | 0.51*  |
| 10m 全力歩行・歩数 (歩)   | 1.57 ± 1.13   | 0.50 ± 0.84  | 1.07   |
| 最大一步幅・補正 (cm)     | 6.70 ± 5.73   | -5.01 ± 9.18 | 11.71* |
| 40cm 踏み台昇降        | -0.14 ± 0.38  | 0.17 ± 0.41  | -0.31  |
| 開脚立立ち (秒)         | 15.14 ± 23.86 | 9.67 ± 8.94  | 5.47   |

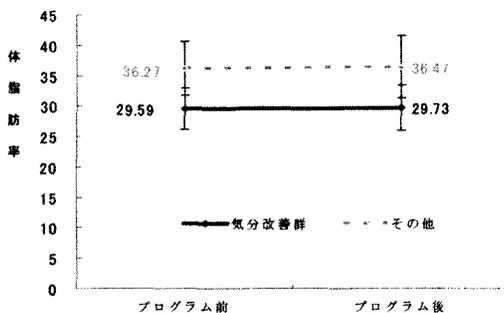


図 2 気分改善群とその他の群の比較  
②

表 2 群別の身体組成・各項目の変化

|           | 気分改善群        | その他          | 差    |
|-----------|--------------|--------------|------|
| BMI       | 0.01 ± 0.47  | 0.00 ± 0.19  | 0.01 |
| 除脂肪量 (kg) | -0.10 ± 0.59 | -0.23 ± 1.04 | 0.13 |
| 体脂肪量 (kg) | -0.10 ± 0.81 | -0.22 ± 1.39 | 0.12 |
| 体脂肪率 (%)  | -0.14 ± 0.96 | -0.20 ± 1.84 | 0.06 |

## 介護予防教室における目的別レクリエーションプログラムの開発と効果に関する研究（2）

○小池和幸（仙台大学）高崎義輝（仙台大学）

### I. はじめに

S大学では「転倒予防教室」を平成13年より近隣の2市5町の自治体と協力して転倒予防、認知症予防を中心とした介護予防教室を実施してきた。現在ではこれら健康教室の参加者への指導の他、介護予防等にかかわる指導者の養成事業を学生及び地域住民対象に並行して実施している。平成19年度からは、平成20年度より実施された特定健診、特定保健指導と関連付けて、従来の介護予防に加えて生活習慣病予防いわゆるメタボリックシンドローム予防のための肥満解消教室も実施している。

本研究はS大学のこれまでに実践してきた介護予防教室の内容を基にこの教室におけるレクリエーションプログラムの役割と効果を整理し、新たなプログラム開発を試みることを目的とするものである。平成18年度の本学会においてS大学のこれまでの介護予防教室におけるレクリエーションプログラムの構造の特徴を活動分析の手法を用いて分析した。合わせて従来のレクリエーション素材の介護予防教室への活用方法についての紹介を行った。今回は介護予防教室におけるレクリエーションプログラムの一部、効果と介護予防の目的別レクリエーションプログラム及びプログラム開発ツールについて示すものである。

### II. 研究方法

1. I市の介護予防教室参加者のプログラム参加前後の体力、体組成分、介護リスク、気分の変化等の測定評価
2. 目的別レクリエーションプログラム開発ツールの作成と使用による実用性についての検討

### III. 結果

#### 1. 介護予防教室におけるレクリエーションプログラムの効果における一考察

介護予防プログラムの前後の比較から体組成分の変化は見られなかったが、気分や体力、介護リスクについては改善傾向であった。また、気分改善群とその他の群において気分改善群の方に体力向上が顕著であった。

#### 2. 目的別レクリエーションプログラム開発ツールの作成と使用

介護予防プログラム計画シートを作成。シートの構成は①プログラムの内容②リスク・注意事項③運動の種類（アイコン）④運動部位以上4項目。

#### 3. 目的別レクリエーションプログラムの紹介

#### IV. まとめ

介護予防教室の前後では気分、体力、介護リスクがそれぞれに改善傾向にあった。介護予防教室におけるプログラムが複合プログラムであることや教室以外での日常生活における参加者の暮らし方の違いが結果に大きく反映される。レクリエーションプログラムの持つ構造から身体側面への作用は考えられるが、それ以上にレクリエーションプログラムの効果としては、その場の気分（やる気）やその場の容認（環境やメンバー・グループの受容）に大きく関与するものと思われる。健康推進・維持のために運動継続は欠かせない。その動機づけに地域、自治体で行われる「介護予防教室」や「健康づくり教室」がある。教室では健康の講話や適切な運動やトレーニングの紹介が行われる。ここでの教室の印象が以後の運動習慣に関係するのではないかと考える。教室の印象はプログラムの内容や会場の様子、参加するメンバーの雰囲気などによって決定すると考えるとレクリエーションプログラムの役割は動機づけ時の気分、気持ちの決定に重要な役割を担うのではないかとと思われる。

目的に合ったレクリエーションプログラム作成においては、レクリエーションプログラムを使用する側に十分な意図が必要不可欠である。レクリエーションプログラムがこの領域で十分な社会的評価を得ていない要因の一つのレクリエーションプログラムが利用者に提供されるプロセスにおいてプログラムの処方的手続きがなされていないか、その習慣がないことに起因することがあげられる。状況を変化させるためには、保健、医療、福祉現場でレクリエーションプログラム実施に関わる人たちがレクリエーションプログラム使用の目的（意図）を事前に明らかにする必要がある。そのためには目的別にレクリエーションプログラム処方、計画するツールの使用が一般化することが重要だと考える。

## 介護予防事業における運動実施の自覚的变化について (2)

—おもにアンケート結果と面接から—

○上野 幸 山崎律子 高橋和敏 (余暇問題研究所)

キーワード：介護予防 高齢者レクリエーション 運動 自覚的变化

### I 問題の所在

前回(2007年学会大会)の報告は、“介護予防事業における運動実施は体力測定での体力状況の把握も重要であるが、参加者同士が親しくなり、運動を楽しく行えることがより重要である。その雰囲気をかもし出す支援方法が大きな役割となる。したがって、克明な観察・生の記録を重視する必要がある”ということを中心に中間の知見としてまとめた。

今回は、その継続研究として、前回で考察したように、開始して6ヶ月経過した時期に参加者に対するアンケートと面接から、前回の報告の一部を正当化しようとするに至った。このような介護予防運動や要介護高齢者のレクリエーション活動に実際に関わりながらの研究(実践研究)において、従来認められてきた(学術)研究結果を期待することは数多くの困難性がある。それについては、“人間生活や人間の行為に対する科学的見地が重要ではあるが、思想あるいは哲学的思考がないまま、科学至上主義に陥ることは避けなければならない。より血の通った研究を模索したい”という考えに基づいてのことである。

### II 目的

本実践研究における当面の目的は、介護予防運動教室参加者の自覚的变化(身体的、心理的)を年代別に明らかにすることである。

### III 方法

参加者全員に対して、年代、参加開始時期、参加動機、参加目的、身体的変化、心理的变化についてのアンケート調査(一部選択式、一部自由記述)を行った。一部の人には面接を実施した。

期 間：平成20年8月28日～9月25日

対象者：65歳以上の介護認定を受けていない東京都B区在住者で、会場へ自力で通える高齢者。 登録者数 106人

\*対象となっている介護予防運動教室は、毎週木曜日に60分間、3教室開催。

#### <アンケート調査>

|             |           |
|-------------|-----------|
| 60歳代        | 3人        |
| 70歳代        | 46人       |
| 80歳代        | 26人       |
| <u>90歳代</u> | <u>2人</u> |
| 合計          | 77人       |

#### <面接調査>

|             |           |
|-------------|-----------|
| 70歳代        | 4人        |
| <u>80歳代</u> | <u>2人</u> |
| 合計          | 6人        |

#### IV 分析方法

参加目的および自覚的变化は、個々の記述を重視するために自由記述の中からキーワードを抽出して、類似する生の声を数量に拘らずまとめた。

#### V 結果

##### 1. アンケート調査結果

###### 1) 参加開始時期について

|      | 今年度から | 昨年度から | 一昨年度以前から |
|------|-------|-------|----------|
| 60歳代 | 0     | 0     | 3        |
| 70歳代 | 13    | 12    | 21       |
| 80歳代 | 10    | 3     | 13       |
| 90歳代 | 1     | 0     | 1        |
| 合計   | 24    | 15    | 38       |

###### 2) 参加動機について

\*7項目から選択、複数回答あり

|      | ①<br>自分から<br>問合せた | ②<br>区報をみ<br>て | ③<br>センター<br>を利用し<br>ていた | ④<br>区役所や<br>保健所等<br>のすすめ | ⑤<br>友人から<br>のすすめ | ⑥<br>家族から<br>のすすめ | ⑦<br>その他 |
|------|-------------------|----------------|--------------------------|---------------------------|-------------------|-------------------|----------|
| 60歳代 | 0                 | 0              | 1                        | 0                         | 2                 | 0                 | 0        |
| 70歳代 | 6                 | 17             | 16                       | 2                         | 19                | 0                 | 0        |
| 80歳代 | 6                 | 9              | 10                       | 2                         | 9                 | 1                 | 1        |
| 90歳代 | 0                 | 1              | 1                        | 0                         | 0                 | 0                 | 0        |
| 合計   | 12                | 27             | 28                       | 4                         | 30                | 1                 | 1        |

###### 3) 参加目的について

○60代・70代

健康・体力維持      転倒防止      時間がある      運動がしたい  
友人や医者のおすすめ      リハビリ      人と会う

\*年代別で類似する生の声を7項目にまとめた。

○80代・90代

健康・体力維持      人と会う      家族に迷惑をかけないように  
一人だと動かなくなる      外出ができるように

\*年代別で類似する生の声を5項目にまとめた。

###### 4) 身体的変化について

○60代・70代

体が軽くなった      体調が良くなった      体の動きが良くなった  
疲れがとれる      転ばないようになった      姿勢が良くなった

\*年代で類似する生の声を6項目にまとめた

○80代・90代

体が軽くなった      体がよく動くようになった      歩行が楽になった  
転ばなくなった      特に変化なし

\*年代で類似する生の声を5項目にまとめた

## 5) 心理的变化について

○60代・70代

楽しみになった 友人ができた 皆と会って話しができて楽しい  
気持ちが明るくなった 前向きになった 外出が楽しい  
他人にも助言できるようになった

\*年代で類似する生の声を7項目にまとめた

○80代・90代

気持ちが明るくなった 笑うことが多くなった 友人ができて楽しい  
体操の日が張り合いとなった 週に一度目的をもって外出するのが嬉しい

\*年代で類似する生の声を5項目にまとめた

## 2. 面接調査の結果

A氏・・体操に来ると、体が軽くなります。皆さんと会えることやお話しのできるお友だちができたのが良かった。

B氏・・以前は膝が痛くて、水がたまってしまったので治療した。その時は痛くて立ってられないくらいでした。ひどい時は松葉杖を使っていたくらいです。痛み止めの薬を飲んでいたら太ってしまったので薬を代えました。その時、やはり運動が一番大事だと思ったのです。今では考えられないくらい回復して、膝が曲げられるようになった。片足で立てるようになった。嬉しい。週一回を継続しているからだと思います。

C氏・・ここではお腹から笑える。家に帰ってもケラケラ笑うことができて良かった。自分が明るくなったと思う。脳梗塞で右半身麻痺になり、お勝手のことも娘に全部やってもらっていた、今は身体が動けるようになった。

D氏・・家にいると一人だから、皆に会えることが楽しいです。自分が明るくなったので、来てよかった。ここに来ることが張り合いになっています。週一回でも足りないくらいです。

E氏・・現状維持していますね。以前は足が一步でも出れたらいいのにと思っていた。冷え性なので、足裏を揉んだりするのもいい。できないこともまだあるけれど、来ることがとても楽しい。

F氏・・前よりも大儀でなくなった。

## VI 考察

1. 参加目的においては「健康・体力維持」が全体的に多い。ただし、これは高齢者の教室に限らず一般的な傾向であると思われる。

2. 「転倒防止」や「外出ができるように」が参加目的にあるとおり、高齢者は生活の中の自由時間の割合が多くなるが、転倒の危険性や外出の目的の有無などの要因から、本人自身の心理や家族からの助言によって自由に外出ができなくなる。谷口1)によると、高齢者の「閉じこもり症候群」はこれらが契機となって起こる。高齢者にとって、閉じこもらない生活を維持することは運動の目的でもある。
3. 4月から開始した教室が6ヶ月経ち、参加者同士が顔なじみになった時期でもあることから、参加目的の「人と会うこと」や心理的变化での「友人に会うことが楽しい」などの人間関係を継続していくことは、高齢者にとって大変重要であることが再確認できた。
4. 身体的変化における「体調がよくなった」「体が軽くなった」「歩行が楽になった」は体力測定などの数値には現れない参加者の自覚的变化であると思われる。
5. 心理的变化において「他人にも助言できるようになった」という点では守屋2)がいう「頼れる関係」だけでなく「頼られる関係」が主観的幸福感につながることを表している。
6. 面接結果にある「よく笑えること」で、「気持ちが明るく」なり、「参加することが楽しくなっている」「皆と会えることが楽しい」などのような、人間関係の微妙な機微を見守ることが大事である。

## VII まとめと今後の課題

今回の結果から、前回の研究での「介護予防運動を継続するためには体力測定結果などの数値的な結果を評価していくことも重要ではあるが、参加者同士が親しくなり互いに話したり、笑ったり、相談しあうような関係づくりもより大切であること」が参加者の自覚的变化の中でみることができた。

人は集団の中で居場所を見つけ、集団の中で過ごすことが欲求の1つである。高齢者（要介護高齢者も含めて）の生活において、個と集団のバランスが必要なことはいうまでもない。それらの活動においては指導者が介在していることが多いが、指導者のプログラムや動きのみならず、言葉がけや表情、雰囲気なども含めた支援法によって、参加者の気持ちや動きが変わってくる。今回のこれらの結果からも、高齢者の集団活動における支援においては、その実施の過程が重要であることを再確認できた。

今後の課題は支援法の充実とともに、現実に即した観察や記録法を開発することである。

### \* 参考文献

- 1) 「高齢者の心理がわかる Q&A」2005 監修：井上勝也・健康7：谷口幸一
- 2) 「中高年期からの心理的発達」2005 守屋慶子 立命館大学研究

## 高齢者介護サービス事業施設の職員における高齢者レク活動 支援力向上についての期待(2)

～ セミナー参加者における経験年数別によって ～

○ 廣田治久(余暇問題研究所) 山崎律子(〃) 高橋和敏(〃)

キーワード: 介護サービス事業施設、高齢者レク活動、支援力

### 1. はじめに

昨年本学会大会において「高齢者介護サービス事業施設の職員における高齢者レク活動の支援力向上についての期待」(廣田、山崎、上野 レジャー・レクリエーション研究 59号 2007年)を発表した。施設職員が直面するレク活動支援における問題意識を分析し、その結果をKJ法により11項目にまとめた。その主なものは“すぐに活用できる活動の修得”“様々な特徴を持つ利用者への対応の修得”“それらの利用者への集団支援法の修得”“職員間の問題解決(とくにチームワーク)”が挙げられた。そしてその解決への期待が明らかとなった。

このような結果を得る中で、さらに介護現場のレク活動支援に対する問題意識を探るために“職員の経験年数によってその内容に違いがあるだろうか”という疑問が湧いた。そこで今回は昨年の継続研究として介護職の経験年数にみた傾向を把握することで、より精密に現場の状況を明らかにできると考えた。

これらの状況を明らかにすることは、高齢者介護施設でのレクリエーション活動の充実を図る上で、ひいては高齢者のQOL向上を目指す上でも重要な示唆を得ることにつながると考える。

### 2. 目的

本研究は、継続研究として昨年の研究から得られた知見をもとに、介護施設職員の経験年数からみた職員の問題意識を探ることを目的とした。

### 3. 研究方法

- ・ 対象はA社が主催する介護施設職員向けの「レクリエーション・セミナー」の参加者。セミナーの開催時期は2008年4/21～9/4。14回を開催。
- ・ 参加者に行ったアンケートの中から「こんな内容を受けてみたい」に記述された自由回答を抽出。それらを昨年の研究で分類した11の項目に照らし合わせ、その結果と新たに設定した「介護施設での経験年数」と合わせて考察を行う。

### 4. 結果

＜表1＞アンケート結果の分類

回答数

|                | 1年未満 | 2年未満 | 3年未満 | 4年未満 | 5年未満 | 5年以上 | 小計  |
|----------------|------|------|------|------|------|------|-----|
| 活動自体を知りたい      | 11   | 19   | 21   | 11   | 10   | 65   | 137 |
| 認知症            | 1    | 4    | 1    | 3    | 3    | 14   | 26  |
| マヒ、目耳不自由       | 2    | 10   | 6    | 3    | 2    | 20   | 43  |
| 拒否・消極的         | 2    | 0    | 0    | 4    | 4    | 2    | 12  |
| 転倒・介護予防        | 3    | 2    | 0    | 4    | 2    | 8    | 19  |
| 身体機能、筋トレ       | 0    | 0    | 0    | 7    | 2    | 9    | 18  |
| 介護度、身体機能の異なる集団 | 1    | 1    | 5    | 5    | 2    | 4    | 18  |
| 集団指導法          | 3    | 5    | 6    | 6    | 4    | 10   | 34  |
| 現場を見たい         | 0    | 1    | 0    | 0    | 3    | 4    | 8   |
| レクリエーションの理解    | 0    | 3    | 5    | 1    | 0    | 2    | 11  |
| 職場/職員          | 0    | 1    | 1    | 1    | 0    | 7    | 10  |
| 計              | 23   | 46   | 45   | 45   | 32   | 145  | 336 |

回答内容を11の項目と経験年数で分類し、その回答数をまとめた結果が<表1>である。今回は傾向の概要を知るために単純集計のみに留めた。アンケートの記入方法が自由回答であったため、その表現は「手遊びなどのレク」「マヒの人にゲーム/体操」など、その言葉の使い方は不統一であり、本研究では総じてレク活動として解釈することとした。

## 5. 考察

- ◆ 表1から、アンケート回答数の経験年数別の分布は、2年未満からが多い結果であった。入職後1年を経てレク活動の知識や技術を求めているのではないかと考える。
- ◆ 項目ごとでは「活動自体を知りたい」が圧倒的多数である。記述内容を見ると、経験年数が2年未満以後の職員が知りたい活動に対して、“高齢者の好む音楽を使った”“短い時間でできる”など、より具体的な回答が見られる。すぐに使える内容を求める自然な要求と考えられるが施設ごとに対象者を把握し、支援法に変化をつけるなどの工夫することなく、安易な方向に意識が広がることが懸念される
- ◆ 「マヒ、目耳不自由」は、ADLの低下、体の障害を持つ施設利用者へのレク活動に関する項目である。全体の中でも2番目に要望の高い項目であることから、それらに対応したレク活動に苦慮していることが推察される。
- ◆ 「拒否・消極的」は、職員が支援するレク活動に対して、拒否または消極的な利用者に関する項目である。全体数は少ないものの男性高齢者を対象とする回答が多く見られた。実際の現場で職員の方々の話やセミナー参加者から質問にこれらのことが多く聞かれることから、現在介護現場の直面する大きな課題と考える。
- ◆ 筋トレに代表される身体機能向上に関する回答は、4年未満以降から多く見られる。「転倒・介護予防」と合わせると回答数は37となる。これらは介護現場において利用者のADLの維持・向上の効果をレク活動に求めているのではないかと考える。またこの現状と経験年数の関係は、職員が年数を経ている中で個々にそのことを意識し、職場においては経験年数から、その効果を求められる立場にあるのではないかと推測する。
- ◆ 「集団指導法」の項目では、記載内容を見ると経験年数が増える中で話し方や参加を促す雰囲気作り、レク活動の企画、進行の仕方など具体的内容が見られた。高齢者レク活動の支援を実践する中で『対象者の把握』の上に立った対応の仕方・支援法が重要と認識しているが、介護職員は様々な特徴を持つ高齢者の集団に対して指導技能の不足を感じていることが推察される。これらの現状を垣間見の中では、今後も職員へのセミナーなどでの教育内容をより吟味し、その提供に努力していく必要があることを強く感じる。

## 6. まとめ

全体的にみて“介護現場でのレク活動支援に直面している職員は、その経験を経るにつれて学びたい内容が具体的で、より現場に即したものになっている”とまとめられよう。さらにこの実践研究を通じて感じられることは、職員がレク活動支援法の素地が十分でない中でレク活動支援を担当することはしばしば苦痛を伴うことにもなり、その支援への意欲低下やひいては施設を利用する高齢者にも影響することが懸念される。

レク活動支援の教育機会の提供は、現場の期待に答えるものと考え。しかし、その機会として従来まで介護資格取得時に必要とされてきた「レクリエーション活動援助法」が削除されることは、今回の研究結果や現場の現状をみても憂慮すべき問題と考える。

## 老人病院の入院初期における余暇支援のあり方

○草壁孝治 佐近慎平 今井悦子 (医療法人社団慶成会 青梅慶友病院)

### I. はじめに

入院初期は、疾病の治癒、障害の改善等に関心が高く、余暇をどう過ごすかということには関心が低いことが多い。高齢で疾病、障害をもち、見知らぬ地で、誰も知らない人の中で一人での生活は不安が大きく、高齢者といえども心の触れ合いには飢えている<sup>(1)</sup>。

A 老人病院は「豊かな最晩年をつくる」を目標に掲げ、入院日に多職種で評価を行い、看護、介護、リハビリテーションスタッフは、6 週間の集中ケアを行い、身体、精神機能のレベルをあげ、その後の生活を快適に過ごせるように努めている。

入院生活にも慣れてくると、余暇への関心も高まり、趣味的な活動を行うことは日常の中でよく見られることである。しかし、それまでの状況下でのレクリエーションワーカー（以下RW）のかかわりはどのようにされているのかは不明な部分が多い。また、入院した患者が何時からどのような余暇に関心を示すのかを明確にし、レクリエーション（以下レク）の役割について考えていきたい。

### II. 目的

入院後、何時からどのようなレクプログラム（以下プロ）に参加しているのか現状を調査し、今後のレクの役割について探求することを目的とする。

### III. 方法

施設：A 老人病院（医療保険病床 239 床（療養病床 239 床）、

介護保険病床 497 床（療養型 257 床、認知症疾患型 240 床）、計 736 床）

病棟数：15 病棟 平均年齢：87.8 歳

男女比：男性 22.2%、女性 77.8%（2008 年 8 月 1 日現在）

調査期間：2008 年 8 月 1 日～10 月中旬

対象者：2008 年 8 月 1 日～8 月 31 日に入院した患者 29 名

内容：入院後、A 老人病院で展開しているレクプロへの参加時期と 6 週間集中ケア期間のレクプロの継続、その後の余暇の過ごし方を調査する。

担当スタッフ：RW、生活活性化員

### IV. 結果

1. 入院対象者：2008 年 8 月の新規入院者 29 名

2. 入院形態：ショートステイで軽快退院者 3 名、新規入院者 23 名（内、死亡退院者 6 名含）、再入院者 3 名

3. 今回の調査対象者と概要

調査対象者：2008 年 8 月 1 日から 31 日までに新規入院者 26 名のうち、ショートステイの 3 名、死亡退院した 6 名を除く 20 名

4. 男女比：男性 8 名、女性 12 名

5. 平均年齢：86.4 歳（71 歳～96 歳）

6. 平均要介護度：4.1

7. 対象プログラム

週 1 回の頻度で、各病棟ホールで行っているプログラム

歌の会、体操（レジスタンスを含む）、趣味の会（手芸、書道、塗り絵など）、コーヒーの会、絵手紙の会、お酒の会、ビデオ鑑賞、俳句の会、足浴、散歩など。

※今回の対象とするプロは、15 病棟ある内、5 割以上の病棟で行っている歌、体操、コーヒー、趣味の会とする。

月 1 回の頻度で開催しているプログラム

コーラス、映画、生演奏会、コンサート。

年 1 回のイベント

季節のイベント（新茶の会、かき氷の会、秋の味覚祭り、年はじめの会）、写真撮影会、和菓子の会など。 ※今回対象とするイベントは、写真撮影会とする。

週 1 回行っている 4 つのプログラムへの参加率：（参照：表 1）

表 1 週 1 回行うプログラムの参加率

| 順位  | 1     | 2     | 3     | 4     |
|-----|-------|-------|-------|-------|
| プロ  | コーヒー  | 歌     | 体操    | 趣味    |
| 参加率 | 70.0% | 60.0% | 45.0% | 16.7% |

週 1 回行っている 4 つのプログラムの週ごとの参加率：（参照：表 2）

表 2 各プログラムの 1 週から 6 週までの参加率の比較

|      | 第1週  | 第2週  | 第3週  | 第4週  | 第5週  | 第6週  |
|------|------|------|------|------|------|------|
| 歌    | 50.0 | 45.5 | 50.0 | 66.7 | 60.0 | 66.7 |
| 体操   | 50.0 | 35.0 | 35.0 | 31.3 | 45.0 | 31.5 |
| コーヒー | 62.5 | 66.7 | 55.6 | 70.0 | 62.5 | 70.0 |
| 趣味   | 11.8 | 17.6 | 20.0 | 23.5 | 18.8 | 17.6 |

8. 各プログラムの参加パターン

歌のプログラムの参加パターン：

(1) 第 1 週目から参加し、その後も参加し続けた。

軽度者で声がけにより参加をするケース。

重度者で病棟スタッフがプロ時間に合わせて離床するケース。

(2) 第 1.2 週目は参加しなかったが、その後参加するようになった。

生活にも慣れ「見学からの参加なら」と参加し、その後、継続に至るケース。

(3) 第 1 週目は参加したが、その後参加しなくなった。

一度は参加したが、その後、病状悪化のため不参加となったケース。

(4) 参加は見られなかった。

嗜好による自己決定で不参加、他のプロに参加したケース。

重度者で離床が困難なケース。

コーヒーの会の参加パターン：

コーヒーの嗜好はあるが、好きな人で坐位が取れる人は第 1 週目から参加し、好まない人は第 1

週目から不参加となる。

#### 体操の参加パターン：

体操もコーヒー同様にリクライニング型車椅子で離床する人を除き、他の人は坐位が取れる人である。

体調によって参加に波のある人もいるが、参加と不参加にわかれる。

#### 趣味の会の参加パターン：

自主性、自己決定を尊重していることから、趣味の会の参加率は低い。

参加した人は3名で、家族の声がけ、以前デイケアで手芸を経験していたケース。

調査機関に行った月、年1回のプログラムへの参加率：(参照：表3)

表3 月1、年1回行われるプログラムの参加率

| 1     | 2     | 3     | 4    | 5    |
|-------|-------|-------|------|------|
| 写真    | コンサート | 生演奏   | コーラス | 映画   |
| 61.9% | 19.0% | 14.3% | 9.5% | 4.8% |
| 1/y   | 1/m   | 1/m   | 1/m  | 1/m  |

写真撮影は会場までの移動が可能であれば、撮影は出来るため参加率が高い。また誘導が必要となるが、敬老の日に開催したため、参加者のうち5割強の人は、家族が誘導者となり一緒に撮影をした。

## V. 考察とまとめ

入院した患者がいつからどのようなプロに参加し、どのような余暇生活を送っているか、入院後6週間での日常のプロにかかわりが見られたのは表1の通りで、プロの内容によって参加率に大きな差が見られた。

このプロを参加率でみると、10%台の趣味の会と40%以上のコーヒーの会、歌の会、体操とに大別できる。

前者は手芸、書道、塗り絵など、参加をして何か物を作る、形が残るプロである。このプロの特徴は、物を作る、作品を仕上げることに主目的がおかれ、作品を少しずつ完成させる喜び、出来上がりを人から誉められる、出来た作品を人にプレゼントすることにある。作業場面を見て誉められる、また、その場にいなくても完成品を見て誉められることでのうれしさ、人に役立つという喜びを感じる事が出来る。デメリットは、作品をうまく完成出来ないと失敗体験を伴い自信を失うこと<sup>(2)</sup>にあり、若い頃のように、体が自由に動かない高齢者にとっては、特に入院間もない頃の参加には抵抗があることが、参加率の16.7%からも読み取れる。

後者は歌、体操、コーヒーで、参加しても物や形が残らないプロである。物を作らないことに特徴があるこのプロは、その場を楽しむ、上手下手が問われず、失敗体験を怖れることなく、誰でも気軽に参加できることにある。したがって、入院直後の不安の大きい人でもかかわりやすい、参加へのハードルが低いことが特徴である。デメリットは、その場での活動を見ていないと、他のスタッフや患者家族はどのように参加しているのか分からず、頑張りや結果を伝えることが困難なことにある。

入院直後の一人での生活は不安が大きい、早く慣れ親しむことが出来るとうたのプロのように、週を追って参加率が高くなっている。レクプロの中には、他者とのよりよい出会いや心地よい共存のために、その媒体としてのレク活動がもつ意味は大きい<sup>(3)</sup>。

歌やコーヒー、体操などは、集団を介して行うが、他の参加者と話すことなく参加ができ、自ら望めば、他の参加者との会話、声を出し歌うことで共感を味わうことも出来る。参加者のコメントに、「最初は見学で」と話し、参加後は、「楽しかった、また次回も参加します」とスタッフとのやり取りから始まり、他患者からの誘いで参加し、その後の会話が弾み、趣味活動に繋がったケースも見られた。したがって、RW は病棟でのレク、イベントにおいては、入院初期の緊張した中でも無理のない、参加しやすい声かけを行い、レクプロ中においても緊張が取れるような声かけをし、スタッフとのかかわりから、信頼関係が保てるよう、または患者同士の交流が図れるよう支援することにレクの役割があり、ここに一つの RW の専門技術があると考ええる。

今回の調査からレクプロへの参加パターンを以下の通り分類した。

#### 自己決定が可能な人

- (1) 余暇を自己選択する（読書など）
- (2) 形が残らないプロから個人の趣味活動に参加（歌⇒お話⇒囲碁）
- (3) 施設で用意しているプロを自ら選択して参加（体操・手芸など）
- (4) 疾病や障害、興味が無い等の訴えから、生活に慣れたまたは家族ニーズにより参加（歌・体操など）

#### 自己決定が困難な人で家族のニーズがある人

- (5) 家族のニーズで余暇プロへの参加（歌・体操・手芸など）
- (6) 家族が自ら一緒にイベントに参加（コンサート・写真撮影会など）

#### 自己決定が困難な重度者で家族ニーズもない人

- (7) 多職種のスタッフで検討する（歌・個別対応など）

6週間後のケアプランによる余暇の過ごし方については、6週の間で参加するようになったレクプロを中心とした内容となっている。重度者については、病棟ホールで行っている歌の会の時間に合わせて病棟スタッフが離床し、生演奏を聴きながら気分転換を図る、隣接した公園や院内の散策を中心とした散歩など、全患者の余暇生活をプランしている。

今回は不安が強い入院初期において、形が残らないハードルの低いプロの参加率が高い、また、参加には7つのパターンに別れ、個人にあった余暇選択がされていた。6週間後の余暇プランも6週以内で見出された余暇のかかわりが継続されて、RW のかかわりが豊かな生活づくりに貢献し、この時期にもレクの役割があると示唆できた。

## VI. おわりに

今回は余暇活動へのハードルの高さの違うプロ、そして移行パターンが伺えた。

今後は、プロへの誘導、参加意欲の引き出し、プロ中の会話、患者間の会話の媒介、プロの見極めなど、RW の役割を更に具体的に見出していきたい。そのことが、入院後早い段階で安心した生活を送ることへの関係性を深めていきたい。

## 参考文献

- (1) 草壁孝治・斎藤正彦編著『高齢者のレクリエーションマニュアル』ワルト・プランニング、2002年4月 4p
- (2) 草壁孝治『初期痴呆高齢者に対するレクリエーション療法の試み』レジャー・レクリエーション学会、2003年10月 64p
- (3) 吉田圭一・茅野宏明編『レクリエーション指導法』ミネルヴァ書房、1990年12月 17p

## 活動支援による行動障害緩和への試み

○佐近慎平 草壁孝治 今井悦子（医療法人社団慶成会 青梅慶友病院）

key words : 認知症、活動支援、認知症行動障害の緩和

### I. はじめに

現在、認知症患者は 150～200 万人といわれる。在宅の認知症高齢者の約 80%に何らかの行動障害がみられるとされ<sup>1)</sup>、認知症の程度が軽度から中等度に進行すると BPSD(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) が多く出現するようになる。認知症患者では、記憶障害、見当識障害などの中核症状以外に、周辺症状として幻覚、妄想、抑うつ、せん妄、興奮、攻撃的言動、徘徊などの多様な精神症状や行動障害が認められ、この周辺症状は BPSD と呼ばれている<sup>3)</sup>。この BPSD は、家族を含めた介護者にとっては大きな負担となり、精神的、肉体的にも疲弊してしまい、看護、介護に支障をきたす場合がある。BPSD への対応は、向精神薬による薬物療法が基本であるが、精神症状に向精神薬が無効な場合、薬の副作用により、食欲不振や歩行不安定等から向精神薬の投与継続困難の場合もある。その際、行動障害状態から移行のために、活動の導入が試みられることも少なくない。本研究では認知症患者の行動障害への活動支援の試みを報告する。

表1 症例1、2の基本属性

### II. 症例検討

本症例 2 件は、同一環境に所属し、同時期に活動支援を試みた症例であり、薬物療法と日常生活支援、さらに活動支援を行い、活動支援が行動障害緩和へ貢献した要因を比較検討した。両症例とも、TV 鑑賞、散歩等の活動を日中活動として導入し、レクリエーションワーカー(以下 RW)は、対象の生活歴、趣味歴から、活動(刺し子: 布巾縫い)を選択し、それぞれの残存機能を把握、課題の難易度を設定し、成功体験(レクリエーション体験)を支援した。頻度は、週 2 回、10 分～20 分程度、個別に直接介入した。また、対象属性の比較を表 1 に示した。

|                | 症例1            | 症例2      |
|----------------|----------------|----------|
| 年齢             | 78歳            | 92歳      |
| 性              | 女              | 女        |
| 主病名            | 認知症            | 認知症      |
| 認知症高齢者の日常生活自立度 | M              | M        |
| 障害老人の日常生活自立度   | C1             | B1       |
| 主な行動障害         | 暴力行為拒否         | 夜間せん妄頻尿  |
| 薬物療法           | 併用             | 併用       |
| 介入時期           | 入院後(3年経過後)     | 入院直後     |
| 活動の決定          | 第三者からの導入後、自己決定 | 第三者からの導入 |
| 生活歴、趣味歴        | 70歳まで、家政婦として働く | 手芸、小唄    |

#### 1. 症例 1

### 1) 対象属性

78歳女性。診断は認知症、中核症状は中等度の見当識・記憶障害はあるが言語理解は比較的保たれている。行動障害は暴言、暴力、つばはき、脱衣行為、不潔行為、物を投げつける等あり、特におむつ交換時の引っかき行為やたたくなどの暴力行為、唾吐きや便をつかむなどの不潔行為が職員の大きな負担となっていた。

### 2) 活動支援のゴール

活動支援の目的に、集中する時間の創設、暴言、暴力の減少、スタッフの苦痛軽減を挙げ、キーポイントを生産性のある活動、役に立つこととし試みた。

### 3) 結果

生活歴、看護師のボタンを直そうとした経緯から、手芸活動の導入を試みた。初回は、刺し子のお誘い（導入）を目的に、RWと1対1での支援を試みた。活動分析により直線を波縫いすることから始め成功体験を促した。10cm程縫うことができ、3～4分集中することができた。介入直前まで、大声をだしスタッフへの攻撃が見られたが、RWへは表出せず、自身でコントロールしている印象を受けた。その後、3回、個別で関わりをもち、成功体験と会話による回想、建設的情緒の誘発を行った。その際に得た、花嫁衣裳を作った等の情報を職員間で共有し、積極的に建設的声かけを行った。その結果、職員の見守りのもと、看室で刺し子活動が可能になった（投葉開始後、2週間目の影響も有り）。その後は、RWの関わりは、環境整備、材料補充等に変更、看護師、ケアワーカーのもと活動を継続し行動障害の表出する頻度も減った。

## 2. 症例2

### 1) 対象属性

92歳女性、診断は認知症。中核症状は、記憶、見当識障害、ことばの機能と思考・判断力は比較的良く維持されている。周辺症状は、短期記憶障害により、数分前の出来事も思い出すことは難しい。繰り返す同じ訴えがあり、その都度、説明対応し落ち着くが、立ち上がり、訴えが頻回に見られ、マンツーマン対応を強いられ、職員の負担が増大していた。歩行にふらつきが見られ要見守りの患者であった。

### 2) 活動支援のゴール

活動支援の目的に、集中する時間の創設、マンツーマン対応の頻度減少を挙げ、キーポイントを生産性のある活動、役に立つこととし介入を試みた。活動は、包帯巻き、散歩、TV・ビデオの鑑賞、刺し子の4種類の導入を試みた。いずれも活動の介入時期は同時期であった。

### 3) 結果

初回は、刺し子へのお誘い（導入）を目的に介入を行った。10分程度集中することができ、RWへの拒否は見られず、活動へ導入でき、短時間であるが集中時間が創設できた。その後、3回、個別で関わりをもち、成功体験と回想による建設的情緒の誘発、継続時間の延長を試みたが、変化は見られなかった。

## Ⅲ. 考察

BPSD、精神症状、行動障害を表2に、周辺症状に対する非薬物療法的介入の際のアセスメント<sup>3)</sup>を元に比較検討をした。

表2 BPSDの症状

|                 |
|-----------------|
| 精神症状            |
| ・幻覚             |
| ・妄想             |
| ・睡眠覚醒障害         |
| ・感情面の障害         |
| ・人格面の障害         |
| 行動障害            |
| ・攻撃的言動、焦燥、叫声、拒絶 |
| ・不適切、無目的な言動     |
| ・食行動の異常         |

表3 イギリスの認知症へのケアのガイドライン  
周辺症状に対する非薬物療法的介入の  
際のアセスメント領域

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1) 身体的健康                            |
| 2) うつ病                              |
| 3) 痛みの有無                            |
| 4) 薬物の副作用                           |
| 5) 個人の生活歴                           |
| 6) 社会心理的要因                          |
| 7) 物理的な環境要因                         |
| 8) 介護者あるいはケアスタッフと<br>関連した行動および機能の分析 |

National Institute for Health and Clinical Excellence  
:National Clinical Practice GuideLINE  
Number42.2006.

### 1. 行動障害の要因比較検討

症例1が行動障害を引き起こす要因は、精神症状の感情面から起こるものであると推測される。自身の欲求が解消されない、ケア時に安全面を考え患者の要求を却下せざるを得ない等、イニシアチブを職員に取られることに対して、暴力行為、不潔行為を通して、職員に訴えていたのではないかと考え、表2の感情面、人格面からの攻撃的言動、焦燥と捉え、表3の8) 介護者あるいはケアスタッフと関連した行動および機能の分析に注目し、介入を行った。

刺し子による布巾作りは、病棟で使う他に、職員、親類、面会者へのプレゼントとして機能し、その際に生じる、第三者からの感謝を得ることが、外発的動機づけの維持を可能にし、活動の安定、継続、発展に繋がり内発的動因へと変容したと考えられる。患者の人の役に立ちたいという欲求を充足させたものと考え。人の役に立つ活動を創設したことで、欲求の流れが、職員への行動障害から、活動達成を職員と共有することへ転化したことが、行動障害の緩和に繋がったのではないかと考える。

症例2の行動障害を引き起こす要因は、意識の変容から起こるものであると推測される。表2の幻覚、妄想からの焦燥、表3の8) 介護者あるいはケアスタッフと関連した行動および機能の分析に注目し、介入を行なった。

患者は、思考、判断力、注意力が保たれており、錯覚による不安が生まれ、対応、処理しようと立ち上がり、大丈夫であることを確認し、席に座るが、短期記憶に障害があり、再度行動をとる。不安が想起されている状態では、活動の導入は難しく、不安が解消され、安定した時に活動へ導入したが、集中が途切れた時点で、再度不安が生まれ、繰り返し行動する様子であった。

### 2. 活動

症例1と症例2は年齢に差があり、意欲、喪失感に差はあるものの、活動に必要な能力に差は見られなかった。生活歴、趣味歴から、活動（刺し子）を選択し導入した。症例1は、作品の出来上がりに対し前向きであり、活動技術を再獲得し、活動の難易度も高度化した。

症例 2 は、活動の完成度に満足できない様子が伺え、喪失感の助長の恐れがあり注意が必要だった。

### 3. 多職種の中の RW の役割

ケアプランをもとに、患者、その人らしい病院での生活、最適な医療看護介護を各職種が提供する。行動障害へのアプローチは、患者へ直接関わる時間、頻度が多い看護師、ケアワーカーに第一に対応が求められ、緩和困難な場合、リハビリ職種、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、そして RW にオーダーされる。

症例 1 の患者が、大声を出し、物を投げるなどしている時、看護師長、臨床心理士、RW を知っているかどうか聞いたことがあった。患者は、看護師長、臨床心理士は知らないと答えたが、RW に対しては、「知っている、美味しいコーヒーをいれてくれる、いい人だ」と答えた。日常のケア、行動障害へ対応していた職員へは、肯定否定、両イメージがあるが、RW は、建設的情緒の関わりにより、患者との間に、肯定的関係が構築されていたのではないだろうか。楽しみを共有する経験は、蓄積記憶され、情緒不安定な状態であっても、想起され活動の導入に役に立ったのではないかと考える。

患者を取り巻く各職種で、行動障害を緩和することが求められる中、RW は、活動の導入、自立支援を行い、患者が日中の自己裁量時間に、活動による集中時間をもつことを支援することが求められ、行動障害の緩和から生活の楽しみまでを支援することが医療福祉機関において、RW の役割の一つと考える。

## IV. おわりに

周辺症状に対する介入では、第一に非薬物療法的介入が推奨される。薬物療法は、周辺症状が顕著であり、認知症の本人および介護者等に被害が及ぶ場合に向精神薬が投与される。本研究報告では、感情面により起こると推測される行動障害において、生活歴、趣味歴に手芸のある患者に対して、施設内で手芸が実施可能、継続可能な活動である場合、非薬物療法的介入、活動支援が行動緩和に役立つ一症例が示された。その際、患者を取り巻く各職種と連携し、行動障害の緩和から生活の楽しみまでを支援することが医療福祉機関において、RW の役割の一つであると考えられる。

本研究の課題は、昨今、EBM (Evidence Based Medicine) が求められる中、活動支援による行動障害緩和への試みも根拠を求めることであり、今後、症例検討、研究が積み重ねられ、学術、技術として成立することを強く望むとともに、研究を継続したい。

## 引用文献

- 1) 本間 昭：痴呆における精神症状と行動障害の特徴、老年精神医学雑誌 9：1019-1024, 1998.
- 2) 国際老年精神医学学会、日本老年精神医学会監訳：BPSD 痴呆の行動と心理症状、アルタ出版、2005.
- 3) 本間昭：これからのアルツハイマー型認知症診療ガイドラインに求められるもの、老年精神医学雑誌 18 (増 1)：70-77, 2007.

## 障害者スポーツにおける「障害/健常」意識の変容過程に関する研究

—車椅子バスケットボール競技者に着目して—

○河西正博（立教大学大学院） 松尾哲矢（立教大学）

### I 研究目的

障害者スポーツの領域においては、大きく分けてリハビリテーションスポーツ、競技スポーツ、生涯スポーツの視点から研究が行われている。先行研究においては、スポーツによる障害の軽減、二次障害の予防、パラリンピックを頂点とした競技的観点からの障害者スポーツ振興の方策について、日常的にスポーツを行うための環境整備について等のテーマを中心に議論がなされている。また、多くの研究においては、「障害」がスポーツ活動を阻害する負の要因として措置されており、「障害者」「障害」という概念が画一的に捉えられている傾向が看取される。星加(2002)は障害の意味付けについて、「障害者のアイデンティティの中に占める『障害』の位置は個別具体的な状況に相関して多様であり得るのだが、『障害』に特別な意味を与えて障害者を規定する社会的な圧力の中で、『障害』への態度を意識せざるを得ない場面は多い。」と述べている。つまり、本来「障害」の意味付けは非常に多様であり、障害をもつ個人によって異なるものであるはずが、「社会的な圧力」によって、あたかも明確な回答があるかのように捉えられてしまっているということである。また、阿部ら(2001)は、障害者水泳に参加している2名の選手のインタビューから、対象者が障害やスポーツを生活の中でどのような資源として用い、自らの生を戦略的に生きているのかに焦点を当て、「いわゆる『障害者』もまた、つねにかかわらず『障害者』であり続けているわけではない～(筆者中略)場面ごとに『障害者』であったり、なかったりする様子もまた、人々が生きている現代的『生』だとするならば、それをとらえる研究視角があってもいい」と述べている。これらの言葉から浮かび上がってくるのは、障害をもつ人々が、暗黙のうちに了解されている「障害者」としてのみ生きているのではなく、状況に応じてさまざまな「顔」をもつ存在として生きているということである。

このことは、これまで自明のものとなっていた上記の障害者スポーツにおける「障害」「障害者」「健常」概念が状況や関係性に依拠して変化するというを示唆するものといえよう。そこで本研究では、障害者スポーツの中でも競技団体の組織化、競技力、競技人口等の点から、わが国の代表的なスポーツの一つである車椅子バス

ケットボールに着目し、スポーツへの取り組みと「障害」「障害者」「健常」意識の変容過程を検討することを目的とする。現在、車椅子バスケットボールにおいては、障害のない競技者が近年増加している。このため、既存の障害者スポーツにおける「障害をもっている」という暗黙の参加資格が無効化されつつあり、既存の「障害者スポーツの枠組み」では解釈ができなくなっている。これらの現状のもとに、障害者がスポーツと出会うことで、「障害」「障害者」意識がどのように変容したのか、を明らかにするとともに、「障害者」競技者が「健常者」競技者に対してどのような意識を抱いているのか、両者の関わりによって「障害/健常」意識の変容過程について検討する。

### II 研究方法

#### 1. 調査対象・時期・方法

2008年8月、日本車椅子バスケットボール連盟(以下、JWBFとする)加盟全チーム(88チーム)を対象に質問紙を郵送し、40チーム278名の競技者から回答を得た(回収率:45.4%)。

#### 2. 主な質問項目

質問項目は以下のように設定した。1.対象者属性(性別、年齢、職業、チーム所在地、障害区分・受傷原因、車椅子バスケットボール経験年数、競技歴、持ち点)/2.チームと自身の活動状況/3.スポーツ全般に対する意識について/4.車椅子バスケットボールへの取り組み・意識について(車椅子バスケットボールを始めるきっかけとなった人物、活動目的等)/5.障害者スポーツ観について(スポーツをするに当たっての障害の捉え方、車椅子バスケットボールを始めて傷害に対する意識が変わったかどうか・どのように変わったのか、「健常者」とともにプレーすることについて)

### III 結果

#### 1. サンプル特性

1) 回答数: 278名

(男性: 254名/女性: 24名)

2) 年齢

平均年齢：37.44歳

標準偏差：11.327

3) 障害区分

| 表1 障害区分     | 人数  | 割合(%) |
|-------------|-----|-------|
| 有効 1 脊髄損傷   | 206 | 75.5  |
| 2 切断        | 20  | 7.3   |
| 3 脳原性まひ     | 7   | 2.6   |
| 4 疾病による機能障害 | 20  | 7.3   |
| 5 その他       | 20  | 7.3   |
| 合計          | 273 | 100.0 |
| 欠損値 0       | 5   |       |

4) 障害受傷原因

| 表2 障害受傷原因 | 人数  | 割合(%) |
|-----------|-----|-------|
| 有効 1 中途障害 | 238 | 88.8  |
| 2 先天性障害   | 21  | 7.8   |
| 3 不明      | 9   | 3.4   |
| 合計        | 268 | 100.0 |
| 欠損値 0     | 10  |       |

5) 障害を受傷してからの年数

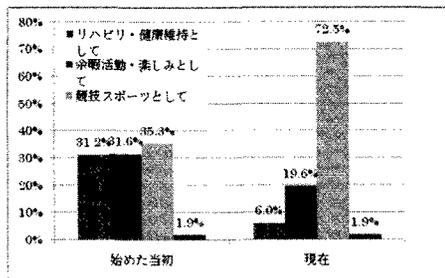
平均年数：17.3年

標準偏差：11.716

6) チーム所在地

| 表3 チーム所在地   | 人数  | 割合(%) |
|-------------|-----|-------|
| 有効 1 北海道・東北 | 55  | 20.0  |
| 2 関東・甲信越    | 46  | 16.7  |
| 3 東京        | 17  | 6.2   |
| 4 東海北陸      | 24  | 8.7   |
| 5 近畿        | 23  | 8.3   |
| 6 中国・四国     | 44  | 15.9  |
| 7 九州        | 67  | 24.3  |
| 合計          | 276 | 100.0 |
| 欠損値 0       | 2   |       |

2. 車椅子バスケットボールの目的



3. 車椅子バスケットボールを実施することによる生活  
上の影響

| 表4 生活上の影響                       | 人数  | 割合(%) |
|---------------------------------|-----|-------|
| 有効 1 友人が増えた                     | 91  | 36.0  |
| 2 体力がついた                        | 39  | 15.4  |
| 3 日常の行動範囲が広がった                  | 51  | 20.2  |
| 4 社会性が身についた                     | 7   | 2.8   |
| 5 ストレス解消・気分がすっきりする              | 22  | 8.7   |
| 6 自身がについてスポーツ以外のことも積極的に行うようになった | 22  | 8.7   |
| 7 生きているという実感をもてるようになった          | 7   | 2.8   |
| 8 障害のない人との交流の機会が増えた             | 4   | 1.6   |
| 9 その他                           | 10  | 4.0   |
| 合計                              | 253 | 100.0 |
| 欠損値 0                           | 25  |       |

4. 「障害」のとらえ方

| 表5 「障害」のとらえ方                        | 人数  | 割合(%) |
|-------------------------------------|-----|-------|
| 有効 1 自分のプレーを阻害(そが)いたり、制限するものである     | 16  | 6.5   |
| 2 車椅子バスケットボールをする上での単なる持ち点である        | 47  | 19.0  |
| 3 性格や人間性、考え方などと同じ自分の特徴の1つであり「個性」である | 65  | 26.3  |
| 4 いたしかたのないもの・受け入れるべきものとしてとらえている     | 54  | 21.9  |
| 5 自分のプレースタイルを規定するものである              | 3   | 1.2   |
| 6 車椅子バスケットボールに出会えたきっかけである           | 59  | 23.9  |
| 7 その他                               | 3   | 1.2   |
| 合計                                  | 247 | 100.0 |
| 欠損値 0                               | 31  |       |

5. 車椅子バスケットボール実施に伴う「障害」に対する意識変容

表6 車椅子バスケットボールを通じて障害を乗り越えられたと感じている

|              | 人数  | 割合(%) |
|--------------|-----|-------|
| 有効 1 非常にそう思う | 47  | 18.1  |
| 2 ややそう思う     | 93  | 35.9  |
| 3 あまりそう思わない  | 92  | 35.5  |
| 4 全くそう思わない   | 27  | 10.4  |
| 合計           | 259 | 100.0 |
| 欠損値 0        | 19  |       |

表7 いろいろな障害をもつ人たちのとの競い合いや、「持ち点制」によって、以前より障害を意識するようになった

|              | 人数  | 割合(%) |
|--------------|-----|-------|
| 有効 1 非常にそう思う | 37  | 14.3  |
| 2 ややそう思う     | 87  | 33.7  |
| 3 あまりそう思わない  | 102 | 39.5  |
| 4 全くそう思わない   | 32  | 12.4  |
| 合計           | 258 | 100.0 |
| 欠損値 0        | 20  |       |

表8 熱心に練習に取り組みれば取り組むほど、障害による自分の限界を感じるようになった

|     |            | 人数  | 割合(%) |
|-----|------------|-----|-------|
| 有効  | 1非常にそう思う   | 33  | 12.8  |
|     | 2ややそう思う    | 71  | 27.5  |
|     | 3あまりそう思わない | 109 | 42.2  |
|     | 4全くそう思わない  | 45  | 17.4  |
|     | 合計         | 258 | 100.0 |
| 欠損値 | 0          | 20  |       |

表9 障害者としてではなく、自分は競技者であるという意識を持つようになった

|     |            | 人数  | 割合(%) |
|-----|------------|-----|-------|
| 有効  | 1非常にそう思う   | 75  | 29.4  |
|     | 2ややそう思う    | 108 | 42.4  |
|     | 3あまりそう思わない | 60  | 23.5  |
|     | 4全くそう思わない  | 12  | 4.7   |
|     | 合計         | 255 | 100.0 |
| 欠損値 | 0          | 23  |       |

表14 「健常者」の存在によって自分自身の障害を意識させられる

|     |            | 人数  | 割合(%) |
|-----|------------|-----|-------|
| 有効  | 1非常にそう思う   | 18  | 6.9   |
|     | 2ややそう思う    | 78  | 29.9  |
|     | 3あまりそう思わない | 92  | 35.2  |
|     | 4全くそう思わない  | 73  | 28.0  |
|     | 合計         | 261 | 100.0 |
| 欠損値 | 0          | 17  |       |

表15 健常者には負けたくないと思う気持ちが強くなる

|     |            | 人数  | 割合(%) |
|-----|------------|-----|-------|
| 有効  | 1非常にそう思う   | 77  | 29.5  |
|     | 2ややそう思う    | 85  | 32.6  |
|     | 3あまりそう思わない | 76  | 29.1  |
|     | 4全くそう思わない  | 23  | 8.8   |
|     | 合計         | 261 | 100.0 |
| 欠損値 | 0          | 17  |       |

## 6. 「健常者」競技者との対戦およびプレーについて

表10 健常者選手とプレー、および対戦したことはありますか

|     |      | 人数  | 割合(%) |
|-----|------|-----|-------|
| 有効  | 1はい  | 247 | 96.9  |
|     | 2いいえ | 8   | 3.1   |
|     | 合計   | 255 | 100.0 |
| 欠損値 | 0    | 23  |       |

表11 自分のチームに健常者選手が加入してほしいと思いますか

|     |                 | 人数  | 割合(%) |
|-----|-----------------|-----|-------|
| 有効  | 1思う             | 147 | 58.6  |
|     | 2どちらかと言えばそう思う   | 59  | 23.5  |
|     | 3どちらかと言えばそう思わない | 34  | 13.5  |
|     | 4思わない           | 11  | 4.4   |
|     | 合計              | 251 | 100.0 |
| 欠損値 | 0               | 27  |       |

表12 相手が持ち点のない「健常者」であることを不公平であると思う

|     |            | 人数  | 割合(%) |
|-----|------------|-----|-------|
| 有効  | 1非常にそう思う   | 22  | 8.5   |
|     | 2ややそう思う    | 45  | 17.4  |
|     | 3あまりそう思わない | 103 | 39.8  |
|     | 4全くそう思わない  | 89  | 34.4  |
|     | 合計         | 259 | 100.0 |
| 欠損値 | 0          | 19  |       |

表13 「健常者」であることを意識せず、一人のチームメイト・対戦相手である

|     |            | 人数  | 割合(%) |
|-----|------------|-----|-------|
| 有効  | 1非常にそう思う   | 134 | 51.5  |
|     | 2ややそう思う    | 97  | 37.3  |
|     | 3あまりそう思わない | 17  | 6.5   |
|     | 4全くそう思わない  | 12  | 4.6   |
|     | 合計         | 260 | 100.0 |
| 欠損値 | 0          | 18  |       |

## IV 考察

### 1. 車椅子バスケットボール実施に伴う障害意識の変容

車椅子バスケットボールを始めた当初の目的については、「リハビリ・健康維持のため」31.2%、「余暇活動・楽しみとして」31.6%、「競技スポーツとして」35.3%となっている。当初から、競技スポーツとしてとらえていた人の割合が約35%いるものの、リハビリテーションや余暇活動としてとらえる人が多い点が指摘される。これは競技者の多くが中途障害者であり、病院やリハビリテーションセンターで車椅子バスケットボールに出会い、退院後も趣味として活動を継続していたものと考えられる。しかしながら現在の目的についてみると、72.5%の競技者が「競技スポーツとして」と回答している。この結果に加え「障害者としてではなく、自分は競技者であるという意識を持つようになった」という項目に約70%の競技者が「そう思う」と回答している。つまり「障害者」としての役割を期待された人々が車椅子バスケットボールと出会い、「競技者」としての役割を獲得し、「障害」が相対化された結果、自らを障害者として、というよりも競技者として認識するようになったものと推察することもできよう。

しかしながら、車椅子バスケットボールに取り組むことによって「障害者」意識が乗り越えられたのだろうか。この点に関して「車椅子バスケットボールを通じて障害を乗り越えられたと感じている」という項目について、「そう思う」と回答した者の割合が54%（「非常に」

18.1%+「やや」35.9%）に対して、「そう思わない」と回答した者の割合が45.9%（「あまり」35.5%+「全く」10.4%）となっており、必ずしも車椅子バスケットボールを行うことによって「障害者」意識の変容を引き起こすわけではないことに注意する必要がある。

## 2. 「障害/健常」意識の変容過程

「健常者」競技者との関係において96.9%の競技者が「健常者」競技者とともにプレーしたことがあると回答していた。また「自分のチームに健常者選手が加入してほしいと思う」と回答した者の割合が82.1%にのぼり、「『健常者』であることを意識せず、一人のチームメイト・対戦相手である」と回答している割合が88.8%と大半を占めていた。これらの結果から大半の競技者が健常者との競技経験を有しており、健常者に対して、健常者としてというよりも一競技者として位置付けながら、健常者に加入してほしいという意識をもつ人が多い。

しかしながら、『健常者』の存在によって自分自身の障害を意識させられる」という項目では36.8%の競技者が「そう思う（「非常に」6.9%+「やや」29.9%）」と回答している。これらの結果は、「健常者」と一緒にプレーしたい、「健常者」であることを意識しないと言いながらも、時に「健常者」の存在によって自身の障害が意識化されるという葛藤を抱え込んでしまうということを示唆するものといえよう。

## V 結果の要約と今後の課題

本研究では、車椅子バスケットボール競技者への調査を通じて、障害者スポーツ当事者のもつ「障害」「障害者」意識を明らかにし、「障害」をもつ競技者が「障害」のない競技者に対してどのような意識を抱いているのか、両者の関わりによる「障害/健常」意識の変容過程について検討を行った。

車椅子バスケットボールに参加することによって、競技者の多くが、「障害者」ではなく、「競技者」として自己をとらえるようになったと認識しており、スポーツ活動がアイデンティティ形成に大きな影響を与えていることが示唆された。しかしながら、「車椅子バスケットボールを通じて『障害』を乗り越えられたか」という問いに対しては、約半数の競技者が「そう思わない」と回答している。ここで重要な点は、スポーツさえすれば障

害が乗り越えられるかのような単純化された図式は、必ずしもあてはまらないという点である。また、この結果は、競技者個々人のアイデンティティは単一のものではなく、文脈に応じて多面的なアイデンティティが生成され、その中を生きているということを示唆するものともいえよう。障害者スポーツの場面において、スポーツ当事者のアイデンティティがどのように変容し、錯綜しているのかは今後の検討課題としたい。

また、大多数の障害者もつ競技者が「健常者」の参加について賛成をしており、ともにプレーする際には『健常者』であることを意識しないと回答している。しかしながら、その一方で「健常者」の存在によって自己の「障害」が意識化されるという傾向が看取され、障害者もつ競技者の葛藤の様相が明らかになった。今後、競技者の葛藤の生成過程および変容過程をより詳細に明らかにしていくために、「障害者」から見た「健常者」像だけでなく、「健常者」から見た「障害者」像についても調査を行い、両者を比較分析することで詳細に検討を行っていききたい。

「健常者」から「障害者」へのまなざし、「障害者」から「健常者」へのまなざし、この両者の接点を探ることで、障害者スポーツの可能性、障害の有無を超えたスポーツ参加の可能性が開かれていくのではないだろうか。

### 【参考文献】

- 阿部智恵子・樫田美雄・岡田光弘（2001）「資源としての障害パースペクティブの可能性—障害者スポーツ（水泳）選手へのインタビュー調査から」『年報筑波社会学』13, pp. 17-51.
- 奥田睦子（2003）「障害者スポーツ論の再検討」『金沢大学経済学部論集』24（1）, pp. 329-345.
- 高橋豪仁（1999）「身体障害者スポーツに関する一考察—ソーシャル・ロール・バリゼーションの視点から」『奈良教育大学紀要（人文・社会）』48（1）, pp. 37-48.
- 星加良司（2002）『「障害」の意味付けと障害者のアイデンティティ—「障害」の否定・肯定をめぐる』『ソシオロギス』26, pp. 105-120.

本研究発表は、「立教大学学術推進特別重点資金」の助成により行うものである。

## レジャー志向性尺度の開発に関する研究（3）

### —成人女性サンプルによる尺度安定性の検討と旅行行動への応用—

○佐橋 由美（大阪樟蔭女子大学）      宮崎 幸子（中京女子大学）

Keywords: レジャー診断ツールの開発, 成人女性データによる志向性尺度安定性の検討, 旅行行動予測への応用

#### 【目的】

団塊世代の大量退職の時期を迎えている今日、中高年層の第二の人生とりわけ、レジャーの面での充実に対する社会の関心は、より一層高まってきているように思われる。しかし、レジャー研究の成果は、未だその社会的ニーズに十分応えうるところまで来ておらず、また、中高齢期のサクセスフルエイジング、良好な適応という観点から研究を進める健康心理学等の分野でも、レジャー生活の充実を主題として取り上げる研究はほとんど認められない。このような状況下、当研究者は成人、とりわけ中高齢者のレジャー生活の状況把握とそれがwell-beingに及ぼす影響を、比較的中長期のタイムスパンで研究を進める必要性を実感しつつ、これまで、個人のレジャー生活の実態ならびにレジャーに対する考え方を把握するための鍵となるような中核概念を探索し、定量化することに取り組んでできた。

これまでの成果は、佐橋・多留(2006)、佐橋・佐藤(2007)、Sahashi, Y. & Sato, K. (2007)として発表してきた。大学生という若年層データのみによる検討結果であるという限定はあるものの、①レジャー志向性の概念がほぼ安定した下位概念から構成されること、②この志向性概念がレジャー生活の質的あるいは量的な意味での充実度をかなり正確に予測でき、さらに③生活全般の充実度(well-being)さえも予測できる非常に有効な概念であることを明らかにすることができたと思われる。

一連の調査研究によって、レジャー生活の状況把握を行うための評価ツール開発に一定の成果をあげてきたと考えるが、さらなる課題として、この尺度がより幅広い年齢層の成人に通用する汎用性があるか確認したり、より多様な行動領域への実践的応用の可能性を探る作業が必要になったことが明らかになった。

そこで今回の発表では、有為抽出によるサンプルの偏りの問題や対象を女性に絞ったという限定はあるが、これまでの研究よりは対象となる年齢幅を広げて(20~69歳)調査を実施し、志向性尺度の統計的な分析と、レジャー活動の主要な領域である旅行行動と志向性の関わりについて検討した結果を報告する。

#### 【方法】

**対象：** 学生を含む成人女性（20歳以上）。

**調査手続き：** 本調査（『余暇生活に関する調査』）は2007年7~11月にかけて実施された。調査データの収集にあたっては、調査者が直接、あるいは調査者のゼミ指導学生を介して知人に協力を求めるとともに、学生調査分については、調査者が担当する授業時間に実施した。

**有効回答：** 志向性尺度を中心に、その他いくつかの尺度において回答に不備があったものを除外した結果、分析に用いることができた有効票は20歳代（ほとんどは学生）61件(26.8%)、30歳代43件(18.9%)、40歳代41件(18.0%)、50歳代48件(21.1%)、60歳代35件(15.4%)、総数は228件、平均年齢41.1歳(SD=15.4)であった。

#### 質問紙の構成：

##### —レジャー生活全般に関する質問—

レジャーに関わる部分の質問内容はまず、研究の主眼である①レジャーに対する考え方や好み、行動傾向等を把握するための32項目のレジャー志向性尺度、そして②レジャースタイルを様々な活動領域における参加頻度から量的に明らかにするためのレジャー行動目録(47活動)、③レジャー場面における各個人の内発的動機づけ傾向を測定するためのレジャー内発的動機づけ尺度(Weissinger & Bandalos, 1995)（4つの下位尺度のうち、

「挑戦」と「関与」の計9項目), ④レジャーにおける阻害要因の認知度を8領域にわたって測定する尺度 [LDB Users Manual (Witt & Ellis, 1988)], ⑤レジャー生活満足度 (単一尺度) 等からなっていた。

レジャー志向性尺度; 32項目からなり, 各設問ともレジャー場面における考え方, 行動傾向を表す内容的に相反する2つの文章「A○○○○…」 「B○○○○…」 が示されている。これらについて, 自分の考えや行動に相当する程度を「A」「どちらかといえばA」「どちらかといえばB」「B」で回答する。

#### 一旅行に関する質問一

レジャー活動の典型的な一領域である旅行に関する質問がもう1つの柱であったが, これについては, ①好みの旅行スタイル (「家族旅行」「リゾート」「都市型遊興」などの16項目にわたる旅行タイプから第1位と第2位を回答), ②旅行する際に重視する条件 (「人間関係を深める」「のんびりリラックスする」「見聞を広め知識を豊かにする」など17項目にわたる重視項目に対し, 「非常に重視する(5)」～「重視しない(1)」の5段階評定), ③過去の旅行経験 (これまでの海外旅行の回数と昨年の国内旅行回数) 等について質問した。

#### 一全般的 well-being に関する質問一

①全般的well-beingを測定するためのPILテスト(Purpose in Life Test Part-A), ②充実感尺度(大野, 1984), ③生活の様々な領域における満足度を測定するためのQOL尺度等が, 主たるwell-being調査項目であった。

#### 【結果と考察】

##### 1. レジャー志向性尺度の構造

志向性尺度の構造を確認するために主因子法による因子分析を試みた(表1)。固有値の減衰状況, 解釈のしやすさ, 過去の分析結果を考慮して6因子解を採用。因子抽出の後, プロマックス回転を実行した。表1によると, 抽出の順序が若干異なっているものの, 先の研究で確認された6因子とほぼ同一内容の6因子が抽出された。佐橋・佐藤(2007)では, I. 長期的展望・向上→II. 活動性→III. 対人関係志向→IV. 主導性→V. 利他主義→VI. 自然志向の順に6因子が抽出されたが, 本分析では, 「III. 主導性」「IV. 対人関係志向」の抽出順序だけが逆転していたものの, 他の順番に変わりはなかった。当該因子への因子負荷量が0.35以上という基準により, 基準を満たしていない攪乱項目を探していくと, 厳密には3項目あったが, そのうちの2項目については十分許容できる範囲であると考えられた。唯一 No. 26「A. 外出好きで面白いことを外に出て探している」の項目だけが, 「活動性」因子に属すると考えていたところ, 「対人関係志向」因子により多く負荷するという結果であった。従って, 今回の結果からも, レジャー志向性を構成する要素は安定したものであることが確認された。これまでの調査は, 大学生という若年層成人に対してのものであったが, 対象年齢を60歳代まで広げても, ある程度まではこの尺度の安定性を確かめることができた。ただし, 年齢構成において20代の数が多いところは注意しなければならない点である。因子ごとの信頼性係数は,  $\alpha = .839 \sim .706$  であり, 各下位尺度の内的一貫性は十分に高いと考えられる。

##### 2. 志向性尺度を用いたレジャー生活の診断とwell-beingへの影響の検討

ここでは, 志向性尺度の得点に基づいてクラスター分析を行うことによって, サンプル全体をレジャー志向性に関して何らかの特徴を示すいくつかのグループに分類することを試みる。さらに, そのセグメンテーショングループごとに, 様々な活動への参加頻度, レジャーに対する内発的動機づけ, レジャー場面における阻害要因認知などのレジャー関連変数ならびに全般的なwell-beingレベルの比較を試みる。レジャー関連変数やwell-being変数に関して, グループ間で何らかの差異が一貫した特徴的パターンで示されるのであれば, 志向性尺度が各個人のレジャー生活を診断するツールとして, ある程度有効であるということが示されるものと思われる。

図1は, 因子得点を用いて階層クラスター分析を行った結果を示したものである。今回は, 全サンプルを5グループに分割して, 各グループの志向性に関するプロフィールを作成した。各グループの特徴を端的に言い表すラベルを探すと, clu1→「消極型」, clu2→「自己啓発型」, clu3→「高活動-対人関係志向型」, clu4→「低活動-対人関係依存型」, clu5→「最適型」などを充てることが可能かもしれない。プロフィールと対応させて見

表1 レジャー志向性尺度の基本統計量および因子分析の結果

| No.  | 質問内容(+)                          | 平均   | SD   | 第I因子         | 第II因子 | 第III因子 | 第IV因子      | 第V因子  | 第VI因子 | クロンバ<br>ツク<br>α |
|------|----------------------------------|------|------|--------------|-------|--------|------------|-------|-------|-----------------|
|      |                                  |      |      | 長期的<br>展望・向上 | 活動性   | 主導性    | 対人関係<br>志向 | 利他主義  | 自然志向  |                 |
| * 13 | A 将来の目標に向かって自分を向上させたい            | 2.29 | 1.00 | .786         | -.122 | -.060  | .008       | -.029 | -.081 | .839            |
| * 21 | A 今知識や技能がなくても努力すればできるようになると思う    | 2.31 | 0.83 | .738         | -.142 | .048   | .142       | .122  | -.053 |                 |
| 29   | B 将来の自分にとって糧になる活動を楽しむとして行う       | 2.31 | 0.78 | .728         | -.142 | -.025  | .107       | .033  | .016  |                 |
| * 30 | A 趣味であっても極めるためにはいかなる努力も惜しまない     | 2.22 | 0.89 | .628         | .177  | .083   | -.076      | -.126 | -.054 |                 |
| * 14 | A 資格取得や技能向上を意識しながら趣味活動をする        | 2.13 | 0.92 | .564         | -.006 | .097   | .062       | .076  | .082  |                 |
| 5    | B 時間ができれば何か学びたい                  | 2.27 | 0.99 | .408         | .138  | -.145  | -.211      | -.013 | .005  |                 |
| 22   | B 新しく何かを学ぶことが好き                  | 2.62 | 0.84 | .344         | .402  | -.147  | -.020      | -.046 | .251  |                 |
| 6    | B 挑戦的で奥深い活動が好き                   | 2.00 | 0.89 | .344         | .136  | .129   | -.272      | -.006 | -.116 |                 |
| * 25 | A 体を動かす方がエネルギー充電になる              | 2.32 | 0.93 | -.021        | -.059 | -.033  | .002       | -.020 | -.020 |                 |
| * 1  | A 体を動かしたい                        | 2.56 | 0.89 | -.107        | -.019 | .196   | -.060      | -.042 | -.042 |                 |
| * 18 | A ドライブや旅行に積極的に出かける               | 2.84 | 0.84 | -.118        | .180  | .154   | -.044      | -.083 | -.083 |                 |
| * 17 | A スポーツやフィットネスなどをして体を動かす          | 2.16 | 0.88 | .120         | .022  | .092   | .083       | -.008 | -.008 |                 |
| 2    | B 出かけた                           | 2.66 | 0.88 | -.088        | -.074 | .213   | -.083      | .034  | .034  |                 |
| * 10 | A 映画やコンサートを見に行く                  | 2.58 | 0.94 | -.120        | .131  | .128   | .082       | -.152 | -.152 |                 |
| 9    | B 作業や手仕事をしてこまめに動く                | 2.39 | 0.94 | .153         | .347  | .089   | -.052      | .032  | .015  |                 |
| * 26 | A 外出好きで面白いことを外に出て探している           | 2.32 | 0.78 | .034         | .195  | .112   | .344       | .012  | -.181 |                 |
| * 23 | A 最初に何かの提案をするのは自分だ               | 2.29 | 0.95 | -.037        | .010  | .804   | .008       | -.014 | .069  |                 |
| 31   | B 何かを計画する時自分が中心となって進める方だ         | 2.27 | 0.82 | .019         | -.029 | .791   | -.050      | .007  | -.012 |                 |
| * 15 | A 自分が中心となって計画を立てるのは楽しい           | 2.47 | 0.90 | -.005        | .114  | .729   | -.092      | -.021 | .126  |                 |
| * 7  | A 人が集まる場面では輪の中心                  | 2.17 | 0.79 | .102         | -.090 | .354   | .235       | .087  | -.066 |                 |
| * 12 | A 誰かと一緒に過ごす                      | 2.64 | 0.90 | -.035        | .023  | -.014  | .762       | .092  | .088  |                 |
| 20   | B 友達や家族とおしゃべりする                  | 2.58 | 0.93 | .146         | .120  | .045   | .612       | -.260 | .006  |                 |
| 4    | B 友達と過ごしたい                       | 2.76 | 0.92 | -.049        | .245  | -.105  | .598       | .067  | .066  |                 |
| * 28 | A 私の趣味活動は人と一緒にするものが多い            | 2.54 | 0.89 | -.137        | .337  | -.054  | .357       | .069  | -.009 |                 |
| * 24 | A 自由時間には、できるかぎり社会や人の役に立ちたい       | 2.12 | 0.83 | .139         | -.138 | -.017  | .127       | .803  | .047  |                 |
| * 8  | A 人の役に立つことは喜びなので自由時間にはそのような活動を行う | 2.05 | 0.80 | -.065        | -.056 | .017   | .021       | .728  | -.112 |                 |
| 16   | B ボランティアやNPOの活動など、時間があつたらしてみたい   | 2.49 | 0.95 | -.066        | .309  | .005   | -.176      | .519  | .141  |                 |
| 32   | B 積極的にボランティアや社会貢献活動に関わっていききたい    | 2.14 | 0.67 | .069         | .172  | .004   | -.115      | .496  | -.042 |                 |
| * 27 | A 人のいない静かな場所に行きたい                | 2.96 | 0.77 | .090         | -.201 | .089   | .087       | -.047 | .747  |                 |
| * 3  | A 旅行するなら自然豊かなところ                 | 3.39 | 0.79 | -.048        | -.020 | .000   | .047       | .041  | .684  |                 |
| * 11 | A 自然の中にいると落ち着く                   | 3.43 | 0.66 | -.148        | .006  | .060   | -.032      | -.079 | .675  |                 |
| 19   | B 自然の中でのスローライフにあこがれる             | 2.87 | 0.81 | .036         | .208  | .008   | .014       | .063  | .349  |                 |

| 説明率 | 54.2% | 因子相関行列 |       |       |       |       |    |
|-----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|----|
|     |       | I      | II    | III   | IV    | V     | VI |
| I   | —     | .417   | .291  | -.187 | .416  | .110  |    |
| II  | —     | .384   | .142  | .431  | .090  | .845  |    |
| III | —     | .136   | .202  | -.103 | -.103 | -.103 |    |
| IV  | —     | -.106  | -.291 | -.133 | -.133 | -.133 |    |
| V   | —     | —      | —     | —     | —     | —     |    |
| VI  | —     | —      | —     | —     | —     | —     |    |

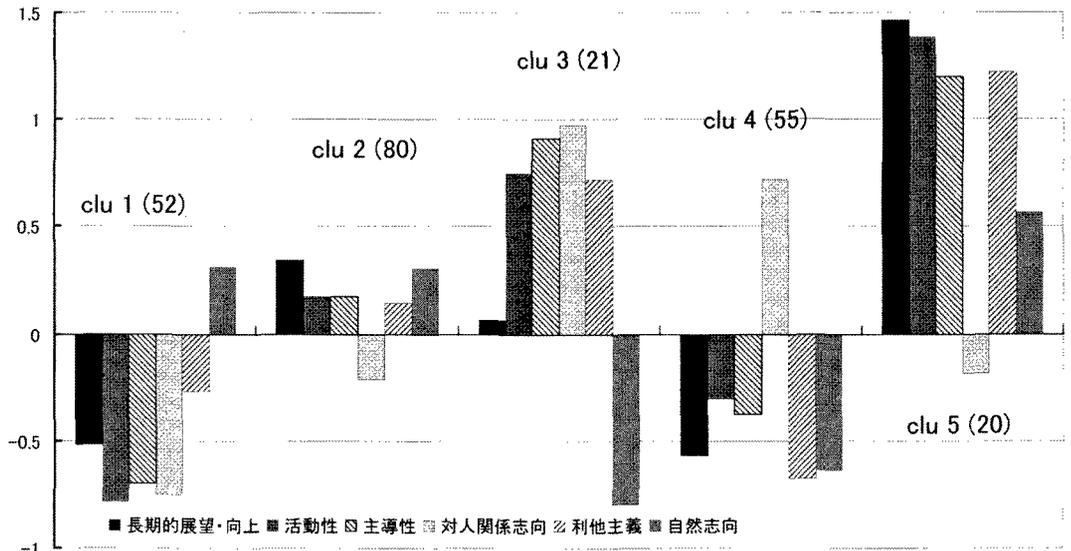


図1 各クラスターにおけるレジャー志向性の得点パターン(プロフィール)

ていくと、「自己啓発型」とは自分の将来を見据えて行動する人で、向上心が強いところが特徴である一方、人とのつきあいが苦手な人ともいえる。「高活動-対人関係志向型」と「低活動-対人関係依存型」は対比させてみると捉えやすい。前者は、活動的で、主導性もあり、他者に対する配慮も怠りがない。その上で、一人よりは人と一緒にいることを好む性格であるが、後者は、単独での自立した行動がとれないというマイナス面が顕著である。活動性も低く、基本的にリーダーではなく追随者である。他者への気遣いも充分な方ではない。そして、多くの観点から判断してネガティブエンドにあるのが「消極型」で、他方、ポジティブエンドに位置するのが「最適型」という図式を思い描けそうであった。表2は、それら5グループのレジャー生活の状況、生活全般の質を比較し、

表2 レジャー関連変数及びwell-beingのグループ間比較の概略

| 比較項目       | 低活動-対人関係依存型 |         | 自己啓発型   |       | 高活動-対人関係志向型 | 最適型 |
|------------|-------------|---------|---------|-------|-------------|-----|
|            | 消極型         | 対人関係依存型 | 対人関係依存型 | 自己啓発型 | 対人関係志向型     |     |
|            | clu 1       | clu 4   | clu 2   | clu 3 | clu 5       |     |
| レジャースタイル   |             |         |         |       |             |     |
| 運動・スポーツ    | ▲           | ▲       | △       | ○     | ◎           |     |
| 外出         | △           | ○       | △       | ◎     | ○           |     |
| 社交         | △           | ○       | △       | ◎     | ○           |     |
| 見物・観賞・映画   | △           | △       | ○       | ○     | ◎           |     |
| 演奏・パフォーマンス | ▲           | ▲       | △       | △     | ○           |     |
| 教養・学習      | △           | ▲       | ○       | △     | ◎           |     |
| アウトドア      | △           | △       | △       | △     | ◎           |     |
| 社会的活動      | ▲           | ▲       | ○       | ○     | ○           |     |
| 活動領域全体     | ▲           | △       | △       | ○     | ◎           |     |
| レジャー生活満足度  | ○           | △       | △       | ◎     | ◎           |     |
| 内発的動機づけ    | ▲           | ▲       | △       | ○     | ◎           |     |
| 阻害要因認知(少)  | △           | ▲       | △       | ○     | ◎           |     |
| 生活充実感      | ▲           | △       | ○       | ○     | ◎           |     |
| QOL        | ▲           | △       | △       | ○     | ◎           |     |
| 生きがい感      | ▲           | ▲       | ○       | ○     | ◎           |     |

◎高レベル ○中レベル △低レベル ▲著しく低いレベル

図式的に表現したものである。表2より、とりわけ「最適型」と「消極型」の間には、レジャー生活の様々な側面、ならびに生活全般の質的側面において顕著な差異が存在しており、レジャー志向性には、レジャー生活の量と質、生活全般の質に関して、個々のサンプルを順序づけ、マッピングする機能があることが示された。

### 3. 旅行行動への応用

志向性のプロフィールは、各人の旅行行動や旅行に対する意識（旅行に求めるもの）の特徴を描写するのにある程度、効力を発揮していた。例えば、旅行にどのような要素を求めるのかという問いを行ったところ、「鮮烈体験」「視野拡大」「人間関係」「快適生活」「リラックス・癒し」というまとまり（因子）が確認され、その中で初めての3要素については、分散分析の結果が有意であった。多重比較を行った結果では、「最適型」が他の4つの志向性タイプを引き離しているというものであったが、それでも、「鮮烈体験」「視野拡大」「人間関係」因子では、表2に示したような「消極型」「低活動-対人関係依存型」<「自己啓発型」

「高活動・対人関係志向型」<「最適型」のだいたいの順序性は維持されているようであった。旅行回数による行動の活発さについては、「最適型」

「高活動-対人関係志向型」とその他3グループの間に有意差が認められ、図に示すような一貫した順序性が保たれていることがわかった。その他、好みの旅行スタイルについての分析結果でも、志向性と好みとする旅行スタイルの間には有意な関連性があることが確かめられ( $\chi^2=117.82$ ,  $df=60$ ,  $p<.001$ )、「消極型」「低活動-対人関係依存型」で「リゾート滞在」や「癒し」目的の旅の選好度が高く、「最適型」「高活動-対人関係志向型」に、「入念な計画に基づく冒険旅」「アウトドア活動」等の選好傾向が顕著であった。

### 【文献】

Sahashi, Y. & Sato, K. (2007) The development of the Leisure Orientation Scale. *Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science 2007 Program and Abstracts*, 117-118.  
 佐橋由美・佐藤馨(2007) レジャー志向性尺度の開発に関する研究(2) 日本レジャー・レクリエーション学会第37回大会発表論文集(レジャー・レクリエーション研究, 59), 52-55.  
 佐橋由美・多留里香(2006) レジャー志向性尺度の開発に関する研究 日本レジャー・レクリエーション学会第36回大会発表論文集(レジャー・レクリエーション研究, 57), 106.

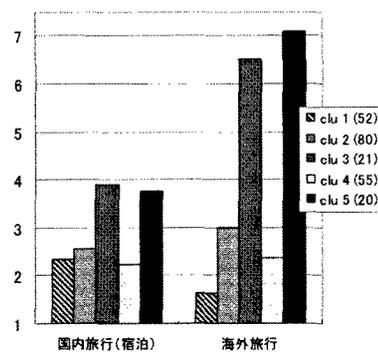


図2 旅行回数のグループ間比較

## レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究

○土屋 薫 (江戸川大学)、茅野宏明 (武庫川女子大学)、マーレー寛子 (平安女子大学)、  
佐橋由美 (大阪樟蔭女子大学)、佐藤馨 (びわこ成蹊スポーツ大学)

キーワード：余暇診断、レジャー診断ツール、レジャー志向性尺度、流山グリーンチェーン戦略

### 1. はじめに

本学会の関わる研究領域における尺度研究の嚆矢として、LDB (Leisure Diagnostic Battery: 余暇生活診断テスト) の日本語オリジナル版作成に関する研究が挙げられる (野村・茅野・清水・西原・浮田・西 1994)。これをきっかけとして、90年代前半から後半にかけて、LBS (Leisure Boredom Scale: 余暇退屈度) やLSS (Leisure Satisfaction Scale: 余暇満足度)、GLSS (Global Leisure Satisfaction Scale)、ILM (Intrinsic Leisure Motivation Scale: 内的余暇動機尺度) といった尺度に関する検証が一通り名乗りを挙げた。しかしながら、それ以降、学会大会・学会誌において尺度研究自体が徹底的にしか見受けられなくなる。

周知の通り、上記の諸尺度は「レジャー・アセスメント・ツール」として、北米大陸を中心として余暇診断に資する目的で開発されてきた。したがって、言語や文化、社会的規範・コンテキストの異なる日本において、それらが等しく妥当性及信頼性を保ち得るとは限らない。またこれらの先行研究においては、必ずしもサンプル抽出に拘泥してはなかったり、大学生を中心としたサンプルによる検証にとどまるものが多い。これは、それらの研究がが消費者であるがゆえに生じる問題であり、本来なら研究領域として市民権を得、多方面において継続的に検討されるべきものであろう。

本学会における尺度研究がまだ発展的に展開されていない理由として考えられることは、ひとつには余暇診断の流れが個人的なものとして認識される傾向にあることが挙げられるだろう。これは反面、診断に際して個人的な熟達で左右されかねない状況をも内包している (茅野 2005)。このような問題意識のもと、本研究では、発達モデルとしてレジャーをとらえて余暇診断の際の枠組みとして利用することを想定した「レジャー志向性尺度」(佐橋・佐藤 2007)に着目した。具体的には、サンプルを大学生から一般市民にまで拡大したときにも尺度として有効な結果を保持し得るのか、検証することを目的とする。

なお用語に関して、本研究においては、余暇とレジャーを同義のものとして捉え、統一的に「レジャー」という語を用いるが、用法が一般化している名称等については、「余暇」という語を用いる。

### 2. 研究の方法

本研究は、平成20年度江戸川大学学内共同研究費にて実施した市民意識調査(千葉県流山市)の質問紙の一部に組み込んだレジャー志向性尺度(一部改定版)の集計結果を用いた。

#### (1) サンプル

調査対象者のサンプリングには層化二段無作為抽出法を用いた。手順としては、流山市を自然条件・社会条件に沿って4地域に分け(図1:北部・中部・南部・東部)、調査区域の選挙人名簿を用いて地域区分ごとに一定数のサンプルを抽出した。

#### (2) 手続き

2008年4月に郵送法による質問紙調査として実施した。

#### (3) 質問紙の構成

質問紙全体は、i) 職業、ii) 家族構成、iii) 住まいの形態、iv) 居住年数、v) 緑への関心、vi) 地域コミュニティへの親和性、vii) 行動範囲、viii) レジャー志向性、ix) LBSおよびILM(どちらも短縮版)、x) メディア使用、xi) 主観的な幸福感、xii) 性格特性(社交性、ソーシャルスキル、自己効力感)で構成した。

#### (4) 分析

志向性尺度の反応結果に対して因子分析を行ない尺度の構造を明らかにし、先行研究の結果と比較した。

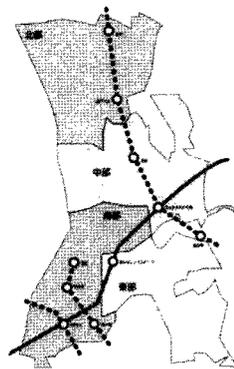


図1 流山市の地域区分

### 3. 結果と考察

#### (1) 流山市の地域特性

本研究におけるフィールドは、「都心から一番近い森の街」を謳う千葉県流山市である。流山市では、このような街づくりを実現するために、グリーンチェーン（以下「GC」と表記）戦略という施策を都市環境整備上の重点項目としている。GC戦略は、都市開発事業によって一度は減少した緑を、質、量両面から回復させようとする、自然環境再生プランである。それは、地域住民が各々の家庭において緑の効果を活かした住まいづくりを实践することで、一定の量と質の緑を適切に確保しようとするものである。具体的に、市が定めたGCの認定基準を満たす家屋を増やして「緑の連鎖」を作り出し、夏に快適に過ごせるクールアイランドの実現を目指すものである。

GC認定自体は、2006年（平成18年）にスタートし、接道部緑陰化・敷地内緑化・敷地内通風に関する条件に適合した物件のみとされる。特に敷地内緑化は、法定建ぺい率の関数で明示されており、戸建て住宅のみならず、集合住宅もその対象内に定められている。

市内は、東武野田線江戸川台駅を中心とした住宅街から成る北部、2005年のつくばエクスプレス開業を期に再開発が進んでいる中部、JR武蔵野線南流山駅と流山電鉄沿線を含み江戸時代からの中心地である南部、交通網・商圈とも隣接する松戸市および柏市に依存する東部という、4つの異なるカラーを持った地区から構成されている。

#### (2) レジャー志向性尺度の構造

先行研究においては、レジャー志向性尺度は32項目から構成されている（佐橋・佐藤 2007）。各項目においてレジャー場面における考え方・行動傾向を表す内容的に相反する2つの文章「A ○○○・・・」「B ○○○・・・」が示されており、自分がどちらの傾向を持つか回答する形式となっている。この32項目は、i) 長期的展望・向上（8項目）、ii) 活動性（8項目）、iii) 対人関係（4項目）、iv) 主導性（4項目）、v) 利他主義（4項目）、vi) 自然志向（4項目）という6つのサブスケールから構成されている。

今回の調査では、流山市の地域特性に鑑み、先行研究において比較的寄与率の高くなかった項目を、i) 長期的展望・向上・ii) 活動性からそれぞれ4項目ずつ減らした上で、自然志向に関わる項目を二つ増やした（表1の最後の2項目：「夏の暑い日はエアコンが必要だ」「自然は守り育てるものだ」）。

表1 レジャー志向性尺度（流山版）の単純集計結果

|                                      |      | N=498 NA=16.3% |      |       |                                        |
|--------------------------------------|------|----------------|------|-------|----------------------------------------|
| 文章「A」                                | A    | いはい A<br>いい B  | B    | 文章「B」 |                                        |
| 例 果物では、リンゴが好きだ                       | 1    | 2              | 3    | 4     | 果物では、ミカンが好きだ                           |
| 余暇時には、体を動かしたい                        | 17.1 | 38.0           | 28.0 | 16.9  | 余暇時には、ゴロゴロしたい                          |
| 余暇時には家にいたい                           | 6.6  | 25.9           | 36.3 | 14.9  | 余暇時には出かけたい                             |
| 旅行する人があるふれあえる雑多なところ                  | 1.2  | 3.8            | 21.1 | 46.6  | 旅行するなら自然豊かなところ                         |
| 余暇時間は一人で過ごしたい                        | 10.5 | 33.7           | 31.7 | 7.6   | 余暇時間は友達と過ごしたい                          |
| 暇なときは遊びたい                            | 11.0 | 26.1           | 34.1 | 9.2   | 時間ができれば何か学びたい                          |
| 手軽で誰にでも楽しめる活動が好き                     | 15.7 | 47.6           | 15.3 | 5.2   | 挑戦的で奥深い活動が好き                           |
| 人が集まる社交的な場面では、輪の中心になりたい              | 3.4  | 18.9           | 43.6 | 17.7  | 人が集まる社交的な場面では、あまり目立たず控えめになりたい          |
| 人の役に立つことほ喜びながら自由時間は自分の楽しみや将来のために使いたい | 2.0  | 14.9           | 44.1 | 29.3  | 自由時間は自分の楽しみや将来のために使いたい                 |
| 自然の中にいると落ち着く                         | 37.1 | 39.4           | 5.8  | 1.4   | 人の中にいると落ち着く                            |
| 余暇時間は、人を誘って一緒に何かをして過ごしたい             | 4.0  | 28.5           | 37.6 | 13.7  | 余暇時間は、一人で趣味に没頭して過ごしたい                  |
| 趣味活動は、資格取得や技術向上を視野に入れるのがよい           | 4.0  | 14.5           | 41.0 | 26.3  | 趣味活動は、目標に関係なく自分のやり方で楽しめばよい             |
| 自分が中心になって計画する方が楽しい、好き                | 5.2  | 23.3           | 36.7 | 8.4   | 人から誘われるのを待っている方が気楽だし、好き                |
| 自分は、ボランティア活動や地域活動などにはまず参加しないとと思う     | 9.6  | 23.7           | 40.0 | 8.4   | ボランティア活動や地域活動、NPO活動などは積極的に参加してみたいと思う   |
| スポーツ、フィットネスに努めている                    | 10.0 | 21.1           | 35.7 | 15.8  | 休養、リラクゼーションに努めている                      |
| ドライブや旅行に出かけるのが楽しい                    | 25.9 | 48.8           | 13.3 | 2.8   | 家の中で本・雑誌、インターネットなどの閲覧情報を見るのが楽しい        |
| 例 果物では、リンゴが好きだ                       | 1    | 2              | 3    | 4     | 果物では、ミカンが好きだ                           |
| 環境問題や食の安全などには興味がない                   | 3.4  | 6.2            | 21.2 | 22.9  | 自然の中でのスローライフにあこがれる                     |
| 余暇時には、おもに一人で音楽鑑賞や読書をしている             | 11.2 | 22.6           | 32.5 | 7.6   | 余暇時には、おもに友人や家族とおしゃべりをしている              |
| 面倒なことはめきにして、楽しいことや気楽できることをしている       | 12.2 | 65.1           | 18.9 | 4.2   | 予定は編みか後援がなくとも、努力すればいつかできると信じて行動している    |
| グループで最初に計画を提案するのははたいてい自分だ            | 6.4  | 27.5           | 42.3 | 8.6   | 提案された計画のについて行くのははたいてい自分だ               |
| 自分の自由になる時間を利用して、社会や人の役に立ちたい          | 4.2  | 28.9           | 33.9 | 18.2  | 自分の自由になる時間だが、だからこそ、自分のために使いたいと思う       |
| 体を活発に動かす方がリフレッシュ（エネルギー充電）になる         | 11.0 | 33.3           | 27.1 | 8.2   | 休養する方がリフレッシュ（エネルギー充電）になる               |
| 人のいい静かな場所に行きたい                       | 19.5 | 46.8           | 15.3 | 2.2   | 繁華街など人の多いところに行きたい                      |
| 私の趣味活動は他の人とするものが多い                   | 1.0  | 20.3           | 32.5 | 14.9  | 私の趣味活動は、一人でできるものが多い                    |
| 休日の日曜や自己放棄日はあえて、今更なことをするのがポリシー（原則）だ  | 4.4  | 22.3           | 38.6 | 6.4   | 休日の日曜や自己放棄日はあえて、（休む）休む活動をするのがポリシー（原則）だ |
| 何かを計画するとき、たいてい自分はサポート役だ              | 4.4  | 17.4           | 22.6 | 4.0   | 何かを計画するとき、たいてい自分が中心になって進める役だ           |
| 自分の行為で人が喜ぶのは嬉しいが、まず自分が優先されると思う       | 5.8  | 41.8           | 28.7 | 3.4   | 周囲の人にボランティア活動や社会貢献できる活動に関わりたいと思う       |
| 夏の暑い日はエアコンが必要だ                       | 12.7 | 28.1           | 21.7 | 15.3  | 夏の暑い日は本陰で涼みたい                          |
| 自然は守り育てるものだ                          | 39.1 | 38.2           | 15.8 | 2.6   | 自然は遊ぶ場だ                                |

### (3) レジャー志向性尺度の有効性

先行研究と同様(佐橋・佐藤 2007)、6つの因子構造が確認されており(表2)、因子ごとの信頼性係数を見ても、これら下位尺度の内的一貫性がある程度高いものとしてとらえることができる。ただ、先行研究においては「活動性」の因子を構成する項目として位置づけられていた項目15(旧項目18)と項目2(旧項目2)が、今回の調査では「対人関係志向」の因子に括られている。これは先行研究における「活動性」の因子の中に、「身体的活動性」と「刺激希求」という二つの要素が潜んでおり、今回のサンプルでは後者が「対人関係志向」と結びついたものと考えられる。

寄与率の点から見ると、先行研究が「長期的展望・向上」と「活動性」が高いのに比べ、本研究のサンプルでは、「長期的展望・向上」が最も低くなっている。この結果が、大学生を中心とした先行研究と一般市民を対象とした本研究のサンプル特性に依存するものなのかどうかについての判断は、今後の調査研究の成果が待たれる。

## 4. 参考文献

- 茅野宏明、内的余暇動機スケールと余暇倦怠度スケールの解釈シートの実践開発、レジャー・レクリエーション研究 55 : 36-39、2005
- 野村一路・茅野宏明・清水やすこ・西原隆一・浮田千枝子・西麻里子、「余暇生活診断テスト」(LD8)日本語オリジナル版作成に関する研究、自由時間研究 15 : 60-108、1994
- 茅野宏明・中澤由夫・平岡貴子、余暇生活診断のツール開発に関する研究、自由時間研究 17 : 31-50、1995
- 野村一路・坂野公信・佐橋由美・茅野宏明・綿祐二・浮田千枝子・辰巳厚子、余暇生活設計のためのツール開発に関する研究、自由時間研究 19 : 11-25、1996
- 野村一路・佐橋由美・茅野宏明、余暇生活設計のためのツール開発に関する研究(II) -ILM日本語版の信頼性と妥当性に関して-、自由時間研究 21 : 40-49、1997
- 佐橋由美・佐藤馨、レジャー志向性尺度の開発に関する研究(2) -多様な大学生における調査データから志向性尺度の今後を展望する-、レジャー・レクリエーション研究 59 : 52-55、2007
- 田口節芳・富永徳幸・折本浩一・谷岡憲三、大学生のレジャーにおける退屈感、レジャー・レクリエーション研究 40 : 11-23、1999
- 土屋薫・澁谷泰秀、レジャー行動モデルの行動計量学的分析、レジャー・レクリエーション研究 39 : 32-35、1998
- 土屋薫・澁谷泰秀、レジャー行動モデルの行動計量学的分析 - 青森市の事例を中心に -、レジャー・レクリエーション研究 41 : 42-45、1999
- 土屋薫・澁谷泰秀、レジャー行動とストレスコーピング、レジャー・レクリエーション研究 43 : 26-29、2000
- 土屋薫・澁谷泰秀、都市部における余暇倦怠度の特性、レジャー・レクリエーション研究 46 : 79-82、2001
- 土屋薫・澁谷泰秀、余暇満足度の測定と施策展開の可能性に関する基礎的研究、青森大学研究紀要第24巻第1号、2001
- 土屋薫・澁谷泰秀、都市部における余暇満足度の特性、レジャー・レクリエーション研究 49 : 30-33、2002
- 土屋薫・澁谷泰秀、青森市における余暇倦怠度の特性、青森大学研究紀要第24巻第2号、2002
- 土屋薫・澁谷泰秀、ストレスと余暇行動におけるニーズ形成、青森大学研究紀要第24巻第3号、2003
- 土屋薫、「豊かさ指標」を読み込むためのツールに関する基礎的研究、青森大学地域問題総合研究所年報地域社会研究第12号、2004
- 土屋薫、豊かさを感じる「技術」に関する考察 -レジャー行動モデルからのアプローチ-、情報と社会第16号、2006

表2 レジャー志向性尺度の基本等計量および因子分析の結果

| 旧<br>番号 | 新<br>番号 | 質問内容 (-)                     | 質問内容 (+)                         | 平均   | SD   | 対人関係<br>志向 | 主導性   | 利他主義  | 活動性   | 自然志向  | 長期的<br>展望・向上 | $\alpha$ |
|---------|---------|------------------------------|----------------------------------|------|------|------------|-------|-------|-------|-------|--------------|----------|
| *12     | *10     | B 一人で趣味に没頭                   | A 誰かと一緒に過ごす                      | 2.27 | .789 | .741       | .124  | .134  | .048  | -.153 | .028         | .752     |
| 4       | 4       | A 一人で過ごしたい                   | B 友達と過ごしたい                       | 2.43 | .827 | .675       | .045  | .096  | .085  | -.050 | -.005        |          |
| 20      | 17      | A 一人で音楽鑑賞や読書をしている            | B 友人や家族とおしゃべりしている                | 2.43 | .836 | .540       | .067  | -.086 | -.026 | -.181 | .054         |          |
| 2       | 2       | A 家にいたい                      | B 出かけた                           | 2.71 | .849 | .505       | .110  | -.080 | .265  | .036  | .018         |          |
| *18     | *15     | B 家で雑誌やインターネットの観光情報を見る方が楽しい  | A ドライブや旅行に出かけるのが楽しい              | 3.06 | .805 | .473       | .151  | -.001 | .200  | .244  | -.017        |          |
| *28     | *23     | B 私の趣味活動は一人ですものが多い           | A 私の趣味活動は他の人と一緒にするものが多い          | 2.34 | .866 | .459       | .126  | .168  | .183  | -.131 | -.030        |          |
| *23     | *19     | B 提案された計画に乗ってついて行くのはたいてい自分だ  | A 最初に計画を提案するのはたいてい自分だ            | 2.35 | .752 | .116       | .602  | .054  | .116  | .040  | -.013        | .775     |
| 31      | 25      | A 何かを計画するとき、たいてい自分はサポート役だ    | B 何かを計画するとき、たいてい自分が中心になって進める役だ   | 2.26 | .716 | .120       | .708  | .137  | .026  | -.007 | .093         |          |
| *15     | *12     | B 人から誘われるのを待っているほうが気楽だし、好き   | A 自分が中心になって計画するほうが楽しいし、好き        | 2.58 | .756 | .198       | .628  | .087  | .067  | .087  | .233         |          |
| *7      | *7      | B あまり目立たず控え目                 | A 人が集まる場面では輪の中心                  | 2.10 | .769 | .325       | .441  | .100  | .086  | -.043 | .055         |          |
| *24     | *20     | B 自由時間は自分のために使いたい            | A 自由時間にはできるだけだけ社会や人の役に立ちたい       | 2.31 | .781 | .021       | .153  | .719  | .193  | -.003 | .110         | .771     |
| *8      | *8      | B 自由時間は自分の楽しみや将来のために使いたい     | A 人の役に立つことは喜びなので自由時間にはそのような活動を行う | 2.00 | .760 | -.025      | .079  | .649  | .124  | -.078 | .097         |          |
| 32      | 26      | A まずは自分のことが優先されると思う          | B 積極的にボランティア活動や社会貢献に関わってきたい      | 2.34 | .667 | .109       | .079  | .617  | .015  | .058  | .151         |          |
| 16      | 13      | A ボランティア活動や地域活動などにはまず関わらない   | B ボランティア活動やNPO活動など、時間があつたらしてみたい  | 2.56 | .824 | .113       | .013  | .585  | .185  | .131  | .260         |          |
| *25     | *21     | B 休養するほうがリフレッシュ(エネルギー充電)になる  | A 体を活発に動かさずほうがリフレッシュ(エネルギー充電)になる | 2.61 | .836 | .237       | .224  | .182  | .687  | -.069 | .004         | .527     |
| *1      | *1      | B ゴロゴロしていた                   | A 体を動かしたい                        | 2.80 | .852 | .264       | .099  | .085  | .644  | .063  | .169         |          |
| *17     | *14     | B 休養、リラクセスにつとめている            | A スポーツ、フィットネスにつとめている             | 2.31 | .914 | .257       | .174  | .126  | .562  | -.020 | .023         |          |
| -       | 28      | A 自然は守り育てるものだ                | B 自然は遊び場だ                        | 1.82 | .771 | .045       | .056  | -.090 | -.193 | -.117 | .002         |          |
| *11     | *9      | B 人の中にいると落ち着く                | A 自然の中にいると落ち着く                   | 3.34 | .682 | -.122      | .013  | .046  | -.009 | .639  | -.106        | .623     |
| *27     | *22     | B 繁華街など人の多いところに行きたい          | A 人のいない静かな場所に行きたい                | 3.00 | .722 | -.236      | .012  | -.049 | -.052 | .603  | -.019        |          |
| *3      | 3       | A 旅行するなら人があふれる雑多なところ         | B 旅行するなら自然豊かなところ                 | 3.48 | .654 | .010       | -.066 | -.006 | .114  | .597  | .013         |          |
| 19      | 16      | A 環境問題や食の安全などには興味がない         | B 自然の中でのスローライフにあこがれる             | 3.12 | .706 | .037       | .135  | .050  | .046  | .341  | .120         |          |
| *21     | 18      | A 面倒なことは避けて発散できる活動をする        | B 今は知識や技能がなくても努力すればできるようになると思う   | 2.24 | .791 | .040       | .127  | .096  | .021  | -.010 | .637         | .579     |
| 29      | 24      | A 今楽しいことをするのがポリシーだ           | B 将来の自分にとって糧となる活動を趣味として行う        | 2.54 | .746 | -.011      | .087  | .175  | -.019 | .035  | .506         |          |
| *14     | *11     | B 趣味活動は目標に関係なく、自分のやり方で楽しめばよい | A 資格取得や技術向上を意識しながら趣味活動をする        | 1.98 | .810 | .183       | .055  | .134  | .017  | -.190 | .425         |          |
| 5       | 5       | A 暇なときは遊びたい                  | B 時間ができれば何か学びたい                  | 2.50 | .858 | -.228      | -.038 | .234  | .213  | .130  | .425         |          |
| 6       | 6       | A 手軽で誰にでも楽しめる活動が好き           | B 挑戦的で奥深い活動が好き                   | 2.12 | .778 | -.079      | .313  | -.042 | .070  | .027  | .333         |          |
| -       | 27      | A 夏の暑い日はエアコンが必要だ             | B 夏の暑い日は木陰で涼みたい                  | 2.59 | .954 | .031       | -.042 | .135  | .205  | .153  | .208         |          |
|         |         |                              |                                  |      |      | 二乗和        | 2.55  | 2.01  | 1.97  | 1.62  | 1.52         | 1.42     |
|         |         |                              |                                  |      |      | 寄与率(%)     | 9.09  | 7.45  | 7.05  | 5.78  | 5.43         | 5.70     |
|         |         |                              |                                  |      |      | 累積(%)      | 9.09  | 16.54 | 23.59 | 29.37 | 34.80        | 39.87    |

\*1 旧番号は先行研究(佐橋・佐藤 2007)における項目番号を指す。新番号は本調査における項目番号を指す。  
 \*2 因子名は先行研究(佐橋・佐藤 2007)による。  
 \*3 得点化はA→Bの順に1→4点を配点した。項目番号に\*が付されている場合はA→Bの順に4→1点を与えた。  
 \*4 因子分析は主成分法による因子抽出の後、バリマックス法による回転を実行した。

## エンパワメントによるツーリズム協働事業定着に向けての グループワークに関する研究

見 田 賢 一 (新潟医療福祉大学大学院)

### 1. 目的

見田(2008)<sup>\*1</sup>は、自治体にて取り組むスポーツ・ツーリズム事業（以下、ツーリズム事業）の定着は、グループワークを通じコミュニケーションを図り、段階的に地域学習及び事業実施に向けた学習を行うことが望ましいとしている。本研究は、行政と地域住民が協働で実施するツーリズム事業の定着に有効なグループワークの方法は何かを、推進委員個々の能力（以下エンパワメント）の視点から検討する。具体的にはA自治体で取り組むツーリズム事業「温泉を活用した健康づくり事業」に携わった推進委員（地域住民）のエンパワメントからグループワークの一方策を探る。

### 2. 仮説

「市民と行政の協働」によるツーリズム事業の定着には、地域住民間及び地域住民と行政のコミュニケーションの成立が必要である。このため、個々のコミュニケーション能力を育むために①レクリエーションを中心としたコミュニケーション向上、②地域特性を再発見するためのグループワーク、を通じて相互のコミュニケーションを図ることがツーリズム事業の定着に必要であると仮説した。

### 3. 対象

対象は、A自治体で取り組むツーリズム事業の開催に対して自治体が委嘱した、推進委員から無作為に抽出した6名である。内訳は表1の通りであった。

表：1 聞き取り調査実施者の内訳

| 個人 | 性別 | 年齢    | 所属他        |
|----|----|-------|------------|
| A  | 男  | 60代後半 | 温泉活用施設支配人  |
| B  | 女  | 40代前半 | 市社会教育委員    |
| C  | 女  | 60代前半 | 食生活改善推進委員  |
| D  | 男  | 20代後半 | 温泉活用施設職員   |
| E  | 女  | 50代前半 | 旧自治体臨時雇用員  |
| F  | 男  | 30代前半 | 民間企業企画営業所属 |

年齢及び所属は、調査当時のものとする。

### 4. 条件

#### (1) 調査方法

対象者個々に対して、半構造化インタビューを実施した。インタビュアーは、対象者がツーリズム事業の開催や運営参画に積極的な気持ちを持つと仮定してインタビューに臨んだ。

#### (2) 調査期間

2008年8月18日(木)から8月20日(土)の3日間

#### (3) 分析方法

半構造化インタビューにより得た言葉を、カード構造化法により分類し、課題を整理することで、ツーリズム事業の定着に必要なグループワークの方策を検討した。

## 5. 結果

大飼(2003)\*<sup>2</sup>は、グループワークトレーニングは対象者双方の日常的コミュニケーションに変容をもたらすことが出来たとしている。本研究でも、①グループワークにより、個々のコミュニケーションスキルが高まる②グループワークによる地域再発見作業が可能であると捉えていた。インタビューから得た言葉からは、「ただ仲良くなるのではなく、他者の考え方を理解したうえで、他人を認めることが必要である」「段階的なグループワークカリキュラムが必要」「欠席者のためのフォローアップシステムがあれば良い」「グループワークの進行役が必要」とあった。また地域再発見作業としては、「机上の作業だけでなく、実際に見て触れる必要がある」とあった。この聞き取り調査から得た方策として、①楽しいだけではない他己理解レクリエーションによる心の交流。②体験型グループワークとフォローアップのカリキュラム化。③グループワーク進行役の養成。これらが、協働によるツーリズム事業定着に向けてのグループワークに必要なことが明らかになった。

## 6. 考察

本研究では、ツーリズム事業の定着に必要な関係者間のコミュニケーションを高める方策としてグループワークが有効であると仮説をした。エンパワーメントから得た協働によるツーリズム事業定着に必要なグループワークとして以下の3点を得た。

### ①他己理解グループワーク

楽しさだけが一人歩きするのではない、他者を理解するための作業としてレクリエーション(アイスブレイキング)を含むエンカウンターの実施。

### ②地域発見グループワーク

机上で考えるだけでは、限られた資源しか検討できないので、あらかじめ地域発見課題を提供し、かつ体感し地域の良さを知る「体験型グループワーク」の実施。

### ③グループワーク進行役の養成

当初は行政がその役割を担うことが想定されるが、行政の考え方を押し付けず、常に平等な立場でグループワークを進行できる人材の養成が必要である。また段階的に同作業を行える地域住民の養成も必要である。

以上のグループワークの方策により、定着を目的とする協働によるツーリズム事業の計画が可能になると予想される。

今後の課題として、進行役(ファシリテーター)養成方法と、より具体的なグループワークの手法を検討し、実際に開催されるツーリズム事業にて実践し、その有効な手段を明らかにしたい。

## <参考文献>

※1 見田賢一「エンパワーメントによるスポーツ・ツーリズムの定着に関する研究」2008 第8回新潟医療福祉学会

※2 大飼己紀子「コミュニケーションのスキルアップをねらったグループワーク・トレーニングの実践」2003 上田女子短期大学紀要第26号

## 高等教育機関における地域に根ざした人材の育成 — 学生交流集会その成果と課題 —

○中野 充（新潟青陵大学）、池 良弘（日本福祉医療専門学校）

### 1. はじめに

財団法人日本レクリエーション協会は、「子どもから高齢者まで各世代にわたる国民ひとりひとりの心身の健康および生活の質の向上と、その実現のための環境づくりをめざして、レクリエーションに関わる指導者の資質の向上とその養成体制を確立すること」を目的に、高等教育機関において、各種のレクリエーション資格の養成課程を認可している。新潟県内には2008年4月現在11のレクリエーション・インストラクターの養成校、3つの福祉レクリエーション・ワーカーの養成校、1つのレクリエーション・コーディネーターの養成校が課程認定を受け、人材の育成にあたっている。2003年度より新潟県内の課程認定校連絡協議会において、養成機関の教員の研修を続けてきた。教員間の連携がとれ研修内容も充実してきたことを背景に、教育の主体者である学生の資質向上を図ることや、学生間の交流を通じて相互に刺激し合い、レクリエーション運動の普及・充実の願いを込めて、2006年度より学生交流集会を実施している。この試みは、地域レクリエーション協会との連携も含め、資格取得後（卒業後）の地域協会への加入を促進し、地域に根ざして活動できる人材を輩出する目的もある。そこで本稿においては、3年目を迎えた学生交流集会の成果と今後の可能性について、地域への人材の還元も含め、学生が求める今後の可能性について明らかにすることを目的とする。

### 2. 学生交流集会の概要

#### 2.1 実行委員会の発足

幹事校教員が音頭を取り2つの幹事校から8名ずつの学生を選出し、合計16名の実行委員会を発足させた。本来であれば、高等教育機関の学生であるので教員はアドバイザー的な立場で参席をし、学生の主導で開催するのが理想ではあるが、学生はこのような大きなイベントの開催を経験したことはなく、何をどのようにしたら良いのか判らない学生が多い中で、交流会終了後には、如何に学生がこのイベントをあたかも「自分たちでやり遂げた」と実感できるようにと教員は意思統一をし、水面下で準備作業に携わった。2つの幹事校から実行委員を選出させたので、役割を各学校に跨らないようにしたことにより、実行委員会の開催は必要最低限の開催で行った。その間、幹事校の教員のサポートにより、それぞれの実行委員会の学生は事前準備、事後処理に当たった。

#### 2.2 プログラム展開

過去3回の交流会は、あまり欲張らずに半日のプログラムとし、実質2時間程度のものにした。参加各校は事前に2つのブースを企画してもらい、各校手作りのブースが出来上がる。各校ともブースの運営には学生が当たり、ゲームの準備から、当日の説明や得点の記載など、ブース運営の手法を学ぶ機会としているのもこのプログラムの特徴である。事前にどのくらいの参加者数があるかを各校に事前調査はしていたが、当日、蓋を開けてみないと参加人数がわからない中で、ゲームの展開をどのようにしたら良いかを実行委員会

を中心に議論をした。その結果、参加者それぞれに1枚のトレールカード（得点表、配置図、日程、ルールなどの記載した「しおり」）を配布し、個人でブースを回り、各ブース10点満点で獲得した得点の合計点で競うという非常にシンプルなルールとした。最終的には、総合得点の高い学校が優勝という形を取り、参加人数が多い学校が優勝することのないように、各校で総合得点が高い10人の得点の合計得点で順位を決定し、優勝杯を授与するというようにした。

### 2.3 ステップ・バイ・ステップ

過去3度の学生交流会は、幹事校の教員が仕掛けたイベントを、あたかも学生自身がやり遂げたと実感できるようにしたが、「参加した学生はこの交流会をどう感じただろうか」、また、「認定校の先生方はどのように、このイベントを評価してくださるのだろうか」との願いを込め、実行委員会の発議によりアンケートを実施した。実行委員を経験した学生の中で多かった感想は、「このようなイベントは経験したことがなく、最初は何をして良いのか全く分からなかった。しかし、今、考えてみると先生が言っていたことが、やっと分かった。」という学生の言葉が多い。学生たちは大いに自分たちの可能性を体感できたようである。

## 3. 学生交流集会におけるアンケート調査

### 3.1 アンケート対象およびアンケート内容

アンケートの対象者（回答者）は、学生交流集会に参加した学生とし、アンケート用紙は学生交流集会当日受付にて幹事校が直接手渡し、すべての事業終了後に実行委員会によって回収、集計をおこなった。過去3年間のアンケートの回答者数、参加者数、ブース数は図1とおおりである。アンケート内容については企画したイベントの満足度の調査、今後の方向性を含んだものとした。

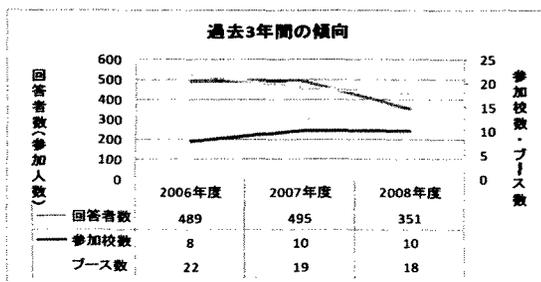


図1. 「過去3年間の回答者（参加者数）、参加校数、ブース数の傾向」

### 3.2 過去3年間におけるアンケート結果

過去3年間に渡って、多少の加筆修正は行われたが、3.1のようなアンケート調査を継続的に実施できた。この調査結果の一部から見る限り、表1.「楽しさ」、表2.「積極性」、表3.「交流会の継続」には、肯定的な回答が約96%以上を占めている。表4.「他校の学生との交流」は、企画段階より想定されていたことではあるが、今後の交流集会を実施する上で重要な要素となる。また、このアンケートには自由記述欄があり、そこでも回答も肯定的な意見、建設的な意見がほとんどであった。自由記述においては、否定的な意見は見

受けられず、このことは日頃の学習の成果であるともいえる。このことから、学生は機会を与えれば十分に活躍する可能性を秘めているともいえるのではないかと著者らは考えている。

表 1. 「楽しさ」

| ④学生交流集会は楽しかったか？ | 2006<br>年度 | 2007<br>年度 | 2008<br>年度 |
|-----------------|------------|------------|------------|
| 楽しかった           | 73%        | 67%        | 70%        |
| 普通              | 24%        | 30%        | 27%        |
| 楽しくなかった         | 3%         | 3%         | 3%         |

表 3. 「交流会の継続」

| ⑧今後も学生交流会を続けるべきだと思いますか？ | 2006<br>年度 | 2007<br>年度 | 2008<br>年度 |
|-------------------------|------------|------------|------------|
| 思う                      | 78%        | 66%        | 75%        |
| どちらでも良い                 | 19%        | 32%        | 22%        |
| 思わない                    | 3%         | 2%         | 3%         |

表 2. 「積極性」

| ⑤あなたは積極的に参加しましたか？ | 2006<br>年度 | 2007<br>年度 | 2008<br>年度 |
|-------------------|------------|------------|------------|
| 積極的だった            | 65%        | 50%        | 59%        |
| 普通                | 32%        | 46%        | 36%        |
| 消極的だった            | 3%         | 4%         | 5%         |

表 4. 「他校の学生との交流」

| ⑨あなたは他校の学生と交流を持つことができましたか？ | 2006<br>年度 | 2007<br>年度 | 2008<br>年度 |
|----------------------------|------------|------------|------------|
| 十分できた                      | 23%        | 17%        | 20%        |
| まあまあできた                    | 46%        | 55%        | 46%        |
| ほとんどできなかった                 | 31%        | 28%        | 34%        |

### 3.3 アンケート結果からみる学生の動向

3.2 から明らかであることは、学生交流集会在学生にとって、有意義な活動であること、そして、同じ県内において同じレクリエーションを学ぶもの同士が作り上げたことが実感できた結果であるといえる。しかし、回を重ね3年目を迎え、今後は学生のニーズを積極的にこの事業に取り入れていくことが必要である。この調査結果から読み取れることは、他校の学生とのグループ編成でブースを回るなど、学生間交流を促進する必要がある。また、毎年20以上のブースができ、そこで作られたレクリエーションの素材を活かすことも必要である。例えば、新潟県レクリエーション協会で毎年開催している新潟県レクリエーション大会に上位5ブースが参加し、一般市民や領域団体などに自分たち自身が作り上げたものを提供することは、そこで活躍している地域社会の人たちへの広報活動にも繋がる。そして、そこで培われたものが、様々な場面において学生自身に還元され、学生自身の生活の質の向上、地域社会との関わりが自然発生的に起こる。とかく昨今の学生たちは学校という温室に育ってきた。このような経験を学生時代に経験することが現在の学生にとっては少なからず必要である。

## 4. 学生が主体的に活動するプロジェクト

### 4.1 プロジェクトマネジメントの活用

学生が地域において具体的な課題を設定し、その課題について探求し、問題解決のための計画を立てて実行するという方法論を活用することによって、地域での課題を解決していくことで学生は地域社会との信頼関係を構築することができる。よく経営学で使われるPDCA (Plan-Do- Check-Action) サイクルや福祉レクリエーションの援助形成としてアメリカで発達した援助プロセスであるA-PIE

(Assessment-Planning- Implementation- Evaluation) プロセスの一連を、このような規模の比較的大きい事業において、体験することは絶好の機会でもある。学生は理論として、前述のようなサイクルやプロセスを机上では学んで頭の中にはあるが、社会に出る前に実際の場面で学ぶ。このことは、将来地域社会の担い手となる学生にとって、大きな自信に繋がる。学生が主体的に地域社会におけるレクリ

エーション活動を実践することは、本来、学校が地域社会と物理的に分離していないのに、分離している現在の状況を省みても教育機関として、社会への貢献としても重要な要素である。

#### 4.2 学生と教員が共に活動することがもたらす価値

学生交流集会に学生を参画させることは、学生だけでなく教員にとっても利益がある。現在の学生が何を欲しているのか、そして、このような活動をどう認識しているのかを教員が知ることによって、学生のニーズをより多く計画に取り入れることができる。また、このようなイベントを学生と教員が作り上げ、学生にはひとつの成功体験をさせることにより、前述のPDCA サイクルやA-PIE プロセスなどを自ら体験することは価値あることであり、学校に対する地域社会への認識も違ってくる。教師がファシリテーターとして、知識を伝える人として働くのではなく、学生が自分自身でこのようなイベントの企画実施ができるような舞台を整え、その成功によって学生たちを助ける役割で参画することが重要である。学生自身がイベントの企画段階や実施段階において自らが問題を発見し、その答えを見つけ出すために教員の知識や技術を活用するということである。

#### 4.3 学生間ネットワークの構築

このようなイベントを2つの幹事校が担うことによって、学校という一つの閉ざされた社会から脱出することが可能であると同時に、同じレクリエーション学ぶ者同士のネットワークの構築が生まれつつある。「レクリエーション」という一つのキーワードが育むネットワークと言ってよい。レクリエーションを学ぶ多くの学生が、卒業後に福祉分野で働く者が多い新潟県において、職場でのネットワークに加え、このような機会でのネットワークが構築されることは、卒業後もより良い情報交換を育むことにもつながり、地域活性化の担い手にもなる。自分たちのコミュニティをより豊かにするレクリエーション運動を知ることによって、人と人とのネットワークが成長することが、これからの課題といえる。

#### 5. 今後の方向性とまとめ

社会環境の変化の早さを考えれば、より素早く考え方を革新していく必要があり、これに対応できるような仕組みが必要である。近年では、国や地方公共団体でも、ニュー・パブリック・マネジメントなどの概念の導入により、自ら積極的にニーズに見合うようなサービスを提供する方向にある。このような環境変化を踏まえて、このままでは高等教育機関においても社会のニーズに応えられない人材を育成することが懸念される。ただし、教育という非常に重要な問題を扱う機関あるから、当然、変化を起こす際には十分に長期的なインパクトとバランスを重視すべきである。そのためには、何らかの形でフィードバックできるような、パブリックコメントの様な仕組みも必要であろう。例えば、オンラインでのディスカッションやコメントを求めるといったのは一つの方法であろう。mixiのようなSNS（ソーシャル・ネットワーキング・システム）を構築することは、学生間のネットワークの拡大にとって、情報爆発時代において必要かと著者らは考えている。例えば、パソコンや iPod を販売する Apple 社のサポート用掲示板ではスタッフ(会社側)の明確な介入はなくとも、ユーザーのみで有益な情報の交換が行われており、これらの議論や不満は適宜製品開発に生かされていると考えられる。オンラインでの議論は一つの仕組みの提案であるが、時代に対応したものをツールとして活用し、レクリエーションの素材を輝きあるものにすることが必要である。ハイテクとローテクの融合こそが、時代を担う若者が地域社会との融合を図るとともに、レクリエーション運動を再生させる一つの方向性であると考えられる。それが地域を活性化できる人材の養成にも繋がるのである。

## 総合型地域スポーツクラブに関する社会学的検討

大隈 節子 (三重大学)

## 1. はじめに

我が国初のスポーツに関する基本的計画としてまとめられた「スポーツ振興基本計画」は、2001年からの10か年計画であり、残すところ2年半のリミットが迫っている。

この計画は21世紀のスポーツ振興の指針として①スポーツの振興を通じた子どもの体力の向上、②地域におけるスポーツ環境の整備充実、③国際競技力の総合的な向上の3つの課題が掲げられており、これまでもそれぞれの課題達成に向けた取り組みが展開されてきた。

課題の1つである「地域におけるスポーツ環境の整備充実」に向けた取り組みとしては、目標達成に向けた必要不可欠な施策として「総合型地域スポーツクラブの全国展開」が掲げられており、2010年までに全国の各市区町村において少なくともひとつは総合型地域スポーツクラブを育成、さらに将来的には中学校区程度の地域に定着することが目指されている。2008年7月の時点では、創設準備中のクラブを含めて2,768クラブが1,046の市区町村において育成され、57.8%の育成率が報告されている。

周知のとおり、この総合型地域スポーツクラブとは(1)子どもから高齢者まで(多世代)、(2)様々なスポーツを愛好する人々が(多種目)、(3)初心者からトップレベルまでそれぞれの志向・レベルに合わせて参加できる(多志向)という特徴を持ち、地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブのことであり、わが国のスポーツ再編を目指す上でのシステム変革の中核を担うものである。

しかし、実際に総合型地域スポーツクラブの創設を検討している市区町村においては、行政によるノルマ達成のための単なる箱モノづくりに終わってしまう可能性も少なくないのではないだろうか。まさに、この総合型地域スポーツクラブ創設の真価は、クラブの創設が地域住民の生涯スポーツ社会の実現に向けたスポーツライフの量的・質的な拡大へとつながるかどうかなのであり、市区町村レベルでクラブの創設を考える場合には、地域住民のスポーツライフの現状との兼ね合いから多面的に検討することが必要であろう。

そこで本研究では、地域住民に対して実施したアンケート調査をもとに、よりよい総合型地域スポーツクラブの在り方について検討することを目的とする。

## 2. 調査概要

## 1) 調査目的

K市内に在住する市民の運動やスポーツに対する意識や活動の実態について把握することを目的とした。

## 2) 調査の設計

① 調査地域 桑名市全域

② 調査期間 平成19年10月1日～10月31日

③調査対象 桑名市内在住の満20歳以上

④調査方法 郵送による配布・回収

⑤配布数 3,002部

⑥調査内容

- ・一般的事項について・健康面の現状について・生活面の現状について
- ・運動やスポーツとのかかわりについて・運動・スポーツ施設について
- ・体育・スポーツ事業について・地域におけるスポーツ活動について

### 3) 回収結果

層化無作為抽出法調査対象者3,002人にアンケート調査用紙を送付した結果、回収数は1,189部、回収率は39.6%であった。また、この中から対象者の特性に関連する項目に対して回答のないもの(98部)は除外し、分析に有効な調査用紙は1,091部(36.3%)であった。

### 3. 調査対象者の特性

#### 1) 性別

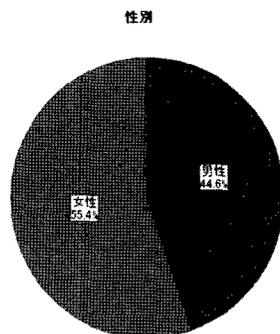
回答者の男女比は、男性44.6%、女性55.4%

#### 2) 年代

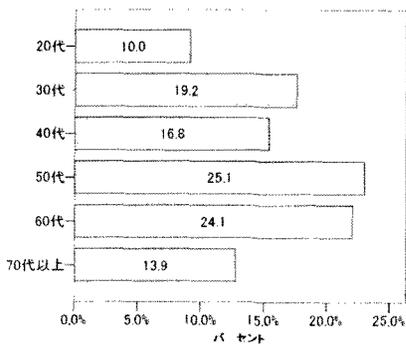
年代の構成は50代が最も多く25.1%、60代が24.1%と20代であり、30代が19.2%、40代16.8%、70代13.9%、最も少ないのが20代の10.0%。

#### 3) 居住年数

居住年数の内訳をみると、21年以上上市内に在住している人が半数以上である。

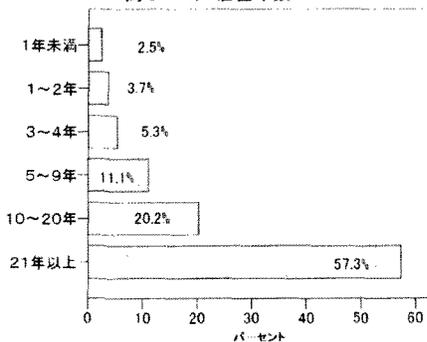


問I-2) 年代



- 1)
- 2)
- 3)
- 4)

問I-4) 居住年数



4. 結果と考察については、当日の発表資料にて検討する。

### 5. 参考・引用文献

文部科学省HP [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/club/main3\\_a7.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm)

総合型地域スポーツクラブ育成事業とレクリエーション協会の「揺らぎ」  
 ―〇県におけるフィールドワークをもとに―  
 谷口勇一(大分大学)

キーワード：総合型地域スポーツクラブ、「揺らぎ」、クラブマネジャー

## 1. 緒言

現在、全国に 2786 設立されている総合型クラブであるが[文部科学省, 2008], その全国的な普及・振興を主導する機関は, 財団法人日本体育協会(以下, 日体協)であるといえよう。日体協は, 加盟団体である都道府県体育協会との連携・協力関係を中心とした「育成支援事業」を展開してきた。当事業展開は確実に成果をあげ, 現在全国に存在する総合型クラブの大部分が日体協「育成支援事業」に関与したクラブである。しかしながら, 総合型クラブの育成支援事業は, 日体協のみで行われているわけではなく, 財団法人日本レクリエーション協会(以下, 日レク協会)においても, 「創設支援事業」を実施し, なおかつ既存クラブ運営の充実を目的とした「活動支援事業」が行われている。

住民にとって, 新しいスポーツ・レクリエーション活動環境の創出が意図された総合型クラブの育成に, 複数のスポーツ・レクリエーション関係団体の支援がなされようとしている状況は歓迎すべきことである。しかしながら, 総合型クラブの普及・振興にあたり「主導的」立場を確立しつつある日体協に対し, 日レク協会は, いかなるスタンスをもって総合型クラブ育成事業を展開しようとしているのか。そこには, 総合型クラブ育成事業をめぐる日レク協会の「揺らぎ」の存在をみることになりはしないだろうか。

そこで本研究では, 実際の総合型クラブ育成(支援)場面をケーススタディとして取り上げ, 地域レベルでの総合型クラブ育成とレクリエーション協会間に生じている「揺らぎ」の諸相を把握・理解する。その際, 具体的に見出そうとする内容は, 「レクリエーション有資格者が抱く総合型クラブへの関与意向と葛藤」「総合型クラブ育成に対する地域(県)レク協会のスタンスとそこでの葛藤」である。これらの状況認識作業を踏まえ, 最終的には総合型クラブ育成とレクリエーション協会の今後の関係性について言及していきたい。

## 2. 方法

### 1) 研究枠組

総合型クラブの設立要件として重要な意味を持つクラブマネジャーの養成は, 2000(平成12)年度から開始されている。当初のクラブマネジャー養成事業は, 文部科学省と日体協, 日レク協会等で構成された総合型地域スポーツクラブ育成協議会によって実施されてきた。その後, 2006(平成18)年度からは, 日体協による主導的なクラブマネジャー養成制度が確立され, 公認クラブマネジャーならびにアシスタントマネジャー資格の誕生をみるようになった。

日レク協会においては, 総合型クラブ育成事業に当初から関与してきたにもかかわらず, 「主導」的な役割を日体協に委ねたこともあって, 以降の具体的な総合型クラブ育成事業展開のビジョンを確立できない状況にあると推察できる。しかしながら, 上記したように, 日レク協会においては, 独自の総合型クラブ育成事業を展開し, 関係団体に対する協力要請―レク活動を中心とした総合型クラブ展開―を行っている状況にある。

日レク協会の総合型クラブ育成に関する動向は、実際に住民との接点を有している都道府県レク協会およびレク有資格者に対し、以下のような葛藤が生じさせると予想できる。すなわち、「都道府県体協を中心として展開されている総合型クラブ育成事業展開との棲み分け、もしくは協働関係はいかに成立するのか」という、支援団体間のコンフリクト（対立・葛藤）である。

葛藤の解消には、そのための「動き」が不可欠である。そこで本研究では、レク関係機関・関係者が総合型クラブ育成事業に関わり合いをもって生じている「スタンス、関係性や価値観などに関する葛藤」の克服プロセスを「揺らぎ」[谷口, 2008・尾崎, 2005]として捉えていくことにする。

## 2) 研究方法

本研究では、質問紙調査とインタビュー調査を実施した。質問紙調査は2007年〇県レクリエーション大会時にレク有資格者を対象に実施し、分析対象者数56部であった。インタビュー調査は2008年8月～9月に行い、対象者は〇県レク協会事務局職員ならびに同協会生涯スポーツ部関係者の2名であった。

## 3. 結果の一部

まず、〇県内レク有資格者を対象とした調査結果をみる。総合型クラブに対する認知度は、「大変知っている」48.1%、「まあ知っている」38.5%であったものの、実際に総合型クラブと何らかの関わり合いがある者は34.5%に過ぎないことがわかった。しかしながら、『総合型クラブにおいて、レク有資格者が果たす役割を感じますか』と訊ねたところ、「おおいに感じている」46.4%、「まあ感じている」42.9%となり、総合型クラブへの積極的関与が強く志向されていることが明らかとなった。具体的な役割意識の内容としては、「様々な年齢に対する身体活動の提供」「住民の“楽しみ”“いきがい”活動を提供する」等が高く、逆にクラブマネジメントの中心的業務である「財務管理」「プログラムの企画・立案」等に対する意識は低いことがわかった。

〇県レク協会事務局職員ならびに同協会生涯スポーツ部関係者に対するインタビュー調査は、独自に作成したインタビューマニュアルに基づく半構造化面接法を用いて行った。現在、回答内容に関する考察中であるが、特徴的な内容としては、『レク指導者の中でも総合型クラブに興味がある方はたくさんいるんです。でも、県内での総合型クラブ育成は体協と広域センターが中心ですから、レク協会として具体的に支援事業を起こす必要もないかなと思っています』『レク協会として総合型クラブを作った場合、設立後は、このクラブは総合型クラブですというお墨付きもらえるのでしょうか？いまは体協関連のクラブでないと公認されていないような・・・。』等であった。

当日は上記調査結果から、より詳細な考察内容を報告したい。

## 【文 献】

谷口勇一「総合型地域スポーツクラブ政策とスポーツ行政の揺らぎ構造」三本松正敏・西村秀樹編『変わりゆく日本のスポーツ』世界思想社, 2008, pp.112-128.

尾崎新「ケア・ワークとはなにかー現場で「ゆらぐ」ことの意味」保育学研究 43 (2), 2005, p.160.

## 幼児・児童の健康づくりシステムの構築 —生活リズム向上のためのレクリエーション活動—

○前橋 明（早稲田大学人間科学学術院）

松尾瑞穂・長谷川 大・泉 秀生（早稲田大学大学院人間科学研究科）

### はじめに

子どもたちの夜型化した生活を改善し、健全育成を図るための方策を模索するために、その基礎調査として、これまで日本各地の子どもの生活実態調査を行ってきた。そして、調査地の子どもたちの抱える課題と、分析・検討した問題改善案を、現地の行政や保育・教育団体に提示し、子どもたちへの生き生き実践を連携して展開する努力を重ねてきた。そこで、本報では、これまで収集してきた子どもの生活調査結果をもとに見いだした「保育園児の生活リズムの乱れを誘発する要因」を報告し、あわせて幼児と児童の生活リズム向上のために提案して実践してきた中から、とくにレクリエーション的な活動を抽出して紹介することとした。

### 方 法

2005～2007年に、幼児の生活実態調査（前橋，2005）を、北海道・青森県・埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県・静岡県・富山県・石川県・岐阜県・奈良県・兵庫県・大阪府・岡山県・広島県・香川県・高知県・沖縄県の保育園児10,153名（1歳男児2,161名・女児2,015名、2歳男児3,561名・女児3,206名、3歳男児7,804名・女児4,904名、4歳男児9,373名・女児8,602名、5歳男児9,474名・女児8,838名、6歳男児3,179名・女児2,413名）の保護者を対象に実施した。調査内容は、①就寝時刻、②睡眠時間、③起床時刻、④朝食摂取状況、⑤朝食開始時刻、⑥朝の排便状況、⑦主なあそび場、⑧外あそび時間、⑨テレビ・ビデオ視聴時間、⑩夕食前のおやつ、⑪夕食開始時刻、⑫園での午後あそび等であった。

統計処理は、SPSSver.11を用いて、t検定、クロス集計、 $\chi^2$ 検定を行い、あわせて、相関係数を算出した（学会当日の配布資料参照）。そして、それらの結果をもとに、子どもたちの生活リズムを乱している要因を分析し、生活リズムの向上策を模索した。

### 結 果

保育園児は、午睡後におやつを食べてからお迎えの時間まで、元気に遊べる空間（園庭）と仲間（園児・保育士）と時間（仲間と関わりあうことのできる時間）の3つが揃っているが、近年、多くの保育園では、その時間帯にテレビやビデオを見せることが、非常に増えてきた。体温が高まっているにもかかわらず、室内で静かな活動をし、あるいは、エアコンをつけて幼児向けのテレビ番組や好きなビデオを見たりしているのである。園児は疲れていないし、好きなことをして落ち着いているようだが、1日のサイクルの中で、身体を動かす機会が少ないため、お腹も空かず、夕食もあまり食べることができない。疲れるような活動をしていないから、夜になっても眠くならない。つまり、午後の時間帯に心地よく疲れるという経験が、体力のついてきた年中や年長児では、不足しているのである。さらに、夕食前にテレビを見ながらおやつをたくさん食べている現状があり、しっかり夕食が食べられずに夜食がほしくなり、就寝と起床のリズムが遅くずれて、生活のリズムの乱れへと向かっていた。

子どもたちの生活要因相互の関連性をみるために、相関係数を算出したところ、幼児期から子どもたちの生活のリズムを夜型にしている要因が3つ確認できた。それらは、①夕食開始時刻の遅れ、②午後の戸外あそび時間の短さ、そして、③長時間のテレビ・ビデオ視聴であった（図1）。就寝時刻の遅れは、起床時刻の遅れを導き、朝食開始時刻や登園時刻の遅れにつながっていった。そこで、戸外あそびの時間の短さ対策と



写真1 親子体操 (対人あそび)

### 親子体操 (埼玉県所沢市)

大脳前頭葉の興奮を、しっかり高める取り組み  
手押し車(ねこ車) 筋力、持久力、協応性、身体認識力



写真2 行政と連携した親子ふれあいあそび教室



写真3 登園時の親子のふれあい用品  
(運動課題の描かれたサイコロ)



写真4 運動課題の描かれたりんご  
(りんごを裏返すと運動課題が見える設定)



写真5 りんごの運動課題「ぐるりんぱ(逆上がり)」  
を行う親子

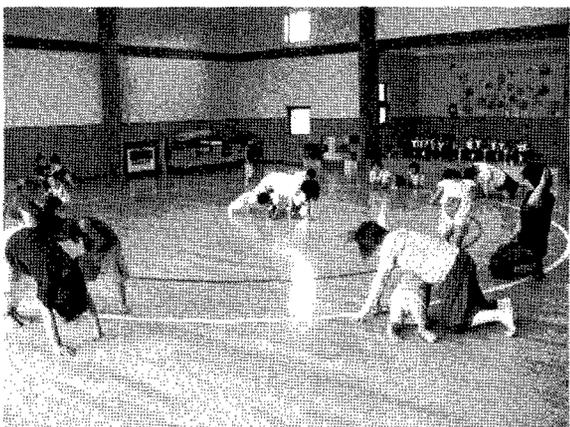


写真6 降園時の親子体操  
(当番の保育者が見本を示す、お迎えに来た保護者が子どもを連れての参加)



写真7 午後の運動計画

(午後4時を過ぎて保育者がヒーローやヒロインに変身、みんなで運動したり踊ったりする企画)



写真10 小学校での放課後あそび

(最終下校時刻まで異年齢で交流、大学生のボランティアが参加協力)



写真8 幼児と児童の交流あそび

(園外保育で小学校に訪問した幼児を、小学生が迎えていっしょに遊ぶプログラム)



写真11 中学生と幼児のふれあい体操

(中学生の保健体育授業に幼児が参加して、組体操を実施)



写真9 幼児と児童といっしょに行うレクリエーションゲーム



写真12 丸たおし

(幼児の力だめし、中学生の腹筋運動)

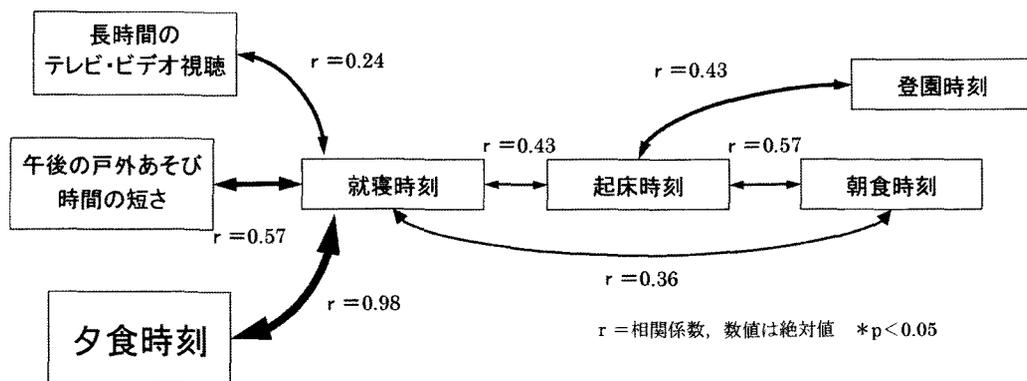


図1 幼児の生活要因相互の関連

して、保育園側にできる生き生き実践を考え、写真1から写真12で示す活動を提案・提示してきた。そして、それらの活動の中から、役立っている実践は、積極的に全国的な展開を呼びかけている。

### 考 察

近年の子どもたちの生活のリズムを整えるためには、①調理時間の短縮や買い物の効率化などを工夫し、夕食の遅れを少しでも早めることや、②日中の戸外あそびやレクリエーション的な活動に費やす時間を増やして運動量を増加させ、心地よい疲れを誘発させること、そして、③テレビ・ビデオ視聴時間を努めて短くして、ただらと夜遅くまでテレビやビデオを見せないことが有効と考えた。

ただし、メディア利用の仕方の工夫に力を入れるだけでは、根本的な解決にはならない。つまり、幼少年期より、「テレビやビデオ、ゲーム等のおもしろさ」に負けない「人と関わる運動あそびやレクリエーション活動（写真1～12）の楽しさ」を、子どもたちに味わわせていかねばならない。しかも、それが子どもたちの心の中に残る感動体験となるように、指導上の工夫と努力が求められる。

幼少年期は、心身のすべてを駆使して友だちとよく遊ぶこと、五感を働かせる全体的なあそびやレクリエーション活動を人と関わり合いながらすること、自律神経機能・体温調節機能を高めるために仲間といっしょに汗をかき、脈拍が高まる運動あそびを優先することが極めて重要である。テレビゲームで経験するより、「実際にそこに行く」、「それをする」という実体験を、友だちや保護者、保育者・教師らと共有することにより、実際に味わう本物の感動や感激が子どもたちの豊かな感情をさらに育てていこう。室内での過度なメディア利用よりも、子どもが小さい頃からできる親子の体操や、子ども同士の組体操、放課後の運動あそびやレクリエーション活動、授業の中で子ども同士が関わる運動を、健康づくりの刺激として与えていくことで、近年、乱れている子どもたちの生活のリズムが健康的に改善していくものと言えよう。これらの取り組みは、確実に、家庭づくり、地域づくり、ひいては地域の防犯や子育て支援につながっていく。

### おわりに

子どもたちの生活リズム上の問題点を改善するには、「就寝時刻を早めること」であるが、そのためには、「子どもたちの生活の中に、太陽の下での戸外運動を積極的に取り入れること」が極めて重要である。子どもの場合、生活リズムに関する問題解決のカギは、毎日の運動量にあると考えるので、まずは、日中の戸外あそびや運動の感動体験をしっかりとませたいものである。そのためにも、幼少年期からの親子体操や子ども同士の運動あそび、異年齢で楽しめるレクリエーション活動、組体操などが有効である。

本研究は、平成20年度科学研究費・基盤研究（A）【課題番号：20240065（研究代表者：前橋 明）】の助成を受けて実施された。

# 幼児の健康づくりシステムの構築

## —保育園児の運動あそびと歩数—

○松尾瑞穂（早稲田大学大学院）

前橋 明（早稲田大学人間科学学術院）

key words : 石川県, 保育園児, 運動あそび, 体温, 歩数

### 目 的

子どもたちが抱えるからだの問題をより詳細に分析するために、これまで体温測定<sup>1)</sup>を行い、自律神経系の機能について検討してきた。

今回は、保育園児の体温を1日定期的に測るとともに、体力との関係の深い身体活動量としての歩数を測定し、体温変化と身体活動量との関連を分析し、検討を加えたいと考えた。

### 方 法

2008年1月～2月にかけての平日の2週間で、石川県中能登町にある町立保育園5園に通う年長児151名（男児82名、女児69名）に対して、前夜の就寝時および当日の起床時、午前9時、午前11時30分、午後3時に、体温測定を行った。また、午前9時から午後4時までの保育園生活時の歩数を測り、1日の身体活動量を把握した。このほか、就寝時刻や朝食摂取状況も尋ね、記録した。

なお、子どもたちに、健康のために、1日の身体活動量として10000歩は確保させたいが、近年の幼児の歩数が、午前9時から午後4時までで5000歩程度にまで減り、懸念されている<sup>2)</sup>ことから、得られた歩数を、5000歩未満、5000歩～平均歩数（性別）未満、平均歩数～10000歩未満、10000歩以上の4群に分類し、歩数別に子どもたちの体温リズムを比較・検討することとした。

その際、2時間で積極的に運動あそびが展開された場合、幼児の歩数は5000歩を超えるため、運動あそびが展開されたときを5000歩以上とみなすこととした。また、1日の中では、午前と午後の2回にわたって運動あそびが展開されるとすると、10000歩以上群の幼児が運動あそびを積極的に行ったとみなした。

### 結 果

石川県に居住する保育園児の平均体温のリズムは、男女児ともに5歳児の体温リズム（前橋，平成15・16年度科研報告，2005<sup>3)</sup>）と類似したリズムを示した（図1）。とくに、朝9時には、体温が36.6℃ほどに高まっており、十分にウォーミングアップのできている状態にあった。

また、生活時間の平均値については、就寝時刻は、男児で21時29分、女児で21時32分、起床時刻は、男児で6時51分、女児で6時58分、睡眠時間は、男児で9時間28分、女児で9時間30分、朝食摂取率は、男女児ともに98.0%であった。

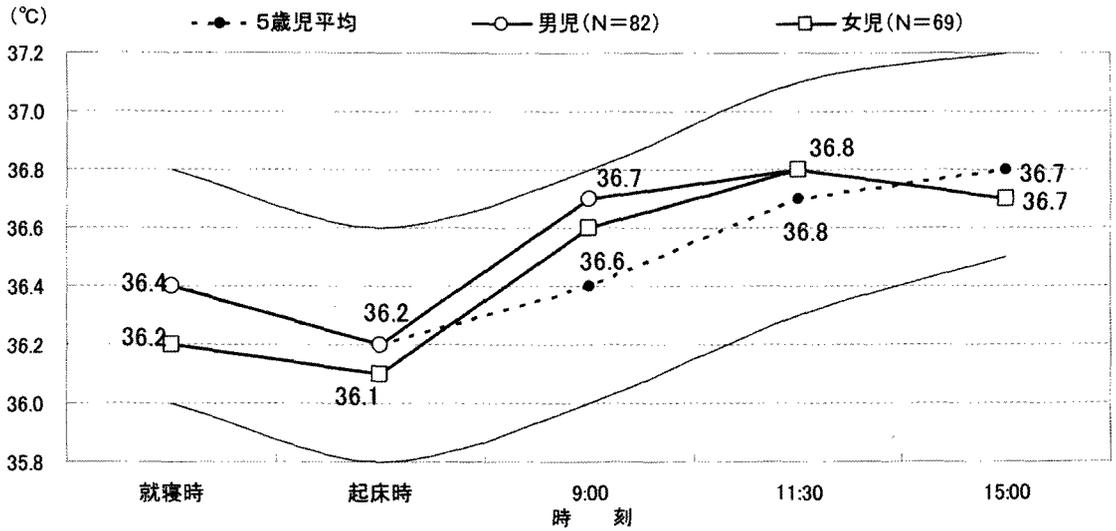


図1 保育園年長児の体温の日内変動

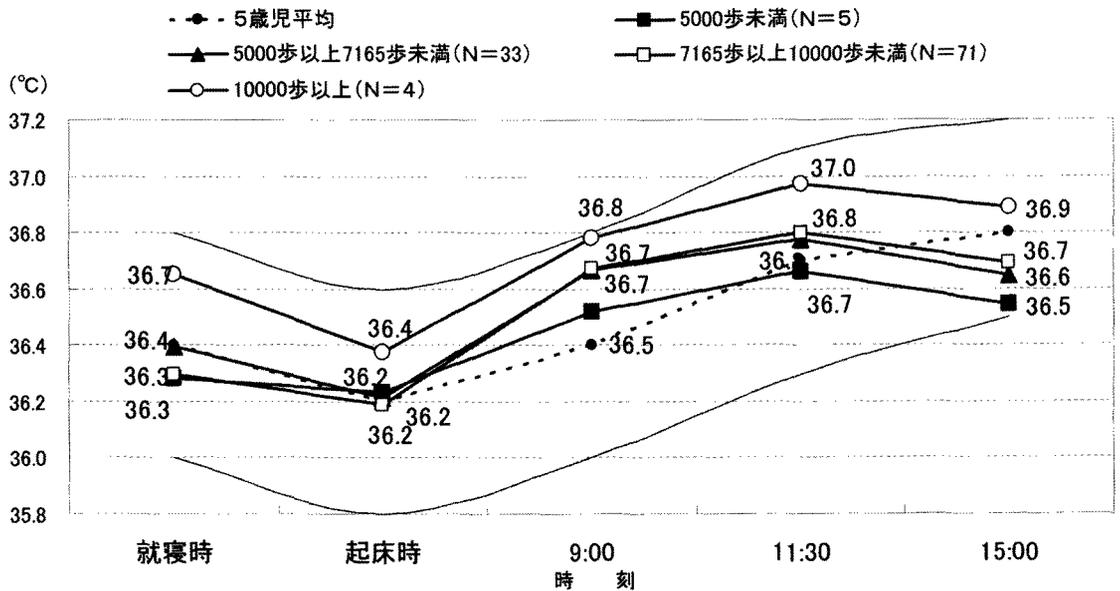


図2-1 保育園年長児の歩数別にみた体温の日内変動(男児)

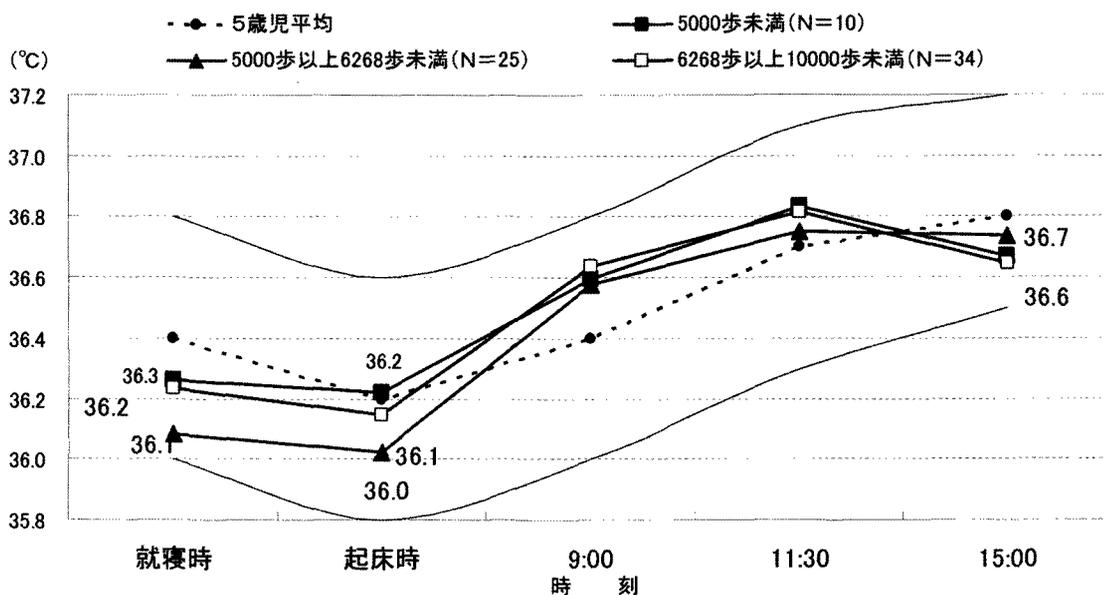


図2-2 保育園年長児の歩数別にみた体温の日内変動(女児)

表1 年長児の1日の歩数別にみた生活時間(男児)

| 対象                 | 就寝時刻   | 朝食摂取状況 | 歩数(歩) |
|--------------------|--------|--------|-------|
| 5000歩未満(N=5)       | 21時34分 | 100%   | 3967  |
| 5000歩以上平均*未満(N=33) | 21時33分 | 97.5%  | 6000  |
| 平均以上10000歩未満(N=71) | 21時26分 | 98.5%  | 8270  |
| 10000歩以上(N=4)      | 21時15分 | 95.0%  | 10274 |

\*平均値:7165歩

表2 年長児の1日の歩数別にみた生活時間(女児)

| 対象                 | 就寝時刻   | 朝食摂取状況 | 歩数(歩) |
|--------------------|--------|--------|-------|
| 5000歩未満(N=10)      | 21時21分 | 100%   | 4026  |
| 5000歩以上平均*未満(N=25) | 21時29分 | 98.3%  | 5811  |
| 平均以上10000歩未満(N=34) | 21時37分 | 97.2%  | 7264  |

\*平均値:6268歩

1日の歩数は、男児が平均 7165 歩、女児は平均 6268 歩であった。これをもとに、歩数別に年長児の体温リズムをみると（図 2-1・図 2-2）、男児は 10000 歩以上を確保している（積極的な運動あそび実施）群が、いずれの測定時にも最も高い体温を示し、歩数の多い群の順に体温が高かった。

就寝時刻は、男児では 10000 歩以上群が最も早く 21 時 15 分、女児では 5000 歩未満群が最も早く 21 時 21 分、続いて 10000 歩以上群の 21 時 25 分であった（表 1・表 2）。

## 考 察

体温は、3 歳児以降になると、1 日のうちに  $0.6^{\circ}\text{C}$ ～ $1.0^{\circ}\text{C}$ の変動を示し、午前 2 時～5 時の夜中から明け方にかけて最も低くなり、午後 3 時～5 時の夕方に最高となる日内リズムに従うようになる。そして、体温の高い時間には、元気に活動できる。今回、測定した石川県の保育園児は、男女とも、このような体温の変動が平均的にみられ、とくに男児は、歩数の多い群ほど体温が高かったことから、体がしっかり温められている子どもほど、大いに活動できていたことが伺えた。

なお、女児において最も歩数の少なかった 5000 歩未満児に注目すると、対象児の中では、早めの就寝、長めの睡眠、100%の朝食摂取であったことより、動きが少なく体力的に低いながらもゆえに、生活が整った状態にならざるを得ないものと推察した。

## ま と め

保育園児 151 名を対象に、1 日の体温リズムと歩数、生活状況を測定・調査した結果、

(1) 園児の体温リズムは、全国の平均的な 5 歳児の体温リズムとほぼ同じリズムであることを確認した。

(2) 男児においては、体温の高まりとともに、歩数の増加を確認したので、運動量を増やし、体力の向上を期待するのであれば、早寝・早起き、朝食摂取、朝の運動（徒歩通園や戸外あそび）、運動あそびによる、1 日 10000 歩以上の活動量確保の機会などを充実させて、体温を高めていく生活が求められた。

(3) 女児の中には、体力レベルが低いながらもゆえに、動きが少なくなり、生活リズムは整った状態になっている子どもがいるのではないかと推察された。

本研究は、平成 20 年度科学研究費（基盤研究(A) 20240065. 研究代表者 前橋 明）の助成をいただいで行われた。

## 文 献

- 1) 前橋 明：子どものからだの異変とその対策，体育学研究 49，pp.197-208，2004.
- 2) 前橋 明・石垣恵美子：幼児期の健康管理—保育園内生活時の幼児の活動内容と歩数の実態一，聖和大学論集第 29 号，pp.77-85，2001.
- 3) 前橋 明：幼児のからだの異変とその対策，平成 15・16 年度 科学研究費報告書，2005.

## 幼児の生活リズム向上戦略と健全育成システムの構築(Ⅳ)

### —幼稚園児の午後あそびの実態と基本的生活習慣づくりを行う上での課題—

○泉 秀生(早稲田大学大学院) 前橋 明(早稲田大学人間科学学術院)

#### はじめに

早稲田大学前橋研究室では、心身ともに健康で生き生きとした子どもたちの暮らしづくりのために、幼児の生活実態の全国調査<sup>1)</sup>を通して、調査地の子どもたちの抱える問題点を把握し、あわせて、行政や保育・教育団体に生活課題や問題の改善策を提示している。

本報告では、2005年から2007年に行った調査結果から、近年の幼稚園児の生活実態と、あわせて午後あそびの内容やあそび場所を、四季ごとに把握することとした。そして、子育てや保育、教育ならびに健康福祉活動に寄与すべき知見を検討し、整理することとした。

#### 方 法

2005～2007年に、幼児の生活実態調査<sup>1)</sup>を、北海道・秋田県・福島県・千葉県・埼玉県・東京都・静岡県・岐阜県・大阪府・兵庫県・鳥取県・島根県・岡山県・広島県・香川県・高知県・沖縄県の幼稚園に通う5・6歳児6,905名(男児3,510名・女児3,395名)の保護者を対象に実施した。調査の内容は、夕食開始時刻、就寝時刻、睡眠時間、起床時刻、朝食開始時刻、通園のために家を出る時刻、降園後の外あそび時間、降園後に子どもたちがよく行うあそびの内容、降園後に子どもたちがよく利用するあそび場などであった。

#### 結 果

##### 1. 生活実態調査結果

幼稚園児の生活時間の平均値を、性別に表1に示した。また、就寝時刻の人数割合を図1に、夜間の睡眠時間の人数割合を図2に、朝食摂取状況を図3に、朝の排便状況を図4にそれぞれ示した。

##### 2. 生活要因相互の関連性

本調査における幼児全体の生活時間相互の関連性を性別に分析し、1%水準で有意なもので、かつ、相関係数( $r$ )が $|0.3|$ 以上のものを抜粋すると男児においては「夕食開始が遅いと就寝が遅い( $r=0.416$ )」、「就寝が遅いと起床が遅く( $r=0.410$ )」、朝食開始が遅い( $r=0.359$ )」、「起床が遅いと朝食開始が遅い( $r=0.837$ )」となった(図5-1)。

また、女児においては、「夕食開始が遅いと就寝が遅い( $r=0.447$ )」、「就寝が遅いと起床が遅く( $r=0.417$ )」朝食が遅い( $r=0.382$ )」、「起床が遅いと朝食開始が遅い( $r=0.848$ )」、「朝食開始が遅いと通園のために家を出る時刻が遅い( $r=0.332$ )」であった(図5-2)。

##### 3. 帰宅後の外あそび内容とあそび場

帰宅後のあそびの内容において、男児では冬を除いて、「テレビ・ビデオ視聴」が最も多く、次いで「お絵かき」や「自転車」「ブロックあそび」が多かった(表2-1)。

また、女児では、季節を問わず「お絵かき」が第1位であり、「テレビ・ビデオ視聴」や「自転車」「ままごと」が続いた(表2-2)。

帰宅後のあそび場所では、男女ともに、季節を問わず「家の中」で遊ぶ子どもが最も多かった(表3-1、表3-2)。また、男女ともに秋を除いて、「公園」が2番目に多かった。

#### 考 察

男女ともに、夕食開始時刻の遅れから、平均就寝時刻が21時を過ぎており、幼児にとつ

表1 幼稚園5, 6歳児の生活時間(性別)

(平均値)

| 性              | 夕食開始時刻 | 就寝時刻   | 睡眠時間   | 起床時刻  | 朝食開始時刻 | 通園時刻  | 外あそび時間 |
|----------------|--------|--------|--------|-------|--------|-------|--------|
| 男児<br>(N=3436) | 18時35分 | 21時07分 | 9時間55分 | 7時02分 | 7時25分  | 8時14分 | 1時間06分 |
| 女児<br>(N=3347) | 18時35分 | 21時09分 | 9時間56分 | 7時05分 | 7時26分  | 8時16分 | 1時間02分 |

表2-1 幼稚園5・6歳の帰宅後のあそび(季節別:男児)

| 順位 | 春(N=751)       | 夏(N=785)       | 秋(N=1323)      | 冬(N=650)       |
|----|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 1位 | テレビ・ビデオ(58.9%) | テレビ・ビデオ(37.8%) | テレビ・ビデオ(49.3%) | ブロックあそび(53.7%) |
| 2位 | お絵かき(31.2%)    | 自転車(39.7%)     | 自転車(32.7%)     | テレビ・ビデオ(50.3%) |
| 3位 | ブロックあそび(25.8%) | ブロックあそび(30.3%) | ブロックあそび(27.9%) | テレビゲーム(31.7%)  |
| 4位 | 自転車(25.7%)     | テレビゲーム(24.6%)  | お絵かき(26.2%)    | お絵かき(29.4%)    |
| 5位 | ヒーローごっこ(24.9%) | ヒーローごっこ(24.3%) | テレビゲーム(24.0%)  | 自転車(23.8%)     |

〔春:3月~5月, 夏:6月~8月, 秋:9月~11月, 冬:12月~2月〕

表2-2 幼稚園5・6歳の帰宅後のあそび(季節別:女児)

| 順位 | 春(N=698)       | 夏(N=828)       | 秋(N=1243)        | 冬(N=625)       |
|----|----------------|----------------|------------------|----------------|
| 1位 | お絵かき(72.2%)    | お絵かき(72.2%)    | お絵かき(59.4%)      | お絵かき(77.6%)    |
| 2位 | テレビ・ビデオ(49.7%) | 自転車(39.7%)     | テレビ・ビデオ視聴(42.6%) | テレビ・ビデオ(38.7%) |
| 3位 | ままごと(36.8%)    | ままごと(36.2%)    | ままごと(36.0%)      | 絵本・本読み(35.0%)  |
| 4位 | 絵本・本読み(32.7%)  | テレビ・ビデオ(30.7%) | 自転車(29.6%)       | ブロックあそび(28.0%) |
| 5位 | 折り紙(19.9%)     | 折り紙(27.5%)     | 絵本・本読み(25.3%)    | 人形あそび(23.4%)   |

〔春:3月~5月, 夏:6月~8月, 秋:9月~11月, 冬:12月~2月〕

表3-1 幼稚園5・6歳の帰宅後のあそび場(季節別:男児)

| 順位 | 春(N=751)     | 夏(N=785)    | 秋(N=1323)   | 冬(N=650)    |
|----|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1位 | 家の中(83.1%)   | 家の中(83.1%)  | 家の中(88.4%)  | 家の中(93.2%)  |
| 2位 | 公園(52.1%)    | 公園(54.6%)   | 家の庭(52.2%)  | 公園(55.8%)   |
| 3位 | 家の庭(30.4%)   | 友人の家(40.5%) | 友人の家(51.2%) | 友人の家(39.2%) |
| 4位 | 友人の家(24.2%)  | 家の庭(38.5%)  | 公園(42.2%)   | 家の庭(28.0%)  |
| 5位 | 団地の廊下(10.1%) | 道路(17.7%)   | 道路(18.4%)   | 道路(12.5%)   |

〔春:3月~5月, 夏:6月~8月, 秋:9月~11月, 冬:12月~2月〕

表3-2 幼稚園5・6歳の帰宅後のあそび場(季節別:女児)

| 順位 | 春(N=698)     | 夏(N=828)    | 秋(N=1243)   | 冬(N=625)    |
|----|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1位 | 家の中(87.8%)   | 家の中(87.4%)  | 家の中(90.9%)  | 家の中(94.2%)  |
| 2位 | 公園(50.3%)    | 公園(51.1%)   | 友人の家(55.8%) | 公園(48.3%)   |
| 3位 | 家の庭(33.0%)   | 友人の家(47.6%) | 家の庭(53.9%)  | 友人の家(38.2%) |
| 4位 | 友人の家(27.5%)  | 家の庭(39.9%)  | 公園(39.3%)   | 家の庭(31.7%)  |
| 5位 | 団地の廊下(10.6%) | 道路(16.2%)   | 道路(15.9%)   | 道路(11.4%)   |

〔春:3月~5月, 夏:6月~8月, 秋:9月~11月, 冬:12月~2月〕

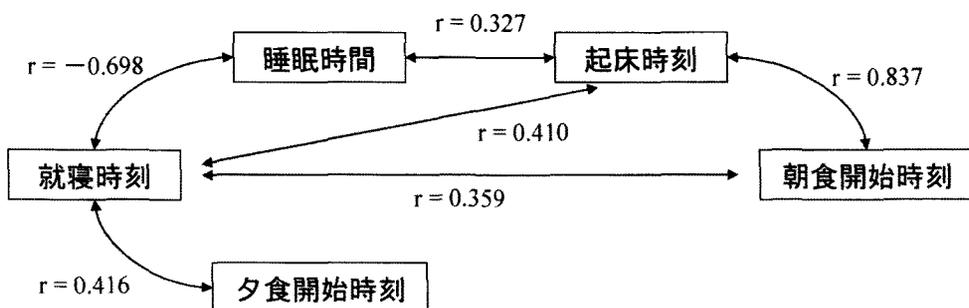
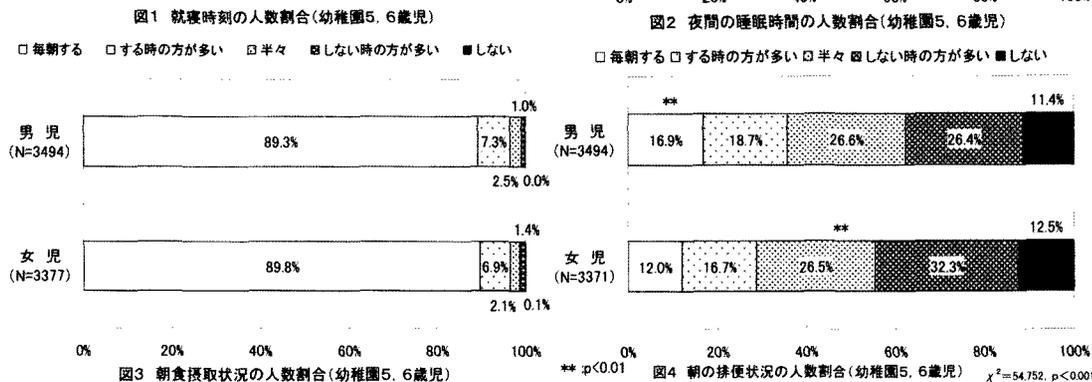
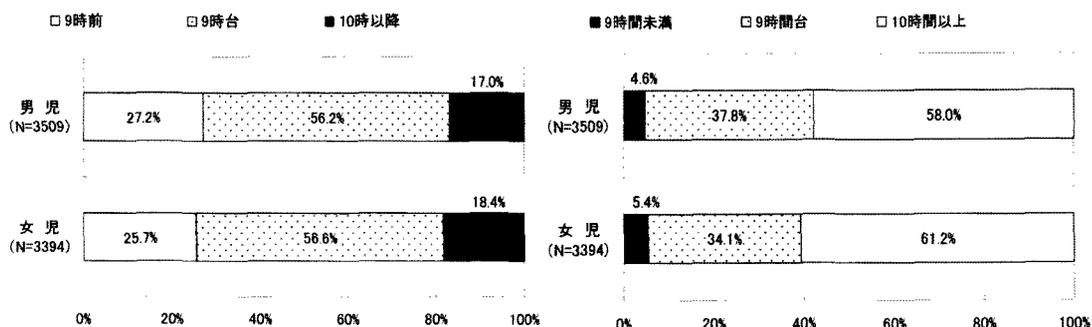


図5-1 幼稚園5, 6歳児の生活要因相互の関連性(男児)

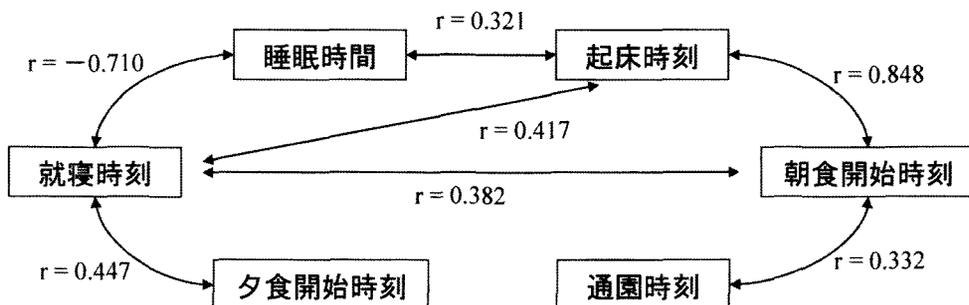


図5-2 幼稚園5, 6歳児の生活要因相互の関連性(女児)

て必要といわれる 10 時間以上の睡眠<sup>2)</sup> が確保できていないことや、戸外での外あそび時間が 1 時間程度と短いことから、子どもの生活のますますの夜型化が懸念された。

また、生活要因相互の関連性から、男女ともに、夕食開始時刻の遅れが就寝時刻を遅らせている誘因となっていることを確認したため、夕食開始時刻を少しでも早める知恵集め<sup>3)</sup> や、夜型生活から生活リズムを改善する外あそびの奨励<sup>4)</sup> が必要ではないだろうか。

そこで、帰宅後、実際に行われているあそび内容を確認するため、寄せられた回答の上位 5 つをみると、いずれの季節においても、男児においては、「ヒーローごっこ」を除いて、女児では全てにおいて、身体活動量の少ないあそびや対物的なあそびが多かったことから、夜間にぐっすり休むための心地よい疲労感が得られないことや、あわせて、人と関わることで身につく社会性や協調性が育ちにくいのではないかと懸念された。

とくに、過度の「テレビ・ビデオ視聴」は、子どもたちの健全育成を阻害する恐れがあるため、保護者は「ながらでテレビをつけておかない」ことや、「テレビ・ビデオ視聴に関する約束事を家庭で作る」等、家庭においてルールづくりをすることの重要性を感じた。

遊ぶ場所では、「家の中」が男女ともに上位であったことから、戸外で人と関わって遊ぶことの大切さや運動の楽しさを子どもたちにしっかりと味わわせ、新たな発見や気づきによる感動体験をしっかりとらせていきたいと考えた。また、「公園」は、男女ともに秋を除いて 2 番目に多かったことから、行政や保育・教育団体、地域、家庭などが、今日作られている「公園」の有効利用を促す工夫をしていくことが求められているといえよう。とくに、秋においては「公園」でのあそびが少なくなることから、紅葉や散策・探検といった、季節を味わう活動やあそびを子どもたちにもっと教えてあげたい。

今日の子どものあそび内容やあそびの場は、健康的な生活習慣づくりと人間性豊かな育ちにとって、必ずしも良い方向に向かっているとは言えない実態が示され、懸念された。

## ま と め

幼稚園の 5・6 歳児 6,905 名の保護者を対象に、子どもの生活習慣と午後あそびに関する調査を行い、分析を加えた結果、(1) 男女ともに就寝時刻が 21 時以降であり、睡眠時間も 10 時間未満であった。また、降園後の外あそび時間が 1 時間 5 分前後と短かった。(2) 帰宅後のあそびの内容において、男児では冬を除いて、「テレビ・ビデオ視聴」が最も多く、女児では季節を問わず「お絵かき」が多かった。(3) 帰宅後のあそび場所については、男女ともに、季節を問わず「家の中」で遊ぶ子が最も多かった。(4) 子どもたちのあそびの内容やあそび場をみると、今後、教師や保護者が子どもたちへあそびを伝承していくことが大いに求められるとともに、子どもたちが遊びたくなるあそび環境を整備するといった、行政や地域、家庭が協力して、子どものあそび空間を整えていく必要性がある。

## 文 献

- 1) 泉 秀生・前橋 明：神奈川県の子どもの生活実態とその課題，食育学研究 3 (2)，pp. 28-29, 2008.
- 2) 本保恭子・前橋 明他：子どもの健康な発達と子育て環境，子どもの健康福祉研究 2，pp. 3-26, 2004.
- 3) 松尾瑞徳・前橋 明：沖縄県における離島幼児の健康福祉に関する研究 (II) - 夕食時刻を早める知恵集め調査 (その 1) -，食育学研究 Vol.2 No. 1，pp. 43-51, 2007.
- 4) 前橋 明：生活リズム向上大作戦，大学教育出版，pp. 75-79, 2006.

# 保育園幼児の生活状況と体力・運動能力に関する研究（第6報）

○長谷川 大（早稲田大学大学院人間科学研究科）

前橋 明（早稲田大学人間科学学術院）

key words：保育園幼児，生活，体力，運動能力，歩数

## 目 的

近年、子どもたちの生活習慣は乱れてきている<sup>1)</sup>。生活習慣の乱れは、子どもたちの運動量や体力とかかわりをもち、例えば、前橋らの先行研究<sup>2)・3)</sup>によれば、就寝時刻が遅く睡眠時間の短い幼児ほど、翌日の握力値が低いことや、起床時刻が遅い幼児ほど、心身のウォーミングアップが遅れ、園内生活時の身体活動量（歩数）の少ないことが明らかにされている。そして、筆者らは、男児において、睡眠時間の長い幼児ほど、体力・運動能力の値が高い傾向にあり、中でも、睡眠時間と跳び越しくぐり能力（身体調整力）、および1日の歩数（身体活動量）の記録は有意に関連性がある<sup>4)</sup>ことを明らかにしてきた。

そこで、本研究では、幼児の生活の中でも、1日の保育園内生活時の身体活動量（歩数）に焦点を当て、保育園幼児の園内生活時の歩数と体力・運動能力との関連をより詳細に分析を加えることとした。

## 方 法

2008年6・7月、埼玉県所沢市の保育園に通園する5・6歳児185名（男児：87名，女児：98名）を対象として、午前9時30分～11時までの間に体力・運動能力テスト（表1）を行い、午前9時～午後4時までの歩数を、YAMASA PZ-150を用いて測定した。また、あわせて、月齢記録と身体計測を行った。

なお、本報では、1日の歩数を取りあげて、その運動量の違いによる子どもの体力・運動能力の違いを分析するため、まず、男女ごとの平均歩数を求め、その平均値を境に平均以上歩数群と平均歩数未満群の2群に分け、男女別にそれぞれの体力・運動能力の記録を比較・分析した。

また、より詳細な分析を試みる必要性がみられた場合は、先行研究<sup>2)</sup>より、7000歩以上群（A群）、3000歩以上7000歩未満群（B群）、3000歩未満群（C群）の3区分に分け、それぞれの群ごとの比較・分析も行うこととした。

結果の統計処理には、SPSS ver.16.0を用い、各群間の平均値の差をみるために、対応のないt検定とKruskal-Wallis検定を行った。加えて、歩数と体力・運動能力の相互の関連性を調べるため、相関係数を算出した。

表1 幼児の体力・運動能力の測定法

| 種 目       | 概 要                                                    |
|-----------|--------------------------------------------------------|
| ① 両手握力値   | 両足を開き、両手で力いっぱい児童用の握力計を握りしめるようにさせた。2回実施し、良い方の記録をとった。    |
| ② 立ち幅跳び   | マットを使用して、両足で同時に踏み切って前方へ跳び、跳んだ距離を測定した。2回実施し良い方の記録をとった。  |
| ③ ボール投げ   | 硬式テニスボールを使用して、2回実施し、良い方の記録をとった。                        |
| ④ 跳び越しくぐり | 膝の高さにはったゴムひもを跳び越したら、すぐにひもの下をくぐる動きを5回行い、その間に要した時間を測定した。 |
| ⑤ 25m走    | 30mラインをゴールに設定し、25m地点を通過した際の時間を測定した。                    |

## 結 果

### 1. 保育園幼児の月齢、身長、体重、ならびに体力・運動能力

男児 87 名の月齢は平均 68 ヶ月±3 ヶ月であり、身長は平均 110.5cm±5.2cm、体重は平均 18.7kg±3.1kg であった。体力・運動能力では、25m走が平均 6.20 秒±0.73 秒、ボール投げが平均 8.61m±3.36m、両手握力値が平均 16.4kg±2.8kg、跳び越しくぐりが平均 15.7 秒±3.1 秒、立ち幅跳びが平均 110cm±15cm、歩数が平均 5273 歩±1596 歩であった。

女児 98 名の月齢は平均 68 ヶ月±3 ヶ月、身長は平均 110.7cm±5.4cm、体重は平均 19.2kg±2.6kg であった。体力・運動能力では、25m走が平均 6.39 秒±0.57 秒、ボール投げが平均 5.95m±1.56 m、両手握力値が平均 15.4kg±2.6kg、跳び越しくぐりが平均 16.6 秒±3.2 秒、立ち幅跳びが平均 103cm±13cm、歩数が平均 4465 歩±1522 歩であった。

### 2. 保育園幼児の 1 日における歩数群別にみた月齢、身長、体重、ならびに体力・運動能力

平均歩数以上群、ならびに平均歩数未満群の幼児の月齢、身長、体重、歩数を、表 2 に示した。また、性別にみた平均歩数以上群、平均歩数未満群の両手握力値、立ち幅跳びの距離、ボール投げの距離、跳び越しくぐりの時間、25m走のタイムを、それぞれ図 1～図 5 に示した。男女児ともに、歩数の多い群の幼児の方が良い記録を示すという、2 群間に有意な差がみられた種目は、両手握力値と立ち幅跳びであった。

男女ともに有意差のみられなかったボール投げと跳び越しくぐり、25m走については、子どもたちの状態に何らかの特徴があるかもしれないという疑問が生じたため、先行研究知見<sup>2)</sup>より、歩数を 3 区分に分け、より詳細な特徴を見いだそうとした。

具体的には、7000 歩以上の A 群、3000 歩以上 7000 歩未満の B 群、3000 歩未満の C 群に分けて、それぞれの群の記録を比較・分析することとした。各々の群の月齢、身長、体重、歩数を表 3 に、ボール投げの距離、跳び越しくぐりの時間、25m走のタイムを図 6～図 8 に、それぞれ示した。

### 3. 保育園幼児の 1 日の歩数と体力・運動能力相互の関連性

歩数と体力・運動能力要因相互の関連性を調べた結果、有意な相関 ( $p, 0.05$ ) がみられ、かつ、 $r \geq |0.2|$  のものを抜粋すると、女児において、歩数とボール投げの距離 ( $r = 0.21$ )、歩数と両手握力値 ( $r = 0.26$ )、歩数と立ち幅跳びの距離 ( $r = 0.23$ ) であった。

表 2 1 日の平均歩数別にみた保育園幼児の月齢、体格、ならびに歩数

| 項 目    | 男 児           |              | 女 児           |              |
|--------|---------------|--------------|---------------|--------------|
|        | 平均歩数以上(N=46)  | 平均歩数未満(N=41) | 平均歩数以上(N=52)  | 平均歩数未満(N=46) |
| 月齢(月)  | 68±4          | 68±3         | 67±2          | 69±4         |
| 身長(cm) | 111.2±4.7     | 109.6±5.8    | 111.3±5.3     | 110.1±5.6    |
| 体重(kg) | 19.3±3.5      | 18.1±2.3     | 19.7±2.8      | 18.9±2.5     |
| 歩数(歩)  | 6468±1104 *** | 3932±787     | 5735±1097 *** | 3342±779     |

平均歩数未満児の平均値に対する差：\*\*\*； $p < 0.001$

表 3 保育園幼児の歩数別にみた月齢、体格、ならびに歩数

| 項 目    | 男 児          |              |           | 女 児         |              |           |
|--------|--------------|--------------|-----------|-------------|--------------|-----------|
|        | A群(N=12)     | B群(N=69)     | C群(N=6)   | A群(N=5)     | B群(N=77)     | C群(N=16)  |
| 月齢(月)  | 67±4         | 68±3         | 66±2      | 67±2        | 69±4         | 67±4      |
| 身長(cm) | 110.2±4.2    | 110.7±5.5    | 108.3±5.1 | 110.0±4.4   | 111.0±5.8    | 109.1±3.4 |
| 体重(kg) | 18.3±1.7     | 18.9±3.3     | 18.0±2.6  | 19.1±1.3    | 19.5±2.8     | 18.4±1.8  |
| 歩数(歩)  | 7918±1102 ** | 5049±1041 ** | 2560±304  | 8209±385 ** | 4656±1022 ** | 2379±396  |

A群：7000歩以上 B群：3000歩以上7000歩未満 C群：3000歩未満 B群、C群に対する差：\*\*； $p < 0.01$  C群に対する差：\*\*； $p < 0.01$

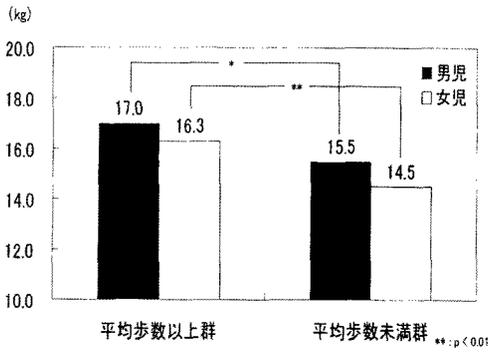


図1 保育園幼児の歩数群別にみた両手握力値

男児(N=46)・女児(N=45) 男児(N=38)・女児(N=50)  
 [男児:5273歩以上, 女児:4465歩以上] [男児:5273歩未満, 女児:4465歩未満]

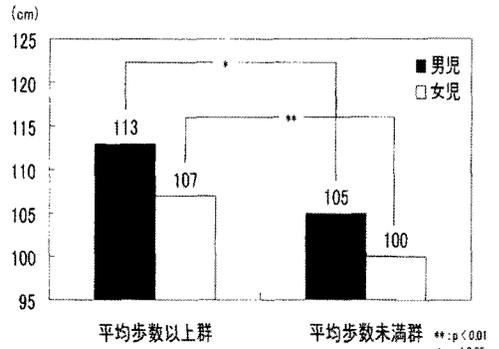


図2 保育園幼児の歩数群別にみた立ち幅跳びの距離

男児(N=46)・女児(N=45) 男児(N=38)・女児(N=49)  
 [男児:5273歩以上, 女児:4465歩以上] [男児:5273歩未満, 女児:4465歩未満]

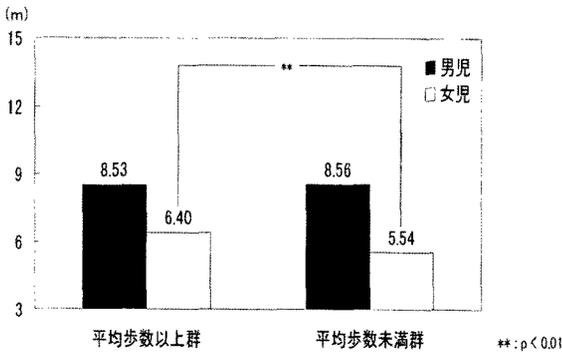


図3 保育園幼児の歩数群別にみたボール投げの距離

男児(N=44)・女児(N=45) 男児(N=40)・女児(N=50)  
 [男児:5273歩以上, 女児:4465歩以上] [男児:5273歩未満, 女児:4465歩未満]

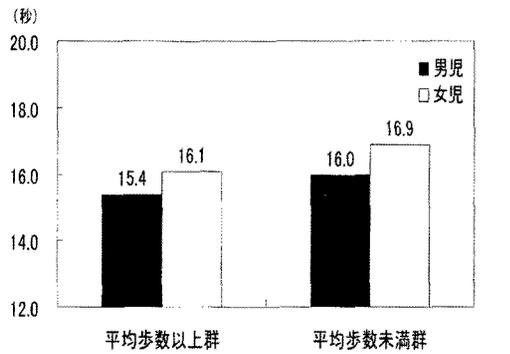


図4 保育園幼児の歩数群別にみた跳び越しくぐりの時間

男児(N=46)・女児(N=45) 男児(N=38)・女児(N=49)  
 [男児:5273歩以上, 女児:4465歩以上] [男児:5273歩未満, 女児:4465歩未満]

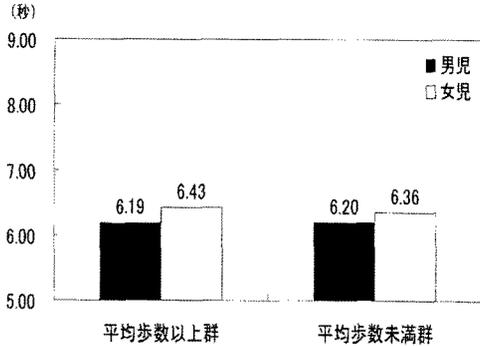


図5 保育園幼児の歩数群別にみた25m走のタイム

男児(N=44)・女児(N=45) 男児(N=40)・女児(N=50)  
 [男児:5273歩以上, 女児:4465歩以上] [男児:5273歩未満, 女児:4465歩未満]

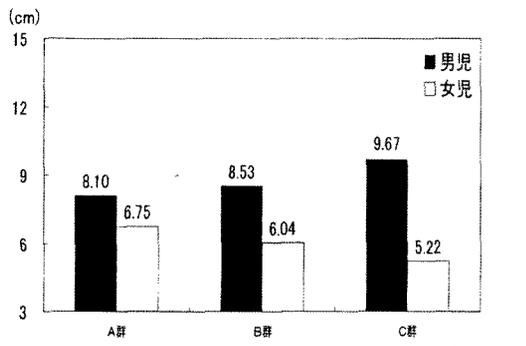


図6 保育園幼児の歩数群別にみたボール投げの距離

A群: 男児(N=12)・女児(N=4) [7000歩以上] B群: 男児(N=67)・女児(N=76) [3000歩以上7000歩未満] C群: 男児(N=5)・女児(N=15) [3000歩未満]

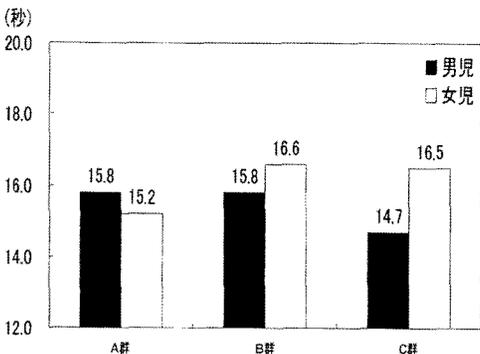


図7 保育園幼児の歩数群別にみた跳び越しくぐりの時間

A群: 男児(N=12)・女児(N=4) [7000歩以上] B群: 男児(N=66)・女児(N=77) [3000歩以上7000歩未満] C群: 男児(N=6)・女児(N=14) [3000歩未満]

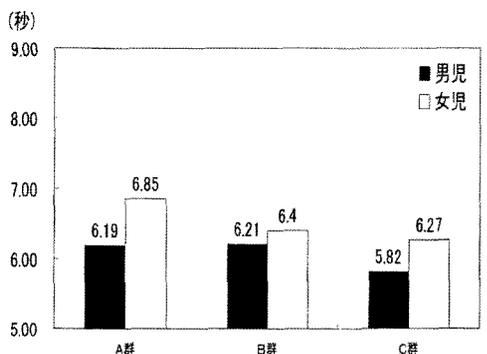


図8 保育園幼児の歩数群別にみた25m走のタイム

A群: 男児(N=12)・女児(N=4) [7000歩以上] B群: 男児(N=67)・女児(N=76) [3000歩以上7000歩未満] C群: 男児(N=5)・女児(N=15) [3000歩未満]

## 考 察

男女児ともに、両手握力値と立ち幅跳びにおいては、平均歩数以上群の方が、平均歩数未満群よりも、記録が有意に優れていた。しかしながら、ボール投げと跳び越しくぐり、25m走では、平均歩数以上群と平均歩数未満群で、男女児ともに、有意な差がみられなかった。このことから、歩数の区分を3区分に分け、記録の詳細な分析を加えてみたところ、ボール投げと跳び越しくぐりにおいて、歩数が少ない女児から、歩数が多い女児に移行するにつれ、体力・運動能力が良くなり、逆に、男児においては、歩数の多い子から少なくなるにつれ、体力・運動能力がより高まるパターンを確認した。これは、歩数の少ないC群の男児の身体調整力や身体コントロール能力が、A群、B群の男児や女児よりも、より高い状態にあるがゆえに、園内生活の中で無駄のない動きをして歩数が少く維持されたと推察した。なお、25m走において、歩数の少ない群の幼児の方が、男女とも、歩数の多い群の幼児よりもやや早い傾向にあったことは、歩数の多いA群の幼児の中に足が遅い幼児が集まったことも一因となっていると考えた。

これらの考察から、保育園においては、身体の高い能力が高いために1日の歩数が少なくすむ子どもの存在を把握し、そうした子どもの身体能力に合致し、より高めていく保育活動・保育計画を提案することによって、身体能力の高い子どもであっても、十分に体を動かすことができ、さらに能力が高められるような配慮をしていくことが求められるであろう。

## ま と め

2008年6・7月に、保育園5・6歳児185名を対象に、体力・運動能力テストを行い、午前9時～午後4時までの歩数を測定し、子どもの歩数と体力・運動能力との関連を分析したところ、

(1) 男女ともに、平均歩数以上群の幼児の方が、平均歩数未満群の幼児よりも、両手握力値と立ち幅跳びの結果が有意に高かった ( $p<0.05$ )。

(2) 男児においては、歩数の少ないC群の幼児が、ボール投げと跳びこしくぐり、25m走の値がA群、B群の幼児よりも高い傾向にあった。一方、女児においては、ボール投げと跳び越しくぐりにおいて、歩数の多い群の幼児の方が、歩数の少ない群の幼児よりも値が高い傾向があった。

(3) 男児においては、歩数の少ない子どもの中に、身体調整力や身体コントロール能力が高いがゆえに、歩数が少なく維持されている子どもがいることが示唆され、女児においては、歩数の多いことが、その子どもの体力・運動能力の高さに影響を与えている可能性が示された。

本研究は、平成20年度科学研究費(基盤研究(A) 20240065. 研究代表者 前橋 明)の助成をいただいて行われた。

## 文 献

- 1) 前橋 明: 最新健康科学概論, 朝倉書店, pp.110-112, 2005.
- 2) 前橋 明: 幼児の健康管理のための生活条件—身体活動量と体力にかかわる生活習慣—教育アンケート調査鑑 2001年版 上, pp.846-849, 2001.
- 3) 岡崎節子・前橋 明他: 生活習慣の見直しを必要とする幼児の体温・握力値・歩数について, 幼少児健康教育研究9(1), pp.1-7, 2000.
- 4) 長谷川 大・前橋 明: 保育園幼児の生活状況と体力・運動能力に関する研究(第4報)—睡眠時間別にみた体力・運動能力—, 日本幼少児健康教育学会第27回大会【秋季:大阪大会】, pp.14-15, 2008.

## 高等教育期における積極的身体運動の必需に向けて ～現代社会における体育実技関連科目群の果たす役割～

○ 鈴木英悟（東海大学非常勤講師）

キーワード：

- 大綱化（大学設置基準）
- 生涯スポーツ（Life Integrated Sports）
- FD（Faculty Development）
- Core Curriculum
- Para Curriculum
- Hidden Curriculum
- Accountability & Accreditation

### I. はじめに

今夏（2008年8月8日～24日）中華人民共和国の首都北京を主な会場として開催された第29回夏季オリンピック（＝北京オリンピック）には、世界の204の国と地域が参加し、28競技302種目が行われ、世界がスポーツの祭典に熱狂し幾多の感動を残し、いくつかの課題を抱えつつも成功裡に幕を閉じた。わが国においても、一段とスポーツに対する国民の興味、関心、期待が高まった今回のオリンピックでもあったといえよう。しかしオリンピックフィーバと言わんばかりに一時の盛り上がり、あるいは、「旬・流行」として闇雲にスポーツ・運動を行えば良いというものではない。

衆知のとおり、スポーツ・運動は人間が積極的健康を得るために不可欠な要素の一つであるが、自然発生的に生理的欲求現象として生起してはこないことから、個人の自己責任のごとく、その実施には深い理解と不断的努力に委ねられることとなる。しかしわが国の生活形態・労働環境等から鑑みると、最早、個人の裁量の範疇を超えているといっても過言ではない。それは現代社会のライフスタイルそのものが個人の判断によらない領域を多く包含するからに他ならない。

幼少期から高等教育期に至る教育諸課程において実施される身体運動（Physical Exercise）や身体活動（Physical Activity）は、それぞれその後の個人の身体文化に深く影響する重要な時期であることに疑いはない。特に高等教育期の教科としての“身体運動の学びと実践”は、多くの学生にとって、最後の機会であると言ってもよい。まさにこの高等教育期こそ、将来にわたる運動習慣の日常化や生活化を図ることができる知識・技能を養い、生涯スポーツに誘う恰好の時期でもある。非日常としてのスポーツ活動ではなく、むしろ生活の中(日常生活)にう

まく積極的な“身体運動・身体活動”が振り込まれている意味を持つ“生涯スポーツ（Life Integrated Sports）”の実践としての重要な機会<sup>1)</sup>として存在しなければならない。

本研究は、高等教育期における積極的身体運動の必需の意味を明らかにし、現代社会における体育実技関連科目群の果たす役割はどのようなものなのかを明らかにしていく。

### II. 大学設置基準の大綱化の流れから生じてきた 現行の体育実技関連科目が抱える諸課題

わが国の大学における教養教育（あるいは一般教育）は、橋本信也によるリベラルアーツ教育を考える *On the Liberal Arts in General Education* をまとめれば、第二次世界大戦後、大学基準協会による「大学基準」によって、米国の大学（主に1940年代のHarvard University）のリベラルアーツ教育をモデルとして1947年（昭和22年）に始まった。もちろん米国のGHQの指令を受けて行われたものであり、同年に制定された学校教育法によってそれまでの旧制高校、大学予科、高等師範学校などが廃止され、これに代わって、様々な旧制高等教育機関を6・3・3・4制の学校体系のもと、新制小・中・高等学校それに続く新制大学に一元化し制定された。大学の目的については、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用能力を展開させることを目的とする」と規定し、人間教育の基盤の上に学問研究と職業人養成を一体化しようとする理念を掲げた。一般教育科目が重要視されることとなり、これを受け1956年（昭和31年）に制定された大学設置基準において、人文・社会・自然の諸科学の3系列均等必修の原則が大学教育の中に組み込まれた。この目的は、「豊かな教養と広い見識を具備した人材育成」を行うものであった。

しかしながら、その実施の中で次のような1)から3)の問題<sup>2)</sup>が生じ始めた：

- 1) 各大学において、少人数教育や学生と教員の密接な交流などの全人的な教育を可能とするための教員数や施設などの条件整備が十分でなく、多くの場合、実際の授業は一般教育の理念・目標と乖離したものになってしまっていたこと

- 2) 一般教育を担当する組織や教員に、その理念が必ずしも浸透しておらず、学生にとって一般教育の内容が高等学校教育の焼き直しに映る一方、教員側にも一般教育の意義や目的が不明確であり、また、専門学部との連携協力も不十分であったこと
- 3) 昭和 31 年から、大学設置基準の大綱化される平成 3 年までの大学設置基準においては、人文科学、社会科学、自然科学、外国語、保健体育などの授業科目の区分や履修単位などが一律に定められており、進学率の上昇に伴い多様化した大学の実態に適合しなかったこと

こうした問題点を踏まえ、大学審議会の「大学教育の改善について」の答申や大学設置基準の大綱化【1991年6月(平成3年)改正(施行は1991年7月)】により自己点検・評価システムの導入等が提言された。大学設置基準 19 条において「大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成するものとする」、「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するように適切に配慮しなければならない」とし、教育課程の重要性を明言した。これを受け、一般教育等の科目である三系列(人文科学、社会科学、自然科学)、外国語、保健体育の明確な区分化が姿を消し、これに対応する形態で、一般教育関連科目の卒業要件となる必要単位数や必要科目数の規制も大幅に緩和されることとなった。その結果、各大学は学部教育を自由に編成でき、多様で特色の有るカリキュラムの構成が一段と可能となり、各大学で従来の専門教育と一般教育との相互乗り入れが実現した。

大学設置基準の大綱化により、1) 各大学における教養教育の改革の取り組みを促進させ、多くの大学における「教養教育の“くさび型”のカリキュラム編成等の教育」と「専門教育の“一貫教育”」の実施、2) 特色のある授業科目の導入、3) カリキュラム改革による授業科目選択肢の拡大による Semester 制の導入、4) 学生による授業評価等を通して指導方法等の改善、等々の取り組みを行う大学が増加するなど、新たな改革の変化がみられた。さらに 1999 年(平成 11 年)の大学設置基準により以下のような：

- 1) 各大学の自己点検・評価の義務付
- 2) 履修科目登録単位数の上限設定
- 3) 教育の質向上のため、ファカルティ・ディベロップ

メント (Faculty Development ; FD) の努力義務化等の改正<sup>3)</sup>が行われた。

大綱化の当初のねらい<sup>4)</sup>は、「①各大学が一般教育科目と専門科目との密接な連携を図りながら、カリキュラム全体を通して“学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることが出来る能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材を育てる”という教養教育の理念・目的を理解させること、②大学のカリキュラム構造の多角化が益々進行し、なおかつ各大学で異なる教育理念・教育環境の中で、一般教育の在り方を一律に規制することが困難となり、規制緩和による自主的な改革の取り組みを促進させることで、学士課程教育の革新及び多様化を期待し、一般教育を柱とする教育課程の編成により、学部における専門教育が改革されること」であった。

しかし大綱化を契機としてカリキュラム改革や教育組織の見直しが進展する一方、結果的には当初の目的から乖離することとなり、カリキュラム改革で顕著に見られる動向は、従来の一般教育科目の著しい減少傾向、および一般教育の理念の軽視傾向へとすすんだ。加えて、一般教育の必要性・重要性は強調されてはいるものの、実際の教育現場において、むしろ学部教育は事実上専門教育を重視する傾向へと移行することとなり、特に保健・体育実技関連科目は、この大綱化により開講科目数を大きく減少させる科目群<sup>5)</sup>となった。

このように大学設置基準の大綱化、その後の改正を踏まえて、多くの大学・短期大学において一般教育・教養教育の多様なカリキュラム改革が積極的に実施されたが、次のような新しい課題<sup>6)</sup>：

- 教養教育の位置づけを曖昧にしたまま、教養教育に関するカリキュラムを安易に削減した大学が存在する
  - 教養教育に対する個々の教員の意識改革が十分に進んでおらず、ともすれば専門教育が重要で教養教育を面倒な義務と考える教員が存在する
  - 教養教育を担当する教員が積極的に取り組むインセンティブが不十分なために具体的な教育方法や内容の改善が進んでいない
  - 教養部に代わって設置された教養教育の実施組織の学内での責任体制が明確でなく、その結果教養教育の改善が全学的取り組みとなっていない
  - 学生の側にも教養教育を含め学部 4 年間の教育に対する目的意識が明確ではなく、教養教育に熱心に取り組む意欲が乏しい
- なども抱えることとなった。

### III. 高等教育期における体育実技関連科目の 教育内容及び指導形態の再考

大学進学年齢である 18 歳人口の減少と共に大学全入時代が到来した。その結果、学生の学習意欲の低下も散見され、大学及び大学教員はこれまで以上に個々の学生に対する学習の動機付けと学習意欲を駆り立てる指導方法や指導内容の再考が喫緊の課題とされている。各大学が学生に対しより高い目的意識と学習意欲を持たせ、組織的に充実した教育活動を展開していくには、各教員が共通理解を持ちつつ具体的な教育と適切な教育指導の実践が必要となっている。学習者の視点に立ち理解しやすい授業展開を模索しながら教育の質を確実に確保するため、具体策の一つとして、FD (=Faculty Development ; 大学における教育活動の中核である授業の実態を確実に把握することを基本とし、その上で大学の組織的教育活動に対する評価及び個々の教員の教育活動に対する評価を行い、教育内容等を改善することを目的とし、教員の資質向上を促す教員の組織的な研究及び研修) が導入された。文部科学省が 2005 年に実施した調査では大学全体の 81% (575 大学) が実施し、2008 年度からは全ての大学・短期大学に FD を義務付けている。

また、各科目担当教員が学生に対してあらかじめ授業における学習目的や目標達成のための授業の方法・計画を明確に示すとともに、学生が自主性を持ち事前に行う予習や事後の復習を行えるよう教授細目 (Syllabus) を適切に示す形態が整うこととなった。授業内容および授業進行の明確化により、シラバス作成を通して当該授業科目の中心あるいは核となるカリキュラム (Core Curriculum) とそれに関連する周辺カリキュラム (Para Curriculum) を考慮したカリキュラムの範囲 (Scope) と論理的順序 (Sequence) <sup>7)</sup> が提示されることが促された。しかしながら、授業形態とすればパフォーマンスの領域に近似の大学における体育実技関連科目群においては、計画したシラバス通りに授業展開することの難しさも生じている。課外活動として行われる特定のスポーツ種目を行う部活動と異なり、体育実技関連科目の授業では、個々人の運動経験・運動能力・体力等様々な異なったレベルの学生が混在している。換言すれば、技能の達成度や修得度を高めるために、本来、約束事として提示されたシラバスとは少なからず異なる形態で授業展開・進行を余儀なくされる隠されたカリキュラムとも言うべき Hidden Curriculum を実施せざるを得ない実態が存在する。このことが時に学習目的や目標達成の曖昧さを醸し出す結果ともなり、コースや学科の中に科目として設置されている適合性の観点から、Accountability や Accreditation が課題となる。これら

2 語については、この種の教育の場面では Accountability が単純に説明責任などと訳されるべきものではなく、むしろ約束事に対する十分な責任を果たしているかという意味に捉えられるべきで、そこに教育の Accreditation としての信頼性が生まれるといえる。

大綱化による様々な体育実技関連科目の名称の多様化 (例えば、同様な語の使用であっても、健康スポーツ、健康とスポーツ ; 健康・スポーツ等) が、科目の本質的意味の誤解 (本質からの乖離) へと繋がっている。これらの多様化している科目名称に対し、どのように評価し、整理すべきか今後の課題としても、少なくとも学生にとってその科目の履修の必要性や価値、科目設置の目的を改めて明確に提示し、理解を促さなければならないと言える。“これまでの時代”とは異なり、“これからの時代”は、強い意識とともに関心を持たなければ、日常生活の中で明らかに身体運動を必要としない生活様式 (ライフスタイル) に留まることとなる。今までの身体運動への関心とこれからの身体運動の必要性に対する関心の異なりは歴然としていて、生活習慣病の若年化等も含めて誰もが認識していることに疑いはない。しかしその認識と現実とは裏腹で、大学では運動は特定の学生のみが実施すればよいと考え勝ちで、全ての学生にとって必要不可欠なものとは考えられていない。このことは学生に限ったことではなく、多くの学部教員もまた同じ考え方の傾向が強い。

通常、健康度の高い青年期において、個人の関心や興味あるいは志向によって目的的に体育実技関連科目の履修が行われるとすれば、身体運動を手段化してきた従来の体育 (体育実技関連科目) から、これからの教育カリキュラムでは、その内容や形態を十分に再考する必要がある。目的である“活動の楽しさや面白さ”を伝えながら、手段的である“健康の維持や体力の増進”も不可欠なねらいとして包含し、両者の比率・割合を勘案しながらさらに生涯スポーツに誘う種目活動の諸技術の向上を進めていく教育内容と形態が考えられるべきである。

ファインアートとは異なり、時間的経過とともに消失を余儀なくされる形態のパフォーマンスの領域に近似な体育実技関連科目群において“動機付け (Motivation)”と“準備性 (Readiness)”を理解したうえで、身体教育 (Education of the Physical) と身体活動を通しての教育 (Education through the Physical Activities) である高等教育期における体育実技関連科目の教育内容及び指導形態の再考が望まれる。

### V. 結びにかえて

スポーツ・運動は人間が積極的健康を得るために不可

欠な要素であるとともに、個々人が高い意識のもと自ら運動する機会を創意工夫し、ライフステージ毎に適した身体活動を継続していかねばならないものである。

高等教育を卒業・修了し社会人として生きることになるが、生活環境が大きく変わり、労働条件等も影響し、スポーツ・運動の実施を阻害する要因が重なり、運動の機会が減少し、運動時間の確保や新たに運動を始めるきっかけを創ることさえも困難になる。生涯スポーツへの誘いとして“最終的な身体運動の機会提供”となる高等教育機関における教育として行われる“体育実技関連科目”の重要性・価値があると言える。義務教育を修了し社会に出る者、その後の高等学校を終え社会に出る者、あるいは高等教育機関に進む者と多様であり、研究科への進学をする者もいるが多くの学生にとって大学における教育課程での教科として体育実技関連科目群いわゆる身体運動の学びと実践は最後の機会であると言っても過言ではない。この機会に、将来にわたる運動習慣の生活化を図ることができる知識・技能を養い、生活の中にスポーツ活動が組み込まれている意味を有する“生涯スポーツ(=Life Integrated Sports)”を可能にする意欲・認識を高める教育活動が不可欠となる。

大綱化では、一般教育科目の軽視化、特に保健体育科目などの減少による諸課題を踏まえ、教育振興基本計画のなかで、“健やかな体を育む教育の推進”が掲げられ、豊かな心と健やかな体を備え持つ人間の育成を図るためには、体育をはじめとする教育が必要である<sup>8)</sup>ことも明確にされた。“健やかな体”を獲得し、充実した人生を送るには、幼少年期から適切な身体運動(Physical Exercise)や身体活動(Physical Activity)を行うとともに「知育・徳育・体育」のバランスの取れた成長を促すための教育も極めて重要である。また、生涯にわたり、運動を楽しみ、親しむための技能や意欲を積極的に育成するとともに、スポーツ・運動を日常生活の中に取り込む、いわゆる“生活習慣化”させる工夫と努力が求められている。

このよう観点について中央教育審議会<sup>9)</sup>も以下：

- ◇体力やスポーツの理解を深めるための教育の充実
- ◇自ら体を動かすようになるための動機付けへの工夫
- ◇運動する機会の確保
- ◇教員や指導者の養成と確保
- ◇スポーツにおける学校と地域連携の推進
- ◇より高い競技レベルに到達するための機会確保について検討事項として掲げている。

個々人が健康で生活を送るために必要となる体力やスポーツの重要性についての理解を深めるための教育と、自らが積極的に身体を動かす機会と動機付けを行う教育

環境の拡充が必要となるが、生涯スポーツとして運動を継続していく機会を確保するためには、個人の意識改革はもとより、行政による総合型地域スポーツクラブ等の政策的啓発や普及をさらに展開していく必要があると考える。

運動を継続的に行っている学生にも、あるいは個人の様々な要因により現在まで運動する機会をあまり持ち得なかった学生にとっても、教育の最終的な期間である高等教育期で行われる体育実技関連科目群の履修は、積極的身体運動に対する正しい理解や必要運動量の確保のみならず、将来の継続的なスポーツ・運動の実施につながるスポーツ活動・運動の楽しさやおもしろさを獲得する最後の機会でもある。そのような“動機付け・きっかけ”を与えることにより、生涯スポーツ(=Life Integrated Sports)へと誘う役割を果たす必需的な科目群であろう。

単に体育実技関連科目の単位を取得すればよいのではなく、継続的な運動により、全ての人々が迎える中高年期において“健康寿命”<sup>10)</sup>を延ばすうえでも若い世代である高等教育期における至適運動の実施はその後の生活に多大な影響を与えるものであることに疑いはない。

#### 【引用文献】

- 1) 鈴木英悟「スポーツ健康科学実技の指導～楽しさを含む‘スポーツ活動・健康活動’の具現化に向けて～」東洋大学公募用資料2007年10月8日、p.2.
- 2) 中央教育審議会「新しい時代における教育の在り方について(答申案)に対する意見募集について」2001年12月27日 p.16.
- 3) 中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について(答申)～我が国の大学における教養教育について～」2002年2月21日、p.18.
- 4) 中央教育審議会「新しい時代における教育の在り方について(答申案)に対する意見募集について」2001年12月27日 pp.16-17.
- 5) 清水一彦「大学教育改革の現状と課題」『大学研究』筑波大学大学研究センター研究紀要、第11号、1993年8月参照.
- 6) 中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について(答申)～我が国の大学における教養教育について～」2002年2月21日、p.19.
- 7) 鈴木秀雄『新版 スポーツ・体育・運動実践考～“至適運動のすすめ”と“生涯スポーツへの誘い”～』石橋印刷刊、2007年3月、pp. 90-97.
- 8) 中央教育審議会「中間報告」、2007年11月、p. 12.
- 9) 前傾書、p. 24.
- 10) 中原英臣、「健康未来講座～平均寿命よりも健康寿命を延ばそう!～」藤沢セミナー、2008年11月12日.

## 幼稚園就園 5 歳児の生活経験と身体活動量

○三浦 唯敬（東海大学大学院生） 西野 仁（東海大学）

### I. はじめに

近年、子ども（児童・生徒）について、「身体を動かすことが少なくなった。」といわれている。厚生労働省<sup>1)</sup>は、児童・生徒の身体活動・運動の現状について、次の3点を報告している。①生徒・児童における身体活動量低下、体力の低下、小児肥満の増加、テレビゲームなどの非活動的余暇時間の増加、夜型生活と生活習慣との関連などの問題。②運動を実施する児童・生徒と、しない児童・生徒の二極化。③身体活動量低下の原因としては、成人同様に交通手段の発達他、外遊びの減少やテレビ、テレビゲームなどの非活動的に過ごす時間の増加。

児童・生徒が身体を動かすことが少なくなったことについての報告はあるが、幼児の身体活動については、数例の報告があるだけで、実態はよくわかっていない。おそらく、児童・生徒と同様に、幼児にも運動をする子、しない子がいるのではないだろうか。

幼児の身体活動に関わる要因には、①家族の関係（親の子育てや教育に関する考え方・親の年齢・親の趣味・親の子どもに使える時間・家族構成等）、②本人に関わること（性別・年齢・性格・健康状態（精神的状況・身体的状況）・食事・睡眠・友だち・遊びの技術・おもちゃ・習い事・幼稚園等）、③居住地域の環境に関わること（居住地域・居住空間・公園・天候・季節等）が考えられる。

身体活動に関わる様々な要因と関連して幼児の生活経験は構成される。起床から就寝までどのように過ごしているかは幼児によって違い、一日の過ごし方が違えば身体活動量も違う。すなわち、幼児の生活経験は、身体活動量に関係する。

今回は、研究の第一段階として、幼児の生活経験と身体活動の関係を記述することを目的とした。具体的には、実際に幼児がいつ、どこで、どんな場面で、どのくらい身体を動かしているのかを調べ、幼児は、いつ活発に体を動かしているのかを明らかにしたい。

### II. 関連の研究

#### 1. 幼児の生活経験に関する先行研究

武藤ら<sup>2)</sup>は、2000年と2005年の幼児の生活時間の比較を、保護者に対するアンケート調査により行い、園児の園で過ごす時間が長くなってきている、就寝時間が遅くなってきている、睡眠時間が短くなってきていることを報告している。厚生労働省<sup>3)</sup>は、子どもの生活の状況を、児童館や児童公園で遊ぶ子は、全体の約8割おり、「同年の子」、「大人（親、祖父母等）」と遊ぶ子は全体の約9割おり、習い事をしている子は半数以上と報告している。

生活経験に関する先行研究は、保護者等に対するアンケート調査が主であった。アンケート調査は、起床時刻や就寝時刻など、生活行動ごとの時刻や時間の回答を求めているため、1日の生活の継続した時間の流れの中でどのように推移しているかを捉えるには限界がある。

#### 2. 幼児の身体活動量に関する先行研究

神奈川県教育委員会の報告<sup>4)</sup>によると、50%以上の保護者が子どもとの運動遊びを「1週間に1回以上」しており、運動関連の習い事をしている幼児や保護者と週1回以上の運動遊びをしている幼児の運動の運動能力は高い傾向にある。逸見ら<sup>5)</sup>は、幼児の睡眠と身体活動の関係について、睡眠時間の長い幼児は、睡眠時間の短い幼児に比べて1日の歩数が有意に多く、走行時間が有意に長いことを報告している。また、幼児の身体活動量について、一軸加速度計を用いた報告<sup>6)</sup>もあるが、身体活動量を生活の流れとあわせて記録した先行研究はない。

子どもたちが、いつ、どこで、どのくらい、身体を動かしているかという身体活動量を知るためには、生活の流れの中で測る必要がある。

### III. 研究の目的と方法

#### 1. 研究の目的

研究の目的は、幼稚園就園 5 歳児は、いつ、どこで、活発に身体を動かしているかを明らかにすることである。

#### 2. 研究の方法

幼稚園就園 5 歳児を対象に、生活経験調査と身体活動量の測定によりデータを収集し、特徴を記述する。

##### (1) 生活経験に関する調査

NHK 放送文化研究所の国民生活時間調査<sup>7)</sup>で用いられた生活時間調査票をもとに、幼児の生活に適した調査用紙を作成し、保護者に 7 日間の生活経験の記録を依頼する。

幼稚園での活動は、クラスの担任教諭に教育活動の記録を依頼する。

##### (2) 身体活動量の測定

身体活動量の測定は、(株)スズケン社製の生活習慣記録機「ライフコーダ EX」を用いる。対象となる幼児に、起床から就寝までライフコーダ EX を装着させ、全員同一の連続 7 日間測定をする。

ライフコーダ EX は、加速時計を内蔵しており、1 日ごとの総消費量(総エネルギー消費量)、運動量(運動エネルギー量)の測定が可能である。また、運動強度を 10 段階(強度 0～9)に算出し、記憶ができる。強度 0 は「安静」、強度 1～3 は「低強度(歩行)」、強度 4～6 は「中強度(速歩)」、強度 7～9 は「高強度(強い運動)」の 4 段階に相当し、2 分間の最頻値を 4 段階の身体活動レベルとして、6 週間分の記憶ができる。

このライフコーダを用いた身体活動量の測定は、角南ら<sup>8)</sup>により測定結果の妥当性について報告がされている。

### IV. 調査の実際

#### 1. 調査の対象と期間

東京都内にある S 幼稚園の就園 5 歳児、合計 20 名(出席番号順の男児 18 名、女児 2 名)を調査対象とした。なお、対象となる幼児の通園する幼稚園及び保護者に、研究の趣旨説明を十分に行なった上で実施をした。調査記録の回収は、体調不良により欠席が続いた男児 1 名を除く 19 名(95%)から記録を得られた。

調査の期間は、2008 年 9 月 16 日(火)から 9 月 22 日(月)までの連続した 7 日間で行った。この時期は、2 学期の始業式が 9 月 5 日(金)にあり、9 月 8 日(月)の普通保育開始から 2 週目にあたる。ライフコーダ EX は、9 月 16 日(火)の幼稚園登園時に担任教諭により装着を開始し、9 月 22 日(月)の幼稚園降園時に担任教諭により回収した。

#### 2. 集計と分析

データ数が少ないため、統計的な分析は平均値と標準偏差を求めることにとどめ、ライフコーダ EX に記録された 1 日の総消費量(Kcal)と習い事との関係を比較した。ライフコーダ EX で得られたデータは、CSV ファイルとしてパソコンで読み込みエクセルで集計した。また、ライフコーダ EX に記録された運動強度が 4～6(速歩)と 7～9(強い運動)を示した活動について、生活経験調査で得られたデータとあわせて分析した。

### V. 結果

#### 1. 1 日の身体活動量について

図 1 は、対象者の 1 日ごとの総消費量である。ライフコーダ EX の装着忘れやスイミングや剣道などをするためにライフコーダ EX を外した日の記録は除外した。9 月 16 日と 9 月 22 日は、ライフコーダ EX の装着開始と回収の日であったため、両日の記録も除外した。

図 2 は、対象者の 1 日平均の総消費量である。最大値は 1,472 キロカロリーで、最小値は 1,075 キロカロリー、平均値が 1,230.5 キロカロリー、標準偏差は 107.2 キロカロリーだった。

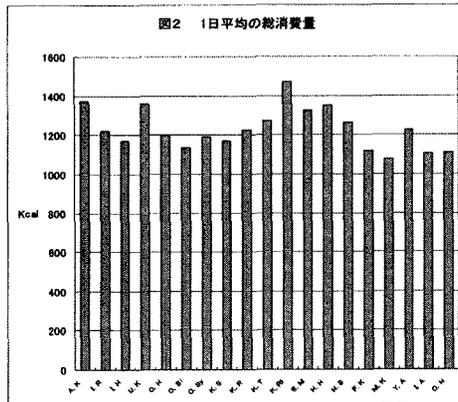
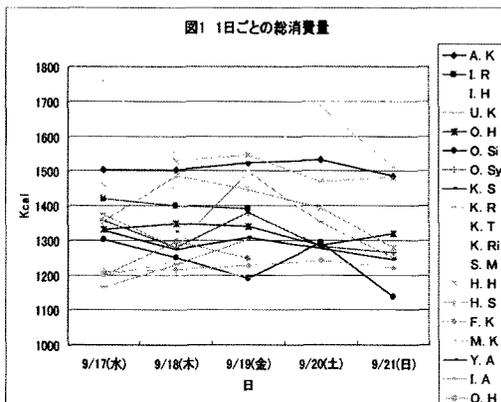


表1 1日平均の総消費量と習い事の関係

| NAME  | 1日平均の総消費量 (Kcal) | 習い事       |            |         |         |         |           |
|-------|------------------|-----------|------------|---------|---------|---------|-----------|
|       |                  | 9/16(火)   | 9/17(水)    | 9/18(木) | 9/19(金) | 9/20(土) | 9/21(日)   |
| K. Ri | 1,472            | 通信教育      | サッカー       | 通信教育    | 通信教育    | 通信教育    | 通信教育      |
| A. K  | 1,372            | サッカー      | 公文の宿題      | サッカー    | サッカー    |         | 公文の宿題     |
| U. K  | 1,359            |           | 体操教室       |         | スイミング   | 公文の宿題   |           |
| H. H  | 1,353            | 幼児教室      | スイング-英会話教室 |         | 英会話教室   | 英会話教室   |           |
| S. M  | 1,327            |           |            | 体操教室    | 英会話教室   |         |           |
| K. T  | 1,275            |           | 通信教育       | 通信教育    |         |         | スイング-通信教育 |
| H. S  | 1,264            | 幼児教室      | 幼児教室       | 幼児教室    | 幼児教室    | 幼児教室    |           |
| K. R  | 1,226            | 幼児教室      | 幼児教室       | 幼児教室    | 幼児教室    | 幼児教室    |           |
| Y. A  | 1,225            | 幼児教室      | スイミング      |         | 剣道      | 剣道      | 剣道        |
| I. R  | 1,222            |           |            |         |         |         |           |
| O. H  | 1,203            | 幼児教室      |            |         | 幼児教室    | 幼児教室    | 音楽教室      |
| O. Sy | 1,191            | 音楽教室-通信教育 | 通信教育       | 通信教育    | 通信教育    |         | 通信教育      |
| I. H  | 1,171            | 音楽教室      |            | 体操教室    | 英語教室    |         |           |
| K. S  | 1,171            |           |            |         | 幼児教室    | 音楽教室    |           |
| O. Si | 1,138            |           |            |         |         |         |           |
| F. K  | 1,121            | サッカー      | サッカー       |         |         | サッカー    | サッカー      |
| O. Hi | 1,110            | 公文の宿題     | 公文の宿題      | 幼児教室    |         | 公文の宿題   | 公文の宿題     |
| I. A  | 1,107            | 通信教育      |            | 幼児教室    |         |         |           |
| M. K  | 1,075            |           |            |         |         |         |           |

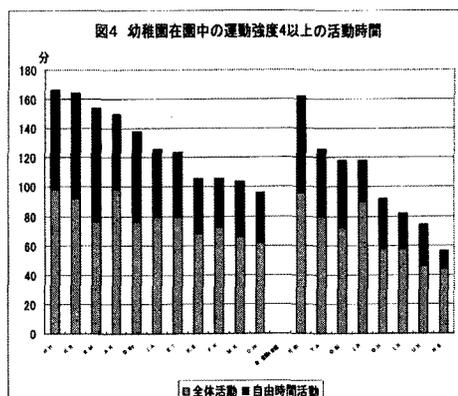
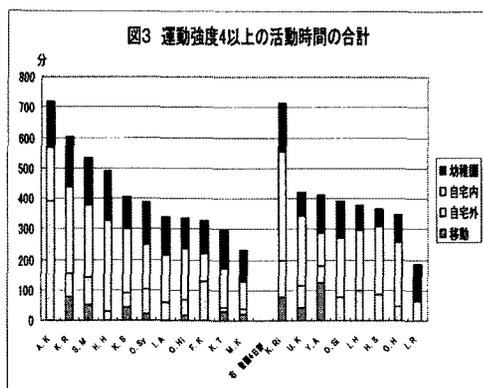
## 2. 習い事について

19名のうち17名がなんらかの習い事をしており、3日以上通っていた。表1は、1日平均の総消費量と習い事の関係、総消費量の高い順に並べたものである。サッカーや体操など、身体を動かす内容の教室に通っている子どもの総消費量が高いことがうかがわれる。

## 3. 活発に身体を動かしている時について

図3は、運動強度が4以上を記録した活動時間を加算し、すごした時を幼稚園在園時、自宅内にいる時、自宅外にいる時、移動時に分けてあらわしたものである。なお、図の右側のK. RiからI. Rの8名は、9月19日(金)に小学校進学面接のため、幼稚園をお休みをしている。運動強度4以上の活動時間の合計の平均値は414.7分で、最大値は718分、最小値は184分、標準偏差は143.2分だった。また、幼稚園在園時の平均値は119.1分で、最大値が166分、最小値は56分、標準偏差は31.5分だった。活発に体を動かしている時間の合計には、個人差がうかがえる。しかし、活動時間の長い子も短い子も、幼稚園ではある程度同じように活発に体を動かしているとみることができる。

図4は、幼稚園在園中に運動強度4以上を記録した活動について、全体活動時と自由時間活動時に分けてあらわしたものである。全体活動時の平均値は74.3分、最大値が98分、最小値が44分、標準偏差が16.3分だった。自由時間活動時の平均値は44.7分、最大値が78分、最小値が12分、標準偏差が17.8分だった。全体活動は、子どもたち全員に身体を動かす機会を提供しているものと考えられる。



## VI. まとめと考察

本研究は、幼稚園就園 5 歳児が、いつ、どこで、活発に身体を動かしているかを明らかにすることを目的とした。

1 日平均の総消費量は、平均値が 1,230.5 キロカロリー、最大値が 1,472 キロカロリーで、最小値が 1,075 キロカロリー、標準偏差は 107.2 キロカロリーだった。

19 名のうち 17 名がなんらかの習い事をしており、3 日以上通っていた。サッカーや体操など、身体を動かす内容の教室に通っている子どもの総消費量が高いことがうかがわれた。

運動強度が 4 以上の活動時間の合計の平均値は 414.7 分で、最大値は 718 分、最小値は 184 分、標準偏差は 143.2 分だった。活発に体を動かしている時間の合計には、個人差がうかがえた。しかし、よく動いている子どもあまり動かない子ども、幼稚園ではある程度同じように活発に体を動かしていた。また、幼稚園での全体活動は、子どもたちが活発に身体を動かす機会を提供していた。

今回の調査は、対象が 20 名であったため、統計的な分析をするにはデータが少なかった。今後、さらに調査を実施し、幼児の生活経験と身体活動量の関係を明らかにしたい。

## 引用・参考文献

- 厚生労働省、21 世紀における国民健康づくり運動（健康日本 21）について 報告書、2000
- 無藤隆・福丸由佳・藤村憲子・桑野純子・邵勤風・田村徳子、ここ 5 年間における幼児の生活時間の変化-1995 年と 2000 年との比較-、日本保育学会大会発表論文抄録 No54、PP54-55、2001
- 厚生労働省、第 6 回 21 世紀出生児縦断調査結果の概況、2007
- 神奈川県教育委員会スポーツ課・日本体育大学身体動作研究室・日本体育大学レクリエーション学研究室、平成 19 年度幼児の運動能力測定報告書、2008
- 逸見光・萩裕美子・鈴木志保子・石田良江・山本直史・吉田裕、幼児における睡眠時間と身体活動の関連、鹿屋体育大学研究紀要第 35 号、PP15-21、2007
- 塩見優子・角南良幸・沖島今日太・吉武裕・足立稔、幼児の日常生活身体活動量についての研究（第二報）-身体活動量と生活習慣の関連性の検討-、体力科学 Vol53.No6、P849、2004
- 2005 年国民生活時間調査、NHK 放送文化研究所、2006
- 角南良幸・塩見優子・沖田今日太・西牟田守・吉武裕・足立稔、幼児の日常生活身体活動量についての研究（第一報）-加速度計による身体活動量の妥当性-、体力科学 Vol. 53 No. 6、P844、2004

## 保育者の『遊び』の認識と実践に関する研究

～指導者養成との関連から～

清水一巳（名古屋女子大学短期大学部）

### 1. はじめに

本年3月に保育所保育指針の改定が行なわれ、これまでの通達から告示とされ、保育の最低基準が示されたことになった。その中で「遊び」と保育（教育）の関係については、簡素されたものの、これまでのものを受け継いでおり、「乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること（保育の方法）」や「保育士等は、子どもと生活や遊びを共にする中で、一人一人の子どもの心身を把握しながら、その発達の援助を行なうことが必要である」と示されている（傍点および括弧内、報告者加筆）。

本報告では、子どもの「生活」と同様に重視されている「遊び」に焦点をあて、保育者－子ども関係における「遊び」の意味を明らかにすることを目的とする。小川氏（2008,7）は「遊び中心の保育」の重要性と関連し、「人生経験的体験が身につく営みとして、遊びを保障し、共感する保育者をどう養成できるのだろうか」と保育者養成の課題を提示している。遊びが重視されている「保育」の場において、保育者－子ども間で「遊び」がどのように伝達されているのか。保育者の遊びへの視点を取り上げ、遊びの場を提供する力（実践力）との関係から考察していく。

### 2. 研究枠組

保育指針では、保育士の役割を「倫理観に裏付けられた専門的知識技術および判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」としている。これらを踏まえ、保育を実践することが保育士には求められることになる。また、幼稚園教育要領（2008）では幼稚園教育の基本として、「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児とともによりよい教育環境を創造するように努めるものとする」とされている。

その役割を実行するためには、第一に、「知識－経験」により得られた力量が考えられる。保育者養成校として保育現場から求められていることは、「知識」、「スキル（技法）」、「態度」を総合的に携えていること（尾島,2006,171）だという。さらに、尾島氏は保育者養成校在学時に、習得すべき事項で最重要視されているものは「人間関係やコミュニケーションの技能」としている。人間関係やコミュニケーションにはもちろん、他者の存在が重要になってくる。自己のもつ知識に加え、他者との関係性により形成される、いわゆる経験知というものが重要になるのである。第二に、平成元年の幼稚園教育要領の改訂で「幼稚園教育は、幼児の特性をふまえ環境を通して行うものであることを基本とする」と示されたことにより、環境（全体）への視点が重視されるようになった。つまり「個別－全体」への視点を持ち、子どもに向き合う力量が必要とされている。

松田氏（2007）は実践力を構成する要素として、それぞれ思考－行動、参加－距離化と

いう軸により、科学知、臨床知、体験、技術という要素を提示し、「授業実施力」、「学習集団構成力」、「授業構想力」、「企画力」を導き出している。この考えを「遊び」を中心とする保育活動へと援用し、遊びの実践力とする。

尾島氏（2006）は、保育者の専門性について検討し、その特殊性を「子どもともにある」発達援助であるとしている。保育現場での活動実施能力つまり実践力という捉え方は非常に有用な視点になると考えられる。

《調査》『『大人のあそびへのまなざし』の調査』

（平成 19 年 1 月実施、F 市内の保育所 174 施設に対する質問紙の郵送法による調査）

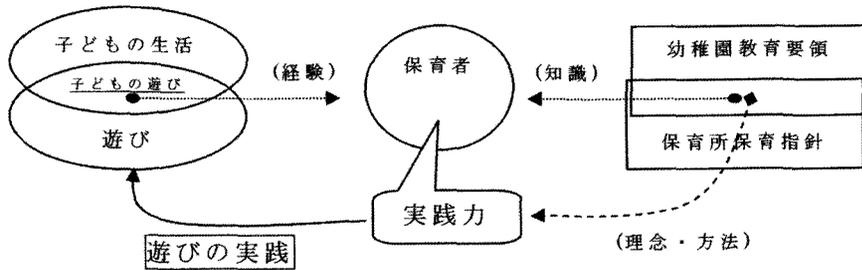


図 1. 遊びの実践力形成の構図

3. 調査の結果

- ① 保育という場においては、教育的視点（「しつけ、教育」）との関わりにより「遊び」が認識されていた。
- ② 若年層の保育者ほど「遊び」を中心（媒介）にした人間関係への視点がもたれていた。
- ③ 遊びの実践力は、現在の保育者の認識では「遊びの構想力」、「遊び実施力」がその中心となっている。

（自由記述）

- ・ こどもは「自由遊びの時間＝遊びの時間」と思っているように感じます。
- ・ 大人が設定した遊びと自由遊びのバランスが必要だと考えます。
- ・ （職員が集団遊びを始めたあと）職員が抜け、子どもだけになると問題が生じ、問題解決を子ども同士で出来ないことが多い。

これらの結果をもとに、保育者の「遊び」の実践について考察を行なう。

付記：本研究の一部は、日本レクリエーション協会平成 19 年度研究助成（保育所におけるレクリエーション指導に関する研究）によるものである。

《参考・引用文献》

小川博久,2008「幼児教育において『遊び保育』は本当に可能か」,日本幼稚園協会編,『幼児の教育』第 107 巻第 2 号,4-7

尾島重明,2006,「第 11 章 専門職としての保育者養成」,田中亨胤、尾島重明、佐藤和順編,2006,『保育者の職能論』,161-171

松田恵示,2007,「体育教師の成長モデルに関する意識調査」,(第 58 回日本体育学会体育社会学専門分科会一般発表資料)

# 第38回日本レジャー・レクリエーション学会大会 ポスター発表・演題

■ 会場／4階中研修室

ポスター発表会場オープン 11:00～15:00  
ポスター質疑応答時間(発表者配置時間) 11:40～12:30

- P-1 大学生の環境に対する態度についての研究  
○加藤 幸真〔日本大学文理学部体育学科〕  
△恩田 裕介〔日本大学大学院研究生〕  
△澤村 博〔日本大学〕
- P-2 レクリエーション教育における実践的展開の報告  
○茅野 宏明〔武庫川女子大学〕  
長岡 雅美〔武庫川女子大学〕  
吉田 圭一〔武庫川女子大学〕
- P-3 高齢者の転倒予防のための運動あそびについて  
○上岡 洋晴〔東京農産大学地域環境科学部身体教育学研究室〕  
本多 卓也〔東京大学大学院教育学研究科身体教育学講座〕  
渡邊 真也〔社会福祉法人みまき福祉会身体教育医学研究所〕  
北湯口 純・鎌田 真光  
〔雲南市立身体教育医学研究所うなん〕
- P-4 アリゾナ州におけるTherapeutic Recreation視察報告  
○森 美和子〔岐阜聖徳学園大学〕  
△茅野 宏明〔武庫川女子大学〕
- P-5 四天王寺大学及び同短期大学部におけるレクリエーション・インストラクター資格取得状況とその課題  
ー資格取得卒業生追跡アンケートをもとにー  
○奥野 孝昭〔四天王寺大学〕  
△大西 敏浩〔四天王寺大学短期大学部〕
- P-6 学校運動部に対する地域スポーツクラブの活動支援  
ー愛知県三河地域におけるオリエンテーリングプログラムの事例よりー  
○松澤 俊行〔愛知教育大学大学院〕  
△杉浦 恭〔愛知教育大学〕
- P-7 西宮市レクリエーション活動協会の歩みと地域貢献への課題  
○田島 栄文〔甲子園短期大学〕
- P-8 民間野外教育活動団体における長期キャンプの実践  
○山下 雅彦〔福山平成大学〕
- P-9 長期キャンプにおける参加者の疲労の推移  
○黒杭 美郷〔福山平成大学〕  
△山下 雅彦〔福山平成大学〕
- P-10 大学キャンプ実習の参加者によるキャンプ場の施設評価  
○恩田 裕介〔日本大学大学院研究生〕  
加藤 幸真〔日本大学文理学部体育学科〕  
△澤村 博〔日本大学〕
- P-11 クッチャロ湖学生サミット(CASE1)について  
○平田 太良〔東京農産大学地域環境科学部造園科学科〕  
白銀 頭〔東京農産大学地域環境科学部造園科学科〕  
△栗田 和弥〔東京農産大学〕
- P-12 輪島市三井町におけるワークショップとその効果について  
○松島由佳里〔東京農産大学地域環境科学部造園科学科〕  
△麻生 恵〔東京農産大学〕
- P-13 横浜市美しが丘西追分公園における愛護会と地域との関わりについて  
○今井 健〔東京農産大学大学院農学研究科造園学専攻〕  
△栗田 和弥〔東京農産大学〕  
△麻生 恵〔東京農産大学〕

○印は、発表者  
△印は、正会員

## ポスター発表 抄録

P-1

大学生の環境に対する態度についての研究

○加藤幸真（日本大学文理学部体育学科）

△恩田裕介（日本大学大学院研究生）

△澤村博（日本大学）

キーワード：関心、動機、行動

今日、環境問題に関する話題は新聞、TV等によく耳にする。そのことから国民の環境に関する興味・関心は高まっているといえる。しかし、現状として中学校・高等学校で環境問題について学ぶ機会は多くはなく、大学生に至っては関係科目を選択しない限り皆無といっても過言ではない。そして、いくらマスメディアを通して地球環境の実態を知ったところで、環境問題に関心を示さないのでは、実際に行動につながってこないのではないだろうか。

そこで本研究では、大学が実施しているキャンプ実習に参加した大学生140名を対象とし、大学生の環境に対する態度に関心・動機・行動の3つの観点から明らかにすることを試みる。そのために質問紙による調査を行い、因子分析を用いて因子構造を明らかにしていく。また性差などの個人的属性による違いを検討して、大学生に必要な環境教育の在り方について模索するための一資料とする。

P-2

### レクリエーション教育における実践的展開の報告

○茅野宏明（武庫川女子大学）、長岡雅美（武庫川女子大学）、吉田圭一（武庫川女子大学）

武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科及び同短期大学部人間関係学科では、過去20数年にわたり、レクリエーション関連資格の取得をめざす学生の教育プログラムの一環として、通常期に講義・実技演習科目を開講するだけでなく、集中講義として宿泊型教育プログラム（宿泊教育）も実施している。本研究では、特に宿泊教育に関する実践的展開を報告し、今後の課題について考察することを目的としている。

宿泊教育は、毎年2月初旬に2泊3日を本学のセミナーハウス（北摂キャンパス丹嶺学苑）で開講している。平成19年度には48名（大学生21名、短大27名）が参加した。

指導者としての能力を向上する目的の宿泊教育は、実践力の習得と生活力の向上の2点を目標にしている。実践力研修では、①企画と運営、②楽しさや達成感の体験学習、を中心に展開し、生活力研修では、①時間の厳守、②施設の規律厳守、③協働、を重視した学習を展開している。

宿泊教育の終了時、学生たちの充実した表情が印象的である。「楽しく過ごす」と「だらしく過ごす」との違いを体験的に学習し、指導者としてあるいは母として、対人育成に携わる時の喜びが、人間社会の幸福化への道筋となることに気づき始めた表情が頼もしい。今後は、宿泊教育による行動変容を調査研究し、その効果を明らかにしたい。

## 高齢者の転倒予防のための運動あそびについて

- 上岡 洋晴（東京農業大学地域環境科学部身体教育学研究室）  
 本多 卓也（東京大学大学院教育学研究科身体教育学講座）  
 渡邊 真也（社会福祉法人みまき福祉会身体教育医学研究所）  
 北湯口 純 鎌田 真光（雲南市立身体教育医学研究所うんなん）

最近のコクラン・レビューでは、筋力トレーニングの効果の限界が指摘されている。転倒予防のための運動プログラムにおいて、様々な移動動作を伴うバランス訓練が、最も効果的な運動であることが報告されている。具体的には、①立位で行うこと（直立二足支持をするから転倒するのであり、同じ状況下でのバランス訓練が基本）、②水平方向へのできるだけ素早い移動動作（安全を確保しながら前・後・左・右に動く：ステップング動作）、③垂直方向（上下）の振幅の大きい動作（大腿と股関節の周辺筋群が働くこと）である。これらを踏まえて、レクリエーション場面での運動あそびの実施や、家庭での運動プログラムの実践が望まれる。

そこで、本研究は、転倒予防の運動介入のエビデンスを踏まえて、典型的なステップ動作（とっさの1歩）となる中高年者向けの運動あそびの整理を行った。

## アリゾナ州における Therapeutic Recreation 視察報告

○森 美和子（岐阜聖徳学園大学）

△茅野 宏明（武庫川女子大学）

Therapeutic Recreation（以下 TR）の発信地アメリカで Certified Therapeutic Recreation Specialist（以下 FCTRS）として資格を取得したスペシャリストが様々な分野そして方法でレクリエーション活動を提供している。近年、日本の医療や福祉関連のレクリエーションに係る分野でも、TRの考え方は積極的に取り入れられている。

今回の視察目的は、アメリカ アリゾナ州マリコパカウンティを中心に CTRS としての意見などを含めて TR に関わる情報を収集し、その環境と実態について調査するためである。この調査をもとに、次の二点について考察した。

1. リゾナ州を例にとり、TRの現状と抱える問題をその動向の分析結果を報告する。
2. 日本におけるレクリエーションプログラムで、より専門的なサービスを提供するための課題と解決策のキーを検討する。

## 四天王寺大学及び同短期大学部におけるレクリエーション・インストラクター資格取得状況とその課題 ～資格取得卒業生追跡アンケートをもとに～

○奥野 孝昭（四天王寺大学）      △大西 敏浩（四天王寺大学短期大学部）

キーワード：レクリエーション・インストラクター、課程認定校、コミュニケーション

1983年から、大学・短大や専修学校等の教育機関で、日本レクリエーション協会が定める「レクリエーション指導者養成課程認定校」制度が発足し、今年で25年を迎えた。

本学でも、レクリエーション・インストラクター資格を2003年度より養成しており、丸5年を経過した。その間に100名を超える資格取得者を輩出したのだが、資格を取得した彼らが職場や地域でこの資格をどのように活用しているか、またそのレクリエーション実践状況はどうなのか、資格養成担当教員として把握しておくべきだと考えた。

調査の結果、本学卒業生においても他学と同じく更新をせずに資格登録を手放す卒業生が多数いたことがわかった。ただ推測とは違い、意外にもそのなかには資格にこだわるよりも、自分たちの実践に自信を持ち、積極的にレクリエーション支援を行っている者が多かったことだ。推測とは違う結果に驚きつつも、資格を取得する意味と、その資格養成の課題について卒業生の追跡アンケートから考察してみた。

## 学校運動部に対する地域スポーツクラブの活動支援

愛知県三河地域におけるオリエンテーリングプログラムの事例より

○松澤俊行（愛知教育大学大学院）

△杉浦恭（愛知教育大学）

少子化、指導者不足等の要因により、学校運動部活動の衰退が著しい。このような状況下では、部活動の場を学校内のみにとどめず、地域のスポーツクラブと連携していくことが、問題の解決につながると考えられる。

北欧では、地域オリエンテーリングクラブが、教育的配慮の行き届いた若年向けプログラムを学校に提供し、運営に協力している事例が見られる。プログラムを通じて、児童生徒が新しいスポーツに触れる機会を得られる他、クラブ側の新入会員獲得にも結び付く。

今回、こうしたプログラムを、北欧との環境の違いを考慮して修正した上で、日本の学校運動部活動に導入することを試みた。対象地域は、オリエンテーリングのフィールドに恵まれた、愛知県三河地域とした。プログラム実施の過程で浮かび上がった問題点や、得られた成果について報告する。

## 西宮市レクリエーション活動協会の歩みと地域貢献への課題

○田島 栄文 (甲子園短期大学)

日本のレクリエーション運動の中心的役割を担った日本レクリエーション協会が創立して今年で60年となる。敗戦後、日本社会の新しい歩みと軌を一にして進んできた日本のレクリエーション運動は、常に社会の動きに対応しながらレクリエーションが人間生活に不可欠の要素であることを主張し続け、国民の余暇生活の充実と開発、及びレクリエーション運動の普及発展に資することを目的としてきた。

このような日本レクリエーション協会の草の根運動を支えているのは、都道府県及び市区町村における地域レクリエーション協会である。1993(平成5)年に日本レクリエーション協会が「特定公益増進法人」に認定されるに伴い、「都道府県内におけるレクリエーション活動の統括組織」という性格付けが明確にされ、日本レクリエーション協会と連携を図りつつ、地域における運動を展開している。また市区町村レク協会は、各都道府県レク協会の加盟団体又は団体会員という形態で各地域での運動推進を担っているとされる。

本報告では、都道府県レク協会の1つである「(特定非営利活動法人)兵庫県レクリエーション協会」の加盟団体である「西宮市レクリエーション活動協会」に注目し、1987(昭和62)年発足以来、今年で21年目を数えるその活動の歩みをまとめる。そして今後NPO団体として「地域に根ざした社会貢献活動」の活性化へ向けての課題について検討した。

## 民間野外教育活動団体における長期キャンプの実践

山下雅彦 (福山平成大学)

キーワード：小学生，長期キャンプ，事例報告

文部科学省では、平成19年より学習指導要領の改訂に向け審議を重ね、中央審議会は、平成20年1月この答申において、教育内容に関する主な改善事項に、「体験活動の充実」があげられ、集団宿泊的行事などを一定期間(例えば1週間程度)にわたって行うことにより高い教育効果が期待されるなど、これまでにない踏み込んだ提言がされた。その体験活動の柱を担うものが、林間学校や臨海学校などが挙げられる。しかしながらその実施には様々な困難や責任を伴うことから躊躇する学校が多いのが実情である。

しかしながら、近年の自然体験活動の高まりから注目されているのが民間団体である。自営事業のプログラム運営や教育委員会などの依頼による教室開催などその果たす役割が大きくなっている。

そこで本研究では、長い歴史をもつ民間野外教育活動団体の長期キャンプの事例を取り上げ実践報告することを目的とした。

## 長期キャンプにおける参加者の疲労の推移

○黒杭美郷・△山下雅彦（福山平成大学）

キーワード：小学生，長期キャンプ，自覚疲労

長期キャンプにおける参加者の健康管理面からの資料を得るため、長期キャンプ中の疲労自覚症状調査を行った。被験者はRAC主催の9泊10日のRACサマーキャンプin板取のキャンプに参加した男女合わせて16人である。調査は、キャンプ中の起床後、就寝前に産業疲労研究会選定の疲労自覚症状調査用紙に各自に記入させた。その結果、次のことが明らかになった。

1) キャンプ中の特徴として、主にI群（身体的症状）の数値が高かった。2) I群（身体的症状）、III群（神経感覚的症状）、II群（精神的要素）の順で高かったことから、全体での症状は一般作業型であるということがわかった。3) 男女に分け、症状の変化を見てみると、男子全体では精神作業型・夜勤作業型、女子全体では一般作業型という結果になった。

## 大学キャンプ実習の参加者によるキャンプ場の施設評価

○恩田 裕介（日本大学大学院研究生）

加藤 幸真（日本大学文理学部体育学科）

△澤村 博（日本大学）

キーワード：野外活動施設、キャンプ場、施設評価、キャンプ実習、大学生

現在、多くのキャンプ場は家族連れによる利用が多く、提供されているプログラムや施設は子どもを対象としたものが多くみられる。しかし、野外活動施設は単に青少年育成の場としてだけでなく、高齢者、障害者、または一般社会人などの多様な年代のニーズに応えられ、気軽に野外活動に参加・体験できるような環境が整備されていなければならない。その準備として、キャンプ場の施設の利便性や快適性、老朽化の程度などから現状を評価し、改善点を明らかにする必要があると考えられた。

本研究ではN大学が実施しているキャンプ実習に参加した大学生90名を対象とし、質問紙によるキャンプ場の施設評価を行った。実習の場所は山梨県北杜市の指定管理施設となっている市営キャンプ場であった。本研究の結果は施設改善のための基礎資料として北杜市へ報告することになっている。

P-11

クッチャロ湖学生環境サミット（CASE1）について

- 平田太良（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）
- 白銀 頤（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）
- △栗田和弥（東京農業大学地域環境科学部）

地球規模での環境問題が盛んに取沙汰されるなかで、最近では観光庁が発足されるなど、環境ベースの地域活性化へ向けて国を挙げて動き出している。そんななか、2008年9月1日から同月8日に北海道浜頓別町で行われた「クッチャロ湖学生環境サミット」（以下、CASE1）を紹介したい。

財政破綻予備軍とされた浜頓別町だが、幸豊かなオホーツク海に面し、もとより今回の対象地となったラムサール条約登録湿地であるクッチャロ湖をはじめとして、環境資源が豊富にある。そのクッチャロ湖の湖畔林の一部を大同特殊鋼株式会社が社有林として保有しており、CASE1はその大同特殊鋼株式会社をはじめとした数々の企業や各関係省庁の協力もあり、「人と地球の付き合い方」をテーマに、大学生85名が浜頓別町の未来を見据えた提案を地域住民へ向けて行った。

今後のCASEは、2010年に名古屋で行われる生物多様性締結国会議（COP10）に向け、湿地の持つ生態系の豊かさや多様さを再評価・再発信していきたい。

P-12

輪島市三井町におけるワークショップとその効果について

- 松島由佳里（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）
- △麻生 恵（東京農業大学地域環境科学部）

近年、「文化的景観」の制度が成立し農村景観に対する関心が高まっている。そのため地域固有の景観の保存やその活用方法に注目が集まっている。そこで景観の特性を把握し、評価することや地域住民の意識を高めることが必要となってくる。

対象とする石川県輪島市三井町には、地域の特徴を表した土地利用が見られる美しい伝統的な農村景観がある。ここ三井町に関しても文化的景観保全の動きが見られる。

東京農業大学造園科学科自然環境保全学研究室では一昨年、文化的景観選定を視野に入れた保存・活用の方向性や課題を検討した。そこで地域住民との関わりや意識向上が必要であると考えられたため、昨年には地域住民と地域の景観が持つ魅力について話し合うためのワークショップを開催し、魅力マップを作成した。また、今年は昨年のワークショップで出た魅力をカタチにするためのワークショップを開催し、地域住民と地域の魅力を活かしたグリーンツーリズムを考えた。

今回は石川県輪島市三井町で行われたワークショップの内容と、その効果について発表する。

横浜市青葉区美しが丘西追分公園における愛護会と地域の関わりについて

○今井 健 （東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻）

△栗田 和弥（東京農業大学）      △麻生 恵（東京農業大学）

近年、地域住民同士の交流やボランティア活動、環境への意識が高まっている。そのため、市民参加型の管理組織が増えている。ここでは、私の関わっている横浜市青葉区にある「美しが丘西追分公園」での愛護会活動について紹介する。この公園は、多摩丘陵に新規に造成された場所で平成12年に開園した。また、「地域住民の交流・地域の子どもへの環境教育・憩える公園の創出」を目的として、平成18年に愛護会が設立された。昨年発表は、愛護会の活動と研究内容が中心であったが、今回は、行政との関わりや自治会との関わりなど、他組織との連携が深まり、新たな展開があったので、それらを中心に報告する。



# 日本レジャー・レクリエーション学会 (JSLRS)

|                 |     |
|-----------------|-----|
| 会則及び諸規程         | 140 |
| 役員選出細則設置の趣旨     | 144 |
| 投稿規程・原稿作成要領・投稿票 | 150 |

# 日本レジャー・レクリエーション学会会則

## 〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レジャー・レクリエーション学会(英語名:Japan Society of Leisure and Recreation Studies)という。

第2条 本会の目的は、レジャー・レクリエーションに関する調査研究を促進し、レジャー・レクリエーションの普及・発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科 自然環境保全学/観光レクリエーション研究室 麻生 恵 気付に置く。

## 〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達するため、次の事業を行う。

- (1) 学会大会の開催
- (2) 研究会・講演会等の開催
- (3) 学会誌の発行ならびにその他の情報活動
- (4) 研究の助成
- (5) 内外の諸団体との連絡と情報の交換
- (6) 会員相互の親睦
- (7) その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

## 〈第3章 会員〉

第6条 本会は正会員の他、賛助会員、購読会員、および名誉会員を置くことができる。

- (1) 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を得て、規定の入会金および会費を

納入した者とする。

(2) 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者で理事会の承認を得た者とする。

(3) 購読会員は、本会の学会誌を購読する機関・団体とする。

(4) 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集・発行する学会誌等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を毀損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

## 〈第4章 役員〉

第10条 本会を運営するために、役員選出規則により正会員の中から次の役員を選ぶ。理事25名以上30名以内(内 会長1名、副会長若干名、および理事長1名)、監事2名

第11条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、または会長が欠けたときは、会長が予め指名した順序により会務を代行する。

3 理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

4 監事は、会計および会務の執行状況について監査する。

第12条 役員任期は3年とする。但し、再任を妨げない。役員選出についての規則は別に定める。

第13条 本会に名誉会長および顧問を置くこ

とができる。

- 2 顧問は、本会の会長または副会長であった者および本会に功労のあった者のうちから理事会の推薦により会長が委嘱する。

### 〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 総会は、毎年1回開催し本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

- 2 総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

- 3 議事（会則改正を除く）は、出席者の過半数をもって決定される。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

- 2 理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

### 〈第6章 支部および専門分科会〉

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

### 〈第7章 会計〉

第19条 本会の経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもって支弁する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

- (1) 入会金 2,000円
- (2) 正会員 年度額 8,000円
- (3) 賛助会員 " 20,000円以上
- (4) 購読会員 " 8,000円

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、

翌年3月に終わる。

### 附 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。

2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。

### 附 則

本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。

本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。

本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。

本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。

本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。

本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。

本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。

本会則は、昭和62年10月17日より一部改訂する。

本会則は、平成3年11月10日より一部改訂する。

本会則は、平成5年10月17日より一部改訂する。

本会則は、平成8年11月24日より一部改訂する。

本会則は、平成10年11月23日より一部改訂する。

本会則は、平成17年12月10日より一部改訂する。

本会則は、平成18年12月3日より一部改訂する。

## 日本レジャー・レクリエーション学会 理事会の運営に関する規定

昭和57年6月12日制定

昭和58年10月30日改訂

平成7年12月10日改訂

平成11年4月26日改訂

1. 会則第17条の規定により、理事会の運営は、会則に定められているほか、この規定に基づいて行うものとする。
2. 理事会は、原則として年に1回以上開催するものとし、理事長がその議長となる。
3. 理事会の招集に当たっては、書面によって付議事項を明示しなければならない。
4. 理事会は、理事の過半数の出席により成立し、議決は出席者の2分の1以上の賛成を必要とする。  
ただし、表決に当たっては、予め書面（署名捺印）を以って当該議事に対する意向を表示した者を、出席者とみなす。
5. 常任理事会の構成および業務は次のとおりとする。
  - (1) 常任理事会構成員は若干名とする。
  - (2) 常任理事会は、理事会の決定の方針にもとづき、日常業務の執行にあたる。
  - (3) 常任理事会の議事録（概要）はできるだけすみやかに各理事に送付するものとする。
6. 理事会は、業務を遂行するために次のような専門委員会を置く  
(1)総務、(2)研究企画、(3)編集、(4)広報渉外、(5)財務  
また専門委員会の委員は、理事会の承認を得て必要により会員の中から委嘱することができる。ただし当該専門委員の理事会への出席はできない。
7. 理事会には、専門的に研究、調査および審議を必要とするような場合には、特別委員会には、理事以外の適任者を委嘱することができるがその人選は理事会の承認を必要とする。
8. その他理事会の運営に必要な事項は、理事会で決定することができるものとする。

## 日本レジャー・レクリエーション学会 専門分科会設置に関する規定

昭和57年6月12日制定

平成7年12月10日改訂

1. 会則第18条規定により、本会会員が専門分科会を設置しようとする場合は、この規定に基づいて行うものとする。
2. 専門分科会の設置は、原則として研究分野を同じくする本学会正会員20名以上の要請があった場合とする。

3. 専門分科会の設置を求めようとする正会員は下記により本学会会長に申請するものとする。
  1. 設立経過および主旨
  2. 名称
  3. 発起人代表者
  4. 発起人名簿
  5. 連絡事務所
  6. その他
4. 専門分科会は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
  1. 活動状況の概要
  2. その他必要と認められる事項

## 日本レジャー・レクリエーション学会 支部に関する規定

昭和56年11月8日制定

1. 本学会会員が、支部を設けようとする場合には、下記により、本学会会長に申請し、理事会の議を経て総会の承認をえるものとする。
  1. 設立の経過概要
  2. 名称
  3. 支部長および役員
  4. 会則
  5. 会員名簿
  6. その他
2. 各支部の運営は、本部との関係については本規定に従って行われるが、その他の事項については各支部規則においてこれを定めるものとする。
3. 支部は原則として隣接する地域に在勤または在住する本会正会員20名以上をもって構成する。
4. 支部運営のため経費は支部会費によって賄うものとする。支部会費の額は各支部毎に決定するものとする。
5. 支部の次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
  1. 役員の変更
  2. 活動状況の概要
  3. その他必要と認められる事項

## 日本レジャー・レクリエーション学会 役員選出細則 設置の趣旨

“学会の活性化”と“学会の継続性”とのバランスから、次の項目について配慮した：

- 1) 理事役員の半舷上陸という観点から、理事総数の半数にあたる15名を正会員による直接選挙（順位標記の5名連記による無記名投票）とした
- 2) 改選前理事10名を、現行理事会での互選とした
- 3) 学会運営の強化を計るために、理事長推薦理事5名以内を設けた
- 4) 会長、副会長、監事は、選挙後初めての理事会で選出することとした
- 5) 会長、副会長は理事以外からの選出ができることとした
- 6) 理事長は、新役員に選出された理事（25名）により、選挙後初めての理事会で互選により選出することとした
- 7) 被選挙権及び理事就任については、辞退を認めた
- 8) 役員欠員に対し、補充選挙は行わないこととした  
（会長については本則に従い、理事については補充選挙は行わない）
- 9) 選挙管理委員会を設置し、その委員会（5名）の推薦を理事会とした
- 10) 会則の改正（第10条）を必要することとなった
- 11) 学会の活性化の側面的効果として、選挙権（人）及び被選挙権（人）の確認事項により、正会員に手続きの明確化をはかった（会費等手続き期日の指定）

## 日本レジャー・レクリエーション学会 役員選出細則

（趣旨）

第1条 この細則は、会則第12条に規定する役員を選出に関し、必要な事項を定める。

（選出の時期）

第2条 すべて役員を選出は、その任期の前年のうちに行わなければならない。

（選出の種別と人数）

第3条 この細則により選出される役員の種類と人数は、会則第10条の規定により次の通りとする。

- |     |       |            |
|-----|-------|------------|
| (1) | 会 長   | 1名         |
| (2) | 副 会 長 | 若干名        |
| (3) | 理 事   | 25名以上30名以内 |
| (4) | 監 事   | 2名         |

（資格の制限）

第4条 選挙権、被選挙権は、選挙実施前年の12月31日までに正会員としての資格を有し選挙実施年の6月30日現在、当該年度の会費を納めている正会員とする。ただし6月30日以降に正会員の資格を失った者を除く。

- 2) 被選挙権の辞退は認めるが、あらかじめ選挙管理委員会に文書で選挙公示後10日以内に届け出るものとする。

(選出の形態)

第5条 会長、副会長、監事、現行理事から選出される理事（以下「改選前理事」という。）及び理事長推薦理事を除く役員は、正会員の直接選挙により選出する。

(選出の方法)

第6条 役員の選出方法は、次の通りとする。

- (1) 会長、副会長、監事は、初めての理事会において選出する。
- (2) 理事のうち、新理事15名を正会員による順位標記の5名連記で、郵送による直接無記名投票とし、改選前理事10名を現行理事会での互選とし、新理事長による推薦理事5名以内を新理事長の任命によって選出する。
- 2 会長、副会長は、理事以外からの選出ができる。ただし理事以外から選出された会長、副会長は、就任と同時に速やかに会則第10条の規定により理事となる。
- 3 改選前理事は、新理事の選挙の前に選出し公表する。改選前理事に選出されない現行理事も細則第4条の規定を満たす限り新理事としての被選挙権を有する。
- 4 理事長は、新役員に選出された理事（25名）による初めての理事会での互選による。

(投票の有効性)

第7条 投票のうち次のものは、無効とする。

- (1) 規定用紙以外のもの
- (2) 定数を越えて記入したものは、その区分全部
- (3) 氏名以外の文字または記号を記入したものは全部

(当選の決定)

第8条 選挙による新理事（15名）の決定は、有効投票の最多得票者から15名とする。ただし同点者がある場合は、順位標記による総得点の高得点者とし、なお同点の場合は順次高順位ごとの得票数の多い者とする。理事就任時に辞退者があるときは、次点者を繰り上げる。次点者に同点者があるときも同じ得点の算定による。順位ごとの得票数によっても同点のときは選挙管理委員会で推薦決定する。

- 2 順位標記による得点の算定は、高順位1位を5点とし順次下位を減数し5位を1点として積算する。

(辞退の届出)

第9条 選挙により選出された新理事が、その就任を辞退しようとする時は、通知が到着した日から5日以内に正当な理由を示して選挙管理委員長に届け出なければならない。

(補充選挙)

第10条 任期途中において役員に欠員が生じても、補充選挙は行わない。

(選挙管理委員会)

第11条 役員（会長、副会長、監事、改選前理事、理事長推薦理事を除く）の選挙を実施するため、選挙管理委員会（以下「委員会」という。）を置く。

- 2 委員会は、5名をもって構成する。
- 3 委員の選出は、理事会の推薦による。

- 4 委員の任期は、当該役員選挙年度の5月1日から次期役員選挙年度の4月30日までの3年間とする。
- 5 委員会に委員長を置く。委員長は、委員の中から互選する。委員長は、この細則にしたがって選挙を執行する責任と権限を持つものとする。
- 6 委員会は、投票の期日、方法等を選挙の1ヵ月以前に、公示しなければならない。
- 7 委員会は、順位区分（1位～5位）を明らかにした氏名記入用投票用紙を作成する。
- 8 委員会は、被選挙人名簿及び投票用紙を、選挙の14日以前に正会員届け出住所に送付しなければならない。
- 9 委員会は、得票数が決定したとき得票数順に上位30位までの一覧表を作成し確認印を押し、その結果を公示するとともに、理事会に報告する。

#### （細則の改廃）

第12条 この細則の改廃は、理事会の過半数の賛成を得て総会の議決による。

- 2 この細則の変更は、会則の変更に準ずるものとする。

#### 附 則

- 1 この細則は、平成10年度の役員改選から適用する。
- 2 この細則は、平成8年11月24日から施行し、従来の役員選出内規及び申し合わせ事項は廃止する。
- 3 この細則は、平成18年12月3日から一部改訂する。

## 日本レジャー・レクリエーション学会 現行理事会から選出される理事の選出に関する申し合わせ

#### （趣旨）

第1条 本学会の役員選出細則第6条第1項第2号の規定により現行理事会から選出される理事（以下「改選前理事」という。）の選出にあたり、この申し合わせを定める。

#### （選出の時期）

第2条 改選前理事の選出は、役員改選前年度の最初に開催される理事会以前とする。

#### （選出の形態）

第3条 改選前理事の選出の形態は、現行理事による直接選挙とする。

#### （選出の方法）

第4条 改選前理事の選出の方法は、現行理事による順位標記の10名連記で、郵送による直接無記名投票による。

#### （投票の有効性）

第5条 投票のうち次のものは、無効とする。

- （1） 規定用紙以外のもの
- （2） 定数を越えて記入したものは、その区分全部
- （3） 氏名以外の文字または記号を記入したものは全部

#### （当選の決定）

第6条 改選前理事の当選の決定は、改選前理事選出理事会（役員改選前年度の最初に開催される理事会）において

郵便投票を開票し決定する。

- 2 改選前理事（10名）の決定は、有効投票の最多得票者から10名とする。ただし同点者がある場合は、順位標記による総得点の最高得点者とし、なお同点の場合は順次高順位ごとの得票数の多い者とする。理事就任時に辞退者があるときは、次点者を繰り上げる。次点者に同点者があるときも同じ得点の算定による。順位ごとの得票数によっても同点のときは、役員改選前年度の最初に開催される理事会において、出席者の投票により決定する。
- 3 順位標記による得点の算定は、高順位1位を10点とし順次下位を減数し10位を1点として積算する。

（選挙管理）

第7条 選挙管理事務は、事務局が行う。

附 則

（施行期日）

1. この申し合わせは、平成10年度の役員改選から適用する。
2. この申し合わせは、平成9年5月26日から施行する。
3. 第2条の規定に関わらず、平成10年度の役員改選に伴う改選前理事の選出の時期は、役員改選前年度の最初に開催される理事会以前でなくてもよいものとする。

## 日本レジャー・レクリエーション学会 新役員に選出された理事（25名）による理事長の選出に関する申し合わせ

（趣旨）

第1条 本学会の役員選出細則第6条第4項の規定により選出される理事長の選出にあたり、この申し合わせを定める。

（選出の時期）

- 第2条 理事長の選出は、現行会長により招集される役員改選後の最初に開催される理事会（以下「新理事会」という。）において互選する。
- 2 理事長が選出されるまでは、新理事会の議長は現行会長が暫定議長となる。

（選出の方法）

第3条 理事長の選出の方法は、現行会長及び会長、副会長、監事の選出に関する申し合わせ第2条により構成されている候補者選定委員会の意見を聴取し審議・決定する。

附 則

（施行期日）

1. この申し合わせは、平成10年度の役員改選から適用する。
2. この申し合わせは、平成9年5月26日から施行する。

## 会長、副会長、監事の選出に関する申し合わせ

### (趣旨)

第1条 本学会の役員選出細則第6条第1項第1号の規定により選出される会長、副会長、監事の選出にあたり、この申し合わせを定める。

### (候補者の選定)

- 第2条 会長、副会長、監事の候補者の選定は、役員改選後の最初に開催される理事会（以下「新理事会」という。）以前に、現行の会長、副会長、理事長、及び常任理事会で選任された常任理事若干名を含む7名により候補者選定委員会（以下「委員会」という。）を構成し、それぞれ複数の候補者を選定する。
- 2 委員会は現行会長が招集し、委員長は初回の委員会において互選とし、委員長が議長となり以後の委員会を必要に応じ招集する。

### (候補者の推薦)

第3条 会長、副会長、監事の候補者の推薦は、委員会が新理事会に推薦する。

### (選出の形態)

第4条 会長、副会長、監事の選出の形態は、委員会の報告に基づき新理事会により審議・決定する。

### (選出の方法)

- 第5条 会長、副会長、監事の選出の方法は、最初の新理事会において新理事による単記の直接無記名投票による。
- 2 新理事が最初の新理事会に欠席する場合は、前項の投票は郵便による投票ができる。

### (当選の決定)

第6条 会長、副会長、監事の当選の決定は、それぞれ有効投票の最多得票者からとする。ただし同点の場合は、委員会の推薦により決定する。

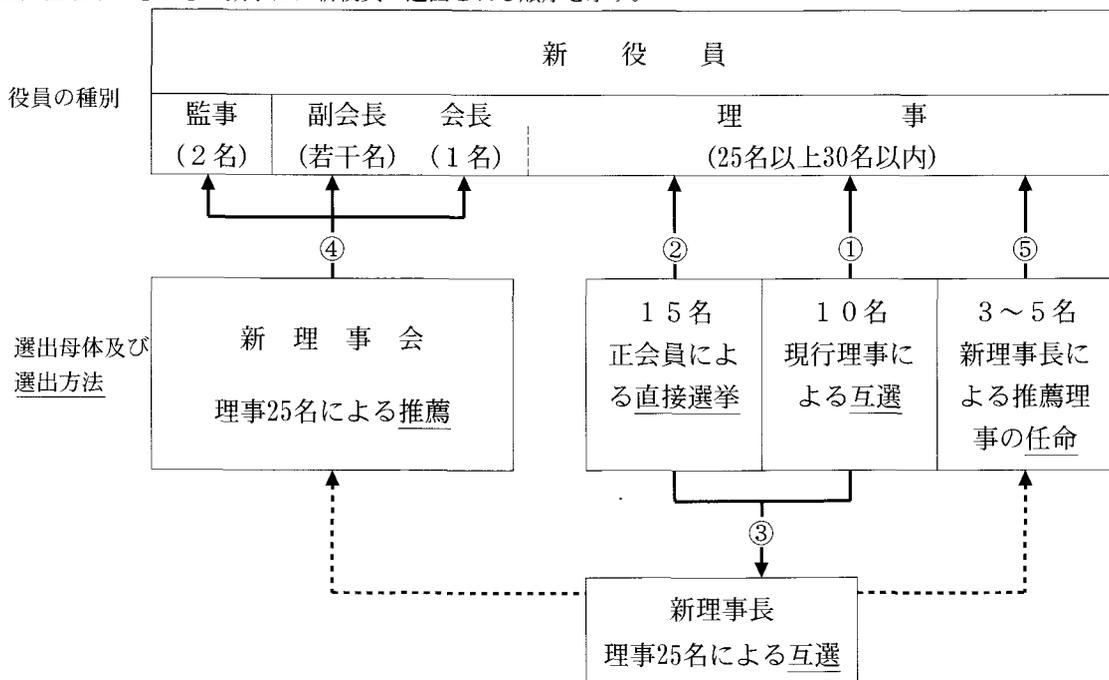
## 附 則

### (施行期日)

1. この申し合わせは、平成10年度の役員改選から適用する。
2. この申し合わせは、平成9年5月26日から施行する。

## 日本レジャー・レクリエーション学会 役員選出方法及びプロセス（図説）

〔注〕 図説中の①～⑤の数字は、新役員の選出される順序を示す。



### 《各役員選挙投票用紙》

#### 〔改選前理事選出投票用紙【a】〕

学会会則第10条及び第12条、役員選出細則第6条第1項第2号、現行理事から選出される理事の選出に関する申し合わせ第4条、の各規定による「改選前理事」10名の選出投票用紙【a】（順位標記の10名連記）

1. ( )
2. ( )
3. ( )
4. ( )
5. ( )
6. ( )
7. ( )
8. ( )
9. ( )
10. ( )

#### 〔新理事選出投票用紙【b】〕

学会会則第10条及び第12条、役員選出細則第6条第1項第2号、の各規定による正会員による新理事15名の選出投票用紙【b】（順位標記の5名連記）

1. ( )
2. ( )
3. ( )
4. ( )
5. ( )

#### 〔会長、副会長、監事選出投票用紙【c】〕

学会会則第10条及び第12条、役員選出細則第6条第1項第1号、会長、副会長、監事の選出に関する申し合わせ第5条第1項及び第2項、の各規定による会長（1名）、副会長（若干名）、監事（2名）の選出投票用紙【c】（無記名単記）

- 会長  
( )
- 副会長  
( )
- 監事  
( )

# 「レジャー・レクリエーション研究」投稿規定

昭和46年3月21日制定  
昭和57年6月12日改訂  
昭和58年7月1日改訂  
平成元年2月2日改訂  
平成8年4月1日改訂  
平成15年2月8日改訂

## 1. 投稿資格

本誌に寄稿できる原稿の筆頭著者は、本学会々員に限る。但し、編集委員会が認めた場合は、この限りでない。

## 2. 原稿種類と審査

- (1) 原稿に用いる言語は原則として、和文もしくは英文とする。但し、編集委員会が認めた場合は、この限りでない。
- (2) 原稿の種類は、レジャー・レクリエーションを対象とした研究領域における総説、原著、研究資料、実践研究、評論、その他とし、他誌に未投稿、未発表のものに限る。なお、上記のうち総説、原著、研究資料、実践研究は、編集委員会が依頼する複数の査読者による審査を経た学術論文である。
- (3) 原稿の定義は以下の通りである。
  - 1) 総説とは、レジャー・レクリエーションを対象とした研究領域に関わる特定のテーマを、文献レビューなどに基づいて大局的かつ客観的に総括したもの。
  - 2) 原著とは、客観性、論理性、普遍性を備えた学術的価値の高い内容を持つオリジナルな研究成果をまとめたもの。
  - 3) 研究資料とは、学術的な資料性が高い研究成果などで、客観性・論理性・普遍性などに検討の余地が残されているものの、速報性等があり公表する価値が認められるもの。
  - 4) 実践研究とは、実践的な事例調査をまとめた研究成果などで、客観性・論理性・普遍性などに検討の余地が残されているものの、速報性等があり公表する価値が認められるもの。
  - 5) 評論とは、ある特定の事項に関する評価、善悪、優劣などを批評し論じたもの。
  - 6) その他の原稿とは、書評や紹介記事、用語解説、シンポジウム・講演会の記録などで、編集委員会が掲載を認めたもの。
- (4) 原稿の長さは、原則として、総説、原著については刷り上がり12ページ以内、研究資料、実践研究、評論については同6ページ以内とする（1ページは2,016字に相当）。ただし、やむを得ない場合には規定ページ数の1.5倍まで認める。その他の原稿については、編集委員会で認められたページ数とする。
- (5) 原稿の採否および掲載時期については、編集委員会が最終的な決定を行う。なお、学術論文の採否については、査読者による審査結果に基づく。
- (6) 大会発表論文集への投稿規定は別に定める。

### 3. 原稿の提出

- (1) 原稿の提出にあたっては以下に従うこと。
  - 1) 投稿原稿は、別に定められた原稿作成要領に従い、原文の鮮明なコピー3部を提出する。原文は、郵送事故などに備えて投稿者が保管する。
  - 2) 投稿原稿は、各部ごとに、標題、抄録（総説、原著、研究資料、実践研究の場合）、本文（註・文献を含む）、図（写真を含む）、表の順にまとめ、ダブルクリップ等で留めて提出すること。
  - 3) 原稿の郵送は簡易書留や宅配便など、配達記録が証明できる方法で行う。本学会ならびに編集委員会は、郵送事故には責任を持たない。
  - 4) 提出先は、日本レジャー・レクリエーション学会事務局とする。
  - 5) 原稿および図表は原則として返却しない。
  - 6) 投稿の際には、本誌掲載の「レジャー・レクリエーション研究 投稿票」に必要事項を記入し、投稿原稿と合わせて1部提出する。なお、投稿票にコピーを用いても構わない。

### 4. 費用

- (1) 審査料・掲載料は原則として無料とするが、次の場合には投稿者にその実費を負担してもらうことがある。
  - 1) カラー印刷など特殊な印刷を要したり、分量が規定を超過する場合など。
  - 2) 別刷を必要とする場合。別刷りは50部までは無料とするが、それ以上必要な場合には50部単位で購入できる。

### 5. その他

- (1) 原稿の作成に当たっては、別に定める原稿作成要領に従う。
- (2) その他、当規定の問い合わせは、学会事務局宛に行う。

# 「レジャー・レクリエーション研究」原稿作成要領

(平成15年2月8日制定)

## 1. 原稿の作成

- (1) 原稿は、原則としてワードプロセッサなどを使用し、下記にしたがって作成すること。
  - 1) 用紙はA4判を縦長に使用し、横書きで作成すること。
  - 2) 書式は、和文の場合には1頁に800字詰め(25字×32行)、欧文の場合にはダブルスペース(30行)とする。また、それぞれ左40mm、右80mm、上下30mm程度の余白を残すこと。
  - 3) 欧文、数字、小数点、および斜線(/)は半角文字を使用すること。
  - 4) 句読点は、マル(。)およびテン(、)を使用すること。
- (2) 原稿の採用決定後に、フロッピーディスク等に保存された文章ファイルの提供を要請する。
- (3) 手書で原稿を作成する場合には、400字詰原稿用紙(20字×20行)を用いること。

## 2. 原稿の体裁

- (1) 投稿原稿は、①標題、②抄録、③本文(註・文献を含む)、④図、⑤表の順番で体裁を整える。
  - 1) 標題ページには、①原稿の種類、および②タイトル(和文・英文の両方)を記入する。このページに著者名や所属などは一切記入しない。
  - 2) 抄録ページには、総説・原著論文・研究資料・実践研究では、英文投稿・和文投稿にかかわらず、英文抄録(250語程度)と和文抄録(500字以内)添える。これらは、刷り上がり時に本文と一緒に印刷される。評論およびその他の原稿については抄録は必要ない。
  - 3) 本文ページには、本文・註・文献などを記入する。なお、本文の作成にあたっては以下の点に留意すること。
    - ①本文の中央下にページ番号を記入する
    - ②本文の左側に、可能な限り、5行おきに行番号を記入する。
    - ③母国語ではない言語による投稿では、投稿前にネイティブによる文章校閲を受ける。
    - ④和文原稿では必要以上の専門外来語の使用を控える。用いる場合は、片仮名書きとする。
    - ⑤見出し記号を用いる際は、大見出しから順に、1.、2. …、(1)、(2) …、1)、2) …、①、②…とする。
    - ⑥学術用語は、学術会議制定の用語に準じ、度量衡単位はSI単位(m、cm、mm、kg、g、mgなど)とする。
    - ⑦本文中の文献表記は、引用箇所後に、<sup>3)</sup>、<sup>2) 4) 8)</sup>、<sup>5-7)</sup>のように、該当する文献番号を上付きにする。註をつける場合も同様にする。
    - ⑧本文欄外に図表の挿入箇所を朱筆により明示する。
    - ⑨謝辞、および付記(研究費交付等)は本文の末尾におく。
    - ⑩註は、本文の末尾と文献の間に、註1)、註2)・・・というように番号順に一括して記載する。

⑩文献は、筆頭著者の姓のアルファベット順に並べるか、ないしは引用順に、1)、2)、3) …と通し番号を付ける。

⑪文献の記載方法は以下を参考にする。

〈学術誌・雑誌の場合〉

著者名、論文名、雑誌名 巻号：ページ数（始頁—終頁）、西暦年号 の順

〔例1〕西野仁・知念嘉史、ESM（経験標本抽出法）を用いた日常生活におけるレジャー行動研究の試み、レジャー・レクリエーション研究38：1-15、1998

〔例2〕Eeva Karjalainen and Liisa Tyrvaainen, Visualization in forest landscape preference research: a Finnish perspective, Landscape and Urban Planning 59(1): 13-28, 2002

〈単著などの場合〉

著者名、書名、発行社、発行地：ページ数（始頁—終頁）、西暦年号 の順

〔例3〕ヨゼフ・ピーパー（稲垣良典訳）、余暇と祝祭、講談社、東京：120pp、1988

〔例4〕Simon Bell, Element of visual design in the landscape, E & FN Spon, London, 11-30, 1993

〈共著書などの場合〉

著書名、論文名、（編集者名、「書名」、発行社、発行地）、ページ数（始頁—終頁）、西暦年号 の順

〔例5〕下村彰男：リゾート景観の保全と創造、（日本造園学会編、「ランドスケープの計画」、技報堂出版、東京）、217-227、1998

〔例6〕Richard Broadhurst and Paddy Harrop, Forest tourism: Putting policy into practice in the Forestry Commission, (In Xavier Font and John Tribe Eds., Forest tourism and recreation, CABI publishing, New York), 183-199, 1999

4) 図・表の作成にあたっては以下の点に留意すること。

①図・表は、それぞれ1点につき1枚の用紙を使用する。

②表は、表1、Table2のように通し番号を付け、題名を表の上部に記載する。

③図は、図3、Fig. 4のように通し番号を付け、題名を図の下部に記載する。

④図表の作成にあたっては、刷り上がり時の巾（2段にまたがる場合は横幅最大14cm、1段の場合は6.5cm）、および縮尺を考慮し、明瞭に作成する。

⑤写真を掲載する者は、原稿の採用決定後にE L版以上の紙焼き写真を提出する。

⑥採用決定後、オリジナルの図表を提出する際には、裏面に、図表の番号、上下の印、および筆頭著者名を鉛筆で薄く書き込んでおく。

⑦特殊なオリジナル図表は、トレーシングペーパーをかけるなどして、できるだけ汚損対策を施す。

## レジャー・レクリエーション研究 投稿票

受付年月日 \_\_\_\_\_

受付番号 \_\_\_\_\_

|                          |                                          |    |    |      |                 |              |
|--------------------------|------------------------------------------|----|----|------|-----------------|--------------|
| ふりがな<br>連絡先氏名            |                                          |    |    |      |                 |              |
| 連絡先                      | 〒                                        |    |    |      |                 | TEL. _____   |
|                          |                                          |    |    |      |                 | FAX _____    |
|                          |                                          |    |    |      |                 | E-mail _____ |
| 全著者名<br>および所属<br>(英文表記も) |                                          |    |    |      |                 |              |
| 原稿の種類                    | 総説、原著、研究資料、実践研究、評論、<br>その他（具体的に： _____ ) |    |    |      |                 |              |
| 原稿の枚数                    |                                          | 初稿 | 2稿 | 3稿   | 採用後の<br>フロッピー添付 | 有・無          |
|                          | 標題                                       | 枚  | 枚  | 枚    | カラー印刷           | 有・無          |
|                          | 抄録                                       | 枚  | 枚  | 枚    |                 |              |
|                          | 本文                                       | 枚  | 枚  | 枚    | 別刷希望数           | 部            |
| 図表                       | 枚                                        | 枚  | 枚  |      |                 |              |
| 原稿の動き                    | 初稿                                       | 2稿 | 3稿 | 初校印刷 |                 |              |
| 著者→編集委員会                 |                                          |    |    | 著者送付 |                 |              |
| 編集委員会→審査者                |                                          |    |    | 著者校正 |                 |              |
| 審査者→編集委員会                |                                          |    |    | 2校印刷 |                 |              |
| 判定                       |                                          |    |    | 2校校正 |                 |              |
| 編集委員会→著者                 |                                          |    |    | 3校印刷 |                 |              |

|                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>和文要旨<br/>(貼り付け可)</p>        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| <p>原稿投稿時の<br/>チェック<br/>リスト</p> | <p>以下の項目の確認後口にチェック(✓)してください。</p> <p>~~~~~</p> <p>標題ページ <input type="checkbox"/> 原稿の種類は記入してあるか<br/><input type="checkbox"/> タイトル (和・英) は記入してあるか<br/><input type="checkbox"/> 著者名・所属は未記入でないか</p> <p>本文ページ <input type="checkbox"/> 本文の体裁は原稿作成要領に即しているか<br/><input type="checkbox"/> 註の体裁は原稿作成要領に即しているか<br/><input type="checkbox"/> 文献の体裁は原稿作成要領に即しているか<br/><input type="checkbox"/> ページ番号 (本文中央下) を記入したか<br/><input type="checkbox"/> 行番号を記入したか (本文左)<br/><input type="checkbox"/> 母国語でない場合、文章校閲を受けたか<br/><input type="checkbox"/> 見出し記号は原稿作成要領に即しているか<br/><input type="checkbox"/> 図表挿入箇所の表示をしたか</p> <p>図 表 <input type="checkbox"/> 図表1点につき1枚の用紙が使用されているか<br/><input type="checkbox"/> 図のタイトルは適切か<br/><input type="checkbox"/> 表のタイトルは適切か</p> |

~~~~~  
イタリック表記の部分 は投稿者が記入すること。

「レジャー・レクリエーション研究」

投稿募集

研究論文の投稿は、常時受け付けております。
積極的にご投稿下さい。

編集委員会

「レジャー・レクリエーション研究」への投稿について

研究論文の審査には最短でも2ヶ月程度を要する点を考慮して、投稿してください。
投稿は、常時受け付けております。会員の皆様の積極的な投稿をお願いいたします。

■投稿論文送付先

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科
自然環境保全学/観光レクリエーション研究室

麻生 恵 気付

日本レジャー・レクリエーション学会編集委員会

学会大会号編集企画

鈴木 秀雄 (学会会長)	土屋 薫 (学会常任理事)
小田切毅一 (学会副会長)	寺島 善一 (学会常任理事)
坂口 正治 (学会副会長)	西野 仁 (学会常任理事)
西田 俊夫 (学会副会長)	沼澤 秀雄 (学会常任理事)
麻生 恵 (学会理事長)	松尾 哲矢 (学会常任理事)
小椋 一也 (学会常任理事)	横内 靖典 (学会常任理事)
上岡 洋晴 (学会常任理事)	古城 健一 (学会監事)
嵯峨 寿 (学会常任理事)	上野 直紀 (学会監事)
田中 伸彦 (学会常任理事)	

第38回学会大会号 (No.61) 編集委員会

麻生 恵 (委員長)	下村 彰男
小椋 一也	前橋 明
寺島 善一	森川 貞夫
西野 仁	山崎 律子
	矢野加奈子 (幹事)

Editorial Committee for Papers of the 38th National Congress

M. Aso (Chief Editor)	A. Shimomura
K. Ogura	A. Maebashi
Z. Terajima	S. Morikawa
H. Nishino	R. Yamazaki
	K. Yano

Address: Subscription Manager, Japan Society of Leisure and Recreation Studies (JSLRS).

c/o: Tokyo University of Agriculture

1-1-1 Sakuragaoka Setagaya Tokyo, Japan

Tel. & Fax. your country code+81+03-5477-2436

『レジャー・レクリエーション研究』第61号 (NOV., 2008)

平成20年11月7日 印刷

平成20年11月14日 発行

編集・発行人：麻生 恵

発 行 所：日本レジャー・レクリエーション学会

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科

自然環境保全学/観光レクリエーション研究室

麻生 恵 気付

電話：03-5477-2436

URL <http://www.jslrs.jp>

QUALITY OF LIFE

きっと、君にもこう生きたいと願う姿はあるはず。

QOLとは、今を生きるすべての人々が考える

自分らしい生き方なのかもしれません。

ひとりひとりにとって一番大切なQOLを支えることが

できたなら、きっと君のQOLも高まっていくことでしょう。

自分もそうだから、誰かのためにも…。

そんなあたたかい気持ちが幸せを生み出すのです。

QOL (Quality of Life)とは…

本学の掲げるQOLは、「長く生きる」という考えから「いかに良く生きる」へ。生き方の質や、満たされた人生、生き様を大切にしようという考え方です。もちろん、QOLは人間ひとりひとりによって異なり、高齢者や障害のある方だけの課題ではありません。本学では、ますます多様化するQOLはもちろん、さらに健康寿命に対する積極的なアプローチを踏まえ、社会が求める「ひとりひとりのQOLの充足」を支えていく人材の育成に力を注いでいます。保健、医療、福祉という3つの分野を横断的に理解し、チームワークを生み出しながら、より効果的なQOL充足の手法を学び、そして実践する人材育成こそ目標とする教育のあり方なのです。

健康科学部

- 健康栄養学科
- 健康スポーツ学科
- 看護学科

医療技術学部

- 理学療法学科
- 作業療法学科
- 言語聴覚学科
- 義肢装具自立支援学科

社会福祉学部

- 社会福祉学科



組織図

医療技術学部	●理学療法学科 ●作業療法学科 ●言語聴覚学科 ●義肢装具自立支援学科	大学院 医療福祉学研究所	(修士課程)	●保健学専攻 ●健康科学専攻 ●社会福祉学専攻
健康科学部	●健康栄養学科 ●健康スポーツ学科 ●看護学科		(博士後期課程)	●医療福祉学専攻
社会福祉学部	●社会福祉学科			



医療技術学部

目標とする資格

【理学療法学科】理学療法士(国)
【作業療法学科】作業療法士(国)
【言語聴覚学科】言語聴覚士(国)
【義肢装具自立支援学科】義肢装具士(国)、福祉用具専門相談員、福祉用具プランナー、福祉住環境コーディネーター

健康科学部

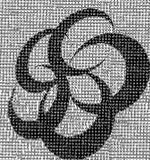
目標とする資格

【健康栄養学科】管理栄養士(国)、栄養士、栄養教諭一種免許状、フードスペシャリスト、サプリメントアドバイザー
【健康スポーツ学科】中学校・高等学校教諭一種免許状(保健体育)、アスレティックトレーナー、健康運動指導士、健康運動実践指導者、レクリエーションコーディネーター等
【看護学科】看護師(国)、保健師(国)、助産師(国)、養護教諭一種免許状

社会福祉学部

目標とする資格

【社会福祉学科】社会福祉士(国)、精神保健福祉士(国)、介護福祉士(国)



新潟医療福祉大学

<http://www.nuhw.ac.jp/>

T 950-3198 新潟市北区豊岡町1398番地
TEL 025-257-4455(代) FAX 025-257-4458

入試事務局 TEL 025-257-4459 E-mail nyuusi@nuhw.ac.jp

携帯URL <http://www.nuhw.jp/m/>



JOURNAL
of
Leisure and Recreation Studies
No. 61

Papers of the 38th National Congress

Special Issue :

Papers Presented at the 38th National Congress of
Japan Society of Leisure and Recreation Studies

(Nov. 28th. 29th. and 30th., 2008)

(Niigata University of Health and Welfare : Niigata, Japan)

Japan Society of Leisure and Recreation Studies (JSLRS)

Nov. 2008